

秋田県文化財調査報告書第190集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書V

— 手取清水遺跡 —

秋田県文化財調査報告書第190集

1990・3

秋田県教育委員会

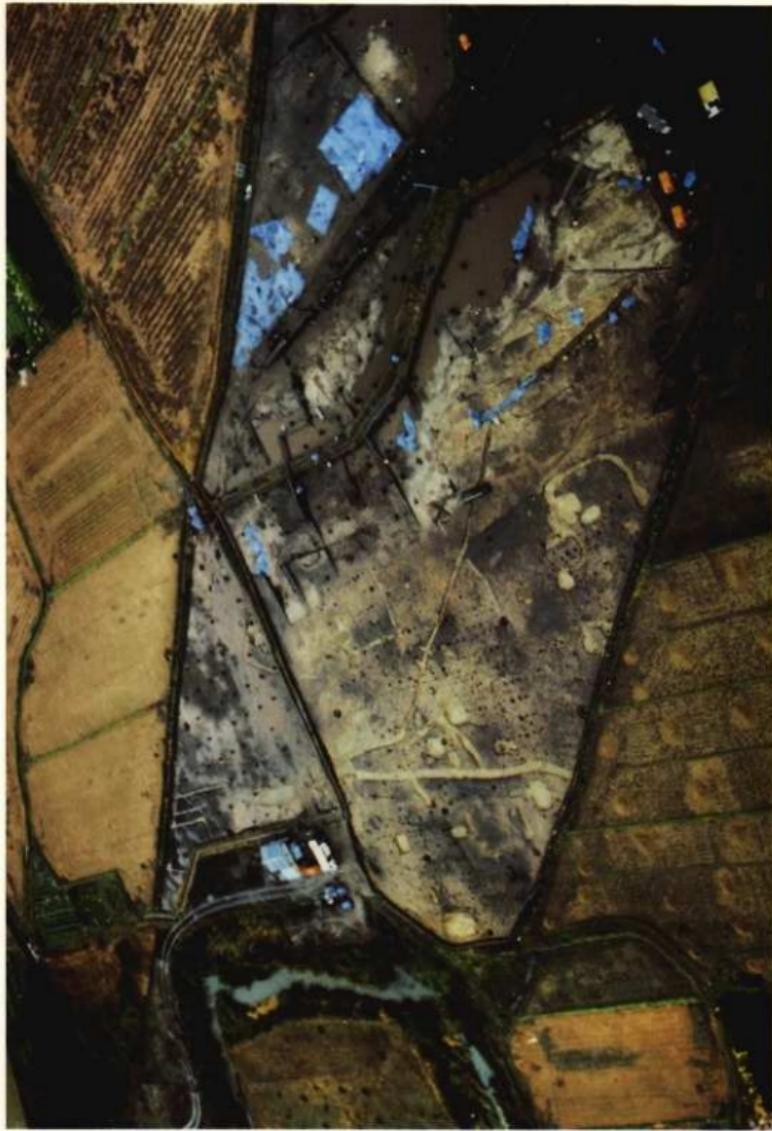
東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 V

— 手 取 清 水 遺 跡 —

1990・3

秋田県教育委員会

卷首圖版一



空中写真 (北>南)

(昭和62年11月5日撮影)



空中写真 (南>北)

(昭和62年11月5日撮影)



1 SL 323旧河川 北西端から中央部を望む (北西>南東)



2 SL 324旧河川 (A区-NH71グリッド) 土層断面 (北>南)



1 S L 324旧河川 (A区-N J72グリッド) 遺物 (RP 450~456) 出土状況 (北▷南)



2 S L 323旧河川 (C区) 木簡 (RW1207) 出土状況



1 SL323旧河川（C区）将棋駒（RW1167）出土状況



2 SL323旧河川（C区）鍔（RW1168）出土状況



1 S E 067井戸跡 曲物出土状況



2 S D 130溝状遺構 完掘 (北東▷南西)



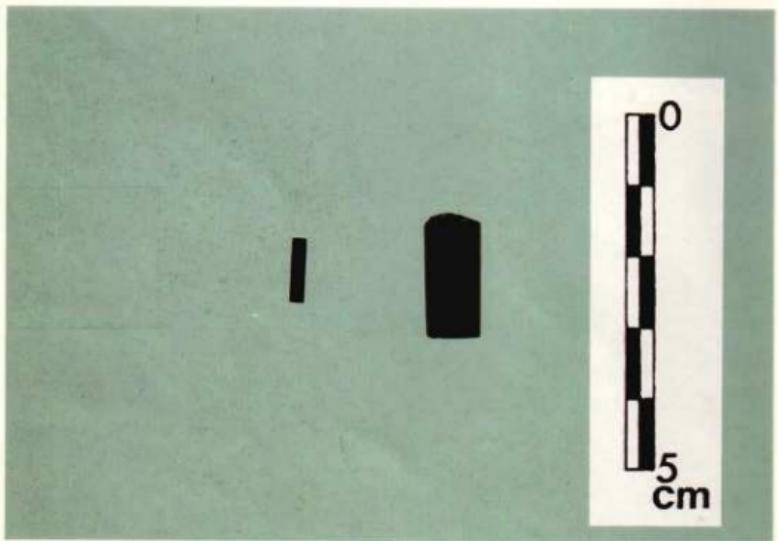
1 SK156土坑 土層断面 (南>北)



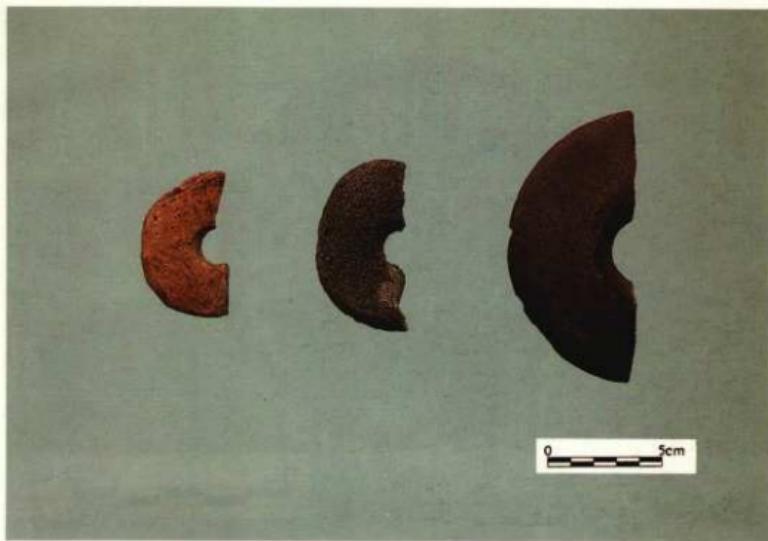
2 SX084その他の遺構 完掘 (西>東)



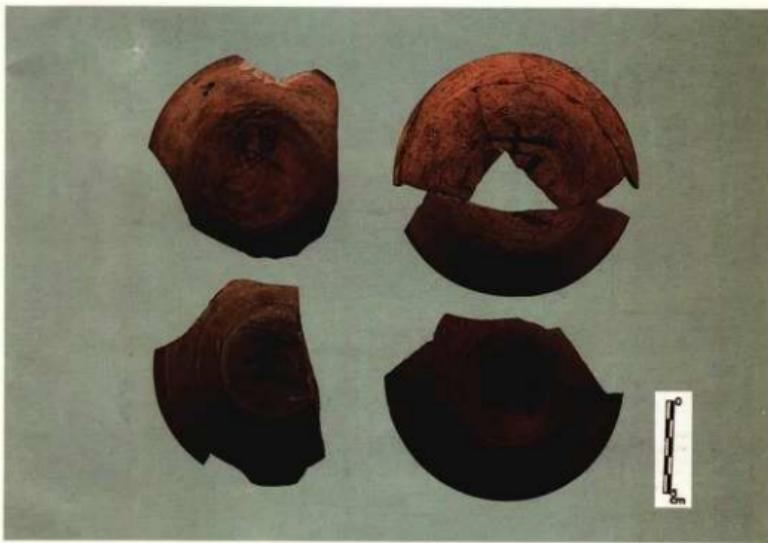
1 S X153その他の遺構 完掘 (南西▷北東)



2 管玉



1 環狀石片



2 墨書土器



1 漆皿



2 擂粉木・箸・ヘラ状木製品

序

秋田県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されています。東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるもので、すでに秋田市から横手市までの57.4kmについては、平成3年度の完成を目指して着々と工事が進められております。

秋田県教育委員会では、工事に先立って昭和60年度から遺跡の発掘調査を実施し、歴史的に貴重な資料を得て逐次その成果を公表してまいりました。本報告書は、昭和62年度に調査しました手取清水遺跡の調査成果をまとめたものであります。調査の結果、縄文・弥生時代、古代～近世まで長期の歴史を物語る多くの土器、石器、陶磁器、木製品などの遺物が出土し、掘立柱建物跡や土坑などの生活跡を示す遺構を検出することができました。特に河川跡から出土した木簡(6点)や墨書き土器(132点)などの文字資料は、古代・中世史の解明に寄与できると考えます。

本書が学術上はもちろんのこと、埋蔵文化財に対する理解と保護のために広く活用いただければ幸いです。

最後に本書を刊行するにあたり、御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、横手市教育委員会並びに関係各位に対し心からの感謝の意を申し上げます。

平成2年1月20日

秋田県教育委員会

教育長 橋本 順信

例 言

1. 本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る手取清水遺跡発掘調査報告書である。
2. 本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

- 柴田陽一郎 「第1章 はじめに」「第3章 調査の概要」「第4章第1節 3
堅穴住居跡・4 堅穴状遺構・5 井戸跡・6 溝状遺構・7 河川
跡・9 配石遺構・10 土器埋設遺構・11 烧土遺構、 第2節 1
(1) (2)石器、第2節 3 中世・近世、5 木製品」「第6章 まとめ
1 (2)石器、2 (2) その他の遺構について・2 (4) 木製
品について、3 おわりに」
- 山崎 文寧 「第4章第1節 1 柱列・2 掘立柱建物跡」「第4章第2節
2 (1)と(2)の土器、第2節 5 文字資料」「第6章 まとめ
2 (1) 掘立柱建物跡・柱列跡や出土遺物について・(3) 文
字資料について」
- 和泉 昭 「第4章第1節 8 土坑・12 その他の遺構」
- 船木 義勝 「第2章 遺跡の立地と環境」「第4章第2節 1 (1)・(2)の
①上器・②土製品」「第6章 まとめ 1 (1)縄文・弥生時代の土
器について」
- 高橋 忠彦 「第4章第2節 1 の(2)の③石器・④石製品」
3. 第5章 自然科学的分析の花粉・大型植物遺体・灰像・火山灰の各分析は(株)パレオ・
ラボに、脂肪酸分析は(株)北海道測量國工社(現・ズヨーナ)に、放射性炭素年代測
定は学習院大学に委託した。なお、灰像分析は(株)パレオ・ラボを介して、東京大学総
合研究資料館 松谷暎子氏にお願いした。
- 火山灰分析は、東北大學農学部 庄司貞雄氏・山田一郎氏(現・農林水産省農業環境技
術研究所 土壌調査分類研究室)にお願いした。心から感謝申し上げる。
4. 上色の表記は、農林省農林水産技術会議監修・財團法人日本色彩研究所色彩監修『新版
標準上色帳』に拠った。
5. 発掘調査および遺物整理にあたって、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して
感謝の意を表す次第である。(順不同・敬称略)

秋田大学教育学部教授 新野貢吉

国立歴史民族博物館考古研究部教授 古岡康暢

東北大學文学部助教授 今泉隆雄

奈良国立文化財研究所飛鳥原宮跡発掘調査部考古第一室長 黒崎 蔦

奈良国立文化財研究所研究員 寺崎保広

筑波大学歴史・人類学系助手 山田昌久

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所指導主任 下津間康夫、李芸主事 佐藤昭嗣

福井県立朝倉氏遺跡資料館主査 南 洋一郎

(社)日本将棋連盟将棋博物館学芸員 小泉信吾

山形県教育庁文化課主任技師 野尻 侃、技師 阿部明彦

東京都立石神井高等学校教諭 菊地照夫

秋田県工業技術センター 川瀬指導所専門研究員 阿部繁三郎

秋田市秋田城跡調査事務所主査 小松正夫、社会教育主事 日野 久

横手市教育委員会主任 沢谷 敏

凡 例

1. 柱穴に付した数値は、地山からの深さである。

2. 各遺構・遺物に付している略記号は以下のとおりである。

擁立柱建物跡	S B、柱列	S A、溝状遺構	S D、井戸跡	S E
竪穴住居跡	S I、竪穴状遺構	S K I、土坑(土壤)	S K、配石遺構	S Q
旧河川	S L、土器埋設遺構	S R、焼土遺構	S N、その他の遺構	S X

3. 文字資料の脚文に付した符号の詳細については、便宜上、本文中に記してある。

4. 遺構はすべてその性格に関係なく通し番号とした。

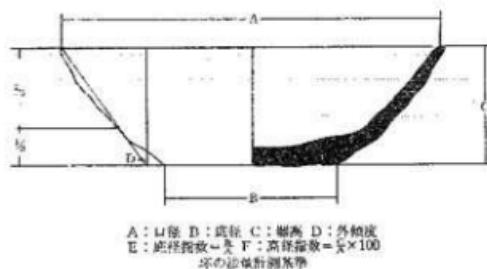
5. 掘図中の遺物実測図と拓本は時代毎に通し番号とし、図版中の遺物もそれにしたがった。

6. 文章中および表中の法量の推定値は()で表示した。

7. 須恵器は土師器と区別するため、掘図中の実測断面を黒く塗りつぶした。

8. 掘図中のスクリーン・トーン、シンボルマークは以下のように使い分けた。

- 地山
- 灰白色火山灰
- 転用器皿、陶器器物の範囲
空洞(造縫)
- 地土
- 土器器物の内側処理
算出炭化物
- 朱绘土器、
塗り



目 次

序	
例言・凡例	
目 次(挿図・表・図版)	
第1章 はじめに	
第1節 発掘調査に至るまで	1
第2節 調査の組織と構成	2
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 遺跡の位置と立地	3
第2節 歴史的環境	6
第3章 発掘調査の概要	
第1節 遺跡の概観	15
第2節 調査の方法	17
第3節 調査の経過	18
第4章 調査の記録	
第1節 掘出遺構	23
1. 立列跡	23
2. 据立柱建物跡	30
3. 壕穴住居跡	52
4. 壕穴状遺構	70
5. 井戸跡	81
6. 溝状遺構	83
7. 旧河川	108
8. 土坑	113
9. 配石遺構	136
10. 上器埋設遺構	130
11. 焼土遺構	153
12. その他の遺構	153
第2節 出土遺物	
1. 繩文・弥生時代	
(1) 遺構内出土遺物	
① 土器	172
② 石器	193
③ 石製品	222
(2) 遺構外出土遺物	
① 土器	222
② 漆塗土器	238
③ 土製品	253
④ 石器	253
⑤ 石製品	256
(2) 平成時代	
(1) 遺構内出土遺物	
① 土器	277
(2) 遺構外出土遺物	
① 土器	280
3. 中世・近世	
(1) 遺構内出土遺物	
① 陶磁器	291
② 古銭	291
③ 陶製品	302
(2) 遺構外出土遺物	
① 陶磁器	302
② 古銭	302
4. 文字資料	
(1) 木簡	302
(2) 将棋の駒	305
(3) 黒青土器	305
5. 木製品	312
第5章 自然科学的分析	
第1節 花粉分析	347
第2節 大型植物遺体分析	364
第3節 灰鉛分析	373
第4節 火山灰分析	379
第5節 脂肪酸分析	386
第6節 放射性炭素年代測定	398
第6章 まとめ	399
写真図版	

挿図目次

第1図	遺跡位置図	3	第33図	S K I 120堅穴状遺構、S K118土坑
第2図	成瀬川・皆瀬川緩衝状地の 土壤型と地形面	4	第34図	S K I 111-112堅穴状遺構、S E 152井戸 跡、S D 157-169-199溝状遺構、S K 226 土坑、S X 113-117-153-159-160-216- 217-319その他の遺構、S B 174掘立柱建 物跡
第3図	遺跡の範囲と周辺の地形	5		79-80
第4図	E区深掘土層	6		
第5図	周辺遺跡分布図(1:50,000)	8		
第6図	周辺地形図・調査範囲図	13-14		
第7図	遺跡基本土層	17	第35図	S E 014-028-031-067井戸跡、 S K 032土坑
第8図	遺構配置図・調査区分模式図	21-22		84
第9図	S A掘立柱列-1	31-32	第36図	S E 086-088-125-215井戸跡
第10図	S A掘立柱列-2	33-34	第37図	S E 116井戸跡、S D 134溝状遺構
第11図	S A掘立柱列-3	35-36	第38図	S D 130溝状遺構、S K 132-162土坑、 S X 167その他の遺構
第12図	S A掘立柱列-4	37-38		97
第13図	S A掘立柱列-5	39-40	第39図	S D 279溝状遺構、S X 310-311
第14図	S A掘立柱列-6	41-42		98
第15図	S A掘立柱列-7	43-44	第40図	S D 281溝状遺構、S X 312-316- 321-322-327その他の遺構
第16図	S A掘立柱列-8	45-46		99-100
第17図	S B掘立柱建物跡-1	51	第41図	S D 282溝状遺構、S X 317
第18図	S B掘立柱建物跡-2	53-54		101
第19図	S B掘立柱建物跡-3	55-56	第42図	D区の溝状遺構(S D)
第20図	S B掘立柱建物跡-4	57-58		102
第21図	S B掘立柱建物跡-5	59-60	第43図	D区の溝状遺構(S D)
第22図	S B掘立柱建物跡-6	61-62		103
第23図	S B掘立柱建物跡-7	63-64	第44図	D区の溝状遺構(S D)
第24図	S B掘立柱建物跡-8	65-66		104
第25図	S B掘立柱建物跡-9	67	第45図	D区の溝状遺構(S D)
第26図	S B掘立柱建物跡-10	68		105
第27図	S B掘立柱建物跡-11	69	第46図	D区の溝状遺構(S D)
第28図	S B掘立柱建物跡-12	71-72		106
第29図	S I 060堅穴住居跡	73-74	第47図	D区の溝状遺構(S D)
第30図	S K I 026-030堅穴状遺構	75		107
第31図	S K I 063-111堅穴状遺構	76	第48図	旧河川遺物出土状況図-2 (S L 323-C V)
第32図	S K I 112堅穴状遺構、S K 226土坑、 S X 117-159その他の遺構	77	第49図	旧河川遺物出土状況図-3

(S L323 - C区)(B部分の拡大) ······	111	S X081-238-239その他の遺構 ······	148
第50図 河川跡遺物出土状況図 - 4		S K267土坑、 S X229-230	
(S L323 - C区-)(C - E部分の拡大)	·····	その他の遺構 ······	149
	112	S D269溝状遺構、 S K270土坑、	
第51図 S K010-011-013-017-018-		S X209その他の遺構 ······	150
924-025土坑 ······	131	S K280土坑、 S X183-255-265	
第52図 S K012土坑、 S X016		その他の遺構、 S N271焼土遺構 ······	151
その他の遺構 ······	132	第70図 S K304-306土坑、 S D303-	
第53図 S K036-037-040-082-		305溝状遺構 ······	152
083-156土坑 ······	133	第71図 S R023-034-126-295	
第54図 S K043-294土坑、 S X050-254-259		土器埋設遺構 ······	154
その他の遺構 ······	134	第72図 S N015-283焼土遺構 ······	155
第55図 S K059-064-066-085土坑 ······	135	第73図 S X033その他の遺構 ······	173
第56図 S D079-168溝状遺構、 S K115-		第74図 S X084その他の遺構 ······	174
123-124-136-137-146土坑 ······	136	第75図 S X084遺物出土状況図 ······	175-176
第57図 S K138-250-253土坑、		第76図 S X114-129-248その他の遺構 ······	177
S D056-251溝状遺構 ······	137-138	第77図 S X153-155その他の遺構 ······	178
第58図 S K128-147-164-189-194-211土坑、		第78図 S X160-216-217その他の遺構 ······	179
S X131-133-181-182-192-318		第79図 S X180その他の遺構 ······	180
その他の遺構 ······	139-140	第80図 S X180その他の遺構断面 ······	181
第59図 S K145土坑、 S X139~144		第81図 S X184-195-266その他の遺構、	
その他の遺構 ······	141	S D121-122溝状遺構 ······	183-184
第60図 S K148-186-187-212-		第82図 遺構内出土土器 ······	
213-214土坑 ······	142	(縄文・弥生時代) - 1 ······	194
第61図 S K179-185土坑、 S X149		第83図 遺構内出土土器 ······	
その他の遺構 ······	143	(縄文・弥生時代) - 2 ······	195
第62図 S K187-188-198-200七坑、		第84図 遺構内出土土器 ······	
S Q237配石遺構 ······	144	(縄文・弥生時代) - 3 ······	196
第63図 S K193-219-235-252土坑、 S X233-		第85図 遺構内出土土器 ······	
234-238-328その他の遺構 ······	145	(縄文・弥生時代) - 4 ······	197
第64図 S D121-122溝状遺構、 S K195土坑、		第86図 遺構内出土土器 ······	
S X184-196-266その他の遺構、		(縄文・弥生時代) - 5 ······	198
S A173柱列、 S B173-190		第87図 遺構内出土土器 ······	
掘立柱建物跡 ······	146	(縄文・弥生時代) - 6 ······	199
第65図 S K202-225-236-247-249土坑 ······	147	第88図 遺構内出土土器 ······	
第66図 S D244溝状遺構、 S K245-258土坑、		(縄文・弥生時代) - 7 ······	200

第39回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 8	201	第107回	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 1	224
第90回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 9	202	第108回	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 2	225
第91回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 10	203	第109回	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 3	226
第92回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 11	204	第110回	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 4	227
第93回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 12	205	第111回	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 5	228
第94回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 13	206	第112回	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 6	229
第95回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 14	207	第113回	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 7	230
第96回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 15	208	第114回	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 8	231
第97回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 16	209	第115回	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 9	232
第98回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 17	210	第116回	遺構外出出土器 (縄文・弥生時代) - 1	239
第99回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 18	211	第117回	遺構外出出土器 (縄文・弥生時代) - 2	240
第100回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 19	212	第118回	遺構外出出土器 (縄文・弥生時代) - 3	241
第101回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 20	213	第119回	遺構外出出土器 (縄文・弥生時代) - 4	242
第102回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 21	214	第120回	遺構外出出土器 (縄文・弥生時代) - 5	243
第103回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 22	215	第121回	遺構外出出土器 (縄文・弥生時代) - 6	244
第104回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 23	216	第122回	遺構外出出土器 (縄文・弥生時代) - 7	245
第105回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 24	217	第123回	遺構外出出土土器 (縄文・弥生時代) - 8	246
第106回	遺構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 25	218	第124回	遺構外出出土土器 (縄文・弥生時代) - 9	247

第125回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 10	248	第143回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 14	270
第126回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 11	249	第144回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 15	271
第127回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 12	250	第145回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 16	272
第128回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 13	251	第146回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 17	273
第129回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 14	252	第147回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 18	274
第130回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 1	257	第148回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 19	275
第131回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 2	258	第149回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 20	276
第132回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 3	259	第150回	出土遺物(古代) - 1	283
第133回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 4	260	第151回	出土遺物(古代) - 2	284
第134回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 5	261	第152回	出土遺物(古代) - 3	285
第135回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 6	262	第153回	出土遺物(古代) - 4	286
第136回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 7	263	第154回	出土遺物(古代) - 5	287
第137回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 8	264	第155回	出土遺物(古代) - 6	288
第138回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 9	265	第156回	出土遺物(古代) - 7	289
第139回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 10	266	第157回	出土遺物(古代) - 8	290
第140回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 11	267	第158回	陶器器 - 1	292
第141回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 12	268	第159回	陶器器 - 2	293
第142回	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 13	269	第160回	陶器器 - 3	294
			第161回	珠洲系陶器 - 1	295
			第162回	珠洲系陶器 - 2	296
			第163回	珠洲系陶器 - 3	297
			第164回	珠洲系陶器 - 4	298
			第165回	古錢	301
			第166回	鉄製品	301
			第167回	文字資料 - 1	313
			第168回	文字資料 - 2	314
			第169回	文字資料 - 3	315
			第170回	文字資料 - 4	316
			第171回	文字資料 - 5	317

第172図	文字資料-6	318	花粉・孢子分布図	358	
第173図	文字資料-7	319	第200図	C地点の主要花粉分布図	359
第174図	文字資料-8	320	第201図	分析地点の地位図	360
第175図	文字資料-9	321	第202図	秋田県低地における 樹木花粉比較図	361
第176図	文字資料-10	322	第203図	地質柱状図と大型植物遺体	
第177図	文字資料-11	323		分析用試料の採取層準	365
第178図	文字資料-12	324	第204図	テフラ分析結果-覧図	381
第179図	木製品-1	329	第205図	屈折率測定結果	382
第180図	木製品-2	330	第206図	手取清水遺跡遺構平面図	392
第181図	木製品-3	331	第207図	S X153遺構内外の 土壤試料採取地点	393
第182図	木製品-4	332	第208図	遺構内外から採取した 土壤の横分布	393
第183図	木製品-5	333	第209図	遺構内外土壌試料に 残存する脂肪の脂肪酸組成	394
第184図	木製品-6	334	第210図	遺構内外土壌試料に 残存する脂肪のステロール組成	395
第185図	木製品-7	335	第211図	遺構内外土壌試料、遺跡遺物および現生 動物油脂の脂肪酸組成樹状構造図	396
第186図	木製品-8	336	第212図	遺構内外土壌試料に残存する脂肪の 脂肪酸組成による種特異性相関	396
第187図	木製品-9	337	第213図	山王川層出土土器の変形工学分1~3 C-2型、4-5 C-2型、4-5 C-3型(須藤隆1983より)	400
第188図	木製品-10	338	第214図	手取清水遺跡における弥生土器の 分類と編年-1	403-404
第189図	木製品-11	339	第215図	手取清水遺跡における弥生土器の 分類と編年-2	405-406
第190図	木製品-12	340			
第191図	木製品-13	341			
第192図	木製品-14	342			
第193図	木製品-15	343			
第194図	木製品-16	344			
第195図	木製品-17	345			
第196図	試料採取地点の断面図	348			
第197図	地質柱状図と 花粉分析用試料採取層準	350			
第198図	A-B地点の主要樹木花粉分布図	357			
第199図	A-B地点の主要草木				

付図1 A区河川跡・土層断面図

付図2 A-B-C区遺構配置図、SD溝状遺構配
置図

付図3 D区遺構配置図、SD溝状遺構断面図

付図4 E-K遺構配置図、SD溝状遺構断面図

付図5 F区遺構配置図、SD溝状遺構断面図

付図6 河川跡遺物出土状況図-1

付図7 D区掘立柱列跡(SA)、掘立柱埋物跡(S
B)配置図

表目次

第1表 簡便遺跡一覧表	9	組成表	353-354
第2表 漆塗上器観察表	238	第22表 A・B・C地点の樹木花粉化石の 組成表	355-356
第3表 平安時代土器(环・壺)		第23表 手取清水遺跡の 大型植物遺体一覧表(本)	366
法量一覧表-1	279	第24表 手取清水遺跡の 大型植物遺体一観表(草本)	367
第4表 平安時代土器(环・壺)		第25表 現地取り上げ標本	370
法量一覧表-2	280	第26表 オニグルミ核測定値一覧表 (S K 086)	371
第5表 平安時代土器(环・壺)		第27表 オニグルミ核測定値一覧表	372
法量一覧表-3	281	第28表 手取清水遺跡出土の灰から 検出された灰像と炭化穀子	373
第6表 平安時代土器(环・壺)		第29表 テフラ分析結果一覧表	382
法量一覧表-4	282	第30表 粒径組成	385
第7表 胸壁器一覧表	299	第31表 一次試物組成	385
第8表 珠洲系胸器一覧表	300	第32表 手取清水遺跡遺構の 残存脂肪抽出量	397
第9表 出土鏡貨一覧表	301	第33表 遺構内外土壤試料に分布するコレステ ロールとシトステロールの割合	397
第10表 墓古土器一覧表-1	306	第34表 将棋駒一覧表	415
第11表 墓古土器一覧表-2	307	第35表 墓古土器器種・器形分類	416
第12表 墓古土器一覧表-3	308	第36表 墓古土器不切離別分類	416
第13表 墓古土器一覧表-4	309	第37表 墓古土器墓葬部位別分類	416
第14表 墓古土器一覧表-5	310		
第15表 墓古土器一覧表-1	310		
第16表 墓古土器一覧表-2	311		
第17表 墓古土器一覧表-3	312		
第18表 木製品一覧表-1	326		
第19表 木製品一覧表-2	327		
第20表 木製品一覧表-3	328		
第21表 A・B・C地点の樹木花粉化石の			

図版目次

卷首図版 1	空中写真(北>南)	卷首図版 4	1.S L 324旧河川 (A区-N J 72ダ リッフ)遺物(R P 440~456)出土 状況(北>南)
卷首図版 2	空中写真(南D>北)	2.S L 323旧河川 (C区)木橋(R W 1207)出土状況	
卷首図版 3	1.S L 323 北西端から中央部を望む (北西>南東) 2.S L 324(A区-N H 71ダリッフ)土 層断面(北>南)	卷首図版 5	1.S L 323 旧河川(C区)将棋駒

(RW1167)出土状況	巻首図版 8	1.S X153その他の遺構 完掘 (南西>北東)
2.S L323旧河川 (C区)調査 (RW 1168)出土状況		2.菅玉
巻首図版 6 1.S E067井戸跡 曲物出土状況	巻首図版 9	1.環状石斧
2.S D130 完掘(北東>南西)		2.墨書き器
巻首図版 7 1.S K156土坑 完掘(南>北)	巻首図版10	1.珪皿
2.S X084その他の遺構 完掘 (西>東)		2.漆粉木・箸・ヘラ状木製品
図版 1 空中写真(上が北) 423		(南東>北西)
図版 2 空中写真(D区)(上が北) 424	2.S L323旧河川 (A区)調査状況	
図版 3 空中写真(D区) S B177・S K124 (上が北) 425		(北西>南東) 433
図版 4 空中写真(D区) S K I 111~113· S D169(上が北) 426	図版12 1.S L323旧河川 (A区)調査後	
図版 5 空中写真(D区) S B175・S K I 112· S D168-169・S E152・S X117-153· 155(上が北) 427	2.S L323旧河川 (A区)完掘 (北東>南西) 434	
図版 6 空中写真(D区) S D130・S K121-132· S X129-131-133-149(左が北) .. 428	図版13 1.S L323旧河川 (A区)完掘 (南>北) 435	
図版 7 空中写真(D区) S B175・S K I 113·S K I 120・S D169・S K118・S X081・S X084(左が北) 429	2.S L323旧河川 ·B区調査後 (南>北) 436	
図版 8 1.調査区近景(B区～F区) (北>南)	図版14 1.D区北部からA～C区を望む (南東>北西)	
2.調査前(A区～北西部) (南東>北西) 430	2.S L323旧河川 ·B区(南>北) .. 436	
図版 9 1.S L323旧河川 (A区)調査状況 (南東>北西)	図版15 1.C区西北部調査終了後 (南>北)	
2.S L323旧河川 (A区)調査状況 (南東>北西) 431	2.A区調査状況(北>南) 437	
図版10 1.S L323旧河川 (A区)調査状況 (南東>北西)	図版16 1.D区調査状況(南>北)	
2.S L323旧河川 (A区)調査後 (南東>北西) 432	2.A区南東部調査状況 (北西>南東) 438	
図版11 1.S L323旧河川 (A区)調査状況	図版17 1.D区南東部調査終了後 (北>南)	
	2.D区南東部調査終了後 (西>東) 439	
	図版18 1.D区調査状況(南>北)	
	2.D区調査状況(北東>南西) 440	
	図版19 1.D区南東部調査終了後	

(西>東)	450
2.E区プラン確認状況(西>東)	441	
図版20 1.F区調査状況(南>北)		
2.F区ノラン確認状況(南>北)	442	図版29 1.SB100掘立柱建物跡-D区-断面 (西>東)
図版21 1.F区調査状況(南>北)		2.SB170掘立柱建物跡-D区-完掘 (南>北) 451
2.F区調査終了後(東>西)	443	図版30 1.SB174掘立柱建物跡-D区-完掘 (南>北)
図版22 1.D区基本土層		2.SA178-210柱列-D区-完掘 (南>北) 452
2.SL323旧河川 (A区-NH71-72グリ ド) 土層断面(南東>北西)	444	図版31 1.SI060住居跡 検出状況 (北>南)
図版23 1.SL323旧河川 (A区-NH72グリ ド) 土層断面(北>南)		2.SI060住居跡 完掘(東>西) 453
2.SL323旧河川 (A区-NH71-72グリ ド) 土層断面(北西>南東)	445	図版32 1.SKI026堅穴状遺構 検出状況 (東>西)
図版24 1.SL323旧河川 (A区-NJ73グリ ド) 遺物出土状況(北>南)		2.SKI026堅穴状遺構 完掘 (北>南) 454
2.SL323旧河川 (A区-NJ73グリ ド) 火山灰・遺物出土状況 (南東>北西)	446	図版33 1.SKI030堅穴状遺構 断面 (南>北)
図版25 1.SL323旧河川 (C区-MD53グリ ド) 木簡-RW1207-出土状況		2.SKI030堅穴状遺構 遺物出土状況 (東>西) 455
2.SL323旧河川 (C区-MD53グリ ド) 銅-RW1168-出土状況	447	図版34 1.SKI030堅穴状遺構 断面 (南>北)
図版26 1.SL323旧河川 (C区-MD52グリ ド) 木製品-RW1249~1252-出土状 況		2.SKI030堅穴状遺構 断面 (東>西) 456
2.SL323旧河川 (C区-MD52グリ ド) 木製品-RW1037~1045-出土状 況	448	図版35 1.SKI111堅穴状遺構 検出状況 (西>東)
図版27 1.SL323旧河川 (C区-MD53グリ ド) 木製品-RW1089~1104-出土状 況		2.SKI111堅穴状遺構 断面 (東>西) 457
2.SL323(C区-MG60グリ ド) 上器出 土状況	449	図版36 1.SKI111堅穴状遺構 遺物出土状況 (北西>南東)
図版28 1.SB019-020-022掘立柱建物跡 完掘 (南>北)		2.SKI112堅穴状遺構 完掘 (北西>南東) 458
2.SB100掘立柱建物跡-D区-完掘		図版37 1.SKI120堅穴状遺構 完掘 (西>東)
		2.SKI120堅穴状遺構 断面 (東>西) 459

図版38	1.S E014井戸跡 完掘(北>南)	(北>南)
	2.S E014井戸跡 断面(南>北) ······ 460	2.S D281溝状造構 断面
図版39	1.S E028井戸跡 完掘(北>南)	(北>南) ······ 472
	2.S E028井戸跡 断面(北>南) ······ 461	図版51 1.S D281溝状造構 断面
図版40	1.S E031井戸跡 完掘(東>西)	(西>東)
	2.S E031井戸跡 断面(東>西) ······ 462	2.S D282溝状造構 完掘
図版41	1.S E067非戸跡遺物 出土状況 (西>東)	(東>西) ······ 473
	2.S E067井戸跡遺物 出土状況 (東>西) ······ 463	図版52 1.S K025土坑 完掘(南>北)
図版42	1.S E067非戸跡遺物 出土状況 (東>西)	2.S K069土坑 完掘(東>西) ······ 474
	2.S E067井戸跡 完掘(西>東) ······ 464	図版53 1.S K059土坑 断面(東>西)
図版43	1.S E086井戸跡 断面(西>東)	2.S K064土坑 完掘(南>北) ······ 475
	2.S E086井戸跡 遺物出土状況 (西>東) ······ 465	図版54 1.S K066土坑 完掘(北>南)
図版44	1.S E088井戸跡 完掘 (北東>南西)	2.S K085土坑 骨出土状況 ······ 476
	2.S E116井戸跡 完掘(南>北) ······ 466	図版55 1.S K124土坑 完掘(南>北)
図版45	1.S E116井戸跡 断面 (北西>南東) ······	2.S K124土坑 断面(南>北) ······ 477
	2.S E125井戸跡 断面(南>北) ······ 467	図版56 1.S K132土坑 完掘 (北西>南東) ······
図版46	1.S E125井戸跡 完掘(南>北)	2.S K132土坑 調査状況 (北西>南東) ······ 478
	2.S E152井戸跡 断面(東>西) ······ 468	図版57 1.S K132土坑 断面 (南東>北西) ······
図版47	1.S E215井戸跡 遺物出土状況 (東>西) ······	2.S K138土坑 完掘(西>東) ······ 479
	2.S E215井戸跡 完掘(東>西) ······ 469	図版58 1.S K138土坑 断面(西>東)
図版48	1.S D130溝状造構・S X167その他の造構 完掘(南西>北東)	2.S K156土坑 完掘(南>北) ······ 480
	2.S D134溝状造構・S E116井戸跡 完掘 (南西>北東) ······ 470	図版59 1.S K156土坑 断面(南>北)
図版49	1.S D279溝状造構 完掘 (北西>南東)	2.S K188土坑 完掘(南>北) ······ 481
	2.S D279溝状造構 断面 (北>南) ······ 471	図版60 1.S K188土坑 断面(南>北)
図版50	1.S D281・282溝状造構 完掘	2.S K188十坑 完掘(南>北) ······ 482
		図版61 1.S K193土坑 完掘 (南西>北東) ······
図版51	1.S D279溝状造構 完掘	2.S K193土坑 断面 (南西>北東) ······ 483
	2.S D279溝状造構 断面 (北>南) ······ 471	図版62 1.S K198土坑 完掘(西>東)
図版52	1.S D281・282溝状造構 完掘	2.S K211土坑 完掘 (北西>南東) ······ 484
		図版63 1.S K211土坑 断面

(北西>南東)	495
2. S K211土坑 断面	図版74 1. S X084その他の遺構 断面
(北西>南東) 485	(西>東)
図版64 1. S K250土坑 完掘(東>西)	2. S X113その他の遺構 完掘
2. S K250 土坑断面(東>西) 486	(北>南) 496
図版65 1. S K250 土坑灰混入状況 (東>西)	図版75 1. S X113その他の遺構 断面 (北>南)
2. S K252土坑 完掘(西>東) 487	2. S X113その他の遺構 断面 (北>南) 497
図版66 1. S K252土坑 断面(西>東)	図版76 1. S X129その他の遺構 完掘 (東>西)
2. S K252土坑 断面(西>東) 488	2. S X133その他の遺構・S K211 土坑 断面(北>南) 498
図版67 1. S K258土坑 完掘(東>西)	図版77 1. S X133その他の遺構 断面 (南>北)
2. S K306土坑 完掘 (南東>北西) 489	2. S X133その他の遺構 断面 499
図版68 1. S R023土器埋設遺構 断面 (南>北)	図版78 1. S X133その他の遺構 断面
2. S R023土器埋設遺構 断面 (東>西) 490	(西>東)
図版69 1. S R295土器埋設遺構 上器出土状況 (東>西)	2. S X149その他の遺構 完掘(西>東)
2. S R295上器埋設遺構 完掘 (東>西) 491 500
図版70 1. S X050その他の遺構 灰層検出状況 (南>北)	図版79 1. S X149その他の遺構 断面 (北>南)
2. S X050その他の遺構 断面 (南>北) 492	2. S X153その他の遺構 完掘 (西>東) 501
図版71 1. S X050その他の遺構 完掘 (北>南)	図版80 1. S X153その他の遺構 断面 (南>北)
2. S X081その他の遺構 完掘 (西>東) 493	2. S X167その他の遺構 完掘 (東>西) 502
図版72 1. S X081その他の遺構 断面 (西>東)	図版81 1. S X180その他の遺構 完掘 (南>北)
2. S X084その他の遺構 完掘 (西>東) 494	2. S X180その他の遺構 完掘 (西>東) 503
図版73 1. S X084その他の遺構 遺物出土状況 (西>東)	図版82 1. S X180その他の遺構(A区-NH73ダ リヤド)-RW704-出土状況 (北東>南西)
2. S X084その他の遺構 断面	2. S X180その他の遺構(A区-NH73ダ リヤド)

図版F) - R W705 - 出土状況 (南>北)	504	図版100 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 18	522
図版83 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 1	505	図版101 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 19	523
図版84 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 2	506	図版102 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 20	524
図版85 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 3	507	図版103 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 21	525
図版86 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 4	508	図版104 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 22	526
図版87 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 5	509	図版105 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 23	527
図版88 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 6	510	図版106 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 24	528
図版89 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 7	511	図版107 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 25	529
図版90 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 8	512	図版108 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 26	530
図版91 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 9	513	図版109 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 27	531
図版92 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 10	514	図版110 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 28	532
図版93 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 11	515	図版111 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 29	533
図版94 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 12	516	図版112 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 30	534
図版95 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 13	517	図版113 造構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 1	535
図版96 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 14	518	図版114 造構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 2	536
図版97 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 15	519	図版115 造構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 3	537
図版98 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 16	520	図版116 造構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 4	538
図版99 造構内出土土器 (縄文・弥生時代) - 17	521	図版117 造構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 5	539

図版118	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 6	540	図版136	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 1	558
図版119	遺構内出土石器 (縄文・弥生時代) - 7	541	図版137	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 2	559
図版120	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 1	542	図版138	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 3	560
図版121	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 2	543	図版139	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 4	561
図版122	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 3	544	図版140	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 5	562
図版123	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 4	545	図版141	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 6	563
図版124	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 5	546	図版142	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 7	564
図版125	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 6	547	図版143	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 8	565
図版126	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 7	548	図版144	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 9	566
図版127	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 8	549	図版145	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 10	567
図版128	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 9	550	図版146	遺構外出土石器 (縄文・弥生時代) - 11	568
図版129	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 10	551	図版147	遺構内出土遺物(古代) - 1	569
図版130	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 11	552	図版148	遺構内出土遺物(古代) - 2	570
図版131	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 12	553	図版149	遺構内出土遺物(古代) - 3	571
図版132	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 13	554	図版150	遺構内出土遺物(古代) - 4	572
図版133	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 14	555	図版151	遺構内出土遺物(古代) - 5	573
図版134	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 15	556	図版152	遺構外出土遺物(古代) - 6	574
図版135	遺構外出土土器 (縄文・弥生時代) - 16	557	図版153	遺構外出土遺物(古代) - 7	575
			図版154	遺構外出土遺物(古代) - 8	576
			図版155	遺構外出土遺物(古代) - 9	577
			図版156	遺構外出土遺物(古代) - 10	578
			図版157	遺構外出土遺物(古代) - 11	579
			図版158	遺構外出土遺物(古代) - 12	580
			図版159	遺構外出土遺物(古代) - 13	581
			図版160	陶磁器 - 1	582

図版161	陶磁器 - 2	583	図版191	木製品 - 6	613
図版162	陶磁器 - 3	594	図版192	手取清水遺跡より産出した 花粉化石 - 1	614
図版163	珠洲系陶器 - 1	585	図版193	手取清水遺跡より産出した 花粉化石 - 2	615
図版164	珠洲系陶器 - 2	586	図版194	手取清水遺跡より産出した 花粉化石 - 3	616
図版165	珠洲系陶器 - 3	587	図版195	手取清水遺跡の大型植物遺体 - 1	617
図版166	古鏡 - 1	588	図版196	手取清水遺跡の大型植物遺体 - 2	618
図版167	文字資料 - 1	589	図版197	手取清水遺跡の大型植物遺体 - 3 (現地取り上げ)	619
図版168	文字資料 - 2	590	図版198	S K252 - 1から検出された灰像の顕微鏡写真と炭化粒の実体顕微鏡写真および走査型電子顕微鏡写真	620
図版169	文字資料 - 3	591	図版199	S K252 - 2から検出された灰像の顕微鏡写真と炭化粒の実体顕微鏡写真および走査型電子顕微鏡写真	621
図版170	文字資料 - 4	592	図版200	S K252 - 3から検出された灰像の顕微鏡写真と炭化粒の実体顕微鏡写真および走査型電子顕微鏡写真	622
図版171	文字資料 - 5	593	図版201	S X084から検出された灰像の顕微鏡写真と炭化粒の実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真	623
図版172	文字資料 - 6	594	図版202	S K138から検出された灰像の顕微鏡写真と炭化粒の実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真	624
図版173	文字資料 - 7	595	図版203	S K149から検出された灰像の顕微鏡写真と炭化粒の実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真	625
図版174	文字資料 - 8	596	図版204	猿物顕微鏡写真	626
図版175	文字資料 - 9	597			
図版176	文字資料 - 10	598			
図版177	文字資料 - 11	599			
図版178	文字資料 - 12	600			
図版179	文字資料 - 13	601			
図版180	文字資料 - 14	602			
図版181	文字資料 - 15	603			
図版182	文字資料 - 16	604			
図版183	文字資料 - 17	605			
図版184	文字資料 - 18	606			
図版185	文字資料 - 19	607			
図版186	木製品 - 1	608			
図版187	木製品 - 2	609			
図版188	木製品 - 3	610			
図版189	木製品 - 4	611			
図版190	木製品 - 5	612	図版204	猿物顕微鏡写真	626

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、秋田市・横手市・岩手県北上市を結ぶ県期待の高速交通体系の基幹をなす道路である。昭和53年11月には、秋田市・横手市間57.4kmについて第8次施行命令が下された。これに伴い昭和54年11月に、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受け秋田県教育委員会では、昭和55・56年の2ヶ年にわたって遺跡の分布調査を行い計画路線内に44遺跡が存在することを報告した。^(註1・2)さらに昭和58年にはこれら遺跡の詳細分布調査を行い、^(註3・4)最終的に路線内に37遺跡が存在することを報告している。

その後、路線内の37遺跡の保護について、日本道路公団と秋田県教育委員会との間で協議されたが、路線変更の不可能のことから最終的には記録保存の措置をとることで合意し、昭和60年度から調査を開始したのである。^(註5)

調査は秋田市寄りの遺跡から順次着手し、昭和60年には河辺郡河辺町七曲地区の6遺跡、翌61年には仙北郡協和町中淀川地区の上ノ山Ⅰ・上ノ山Ⅱ・館野遺跡の3遺跡、それに同町峰吉川地区に所在する半仙遺跡の一部の調査を実施した。さらに昭和62年には半仙遺跡の残りの部分と、西仙北サービスエリア予定地の上野台遺跡とその北側の寺沢遺跡、仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅲ・小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の一部、大森町の下田遺跡、横手市の手取清水遺跡の調査を実施したのである。^(註6)

註1 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第79集

1981(昭和56年)

註2 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集

1982(昭和57年)

註3 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第116集

1984(昭和59年)

註4 その後の範囲確認調査などで追跡の範囲が路線内に及んでいないことが判明したものがあり、37の遺跡のうち、実際の調査の対象となる遺跡は24遺跡である。

註5 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書1』秋田県文化財調査報告書第166集 1988(昭和63年)

第1章 はじめに

註 6 7 遺跡の範囲確認調査を実施したが、石板台V遺跡(遺跡No.32)は路線内に範囲が及んでいなかつたので調査対象から外された。

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第126集
1985(昭和60年)

註 7 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書
第166集 1988(昭和63年)

註 8 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書
第180集 1989(平成元年)

第2節 調査の組織と構成

調査主体 秋田県教育委員会

遺跡名・所在地・調査面積・調査期間・調査担当者

番号	遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	調査担当者
9	手取清水	横手市清水田新田 字皿川端22外	13,000 m ²	昭和62年 4/17~8/12	柴田陽一郎(文化財主任) 山崎 文幸(文化財主事) 沢田 康志(非常勤職員) 和泉 昭一(非常勤職員) 村上 光明(非常勤職員) 鐘田 茂(非常勤職員) 小山内 透(非常勤職員) 石川恵美子(非常勤職員) 能登谷宣康(非常勤職員)

専門指導員 工 楽 善 通 余良國立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長
桑原滋郎 宮城県多賀城跡調査研究所長

小林達雄 国学院大学文学部教授

白石建雄 秋田大学教育学部教授

須藤 隆 東北大文学部助教授 (五十音順)

総務担当 加藤 進 秋田県埋蔵文化財センター主査(現・秋田県立博物館主査)
佐田 茂 秋田県埋蔵文化財センター主査

高橋忠太郎 秋田県埋蔵文化財センター主事

協力機関 横手市・横手市教育委員会

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と立地

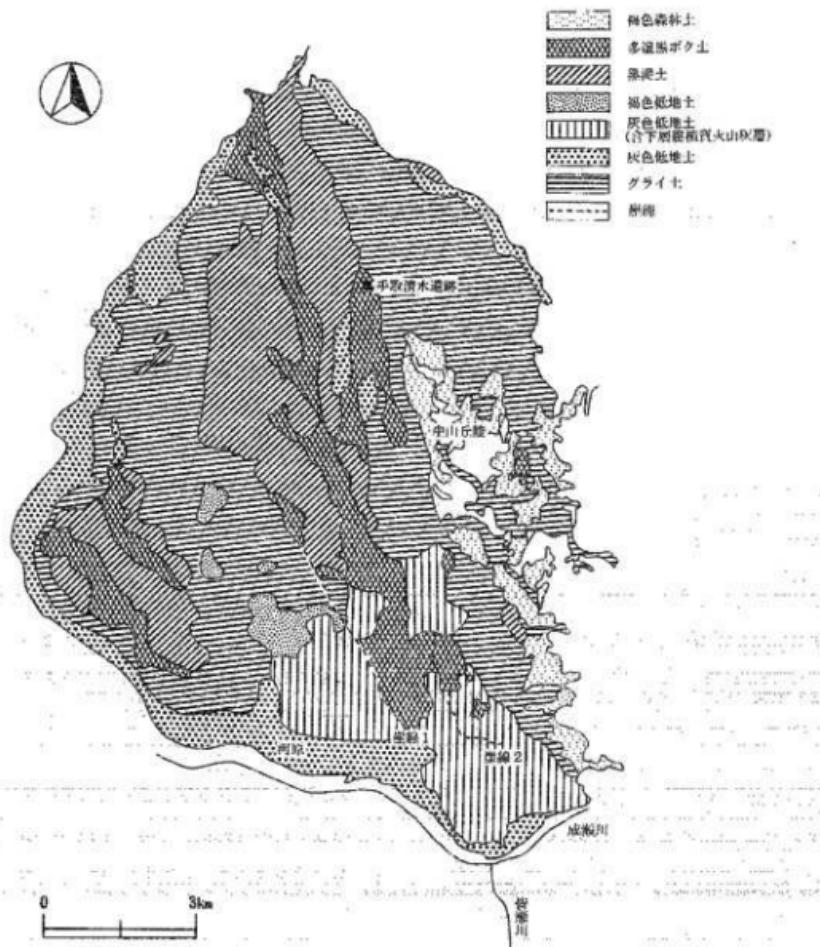
横手市は秋田県南東部、雄物川の上・中流域に広がる横手盆地のはば中央東部に位置し、北を大曲市・六郷町、東を山村村、西を大雄村、南を平鹿町と接し、面積110.6km²、人口4万3千余の中核都市である(第1図)。手取清水遺跡は横手市清水町新田字眼川端(通称「塚堀」という)にある。遺跡はおおよそ北緯39度20分、東経140度30分にあり、奥羽本線横手駅から直線距離にして北西5kmの地点である。「塚堀」は市の西端にあたり、西は大雄村、南は平鹿町に隣接している。西境の一部を流れる大戸川が、北端で南東からの皿川を合わせ北流を続ける。県道横手一大森一大内線はその合流地点を通り、東西方向に走る。大戸川に沿って南北に長い横手市域の北部県道沿いに塚堀、南部の市道上猪岡一般若寺線沿いに般若寺などの集落がある。

る。木田中心の純農村地帯である。

横手盆地は西奥羽内陸盆地列のなかで最大の盆地で、南北の長さ60km、東西の幅15kmと南北に狭長な範囲である。その東縁は真昼岳断層崖によって奥羽山脈に、西縁は姫神、大黒森岳断層崖によって出羽山地に接している。盆地北部の角館付近では分離段丘が多い。南部の国見岳断層崖と東鳥海断層崖もきわめて明瞭である。雄物川は盆地の西縁を北流し、皆瀬川・横手川(旭川)・丸子川・玉川など奥羽山脈から流れれる諸河川を合わせ、出羽山地を先行的に横断し日本海に注ぐ。河床の海拔高度は盆地南部で100m、盆地尻は20mである。盆地名は盆地内最大の集落であった横手に由来する。盆地の大部分は奥羽山脈から流れ出る諸河川のつくる複合扇状地と西部の沖積低地とか



第1圖 遺跡位置圖



第2図 成瀬川・皆瀬川・西馬内川扇状地の土壤型と地形面

らなっている。やや大型の扇状地は丸子川扇状地など9個を数えるが、これらのうち南部・皆瀬川、西馬内川扇状地を除くと、現成扇状地である。

(註2)
成瀬川、皆瀬川扇状地の地形をみると、駒越-梨ノ木-下醍醐(座標1)、増田-浅舞(座標2)をむすぶ3~5mの北西-南東方向の二段の崖線があって、高・中・底位の三面に大別される。(第2図)崖線は南西に向かって非対称的配置をなし、相対的沈降方向を示している。さき

の高・中・低位三面の土壤型は高位面ではグライ土が、中位面では黒泥上と多湿黒ボク土が主体であり、低位面ではグライ土が主体で黒泥土・多湿黒ボク土等も西端域にみられる。

皆瀬川・雄物川の狭長な池溝帯には、国見岳・東島海ブロックの断層崖下に標式的な小扇状地が並んでいる。かつて雄物川は網状流路をなし、河道の変遷や氾濫を繰り返しながら西へ西へと移動した痕跡を認めることができる。盆地西縁の大雄村付近の沖積低地では泥炭層(通称「田村根ココロ」)の分布がみられ、旧くは湖沼であったことを推定させる。横手市街地の西側にある中山丘陵は金峰山山地の支脈が盆地面下に埋没し、切れずに残った凝灰岩丘陵地である。

遺跡は大戸川と皿川の合流地点より皿川を約300m遡った皿川の左岸に接した位置にある。遺跡の範囲と東北横断自動車道路線を明示したのが第3図である。調査地点は標高40.3~42.9mの河岸段丘上であり、おおよそ40.3~40.8, 41.5~41.8, 42.2~42.9mの小さな三段丘面からなり、多くの遺構は最も高い標高42.2~42.9mの段丘面から検出された。他の低い段丘面は河道の氾濫原で、遺構は少なかったけれど多量の遺物が発見された。第4図はE区深掘の土層図であり、おおよそ20層に分層できた。土層を大きく見ると、上層は砂層と粘土層、中層は砂層、下層は礫層が主体である。

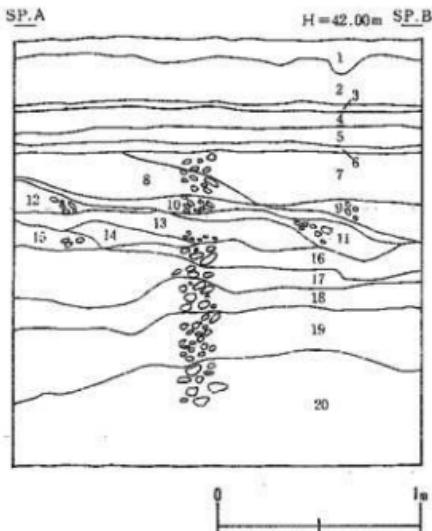


第3図 遺跡の範囲と周辺の地形

第2節 歴史的環境

手取清水遺跡と横手市内の遺跡を中心掘えて、周辺の平鹿町・大雄村内の遺跡についても取り上げて概観してみる。

(図3)
手取清水遺跡と周辺の遺跡を示した第5回の遺跡数は62遺跡である。範囲内の遺跡について時代別に分けてみると、縄文時代30・弥生時代2・古墳時代1・古代32・中世以降7・不明7となり、縄文時代(38%)と古代(41%)が圧倒的に多い。縄文時代と平安時代が重複する遺跡が17遺跡(27%)もある。また、縄文時代の時期のわかる遺跡のうち、後期～晩期



第4図 E区深掘土層

F区深掘

- 黒褐色土(10YR 5G) 拾子網、粘性あり 塗化植物 1mm
- にぶく 黃褐色土(10YR 5G) 植物少少、粘性若干
- 灰白色土(15Y 7G) シルト質の粘土層、粘性若干、酸化植物 10%
- にぶく 黃色土(2.5Y 5G) 粘性稍強、粘性若干、酸化植物 3%
- 灰オーラー色土(5Y 5G) 粘性稍強、粘性若干、酸化植物 5%
- 灰色土(5Y 7G) シルト質の粘土層、粘性あり、酸化植物 5%
- にぶく 黄褐色砂層(10Y 5G) 径1mm～3mmの大砂粒、小砂径15mm～35mm大70%、礫やや左斜め上前方下
- 黄褐色砂層(10Y 5G) 径1mm～2mmの大砂粒、小砂径7mm～30mm大80%、礫右斜め上後方下
- にぶく 黄褐色砂層(10Y 5G) 径1mm～2mmの大砂粒、小砂径10mm～30mm大70%、礫右斜め上やや後方傾斜
- 混砂小礫層、(0.5mm～2mm)の大砂粒、径1mm～2mm人の頭取10%、礫左斜め上後方下
- にぶく 黄褐色砂層(2.5Y R 5G) 径0.5mm～1mmの大砂粒層、径10mm～20mmの大砂粒50%以上部に集中、礫左斜め上後方傾斜
- 褐色砂層(10Y R 5G) 径1mm～2mmの大砂粒、小砂径10mm～30mm大80%、礫右斜め上
- 疊灰白砂層(2.5Y R 5G) 径1mm～2mmの大砂粒、層下部に小砂径5mm～20mm大集中15%、礫も斜め上前方下
- 黄褐色砂層(2.5Y 5G) 径1mm～2mmの大砂粒、小砂径5mm～30mm大2%層下部に集中、礫左斜めの上前方傾斜
- 灰褐色砂層(10Y R 5G) 径1mm～2mmの大砂粒、小砂径5mm～15mm大5%、礫左斜め上後方下
- 黄褐色砂層(2.5Y R 5G) 径0.5mm～1mmの大砂粒層、小砂径5mm～40mm大80%、礫左斜め上後方下
- 漂砾帶層、径0.5mm～2mmの大細粒混入小砂径5mm大～2.5mm大多量、5mm～70mm大3%、礫左斜め上後方下
- 漂砾帶層、径0.5mmの漂砾砂混入
- 混砂礫層、小砂径5mm～30mm大多量、40mm～80mmの大砂20%、礫左斜め上前方下
- 混砂礫層、径0.5mmの大細粒混入、礫径40mm～100mm大50%、小砂径5mm～30mm大50%、礫左右の傾斜なし、前傾
- ×19・20層より湧水

とされているのが10遺跡(33%)もある。このような当該地域の遺跡の特徴は、横手盆地における一般的傾向を示していると言つてもよい。

旧石器時代の遺跡は横手市内に4箇所確認され、いずれも横手川周辺標高100m前後の台地上にある。

縄文時代の遺跡は、前期の鳥子山遺跡があり、中期～晩期にかけて中杉沢A遺跡や子吉山遺跡など比較的大きい集落がみられるようになる。後期後半～晩期に入ると、台地上だけでなく、沖積低地にも集落が拡がる。大戸川右岸の低位段丘上に立地するオホン清水A遺跡(13「第5回中の遺跡番号」以下同じ)では200基以上の土壙墓とそれらを取り囲むように20軒近くの竪穴住居跡が検出されている。

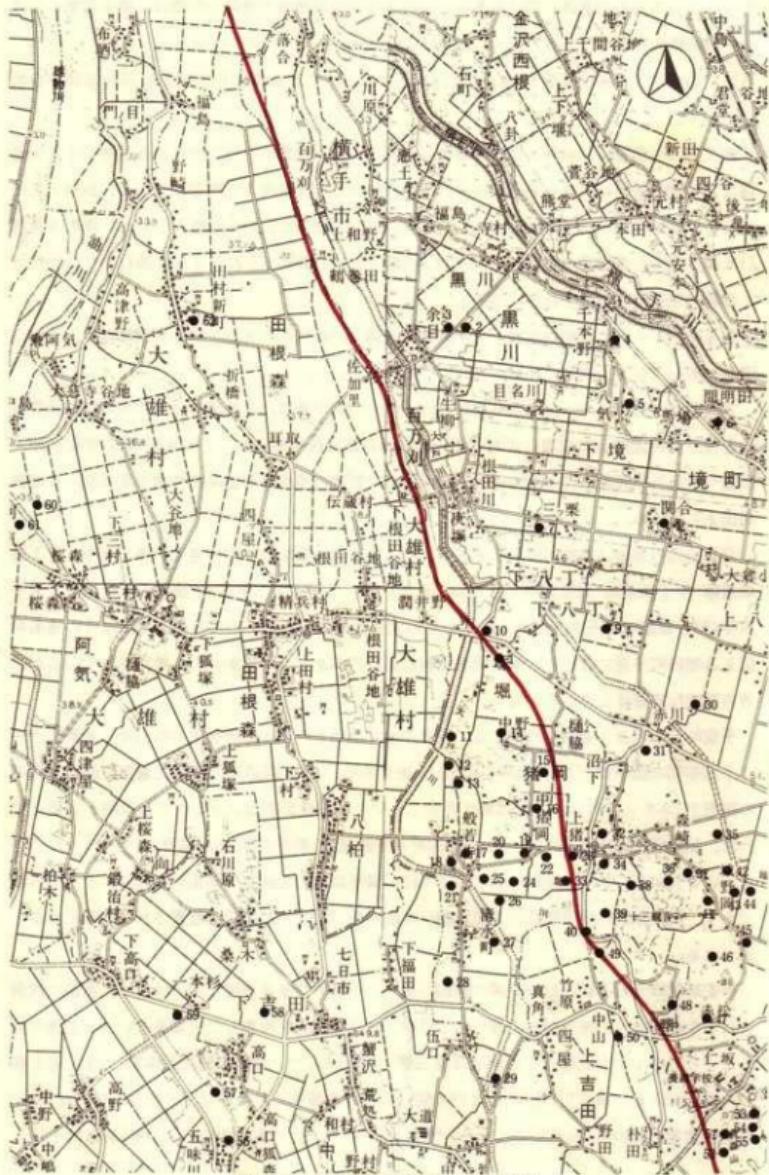
弥生時代に入ると遺跡は激減し、手取清水遺跡(1)のほかにオホン清水北遺跡(11)、子吉山遺跡において弥生土器数点が採取されているにすぎない。

古墳時代の遺跡はオホン清水B遺跡(12)が唯一の例である。この遺跡は大戸川右岸の後背湿地を伴う自然堤防上に立地しており、一辺8mの竪穴住居跡とおよそ五世紀末・六世紀初頭に位置づけられる脚部に長方形の透し3箇所をもつ短脚の須恵器有蓋高杯や南小泉式期の土師器が出土している。

奈良時代の遺跡は雄物川町から平施町、横手市中山丘陵をむすぶ古道上に多く分布し、下藤根遺跡・牛子塚遺跡・竹原窯跡などが知られている。天平宝字三年(759)建郡の平鹿郡は、天平五年(733)建郡の雄勝郡を母体として、その北部に建郡されたものである。郡衙は今に遺名を伝える増田町平鹿に置かれ、助河駅が郡衙に近い八木あたりに置かれたと推定されているが、考古学的な実証はなされていない。

平安時代に入ると遺跡は急増する。現在の仙北郡仙北町払田に所在する払田柵は延暦二十二年間に創建された「河辺府」と考える説もある。この「河辺府」を「河辺地方の国府」「河辺の国府」であるとすれば、平鹿郡域に存在していた可能性がある。もし、この仮説が妥当とすれば、払田柵は『和名類聚抄』の「出羽國府在平鹿郡」に相当する「出羽國府」とすることができる。いずれにしても、九世紀初頭の段階では、横手盆地の北部まで開拓が進んだことが明らかであり、弘仁年間には平鹿郡の北部を割いて山本郡(現在の仙北郡)が建設されたと考えることができる。

平安時代に入ると横手盆地全城の開拓が進み、一般的な集落遺跡だけではなく、塚跡に代表される生産遺跡、仏教思想の表徴である経塚、特定の人物を埋葬した火葬墓といった遺跡が見えてくる。横手市金沢柵とその周辺は後三年の役(1083)で、源家衡が源義家・義光を迎えた場所である。横手川(旭川)と大戸川間の広大な沖積地には条理制とみられる古い地割(上地開発遺構)が認められている。この一帯には上八丁の上小屋をはじめ福小屋・助太郎小屋な



第5図 周辺遺跡分布図(1:50,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代(時期)	参考文献	番号	遺跡名	時代(時期)	参考文献
1	手取清水	縄文(晚期)・弥生・平安	1・2	32	猪岡頃	中世	17
2	黒川館跡	中世～近世	3・4	33	長瀬A	平安	
3	館西	平安		34	長瀬B	繩文	
4	西野館跡	中世～近世	5	35	赤坂字高口	縄文・平安	
5	八氣	平安		36	城野岡館	中世	18
6	上間明田	繩文		37	城野岡塚群	不明	
7	三ツ栗柵木	不明	6・7	38	猪岡	縄文・平安	
8	開合	繩文		39	岩野沢A	繩文	
9	古館跡	中世	8	40	岩野沢B	縄文(後期～晚期)・平安	19
10	塙塙字塙塙	不明		41	城野岡	平安	
11	オホン清水北	縄文(後～晚期)・弥生・平安	9	42	城野岡前A	繩文	
12	オホン清水B	縄文(後～晚期)・古墳・平安	10	43	城野岡B	繩文	
13	オホン清水A	縄文(後期～晚期)・平安	11・12・13	44	赤坂字堤下	縄文・平安	
14	猪岡字菅原	縄文(後期～晚期)		45	橋本	縄文(後期～晚期)	
15	匱匠道下	繩文・平安		46	城野岡塙跡	平安	
16	中堀西	縄文・平安		47	沢口	平安	20
17	轟師前	繩文		48	明通	平安	21
18	般若寺	平安	14・15	49	竹原	奈良・平安	22・23
19	中猪岡A	縄文・平安		50	福島	平安	24
20	中猪岡B	平安		51	西ヶ沢前森	平安	25
21	宮下	平安		52	西ヶ沢	平安	26
22	川口A	平安		53	西ヶ沢山丁	平安	
23	川口B	中世～近世		54	西ヶ沢山丘	平安	
24	猪岡字八幡	縄文(晚期)・平安		55	西ヶ沢山Ⅲ	平安	
25	清水町新田字堤下	縄文(後期～晚期)・平安		56	五味川	平安	27
26	大堀端	縄文(後期～晚期)・平安		57	越部云	平安	
27	宮東	縄文・平安		58	高口東	平安	28
28	宮表	中世～近世		59	一本杉	平安	
29	新城下	繩文		60	江原鷲1	繩文	
30	赤川館	中世	16	61	江原鷲2	繩文	29
31	野際	縄文・平安		62	藍物館	中世	30・31

ど、いわゆる48小屋といわれる小屋のついた地名が残っており、満徳長者・地副長者・明永長者などの長者伝説とともに、ト部一族や清原一族が平安中期頃にこの泥炭地帯を開拓したときの^(註4)名残だという由緒を伴っている。

十世紀後半から十二世紀における平鹿郡内にはいくつかの経塚群が発見されている。横手市金沢寺寺沢の閑居長根経塚群からは珠洲系陶器の四耳壺と、蓋として用いられた和鏡(蘆雁鏡)が出土している。この他横手市金沢周辺には積石塚や十三塚などがある。雄物川町沼館字千刈田より、永延三年(989)紀年銘をもつ瑞花双鳳八稜鏡が出土した記録がある。八稜鏡の一側には一弁ずつの蓮弁がかたどられ、鏡面の中央には大日如来を置き、周囲に八仏を配した胎藏界曼荼羅である。鏡の縁部には「永延三年八月三日幸以奉始八葉九尊菩薩願主 仗伴守光女且主伴希子願也」と刻まれていた。雄物川町左岸の丘陵には雄物川町北野経塚、大沢経塚があり、経甕、経筒、経巻が発見されている。大森町観音寺経塚では青銅製の経筒に「久安五年(1149)己巳五月日僧良與」と刻まれている。このように平安時代後期には仏教文化が深く浸透していく様子をうかがうことができる。

鎌倉初期、尾張国出身の御家人松葉助宗は平鹿郡地頭に補任され、その次男惟泰の代から当郡名を苗字として出羽国御家人平賀(平鹿)氏を名乗ったという。^(註5)惟泰の弟油河四郎泰実・吉田五郎経宗もそれぞれ都内の油河郷・吉田郷を苗字の地にしたとみられる。延元元年(1336)南朝方の鎮守府将軍北畠頼家は当地にとどまる平賀四郎左衛門を当方の「北出羽使節」に任命している。建武五年(1338)頃、惟泰系統の平賀家宗家一族が塙守(塙堀)郷・三捺(三栗)郷の横手市西城に属する郷や八柏郷(大雄村)を伝領し、現在の平鹿町や大雄村・雄物川町方面に庶子を分派出しているので、横手市が出羽国御家人藤原姓平賀氏惣領家の主たる基盤であったと考えられる。

鎌倉中期頃に郡地頭職(郡惣領職)は北条・門の手に移り、鎌倉幕末の北条金沢忠時を最後とした。そのため鎌倉幕府が滅亡し、建武新政が始まると、平鹿郡は元弘没収地の扱いを受けることになるが、平賀一族は郷村地頭として勢力をとどめる。戦国期における平鹿郡の松葉系平賀氏は雄勝郡の小野寺氏や山本郡の戸沢氏の勢力に押されその家臣になる。

慶長七年(1602)から秋田藩領となる。横手市に城代(所領)を配置し、初期には増田・浅舞にも藩士を配置している。横手・浅舞周辺は横手木綿の産地として有名であった。塙堀村は正保四年(1647)『出羽国一国絵図』によれば塙堀新田村167石とみえるし、享保十五年(1730)の岡見知愛編『享保郡邑記』における「塙堀村81軒一支郷2」の地にあたる。

- 註1 『角川日本地名大辞典5秋田県』 角川书店 1980(昭和55年)
- 註2 秋田県農政部 『横手』 雄平仙中核都市建設計画地域上地分類基本調査 1977(昭和52年)
- 註3 横手市教育委員会 『秋田県横手市遺跡詳細分布調査報告書』 横手市文化財調査報告11
1986(昭和61年3月)
- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県南版)』 1987(昭和62年12月)
- 註4 註3文献
- 註5 註1文献

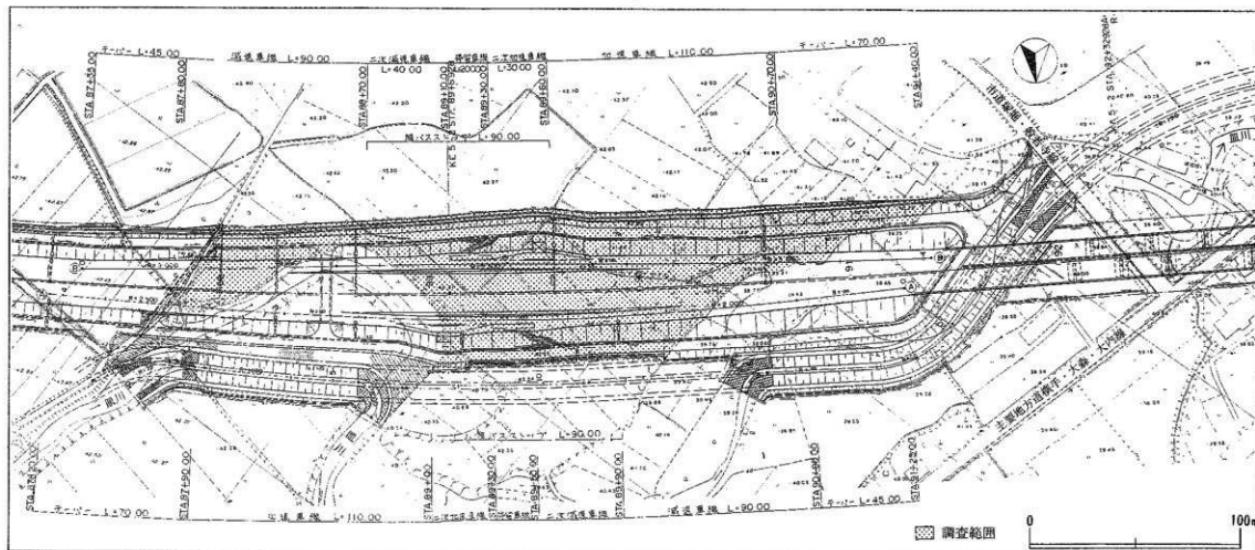
第1表周辺遺跡一覧表中の『参考文献』に記載した番号である。

- 1 佐川良視 「弥生式文化遺跡－手取清水の発掘－」『横手郷土史資料』第33号 1960(昭和35年)
- 2 横手市教育委員会 『手取清水遺跡発掘調査報告書』 1974(昭和49年)
- 3 沼船愛三 『出羽諸城の研究』 伊吉書院 1980(昭和55年)
- 4 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
- 5 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
- 6 秋田県教育委員会 『金沢櫛跡発掘調査概報』 秋田県文化財調査報告書第12集 1967(昭和42年3月)
- 7 秋田県教育委員会 『金沢櫛跡発掘調査概報』 1974(昭和49年)
- 8 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
- 9 横手市教育委員会 『秋田県横手市オホン清水－第3次遺跡発掘調査報告書－』 横手市文化財調査報告10 1984(昭和59年)
- 10 横手市教育委員会 『秋田県横手市オホン清水－第3次遺跡発掘調査報告書－』 横手市文化財報告書告10 1984(昭和59年)
- 11 杉山寿栄男 『日本原始織維工芸史(原始編)』 雄山閣 1967(昭和42年)
- 12 奈良修介・豊島昂 『秋田県の考古学』 吉川弘文館 1967(昭和42年)
- 13 横手市教育委員会 『秋田県横手市オホン清水－第3次遺跡発掘調査報告書－』 横手市文化財調査報告10 1984(昭和59年)
- 14 杉山寿栄男 『日本原始織維工芸史(原始編)』 雄山閣 1967(昭和42年)
- 15 大和久賀平・奈良修介 『秋田県史・考古編』 1960(昭和35年)
- 16 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
- 17 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
- 18 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
- 19 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第93集 1982(昭和57年3月)
- 20 富樫泰時 『秋田県横手市発見の彫刻器』 『若木考古』63・64 国学院大学考古学研究会 1962(昭和

第2章 遺跡の立地と環境

37年)

- 21 平鹿町『平鹿町史』1984(昭和59年)
- 22 秋田県教育委員会『秋田県遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第103集 1983(昭和58年3月)
平鹿町『平鹿町史』1984(昭和59年)
- 23 秋田県教育委員会『秋田県遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第103集 1983(昭和58年)
- 24 平鹿町『平鹿町史』1984(昭和59年)
- 25 平鹿町『平鹿町史』1984(昭和59年)
- 26 平鹿町『平鹿町史』1984(昭和59年)
- 27 平鹿町『平鹿町史』1984(昭和59年)
- 28 豊島昂『現地調査』報告書未刊行 1968(昭和43年)
- 29 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
- 30 菅江真澄『雪の出羽路』1824(文政7年)



第6図 周辺地形図・調査範囲図

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

前述のように、手取清水遺跡は、市の西端にあたる横手市清水町新田に所在する。遺跡は、西を北流する大戸川とその支流皿川の合流地点より皿川を約300m遡った、標高40.3~42.9mの河岸段丘上に位置する。蛇行する皿川によって形成された河岸段丘は3段丘面からなり、多くの遺構は最も高い標高42.2~42.9mの段丘面に構築されていた。他の低い段丘面は旧河川(SL323~326)で、遺構はきわめて少なかつたが、多量の土器・石器、木製品などが出土した。現況は水田を主とし、一部に畑地・原野が含まれる。

本遺跡は昭和35年10月に発掘調査が実施されており、今回の調査は2回目の調査にあたる。昭和35年の発掘地点は、報告書中の「第1図・第2図」によれば、溝の検出状況や皿川・水路・畦畔の位置などから、今回調査したC区の東側、つまりD区との境寄り(付図3の矢印部分)と思われる。検出遺構は溝状遺構2条で、出土遺物は弥生時代の土器を主体として、縄文時代晩期の土器・石器・土師器・須恵器が出土している。^(註1)

遺跡の基本層位はD区の東西のはば中央MAラインと西端のMRラインの上層断面(第7図)の観察では以下のとおりである。

第1層 黒褐色土(10YR 3/1)。[表土] 層厚12~15cmである。

第2層 黒褐色土(10YR 2/2)。粘性・しまりがある。層厚10~20cmである。時代の異なる遺物が混在して出土する。

第3層 黒褐色土(7.5YR 2/2)。[地山漸移層] 粘性・しまりがあり、径2~10cmの円礫7%ほど混入している。層厚は4~15cmであるが、第7図のとおりLRラインでは、第3層が削平されてすでになかった。したがって第2層はすでに動かされた上の可能性がある。

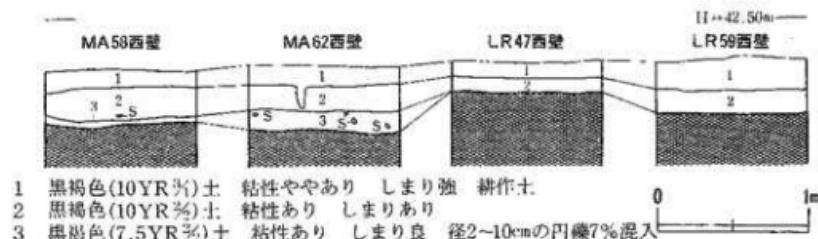
D区の東側では第2層がほとんどなく、表土を剥いた段階で遺構プランを確認できた。LRラインでは前述のように第3層がなく、MAラインでは第1層から第3層まであり、地山までの最深は40cm前後と東側に比較してかなり深くなる。さらにMAラインから西のD区西端部では表土から地山までの深度がMAラインよりもさらに増す。

本調査区は最も高い段丘面に立地するが、この周辺一帯は昭和38年に重機を使って耕地整理が行われている。今回の調査の結果、原地形は東から西に傾斜している事が判明した。ここにある黒ボク土は東から西に重機によって押されたものと考えられる。C区の東端部は昭和35年の調査報告書の上層断面観察によれば、表土から黄色粘土層(地山)まで深さは約70cmもあ

り、遺物包含層である第3層の黒色土層が層厚50cmあり、上半部から遺物が多く出土している。遺物は弥生時代の土器を主体とし、縄文時代の土器、古代の土師器・須恵器と、時期の異なる遺物が同一層位に混入し、その出土状態から遺物の再堆積の可能性が強いと指摘されている。このことから昭和38年の耕地整理以前にも土が動かされていたと考えられる。C区は今回の調査前の現況ではD区よりも1段低い水田となっており、昭和35年当時よりも2層の黒色土はさほど厚くはなく、北に行くほど薄く、その上に盛上されていた。このことから、この周囲も耕地整理により削平されたものと思われる。B区においてはA区寄りの北西側で、表土下に礫を多く含んだ土が厚さ30~40cmほど盛上され、その下にわずかに遺物包含層が残っていた。この地点も耕地整理時に、低くなっている北東よりの旧河川(S L 323・326)に重機によって黒色土が動かされたようである。F区は表土の下が第2層で黒褐色上の遺物包含層となっており、地山は黄褐色シルトで、地山面より10cmほど上で古代~中世の遺物が同一レベルで出土した。

S L 323~326の旧河川からは多量の木製品とともに、縄文・弥生土器、古代の土師器・須恵器などが出土した。A区北西部のS L 324の土層断面(NH71グリッドS P B~S P C)によれば、表土から砂礫層まで深さ約110cmほどあり、大きさは1~3層に分かれる。堆積物の記載は第5章の自然科学分析や付図1に詳しいのでそれらにゆずるが、第1層は表土、第2層は黒色~黒褐色の泥炭~泥炭質粘土質シルトで、2-c層の上部には火山灰(2-b層)が薄く帯状に堆積する。第3層は主として砂礫及び砂層である。第2-b~2-d層からは古代土器・墨書き土器とともに多くの木製品が出土する平安時代の遺物包含層である。2-a層からは遺物の出土がきわめて少ないが、大觀通宝(初銅年1107年~北宋)が出土していることから、大きさは古代~中世の間の堆積層と考えられる。第3層の砂礫層中からは縄文・弥生時代の摩滅した土器の破片や石器などが多く出土しており、遺跡周辺から流れ込んで混入した遺物である。

以上のように本地点は層が比較的厚く、時代毎の層序がしっかりとしていた。しかしA区の北西端や中央部では層厚がありなく、縄文~弥生時代、古代、中世の遺物が混在して出土し、層位的なまとまりがなく、泥炭層から出土した木製品は供伴する土器などから時代的な関係を把握できなかった。B・C区 S L 323の52ライン土層断面(S P K~S P L~付図2-1)は、13層に分層され、4、5、7~12層は黒色~黒褐色の泥炭~泥炭質粘土質シルトで植物遺体を含んで木製品が多く出土し、第8~12層にはその傾向が顕著である。第1・2・4・6・13層は砂利や礫の混入層で、縄文・弥生土器などが出土し、中央部では部分的に層位が逆転しているところもある。A区の北西端や中央部よりは平均した厚さはあるものの、遺物出土状況はほぼB・C区の場合と類似する。また、左右両岸には地山の盛土や削平の痕跡もみられた。



第7図 遺跡基本土層

第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。東北横断自動車道秋田線路線内には、20m毎に中心杭が打設されており、その中心杭1箇所を選定し、これをグリッドの起点MA50とした。MA50から磁北を求めて南北基線とし、それと直交するラインを東西基線とし、4m×4mのグリッドを設定し、数箇所の杭をレベル原点とした。起点とした中心杭はSTA 89+60で、磁北は座標北(第X座標系の北)から $7^{\circ}19'2''$ 西偏している。グリッド杭には、東西方向にKA→KT、LA→LT、MA→MTというふうにアルファベットを、南北方向には49-50-51……というふうに南から北に向かって昇順となる連続する2桁の数字を用い、MA50といふうにこの両者の組み合わせを記入し、4m×4mの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした。

今春のトレンチ調査の結果、遺物包含層は薄く、遺構確認面までは浅かったので、発掘調査は全て人力によった。遺物の取り上げは、遺構外出上のものは出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入し、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。また、これら遺物の出土状況は必要に応じて適宜図面作成や写真撮影を行った。遺構の確認はできるだけ掘り込み面において確認するよう努めたが、水田の開墾整備などによる搅乱が著しく、地山面で確認される遺構が多くあった。

遺構の調査は、主に四分法を用いている。住居跡や窓穴状遺構などの、面積規模の大きな遺構は、そのプラン確認後、東西及び南北の二方向または長軸及び短軸の二方向に直交する埋土堆積状況観察用のベルトを残して調査を進む。また、規模の小さな土坑などの遺構は、長軸に沿ってベルトを残して二分割して調査した。調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は、基本的に $1/20$ の縮尺で作図することとしたが、遺物出土状況など、細部の表現が必要な遺構に関しては $1/10$ で行った。また遺構図面は、遺物出土状況・重複関係などから数回にわたる図面作成も行っている。この他、平板測量によるA-F区の地形図や遺物出土地点平面図

の作成も行った。

写真撮影は、基本的には35mmのモノクロとカラーリバーサルフィルムを使用した。この他、遺跡の古環境や遺構の性格・年代把握のため、試料を採取し自然科学的分析を委託した。

室内における整理は、遺構は現場で取った平面図・断面図より第2原図を作成し、これをトレースした。遺物は洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

第3節 調査の経過

発掘調査は昭和62年4月17日から開始し、同年5月9日までトレンチ調査を実施した。調査対象地は、今回の調査区とその南側水田部分、及び北側の皿川寄りの1段低い段丘面を含む48,500m²を対象としたが、結果的には13,000m²が調査対象となることが判明した。この間、ブレハブの設置や資材を一部搬入している。

昭和62年5月18日、県高速道路対策事務所と調査区内の水路切り回しについて現地で協議。19日、進入路・ブレハブ内外の整備、トレンチ調査時の排土処理を開始。22日、本格的な調査に備え発掘資材、ベルコンの搬入。26日、グリッド杭打設をやっていないため、調査区南部(山林部分F区)より調査に入り、粗掘・抜根を開始。上飾器・須恵器片が若干出土した。

6月2日、調査区北面端(A区)の粗掘りを開始し、F区と2班に分かれて平行して調査を進めることにした。A区のII層下は礫層となっており、旧河川のようである。繩文・弥生、平安、中世の遺物が混在して出土した。F区は第2層を掘り下げて、溝状遺構、土坑を検出した。11日、A区から木製品や墨書き器がまとまって出土した。15日、今日から業者委託したグリッド杭打設を開始(24日に終了)。A区では厚感した上器が混入している第3層(砂疊層)の掘り下げが進む。23日、S L 323旧河川の東中央部(D区)の粗掘を南側より開始した。

7月6日、遺構精査、図面作成、全体写真撮影をし、F区の調査を終了した。A区の砂疊層掘り下げもだいぶ進み、終了の見通しがついてきた。7日、D区の南側は表土の下で遺構のプランがつかめ、竪穴状遺構、土坑、上器埋設遺構や柱穴など多くの遺構がありそうである。この頃、A区の土層観察用ベルト兼通路の掘下げをし、第2層上面で火山灰の下より須恵器・墨書き器や木製品の箸や板材が出土した。さらに、B区の北東側とC区の東側(昭和35年調査部分)の粗掘に新たに入った。B区は耕作土の下は砂利を多く含む盛土層で、遺物はきわめて少ない。22日、A区の東端のS L 323を水中ポンプによる排水をしながら土層断面図作成及び写真撮影を行う。専門指導員 白石雄三氏が来駆され、遺跡内及び周辺の地形・地質について指導を仰いた。27日、E区の粗掘に入る。この頃には遺構・遺物の集中するD区の第2層までの掘下げをほぼ終了し、全体的に遺構の精査を行う。29日、C区の粗掘を開始した。

8月1日、B・C・E区の第2層までの掘り下げを続行し、A区は残していたベルトの掘り下げると土層断面図作成、D区は多くの複雑に重複している遺構精査、写真撮影、図面作成におわれる。6日、E区にて堀立柱建物跡、B区にて堅穴住居跡のプランを確認した。18日、昨日、午後からの集中豪雨で、A～E区には20～70cmの深さで水がたまつたため、排水作業を行う。25日、E区の溝状遺構掘り下げを終了し、B区ではS E 067から大小2箇の曲物が出土、D区では堀立柱建物跡が予想以上に重複しており、精査に時間がかかっている。

9月1日、専門指導員 工栄善通氏来跡。遺構・遺物について種々ご教示を得た。C区では中央に入れたレンチから墨書き器や転用鏡が出土し、泥炭層のあることが確認され、A区に続く旧河川(S L 323)で、多くの自然遺物が出土することが予想された。全体の遺構数は未登録を含めて約150遺構となり、その多くがD区に集中する。5日、D区のS X 085より骨片が出土し、サンプリングを行った。12日、D区の第2層の掘り下げが進み、南側に残していた排土運搬用道路の掘り下げも開始。北東部のS X 084は「コ」字状で、埋土に焼土を伴うことが判明した。E区のS D 092は北端にて、C区を北流するS L 323に合流することが判明した。24日、E区は、調査後の全体写真撮影をもって終了した。

10月9日、A区は土層断面図・等高線図作成、全体写真撮影をもって終了した。12日、D区全体の第1回目遺構写真測量を開始し、14日に終了した。この頃、C区のS L 324第6層を掘り下げ、木簡や木製品が多く出土し、その取り上げ作業におわれる。19日、B・C・D区の調査を併行して行っているが、D区は精査の主力が北西部に移っているが、遺物もさることながら、相変わらず遺構の重複が激しく、作業が遅れぎみである。B・C区はいずれも旧河川を掘り下がたが、C区に比較し、B区の出土遺物は極端に少ない。全体の遺構数は200を越えた。

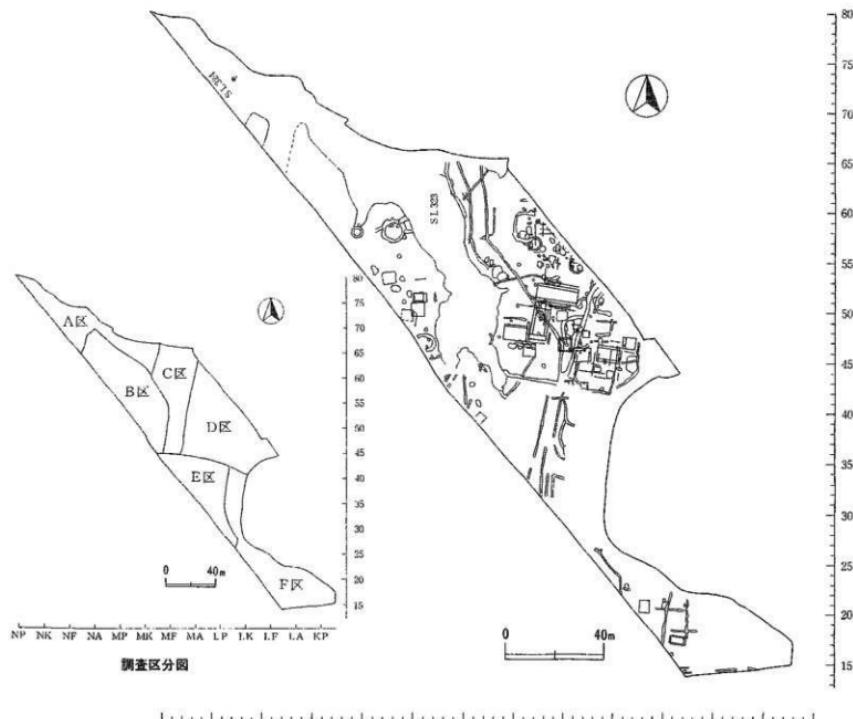
11月5日、D区のラジコンヘリコプターによる2回目遺構写真測量を開始し、6日に終了した。専門指導員 須藤 隆氏来跡。遺構や纏文・弥生時代の遺物についてご教示を仰ぐ。13日、C区北部・D区東部調査後の全体写真撮影を行ない、C区の調査は北部のS L 323旧河川を残すのみとなつた。14日、専門指導員 白石健雄氏来跡。E区の深掘上層断面を見ていただき、遺跡地周辺の地形・地質についてご指導を仰ぐ。19日、D区のS X 153など、脂肪酸・リン分析用土壤サンプルの採取を行つた。24日、朝から風強く、雪がちらつき、午後から吹雪が激しくなり、15時で現場作業を中止。26日、C・B・D区とも掘り下げや遺構精査を継続中であるが、C区は土層断面用ベルトを残して、周囲の掘り下げがほぼ終了した。45ラインベルト(S L 323)にて花粉分析用の土壤を探取した。30日、昨夜から約40cmの降雪があり、朝から全員で駐車場・プレハブ周囲や現場までの除雪をした後、遺構精査に入る。

12月に入ってからも降雪があり、B・C・D区とも除雪をしてからの遺構精査である。7日、長きにわたったD区の遺構精査・実測も、図面チェックを残し終了した。遺構精査・レベル計測

第3章 先史調査の概要

や遺物取り上げはB区の中央部と旧河川、C区の旧河川を残すのみとなった。9日、B区中央部の遺構全体写真撮影後、平面図の作成をもってB区の調査を終了した。朝から撤去準備を開始し、午後、木製品や発掘器材を埋蔵文化財センターに運搬した。10日、空中写真撮影を実施、11日に道路公団と現地立ち会い後、引き渡しをした。12日、撤去を終え、8箇月にわたる遺跡の調査を全て終了した。

調査期間中を通じて、地元小・中学生や、郷土史家やそのグループ、地元文化財関係の人々の遺跡見学があり、この説明にあたった。また、報道関係諸機関の取材にも応対した。



第8図 遺構配置図・調査区分模式図

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構

手取清水遺跡では、柱列跡36列、掘立柱建物跡19棟、堅穴住居跡1軒、堅穴状遺構6基、井戸跡10基、溝状遺構73条、旧河川4、土坑67基、配石遺構1基、土器埋設遺構4基、焼上遺構3基、その他の遺構62基の計286遺構を検出した。これらの遺構は出土遺物によれば、縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世に属するものである。しかし、遺跡の大半が過去に耕地整理による削平・搅乱を受けているため、時代の異なる遺物が混在している状態であり、各遺構間の検出レベルにも差は認められない。したがって、時代を特定できる遺構は限られており、全ての遺構を時代別に分類することは難しい。よって、遺構の説明は遺構別に行う。以下、検出遺構について順次その概略を記す。

1. 柱列跡(第9~16図)

S A 068 (第9図)

E区のL O 38、L P 38-39グリッドに位置する東西筋1間以下の掘立柱列である。現状での柱間距離は2.11mで、計画尺による7尺以上の柱列であろう。柱掘形は長径40cm前後の梢円形を呈し、確認面から25cmの深さまで掘り込まれている。埋土は暗褐色土が主体で、S A 068-1にて径15cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S A 103 (第9図)

D区のL H 46-47、L I 46-47、L J 46-47グリッドに位置する東西筋2間以上の掘立柱列である。現状での柱間距離は総間4.9m(東から2.44m+2.46m)で、計画尺8尺等間の柱列と考えられる。柱掘形は長径29~37cmの梢円形を呈し、確認面から29~34cmの深さまで掘り込まれている。埋土は明黄褐色土ないしにぶい褐色土が主体で、径12cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S A 172 (第9図-64)

D区のL R 47、L S 47グリッドに位置する東西筋2間の掘立柱列である。S B 173の南側柱筋の延長にあたり、S B 173に付随するものと考えられる。柱間距離は総間5.16m(東から2.73m+2.45m)で、計画尺17尺(東から8+9尺)の柱列であろう。柱列がS B 173に接続するものであれば柱間は3間となり、総間7.48m(東から2.73m+2.45m+2.33m)で計画尺が25尺(東から8+9+8尺)の柱列となろう。柱掘形は長径20~34cmの梢円形を呈するものと20×28cmの

長方形を呈するものがあり、確認面から12~33cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、S A172-3にて径14cmの柱痕を確認した。遺物は繩文~弥生土器片が出土している。

S A176 (第9図)

D区のLK43、LL43-44、LM44、LN44グリッドに位置する東西筋5間の掘立柱列である。柱間は総間11.45m(東から2.25m+2.36m+2.28m+2.3m+2.26m)で、計画尺7.5尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径25~38cmの梢円形を呈し、確認面から27~47cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、S A176-1・2・5にて径14~18cmの柱痕を確認した。遺物はフレイクが出土している。

S A177 (第9図、図版3)

D区のLK43、LL43、LM43グリッドに位置する東西筋3間の掘立柱列である。柱間は総間5.4m(東から1.83m+1.82m+1.75m)で、計画尺6尺等間の柱列であろう。柱掘形は1辺が25~34cmの方形を呈し、確認面から23~46cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土ないし黒褐色土が主体で、S A177-3・4にて径10~16cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S A178 (第10図、図版30)

D区のLJ45-46グリッドに位置する南北筋2間の掘立柱列である。S B100棟通りの柱筋と柱穴位置が一致しており、関連が考えられるものである。柱間は総間4.91m(北から2.49m+2.42m)で、計画尺による8尺等間の柱列であろう。柱掘形は1辺が15~18cmの方形を呈し、確認面から10~20cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、S A178-2にて径10cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S A205 (第10図)

D区のLJ47、LK47グリッドに位置する東西筋2間の掘立柱列である。S B100の柱筋の延長に柱穴が位置しており、S B100に付随する可能性もある。柱間は総間4.49m(東から2.21m+2.28m)で、計画尺7.5尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径30~40cmの梢円形を呈し、確認面から18~21cmの深さまで掘り込まれている。埋土は明黄褐色とにぶい黄褐色土が主体で、S A205-2・3にて径10~15cmの柱痕を確認した。遺物はフレイクが出土している。

S A206 (第10図)

D区のLL46-46、LM46-46グリッドに位置する南北筋4間の掘立柱列である。柱間は総間9.92m(北から2.36m+2.50m+2.37m+2.69m)で、計画尺8尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径24~35cmの梢円形を呈し、確認面から33~52cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、S A206-3にて径15cmの柱痕を確認した。遺物は繩文~弥生土器片、上師器杯の底部破片が出土している。

S A 207 (第10図)

D区のLM45-46グリッドに位置する南北筋2間の掘立柱列である。柱間は総間5.05m(北から2.59m+2.46m)で、計画尺8.5尺等間の柱列であろう。柱掘形は径20~25cmの円形を呈し、確認面から21~30cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、径13~15cmの柱痕を確認した。遺物は繩文~弥生土器片が出土している。

S A 208 (第10図)

D区のLN44-45グリッドに位置する南北筋3間の掘立柱列である。SD151と重複しており、SA208-4は柱掘形がSD151を切っている。柱間は総間8.13m(北から2.77m+2.55m+2.82m)で、計画尺9尺等間の柱列であろう。柱掘形は径20~25cmの円形を呈し、確認面から15~27cmの深さまで掘り込まれている。埋土はにぶい黄褐色土が主体で、SA208-1・2にて径12~18cmの柱痕を確認した。遺物は繩文~弥生土器片が出土している。

S A 210 (第11図、図版30)

D区のLJ43~44グリッドに位置する南北筋2間の掘立柱列である。柱間は総間3.3m(北から1.6m+1.7m)で、計画尺5.5尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径28~30cmの梢円形ないし隅丸方形を呈し、確認面から26~30cmの深さまで掘り込まれている。埋土はにぶい黄褐色土が主体で、径12~15cmの柱痕を確認した。遺物は繩文~弥生土器片が出土している。

S A 222 (第11図)

D区のLN52、LO52-53、LP52-53、LQ53グリッドに位置する東西筋7間の掘立柱列である。SB170柱筋にはほぼ平行する位置にあり、何等かの関連を持つものかも知れない。柱間は総間17.05m(東から2.3m+2.56m+2.55m+2.47m+2.37m+2.4m+2.44m)で、計画尺8尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径が32~48cmの梢円形を呈し、確認面から18~50cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、SA222-1・2・4にて径14cm前後の柱痕を確認した。遺物は繩文~弥生土器片、フレイダが出土している。

S A 224 (第11図)

D区のLQ54、LR53-54グリッドに位置する南北筋2間の掘立柱列である。SA224はSK138と重複しており、SA224-2はSK138に切られている。柱間は総間4.83m(北から2.44m+2.39m)で、計画尺8尺等間の柱列であろう。柱掘形は1辺が30~45cmの方形を呈し、確認面から34cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体で、径10~20cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S A 227 (第11図)

D区のLQ54-55グリッドに位置する南北筋2間の掘立柱列である。SK137と重複しているが、新旧関係は不明である。柱間距離は総間4.87m(北から2.32m+2.55m)で、計画尺8尺等

間の柱列であろう。柱掘形は1辺が33~37cmの方形を呈するものと長径42~56cmの梢円形を呈するものがあり、確認面から36~46cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、S A227-3にて径11cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片が出土している。

S A240 (第12図)

D区のL R56~58、L S56~58グリッドに位置する南北筋4間の掘立柱列である。柱間は総間8.35m(北から2.2m+1.95m+2.0m+2.18m)で、計画尺7尺等間の柱列であろう。柱掘形は1辺が50~60cmの方形を呈し、確認面から28~42cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色~黒褐色土が主体で、S A240-2~4にて径20cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片、フレイク、須恵器壺の細片、土師器壺の体部細片が出土している。

S A241 (第12図)

D区のL R57~59グリッドに位置する南北筋3間以上の掘立柱列である。S A241-3はS A242-2と重複しているが、新旧関係は不明である。柱間距離は総間6.4m(北から2.16m+0.7m+2.17m)で、計画尺7尺等間の柱列であろう。柱掘形は1辺が60~70cmの方形を呈し、確認面から24~38cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土ないし黒褐色が主体である。柱痕は確認できなかった。遺物は縄文~弥生土器片、フレイク、土師器壺の胸部破片、須恵器壺の胴部破片が出土している。

S A242 (第12図)

D区のL Q57~58、L R57~58グリッドに位置する東西筋2間以上の掘立柱列である。S A242-2はS A241-3と重複しているが、新旧関係は不明である。現状での柱間は総間4.2m(東から2.12m+2.1m)で、計画尺7尺等間の柱列であろう。柱掘形は1辺が60~65cmの方形を呈し、確認面から26~35cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体で、S A242-1にて径22cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片、フレイク、須恵器蓋の口縁部破片、土師器壺の口縁部・胴部破片が出土している。

S A243 (第12図)

D区のL Q58、L R58グリッドに位置する東西筋1間以上の掘立柱列である。現状での柱間距離は2.30mで、計画尺8尺の柱列であろう。柱掘形は1辺が50~60cmの方形を呈し、確認面から32~34cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、径18~24cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片、土師器壺の胴部破片が出土している。

S A256 (第13図)

D区のL R56、L S56グリッドに位置する東西筋1間の掘立柱列である。柱間は2.16mで、計画尺7尺の柱列であろう。柱掘形は長径70~75cmの梢円形を呈し、確認面から37~42cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体である。柱痕は確認できなかった。遺物は縄文

～弥生土器片、フライク、土師器杯・甌の細片が出上している。

S A257 (第13図)

D区のL Q58・59、L R58・59グリッドに位置する東西筋1間以上の掘立柱列である。現状での柱間は2.01mで、おそらくは計画尺7尺の柱列であろう。柱掘形は55×75cmの長方形を呈し、確認面から20～26cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。柱痕は確認できなかった。遺物繩文～弥生土器片、フライク、土師器鉢の胴部破片が出上している。

S A273 (第13図)

D区のL J44・45グリッドに位置する南北筋2間の掘立柱列である。S A273はS K024と重複しており、S A273-3はS K024に切られている。柱間は総間5.08m(北から2.45m+2.63m)で、計画尺8.5尺等間の柱列であろう。柱掘形は径18～28cmの円形ないし梢円形を呈し、確認面から21～26cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黑色土が主体である。柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。

S A274 (第13図)

D区のL J43～46、LK43グリッドに位置する南北筋5間の掘立柱列である。S A274はS D029と重複しており、S A274-6がS D029に切られている。柱間は総間12.29m(北から2.3m+2.53m+2.28m+2.5m+2.69m)で、計画尺8尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径25～30cmの梢円形を呈し、確認面から20～38cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。柱痕は確認できなかった。遺物は繩文～弥生土器片が出上している。

S A275 (第13図)

D区のLL44、LM44・45グリッドに位置する東西筋2間の掘立柱列である。柱間は総間4.76m(東から2.27m+2.49m)で、計画尺8尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径30～35cmの梢円形を呈するものと1辺が22cmの方形を呈するものがあり、確認面から39～48cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。

S A276 (第14図)

D区のLK44～46グリッドに位置する南北筋3間の掘立柱列である。柱間は総間7.36m(北から2.3m+2.76m+2.31m)で、計画尺8尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径25～30cmの梢円形を呈し、確認面から33～44cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。柱痕は確認できなかった。遺物は珠洲系陶器甌の胴部破片が出上している。

S A277 (第14図)

D区のL L45・46グリッドに位置する南北筋2間の掘立柱列である。柱間は総間3.63m(北から1.91m+1.72m)で、計画尺6尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径30～34cmの梢円形を呈し、確認面から32～36cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。柱痕は

確認できなかった。遺物はフレイクが出土している。

S A284 (第14図)

B区のMK49・50グリッドに位置する南北筋3間の掘立柱列である。柱間は総間4.45m(北から1.6m+1.49m+1.36m)で、計画尺が5尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径30~35cmの梢円形ないし隅丸方形を呈しており、確認面から17~34cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、S A284-1・3にて径15cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S A285 (第14図)

B区のM J48・49グリッドに位置する南北筋2間以上の掘立柱列である。柱間は北から2.17m+2.26mで、現状での総間は4.42mである。おそらくは計画尺7尺等間の柱列であろう。柱掘形は30~35cmの円形を呈し、確認面から18~33cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体である。柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。

S A288 (第14図)

B区のMH51・52、M I 52グリッドに位置する南北筋2間の掘立柱列である。柱間は総間3.75m(北から1.89m+1.86m)で、計画尺が6尺等間の柱列であろう。柱掘形は1辺が20~25cmの方形を呈するものと径23cmの円形を呈するものがあり、確認面から22~28cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。

S A289 (第15図)

B区のM I 53、M J 53、MK53グリッドに位置する東西筋2間の掘立柱列である。柱間は総間4.32m(東から2.28m+2.05m)で、計画尺による7尺等間の柱列であろう。柱掘形は1辺が20~25cmの方形を呈し、確認面から13~26cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体である。柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。

S A297 (第15図)

D区のL Q47・48グリッドに位置する南北筋2間の掘立柱列である。S A298と平行しており、その位置もほぼ同位置にあることからS A297・298は柱列を同一位置で造り替えたものと考えられる。S A297-1がS A298-1に切られており、新旧関係はS A297→S A298である。柱間は総間4.9m(北から2.5m+2.4m)で、計画尺8尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径28~35cmの梢円形を呈し、確認面から20~27cmの深さまで掘り込まれている。埋土はにじい黄褐色土が主体で、径10cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S A298 (第15図)

D区のL Q47・48グリッドに位置する南北筋2間の掘立柱列である。S A297と平行しており、その位置もほぼ同位置にあることからS A297・298は柱列を同一位置で造り替えたものと考えられる。S A297-1がS A298-1に切られており、新旧関係はS A297→S A298であ

る。柱間は総間4.81m(北から2.51m+2.3m)で、計画尺8尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径が21~39cmの橢円形を呈し、確認面から21~26cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体で、S A298-1・2にて径10~12cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S A299 (第15図)

D区のL Q50-51、L R48~51グリッドに位置する南北筋4間の掘立柱列である。S D168と重複しており、S A299-4柱掘形がS D168を切っている。柱間は総間8.78m(北から2.01m+2.24m+2.23m+2.31m)で、計画尺7.5尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径が25~40cmの橢円形を呈し、確認面から20~35cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体で、S A299-1・4・5にて径11~15cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片が出上している。

S A300 (第15図)

D区のL O50、L P50、L Q50グリッドに位置する東西筋4間の掘立柱列である。S A301・302と平行しており、その位置もほぼ同位置にあることからS A300~301は柱列を同一位置で造り替えたものと考えられる。ただし、相互の新旧関係は不明である。柱間は総間9.53m(東から2.51m+2.38m+2.34m+2.31m)で、計画尺8尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径が20~30cmの橢円形を呈し、確認面から20~30cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体で、S A300-1にて径10cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片、フレイクが出土している。

S A301 (第16図)

D区のL O50、L P50、L Q50グリッドに位置する東西筋4間の掘立柱列である。S A300・302と平行しており、その位置もほぼ同位置にあることからS A300~301は柱列を同一位置で造り替えたものと考えられる。柱間は総間9.11m(東から2.29m+2.36m+2.56m+1.89m)で、計画尺はS A300よりやや小さい30尺(東から7.5+7.5+9+6尺)の柱列であろう。柱掘形は1辺が25cmの方形を呈するものと径25cmの円形を呈するものがあり、確認面から28~44cmの深さまで掘り込まれている。埋土はにぶい黄褐色土が主体で、S A301-1にて径14cm柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片、上師器坏の体部細片が出上している。

S A302 (第16図)

D区のL N50、L O50、L P50、L Q50グリッドに位置する東西筋4間の掘立柱列である。S A300・301と平行しており、その位置もほぼ同位置にあることからS A300~301は柱列を同一位置で造り替えたものと考えられる。柱間は総間9.07m(東から2.08m+2.38m+2.69m+1.92m)で、S A301と同様の計画尺30尺(東から7.5+7.5+9+6尺)の柱列と思われるが、柱間距離のはらつきが大きい。埋土は黑色土が主体である。柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。

S A 307 (第16図)

D区のL S50、L T50・51、MA51グリッドに位置する東西筋3間の掘立柱列である。柱間は総間6.7m(東から1.94m+2.58m+2.17m)で、計画尺7.5尺等間の柱列であろう。柱掘形は長径38~60cmの梢円形を呈し、確認面から30~44cmの深さまで掘り込まれている。埋土は灰白色粘土が主体で、径10~19cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片が出上している。

2. 掘立柱建物跡(第17~28図)

S B019 (第17図、図版28)

F区のLC16・17、LD16・17、LE17グリッドに位置する東西棟桁行3間×梁行1間の掘立柱建物跡である。ほぼ同位置でSB020と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。柱間は桁行総間5.38m(東から1.84m+1.78m+1.76m)、梁行2.97mである。計画尺は桁行6尺等間、梁行10尺と考えられる。柱掘形は長径25~38cmの梢円形を呈し、確認面から14~27cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。SB020 (第17図、図版28)

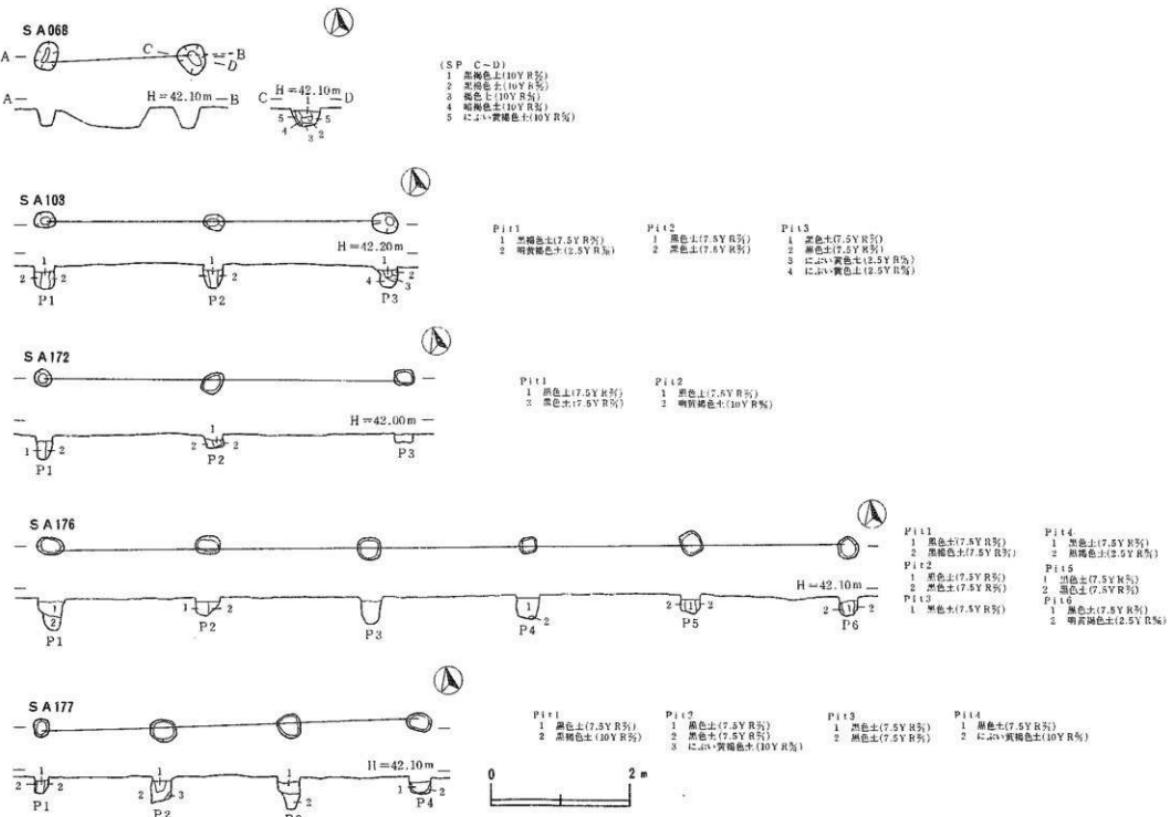
F区のLC16・17、LD16・17、LE17グリッドに位置する東西棟桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡である。ほぼ同位置でSB019と重複するが、新旧関係は不明である。柱間は桁行総間9.53m(東から1.83m+2.24m+1.83m)、梁行総間3.31m(北から1.63m+1.67m)である。計画尺は桁行20尺(東から6+8+6尺)、梁行5.5尺等間と考えられる。柱掘形は長径23~43cmの梢円形を呈するものを主体とし、確認面から28~38cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色ないし黒褐色土が主体である。柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。

S B022 (第18図、図版28)

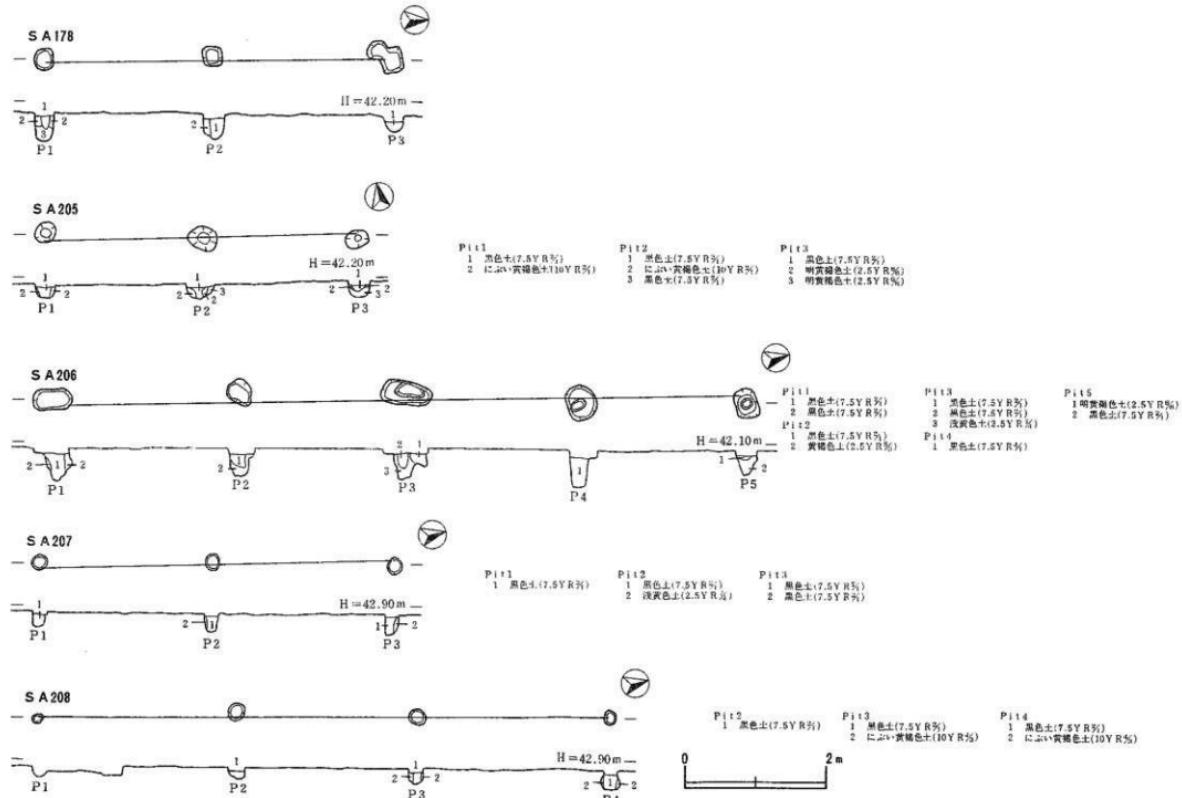
F区のLG19~21、LH20・21グリッドに位置する南北棟桁行3間×梁行1間の掘立柱建物跡である。柱間は桁行総間5.05m(北から1.72m+1.62m+1.71m)、梁行4.64mである。計画尺は桁行16.5尺(5.5尺等間)、梁行15尺と考えられる。柱掘形は1刃が40~45cmの方形を呈するものと長径45~60cmの梢円形を呈するものがあり、確認面から25~35cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。柱痕は確認されなかった。出土遺物はない。

S B069 (第18図)

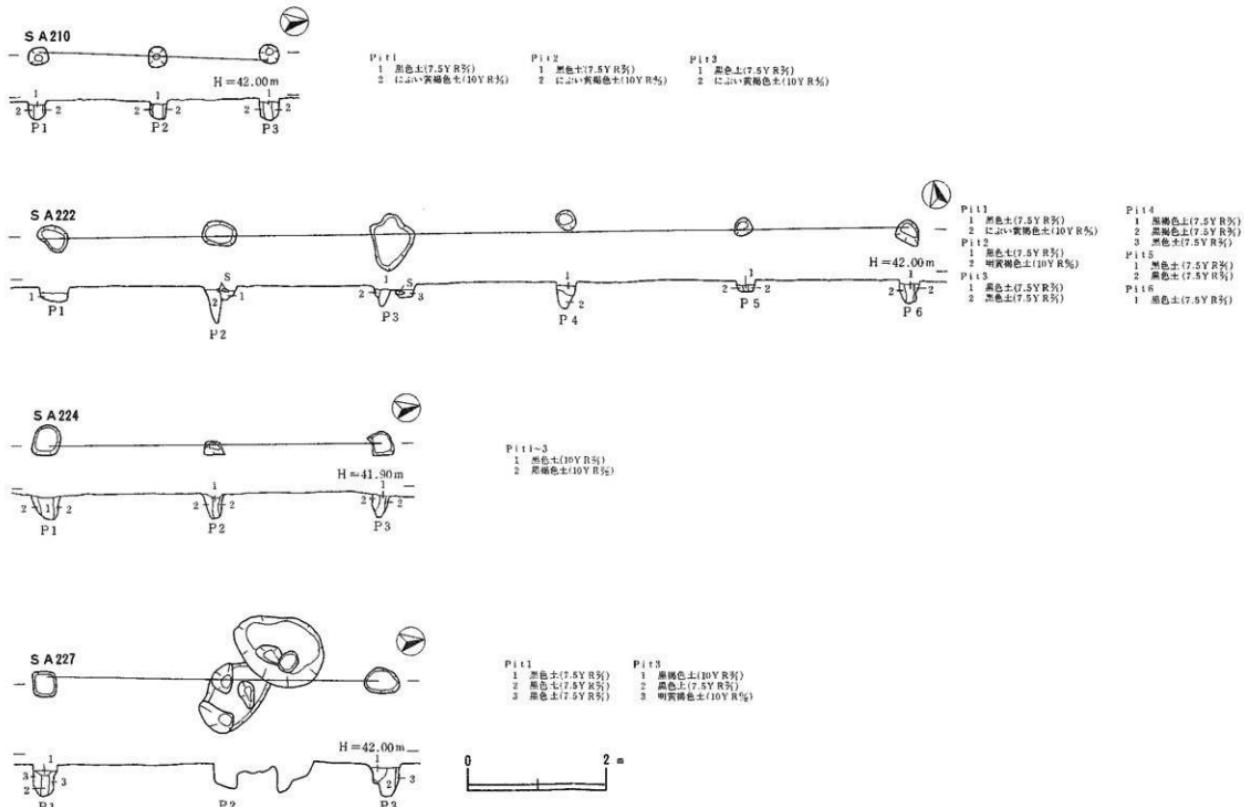
E区のMC39・MD39・40グリッドに位置する東西棟桁行3間以上×梁行2間以上の掘立柱建物跡である。現状での柱間は、桁行総間3.63m(東から1.82m+1.67m+0.96m)、梁行総間2.7m(北から1.56m+1.13m)である。おそらくは計画尺による桁行12.5尺以上(東から3.5+5.5+3.5尺)、梁行9尺以上(北から5+4尺)のものであろう。柱掘形は径20~25cmの円形を呈しており、確認面から15~18cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体で、SB069-



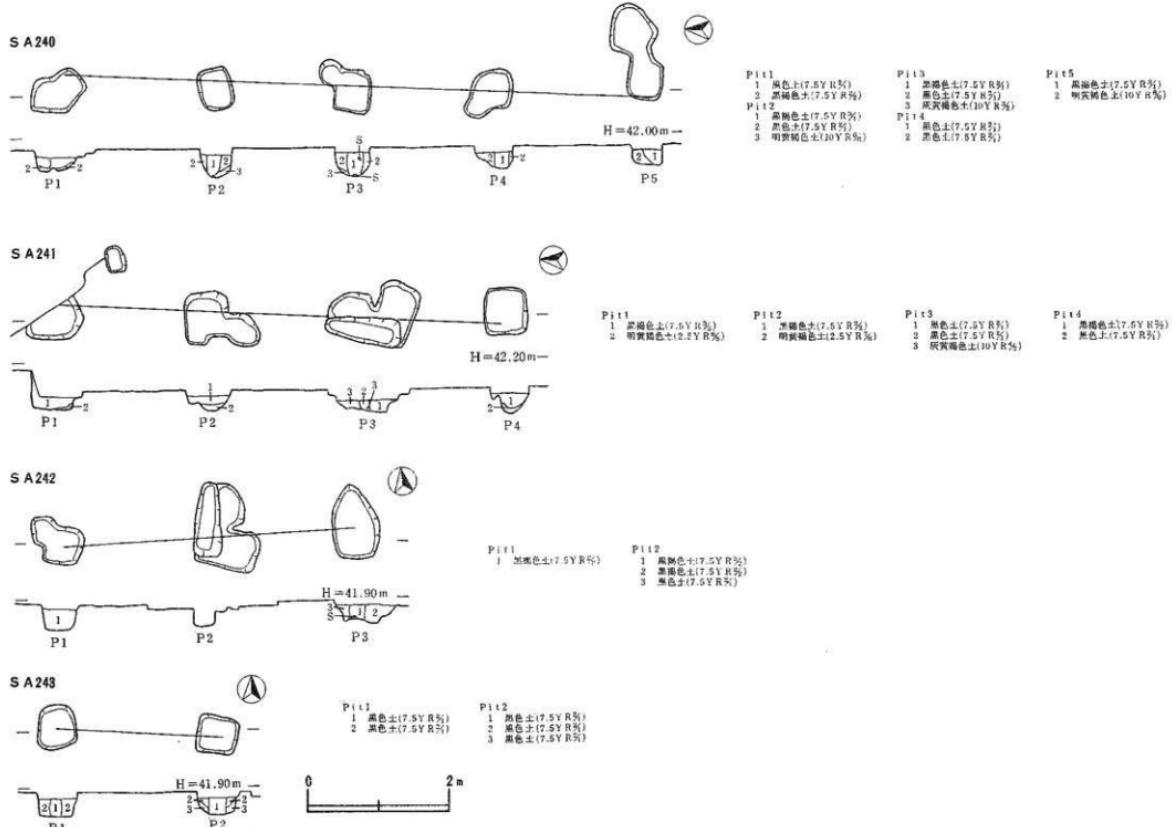
第9図 SA掘立柱列 (1)



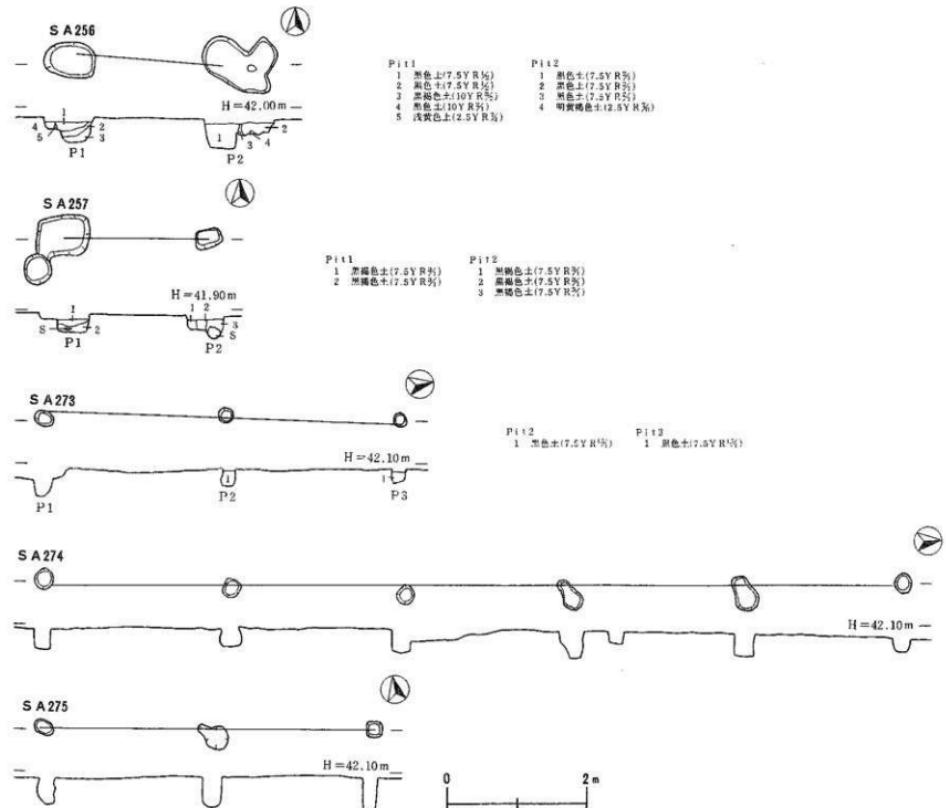
第10図 S A 据立柱列 (2)



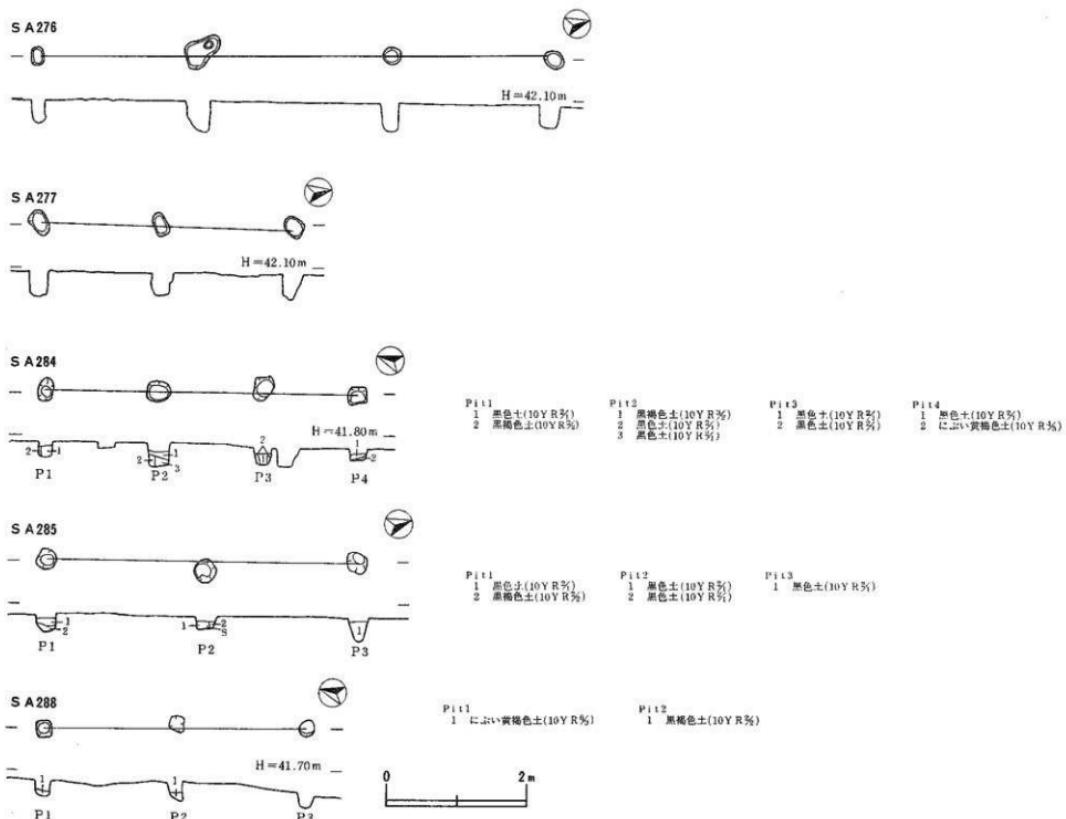
第11図 S A 据立柱列 (3)



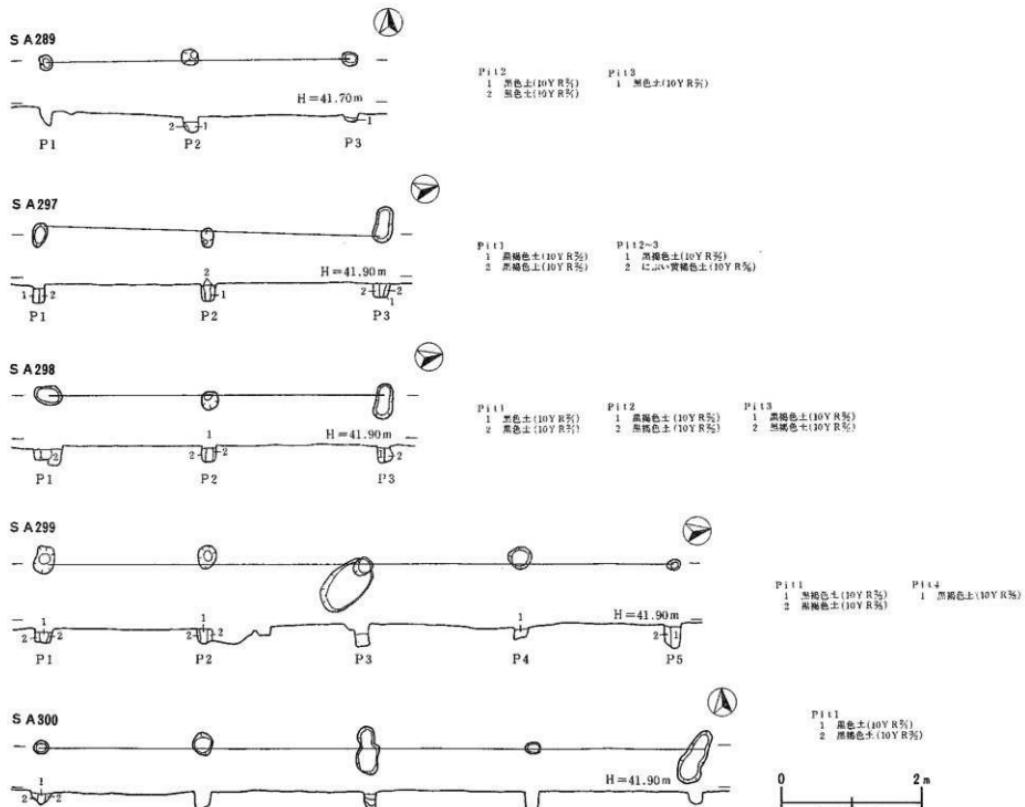
第12回 S A掘立柱列 (4)



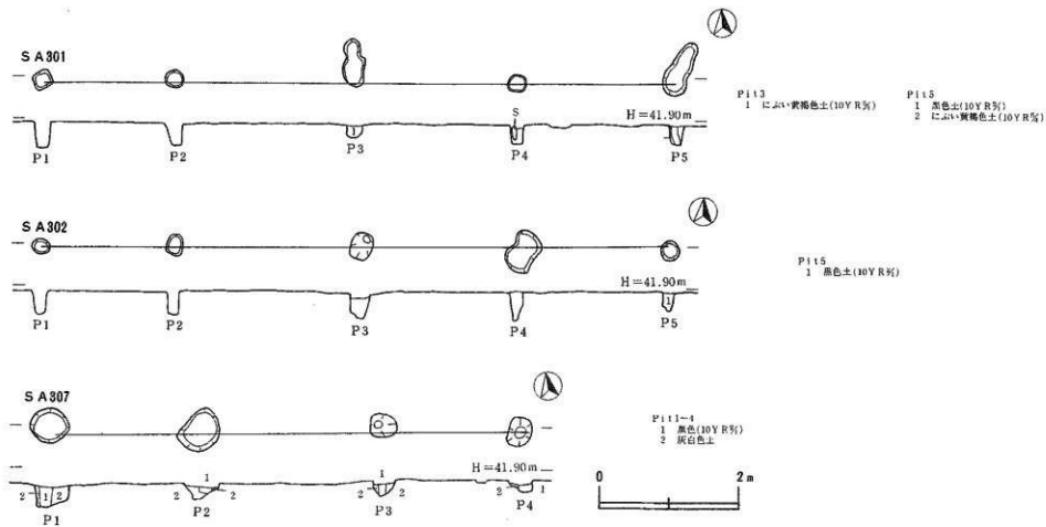
第13図 SA掘立柱列 (5)



第14図 S A 据立柱列 (6)



第15圖 SA獨立柱列(7)



第16図 SA 据立柱列 (8)

1にて径12cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S B100 (第19図、図版28・29)

D区のL J 44~46、L K 45~46、L L 45~47グリッドに位置する東西棟桁行4間×梁行4間(身合2間、廊が南北に各1間)の掘立柱建物跡である。S A178・205はS B100に平行する柱列で、柱穴がS B100柱筋と一致することから、S B100に付随する施設の可能性が考えられる。柱間距離は桁行総間9.24m(東から2.36m+2.22m+2.41m+2.28m)、梁行総間6.81m(北から1m+2.38m+2.24m+1.21cm)である。計画尺は桁行8尺等間、梁行24尺(北から4+8+8+4尺)と考えられる。柱掘形は長径38~50cmの橢円形を呈するものを主体とし、確認面から22~54cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、径14~22cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片、フレイクが出土している。

S B101 (第20図)

D区のL H 46~47、L I 46~47、L J 46~47グリッドに位置する南北棟桁行2間×梁行2間(廊1間含む)の掘立柱建物跡である。柱間は桁行総間4.6m(北から2.37m+2.24m)、梁行総間4.99m(東から4.06m+93cm)である。計画尺は桁行8尺等間、梁行17尺(身合14尺+廊3尺)と考えられる。柱掘形は長径25~40cmの橢円形を呈し、確認面から24~42cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。S B101-5にて径12cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S B165 (第20図)

D区のLM42~43、LN42~43グリッドに位置する東西棟桁行2間×梁行1間以上の掘立柱建物跡である。柱間は桁行総間2.71m(東から1.4m+1.31m)、梁行は現状で東側2.06m・西側1.8mである。計画尺が桁行4.5尺等間、梁行6~7尺のものであろう。柱掘形は1辺が35~40cmの方形を呈するものを主体とし、確認面から15~38cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。S B165-1・3にて径15~20cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S B170 (第21図、図版29)

D区のLN50~52、LO50~52、LP51~52、LQ51~53、LR51~53、LS51グリッドに位置する東西棟桁行7間×梁行4間(南北廊各1間含む)の掘立柱建物跡である。S B170-23・31はSD199に切られている。柱間は桁行総間17.05m(東から2.36m+2.48m+2.59m+2.45m+2.34m+2.47m+2.36m)、梁行総間6.73m(北から1.04m+2.23m+2.29m+1.17m)である。計画尺は桁行8尺等間、梁行22尺(北から3+8+8+3尺)と考えられる。柱掘形は長径35~60cmの橢円形を呈するものが主体であり、確認面から16~59cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土ないし黒褐色が主体で、径16~20cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片、フレイク、須恵器杯の口縁部破片、土師器杯の底部破片・甕の胴部破片が出土している。

S B171 (第22図)

D区のL Q47~51、L R47~51、L S47~51グリッドに位置する南北棟桁行7間×梁行3間の掘立柱建物跡で、身舎が桁行5間×梁行1間の建物の4面に扉が付くものである。S B171-7・14はS D168を、S B171-15はS K235・S D168をそれぞれ切っており、S D122・244との新旧関係は不明である。柱間は身舎部分で桁行総間10.6m(北から2.1m+2.08m+2.11m+2.15m+2.16m)、梁行4.4m、扉部分の桁行総間15.18m(北から2.09m+2.17m+2.15m+2.08m+2.24m+2.07m+2.37m)、梁行総間6.64m(2.25m+2.21m+2.19m)である。計画尺は身舎の桁行7尺等間、梁行15尺、扉の桁行7尺等間、梁行22尺(7.5+7+7.5尺)で、身舎から扉柱までは東西で3.5尺、南北で8尺と考えられる。身舎柱掘形は長径40~75cmの梢円形を呈するものが主体で、確認面から35~53cmの深さまで掘り込まれている。扉柱掘形は長径35~40cmの梢円形ないし同規模の円形を呈するもので、確認面から32~40cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、径13~15cmの柱痕を確認した。遺物は繩文~弥生土器片、フレイク、土師器壺の底部破片、中世以降と思われる陶器の底部破片が出上している。

S B173 (第23-64図)

D区のL S47-48、L T47~49、MA47~49、MB47~49グリッドに位置する東西棟桁行4間×梁行2間(扉1間を含む)の掘立柱建物跡である。南側柱筋の東部延長線上に位置するS A172が付属する可能性が考えられる。S B173-12はS K195を切っており、S B173-1・6とS D122との新旧関係は不明である。柱間は桁行総間9.46m(東から2.22m+2.45m+2.4m+2.4m)、梁行6.37m(北から93cm+5.45m)である。計画尺は桁行8尺等間、梁行21尺(扉3尺+身告18尺)と考えられる。柱掘形は長径40~60cmの梢円形を呈し、確認面から34~53cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色ないし黒褐色土が主体で、S B173-8・10にて径16~18cmの柱痕を確認した。遺物は繩文~弥生土器片、フレイクが出土している。

S B174 (第24-34図、図版30)

D区のL M45-46、L N45-46、L O45-46グリッドに位置する東西棟桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡である。S B174はS D169・S X153と重複しており、S B174-3・5がS D169に切られ、S B174-2・3がS X153に切られている。またS X153はS D169に切られている。このことから新旧関係はS B174→S X153→S D169である。柱間は桁行総間6.91m(東から2.35m+2.07m+2.48m)、梁行総間5.27m(北から2.69m+2.6m)である。計画尺は桁行23尺(東から8+7+8尺)、梁行9尺等間と考えられる。柱掘形は1辺が35~60cmの方形を呈するものと長径55~65cmの梢円形を呈するものがあり、確認面から40~42cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、径15~19cmの柱痕を確認した。また柱の一部が残っているものや、柱部分が空洞となっているものもあった。遺物は繩文~弥生土器片、フレイクが出土している。

S B175 (第24図、図版5・7)

D区のLM47・48、L N47・48グリッドに位置する東西棟桁行2間×梁行2間の掘立柱建物跡である。南北に走るS D169と重複しており、S B175-3柱掘形がS D169に切られている。柱間は桁行総間2.58m(北から1.38m+1.21m)、梁行総間2.75m(東から1.38m+1.36m)である。計画尺は桁行5尺等間、梁行5尺等間と考えられる。柱掘形は1辺が35~55cmの方形を呈するものと長径50~73cmの横円形を呈するものがあり、確認面から10~30cmの深さまで掘り込まれている。

埋土は黒褐色ないし浅黄色土が主体で、S B175-8にて径22cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片、フレイク、須恵器杯の口縁部破片・瓶の胸部破片が出土している。

S B190 (第25・64図)

D区のLR45~47、LS45~47、LT45~47グリッドに位置する南北棟桁行2間×梁行1間の掘立柱建物跡である。SK195-S D121と重複しており、S B190-2がSK195-S D121に切られている。またSK195はSD121も切られている。このことから新旧関係はS B190→SK195→SD121である。柱間は桁行総間5.23m(北から2.59m+2.64m)、梁行4.95mである。計画尺は桁行9尺等間、梁行16尺と考えられる。柱掘形は1辺が42~72cmの方形を呈するものと長径64~71cmの横円形を呈するものがあり、確認面から40~45cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土ないしにい・黄褐色土が主体である。径12~30cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片、フレイク、須恵器杯の口縁部細片が出土している。

S B220 (第26図)

D区のLO46・47、LP46・47グリッドに位置する東西棟桁行3間×梁行3間の掘立柱建物跡である。S B220はS B221とほぼ同位置での重複であり、S B220-4がS B221-1に切られている。またS B220はS D168にも切られている。よって、新旧関係はS B220→S B221→S D168である。柱間は桁行総間5.29m(東から1.49m+3.81m2間分)、梁行総間5.53m(北から2.28m+1.5m+1.86m)である。計画尺は桁行18尺(東から5+8+5尺)、梁行20尺(北から8+5+7尺)と考えられる。柱掘形は長径40~60cmの横円形を呈し、確認面から28~40cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体である。柱痕は確認できなかった。遺物は縄文~弥生土器片、フレイクが出土している。

S B221 (第26図)

D区のLO46・47、LP46・47グリッドに位置する東西棟桁行2間×梁行2間の掘立柱建物跡である。S B221はS B220とほぼ同位置での重複であり、S B221-1がS B220-4を切っており、S B221-2はS D168に切られている。またS B221はSX153にも切られている。よって、新旧関係はS B220→S B221→SX153→SD168である。柱間は桁行総間5.1m(東から

2.69 m + 2.38 m)、梁行総間5.08 m(北から2.44 m + 2.63 m)である。計画尺は桁行8尺等間、梁行8尺等間と考えられる。柱掘形は長径60~65cmの梢円形を呈するものと1辺が30~50cmを呈するものがあり、確認面から33~48cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体で、径c16~20 mの柱痕を確認した。遺物は繩文~弥生土器片、フレイクが出土している。

S B290 (第27図)

B区のM J 50、MK49·50、ML 50グリッドに位置する東西棟桁行2間以上×梁行2間以上の掘立柱建物跡である。S B291·292·293、S A284·285と重複する位置にあるが、新旧関係については不明である。柱間は現状で桁行総間5.02 m(東から2.51 m + 2.5 m)、梁行総間4.78(北から2.23 m + 2.55 m)である。計画尺が桁行8.5尺等間、梁行8尺等間の掘立柱建物跡であろうか。柱掘形は径28~35cmの円形を呈し、確認面から21~37cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体で、径10~18cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S B291 (第28図)

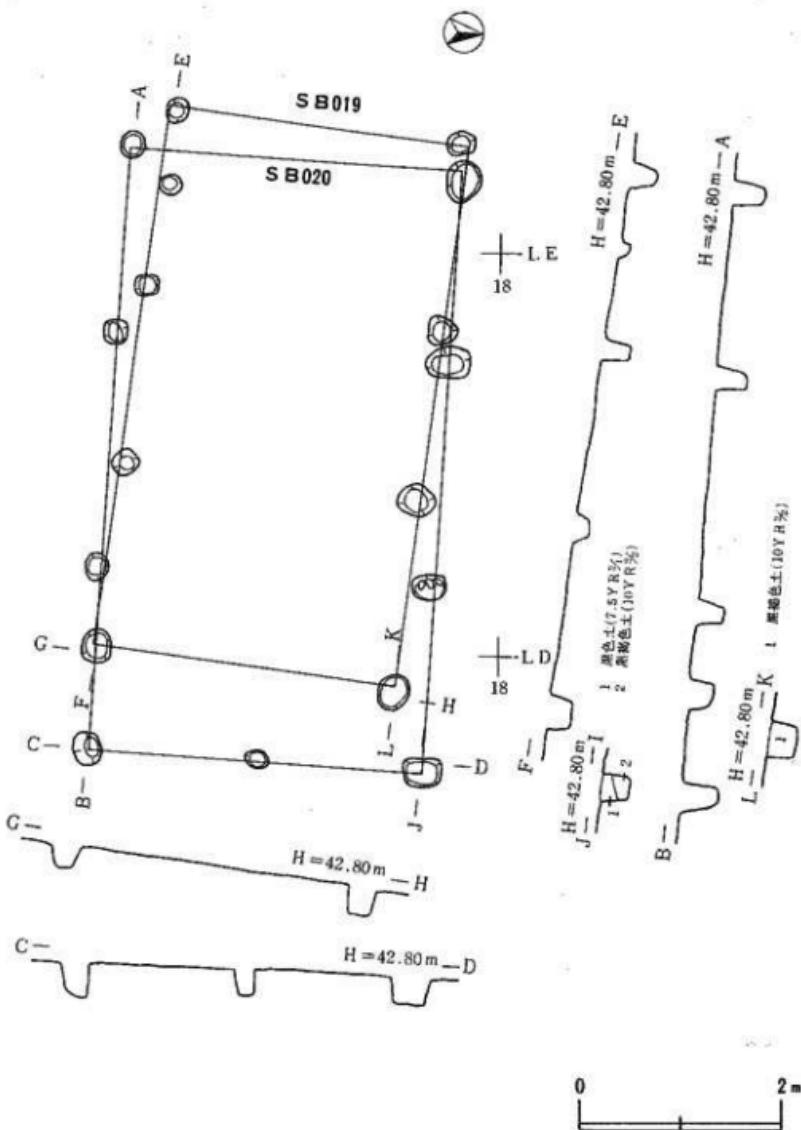
B区のM I 52、M J 51·52、MK51·52グリッドに位置する東西棟桁行2間×梁行2間の掘立柱建物跡である。S B292とはほぼ同一位置にあり、その新旧関係はS B291-2·7とS B292-3·9の切り合い関係から、S B291→S B292である。S B290·293、S A284·285とも重複する位置にあるが、新旧関係については不明である。柱間は桁行総間4.15 m(東から1.98 m + 2.17 m)、梁行総間3.8 m(北から2 m + 1.79 m)である。計画尺は桁行7尺等間、梁行6尺等間と考えられる。柱掘形は長径18~53cmの梢円形を呈するものを主体とし、確認面から18~39cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体で、S B291-3にて径15cmの柱痕を確認した。遺物は繩文~弥生土器片が出土している。

S B292 (第28図)

B区のM I 51·52、M J 51·52、MK51·52グリッドに位置する東西棟桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡である。S B291とはほぼ同一位置にあり、その新旧関係はS B291-2·7とS B292-3·9の切り合い関係から、S B291→S B292である。S B290·293、S A284·285とも重複する位置にあるが、新旧関係については不明である。柱間は桁行総間5.32 m(東から1.92 m + 1.72 m + 1.69 m)、梁行総間3.49 m(北から1.8 m + 1.68 m)である。計画尺は桁行6尺等間、梁行6尺等間と考えられる。柱掘形は長径26~32cmの梢円形を呈し、確認面から27~44cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒色土が主体で、S B292-9·10にて径14cmの柱痕を確認した。出土遺物はない。

S B293 (第28図)

B区のM I 49~51、M J 49~51、MK49~51グリッドに位置する南北棟桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡である。S B290·291·292、S A284·285と重複する位置にあるが、新旧関係に



第17図 SB掘立柱建物跡（1）

ついては不明である。柱間は桁行総間5.49m(北から1.69m+2.01m+1.82m)、南梁行総間5.02m(東から2.62m+2.4m)、北梁行5.52mである。計画尺は桁行6尺等間、梁行9尺等間と考えられる。柱掘形は長径27~35cmの楕円形を呈し、確認面から25~28cmの深さまで掘り込まれている。埋土は黒褐色土が主体で、SB293-3・9にて径10~12cmの柱痕を確認した。遺物は縄文~弥生土器片が出土している。

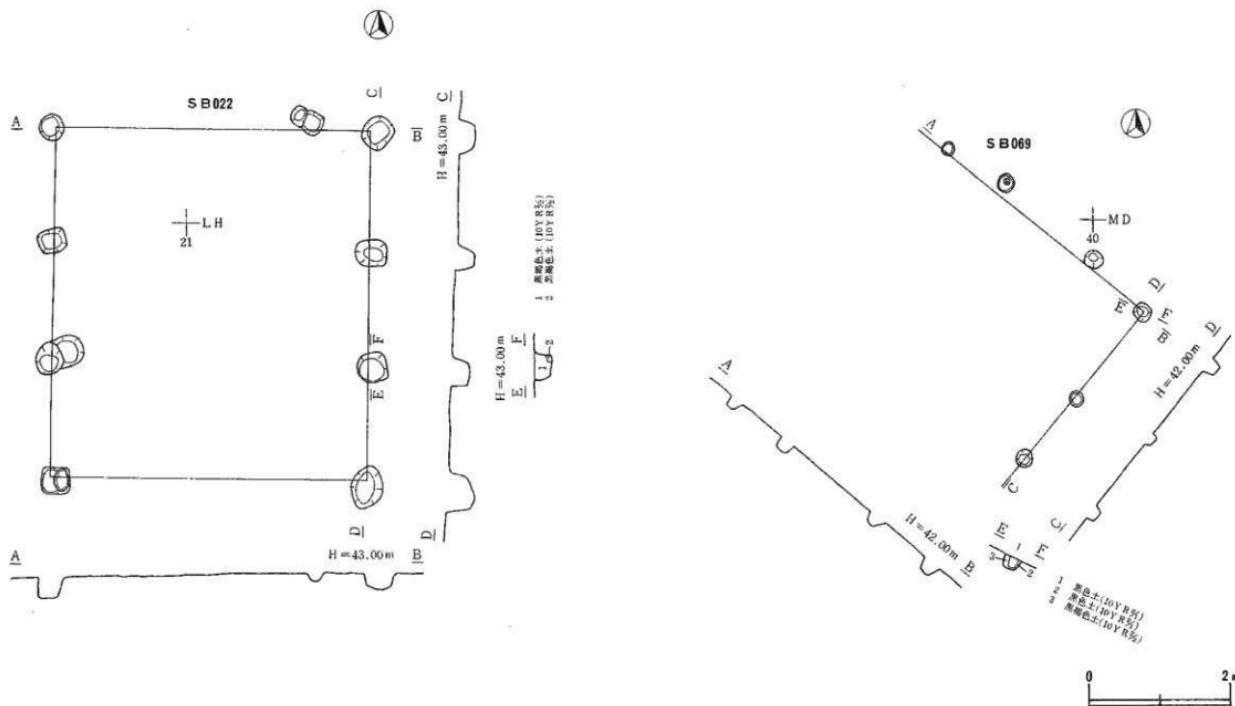
以上、掘立柱列と掘立柱建物跡について概略を説明したが、遺跡内のすべての柱列・建物跡を網羅することができたとは思えない。現に、D区ではピットが1,300個前後確認されているが、柱列や建物を想定できたのはその一部に過ぎない。またD区北東部には十分に検討できなかかった柱穴のまとまっている部分があり、わずかに柱筋からSA227・240~243・256を拾ったのみである。これらは建物の一部である可能性が高く、調査区外にかけてさらに数棟の建物が存在することも考えられる。また中世の建物配置・間取り等についても、検討が不十分な面が多くあろうと思われる所以、建築関係の専門諸氏から、御指摘・御指導をいただければ幸いである。

3. 壁穴住居跡

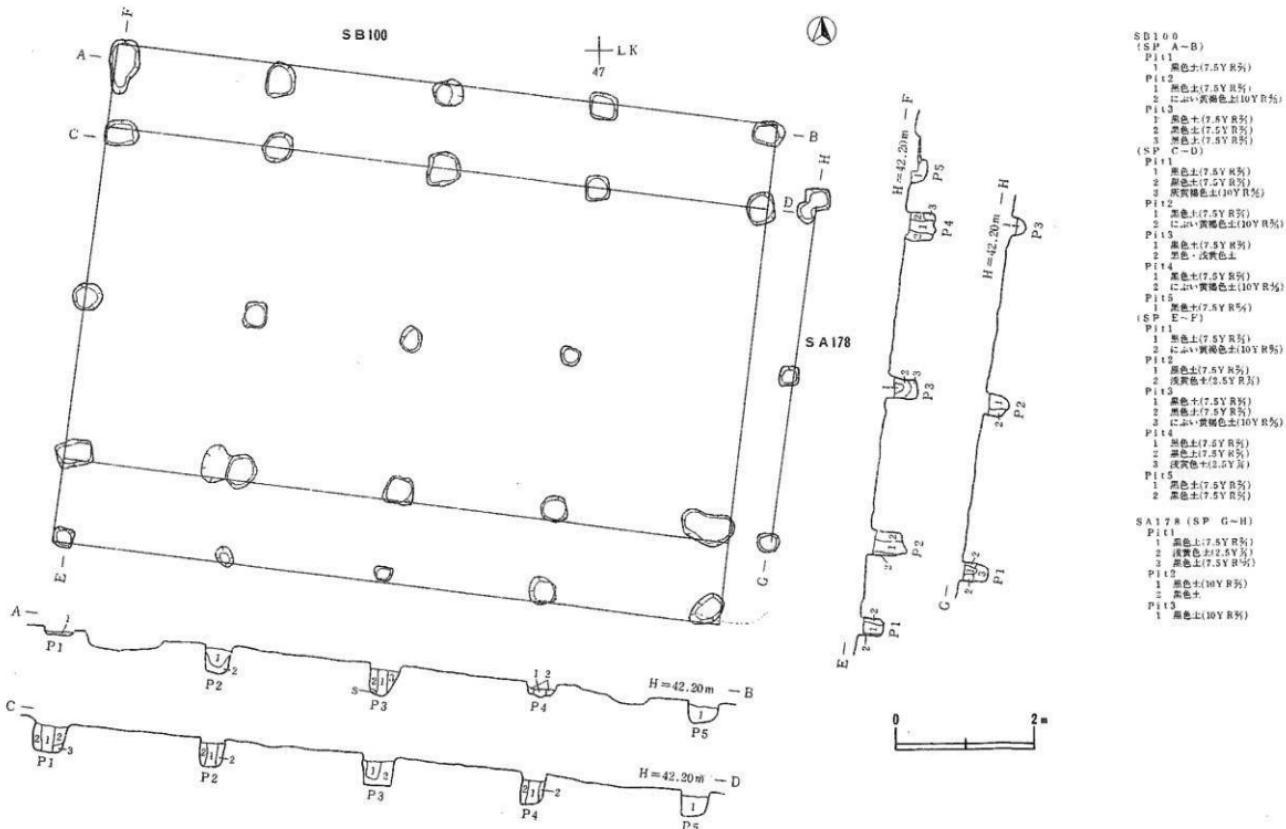
S I 060 (第29図、図版31)

B区のMM53・54グリッドに位置し、ほぼ地山に近い面で検出された。平面形は方形で、規模は370cm×420cmで、径4cm~28cm、深さ4cm~13cmの壁柱穴をもち、西壁では部分的に途切れる。壁外に16本の柱穴(以下Pとする)が配される。P1~P7は主柱穴と思われ、径28cm~44cm、深さ6cm~50cmで、各コーナーと南壁を除く中間点にあり、それぞれの柱間は北壁外のP1・P2・P3間は、7.5尺等間で、総間が15尺で、南壁外のP6・P7間の総間と一致する。西壁外のP1・P4・P6間は柱筋は通らないが6.5尺等間で、総間は13尺である。東壁外のP3・P5・P7間は6尺等間で総間は12尺である。東壁外にはP5の外径14cm~26cm、深さ8cm~14cmの小さな柱穴(P12~P16)が配される。床面には南壁寄りに径156cm、深さ36cmの円形の土坑1があり、南東コーナーには径100cm、深さ16cmの円形の土坑2がある。南壁には円形の掘り込みをもつ径46cm、厚さ6cmの焼土1と、径34cm、厚さ2cmの焼土2が25cm離れて並んでおり、焼土中には炭化物が混入する。焼土はいずれも本住居跡に伴うものであろう。

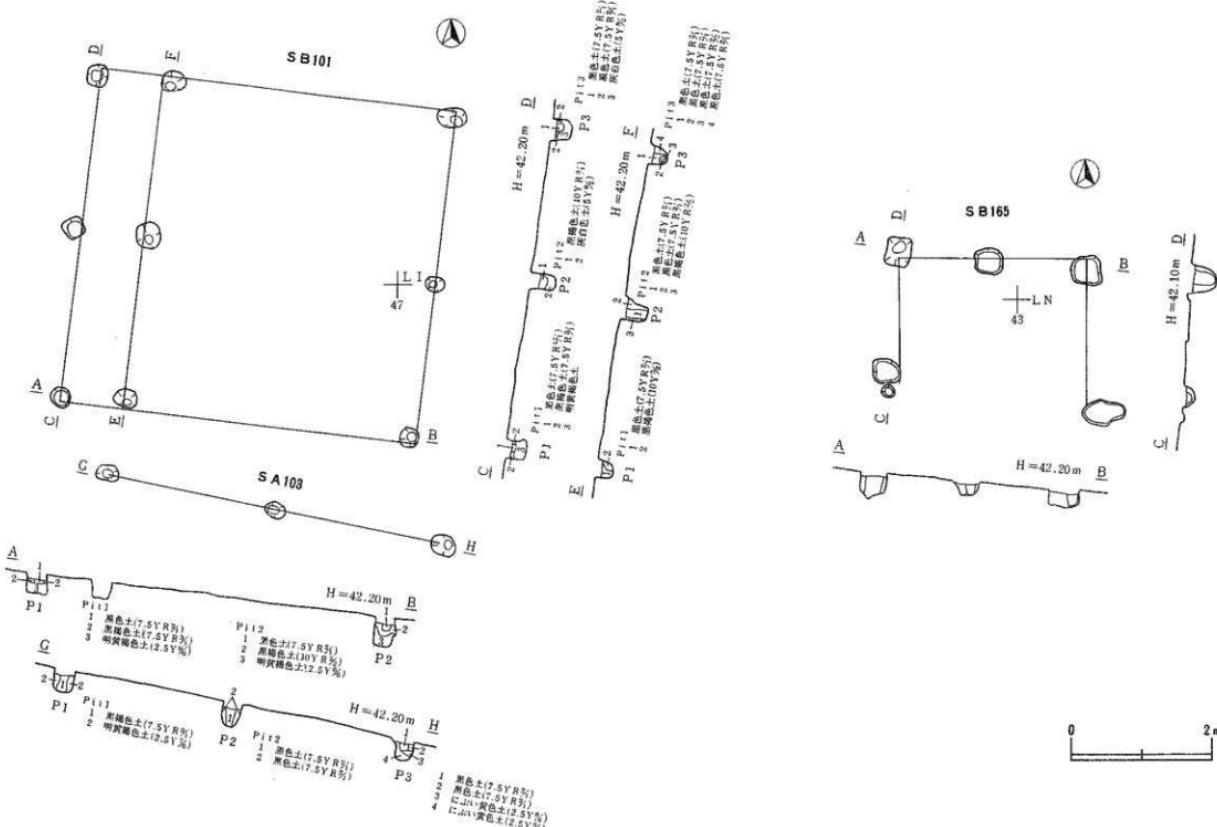
遺物は範状石器が出土しているが、周囲からは平安時代の遺物が多く出土しているし、住居跡の形態から平安時代に属すると考えられる。



第18図 SB 建立柱建物跡 (2)

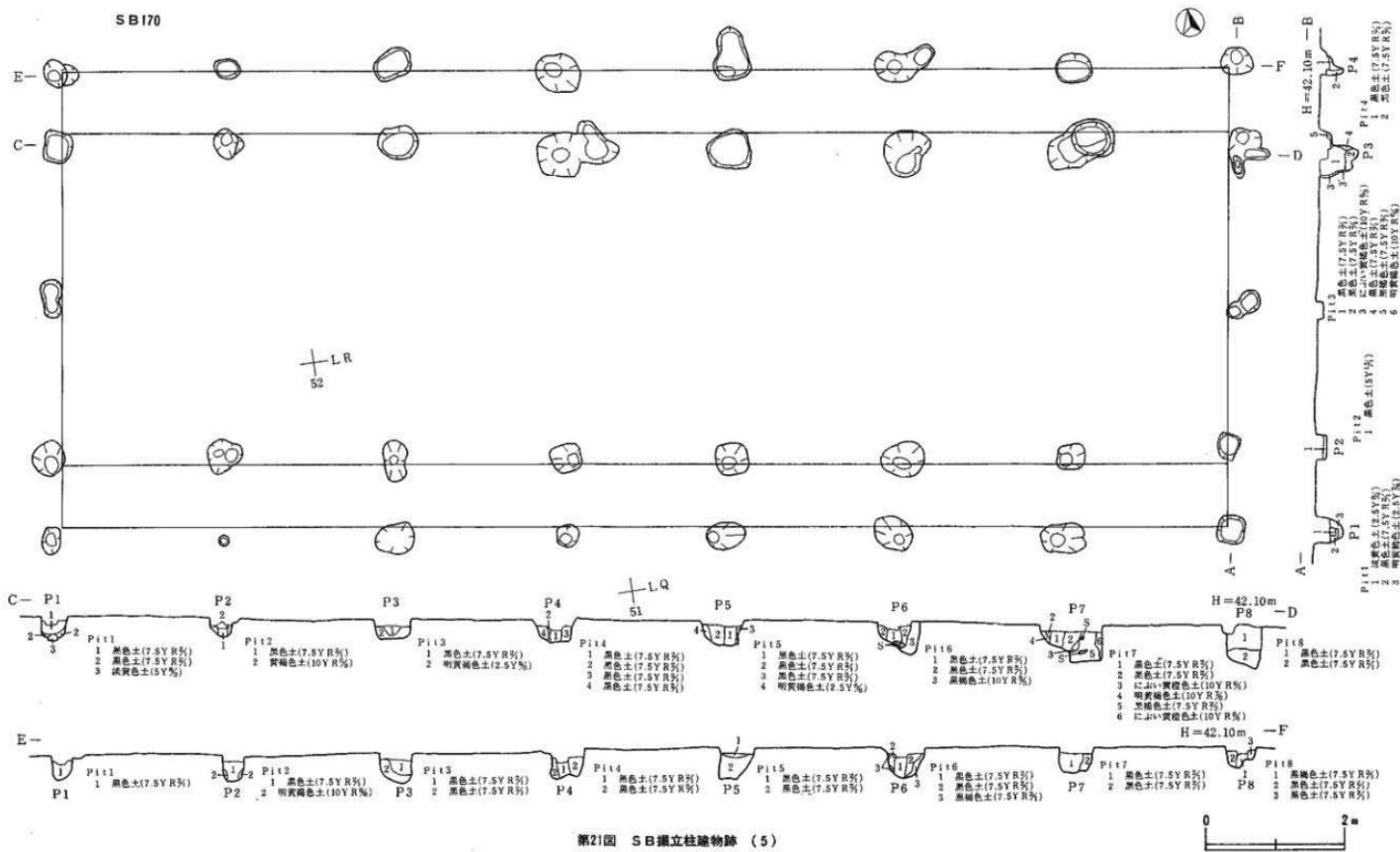


第19図 SB 据立柱建物跡 (3)

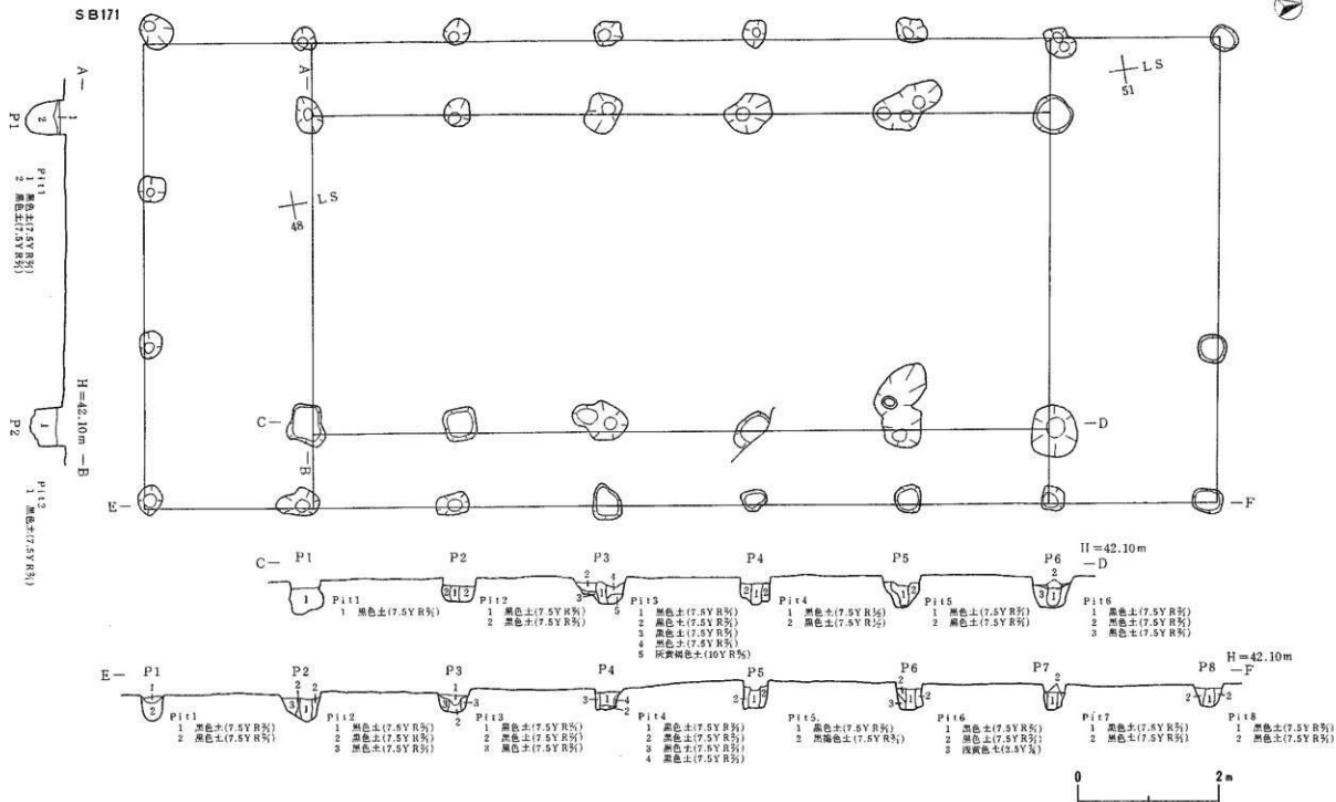


第20圖 SB 挖立柱建物跡 (4)

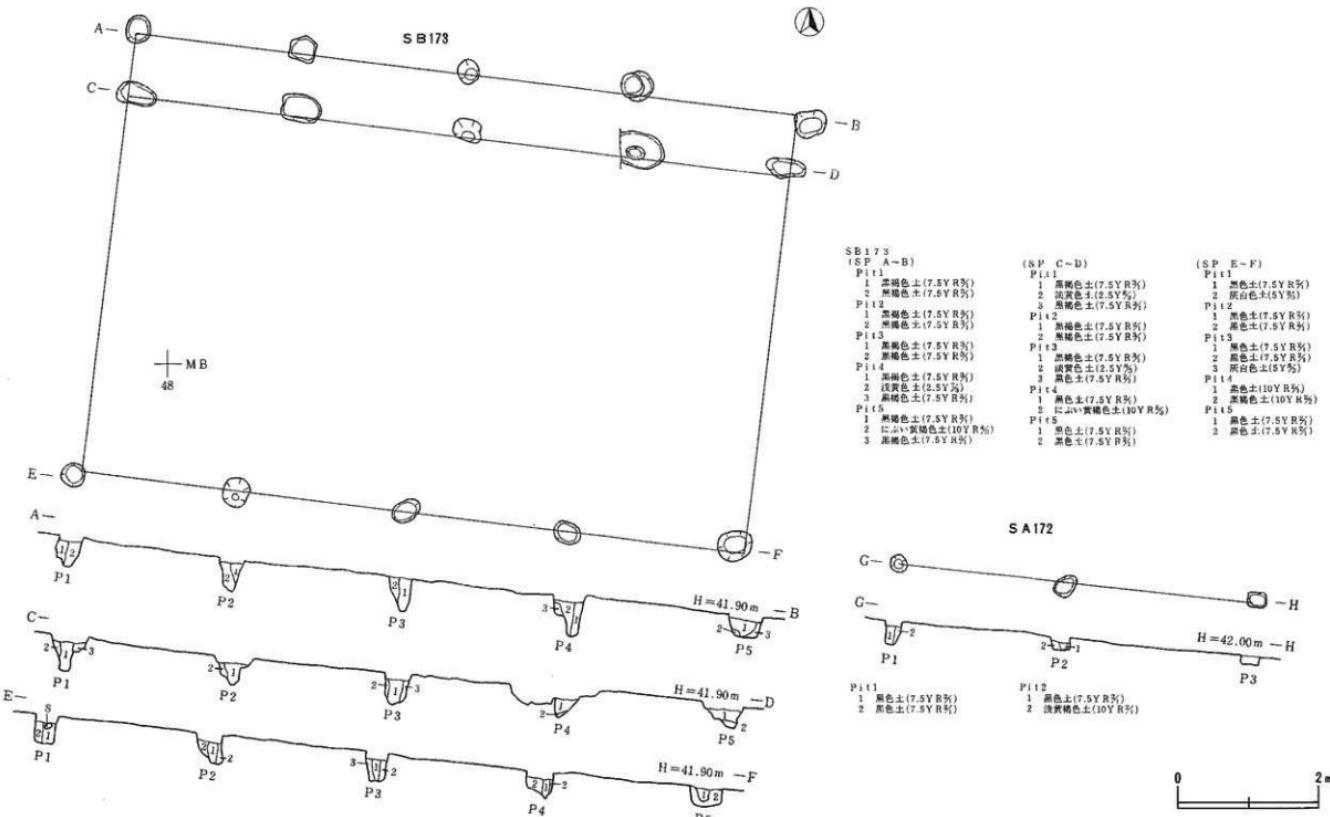
S B 170



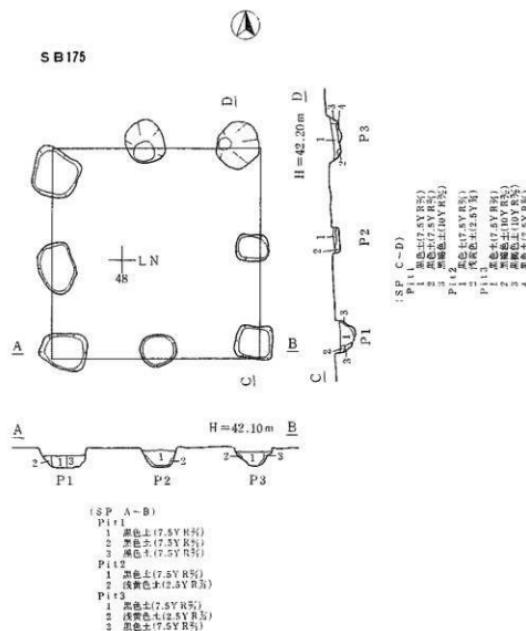
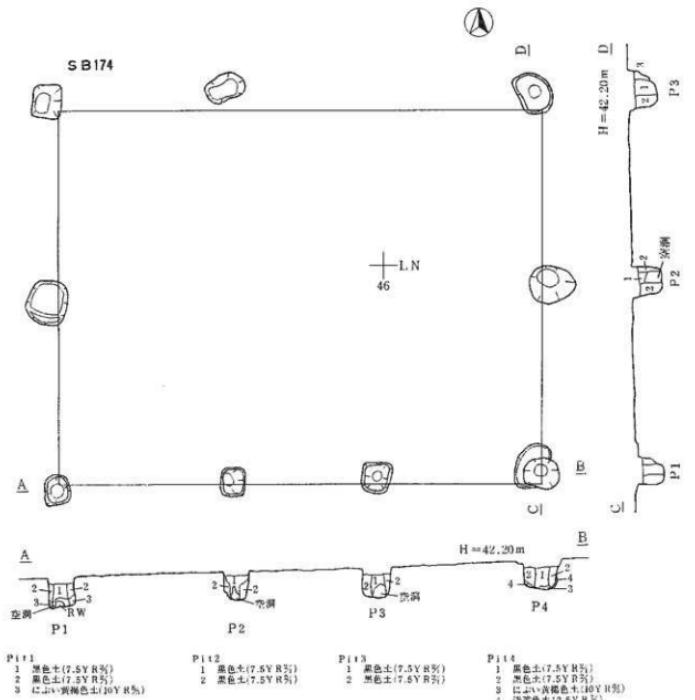
第21図 SB掘立柱建物跡 (5)



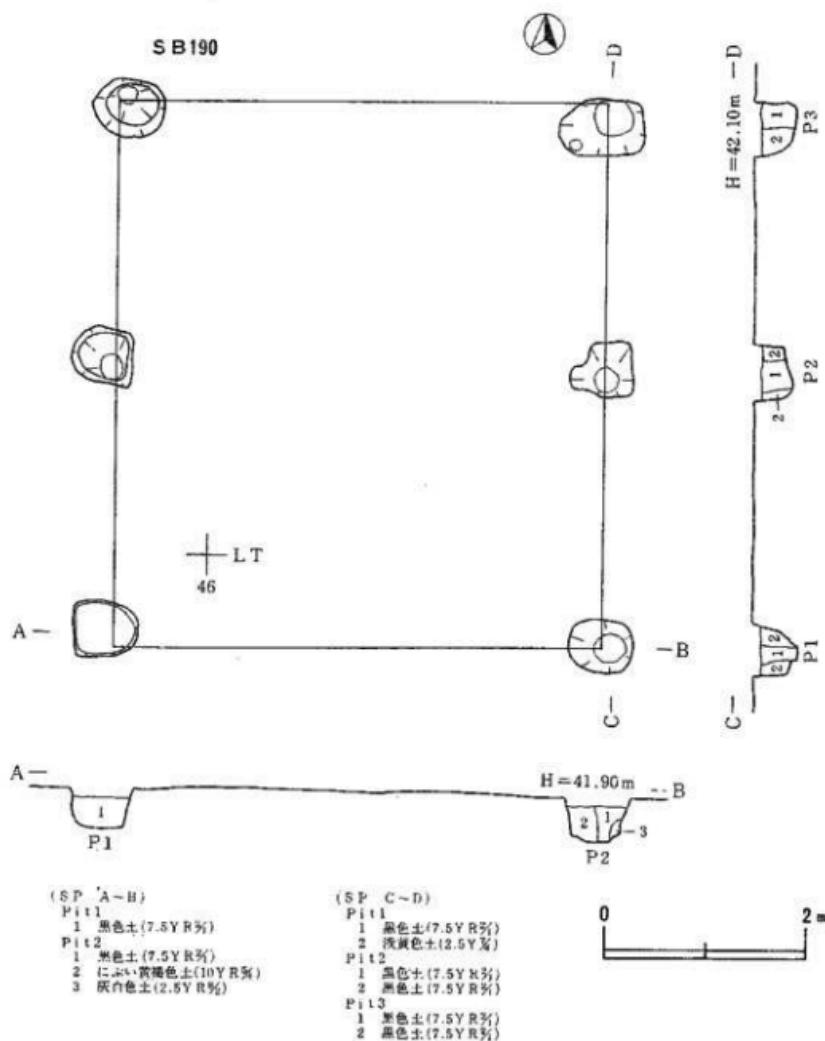
第22図 SB掘立柱建物跡 (6)



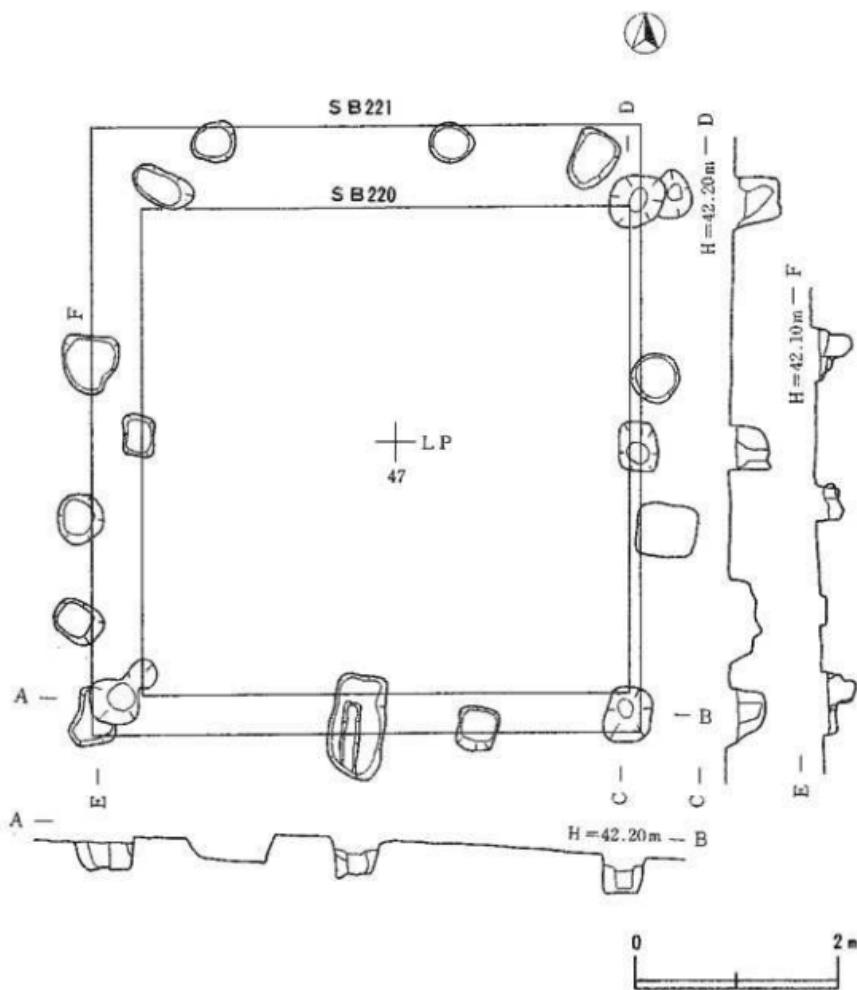
第23図 S日据立柱建筑物跡 (7)



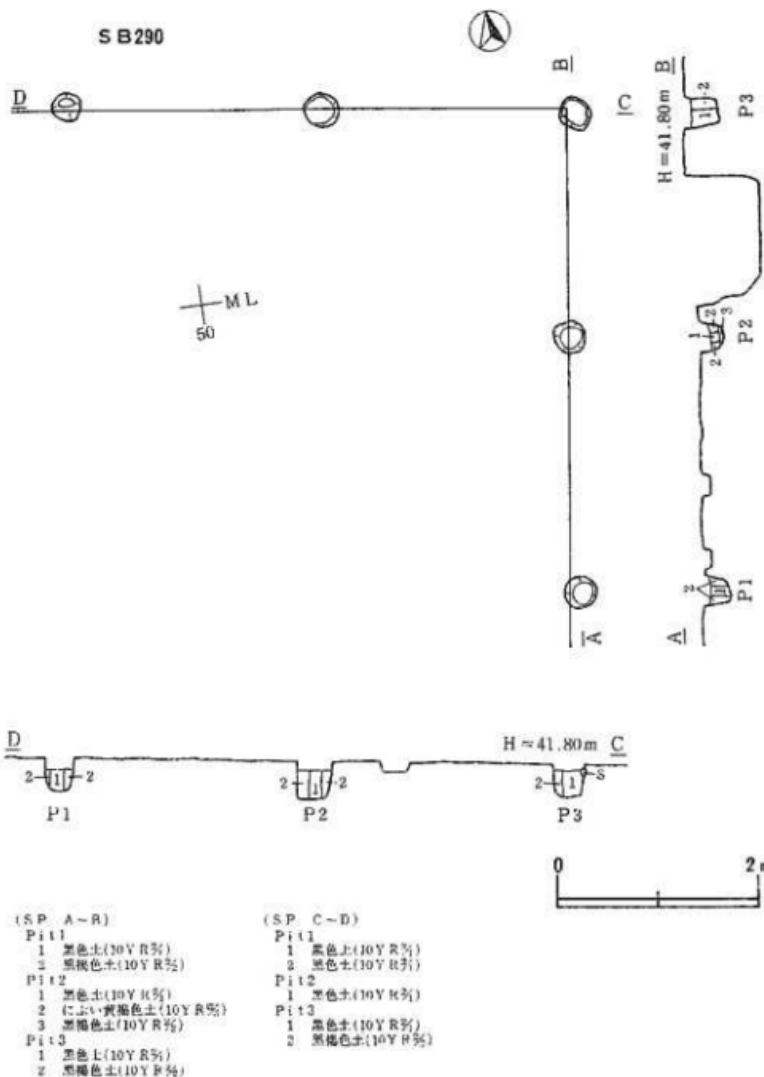
第24図 SB掘立柱建物跡 (8)



第25図 SB掘立柱建物跡 (9)



第26図 SB 摺立柱建物跡 (10)



第27図 S B 挿立柱建物跡 (1)

4. 壁穴状遺構

SK I 026 (第30図、図版32・33)

D区のL L44・LM44グリッドで検出した。平面形は242cm×310cm、底面は204cm×273cmの隅九長方形を呈し、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、壁高は36cmである。底面積は5.30m²である。埋土は6層に分層し、いずれにも比較的多くの黄褐色土ブロック粒子が混入していることから人為的堆積と考えられる。

遺物は出土しなかった。

SK I 030 (第30図、図版33・34)

D区のL K43・44グリッドで検出した。平面形は268cm×290cmの隅丸方形を呈し、底面はほぼ平坦で222cm×228cmを呈している。底面積は8.20m²である。壁は大変緩やかに立ち上がり、壁高は32cmである。埋土は1層のみで、黒色土に明黄褐色土5%混入している。

遺物は繩文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

SK I 063 (第31図、図版34)

B区のML53グリッドで検出した。平面形は206cm×233cmの略隅丸長方形で、底面はほぼ平坦で198cm×205cmを呈している。底面積は3.00m²である。壁は垂直もしくは緩やかに立ち上がり、壁高は25cmである。埋土は黒色土・黒褐色土を主体にし、堆積土の中位に地山(オリーブ褐色)砂質粘土が帯状に薄く堆積し、全体的に混入物が少ないので、自然堆積と思われる。

遺物は繩文・弥生土器、フレイクが僅少出土した。

SK I 111 (第31・34図、図版4・35・36)

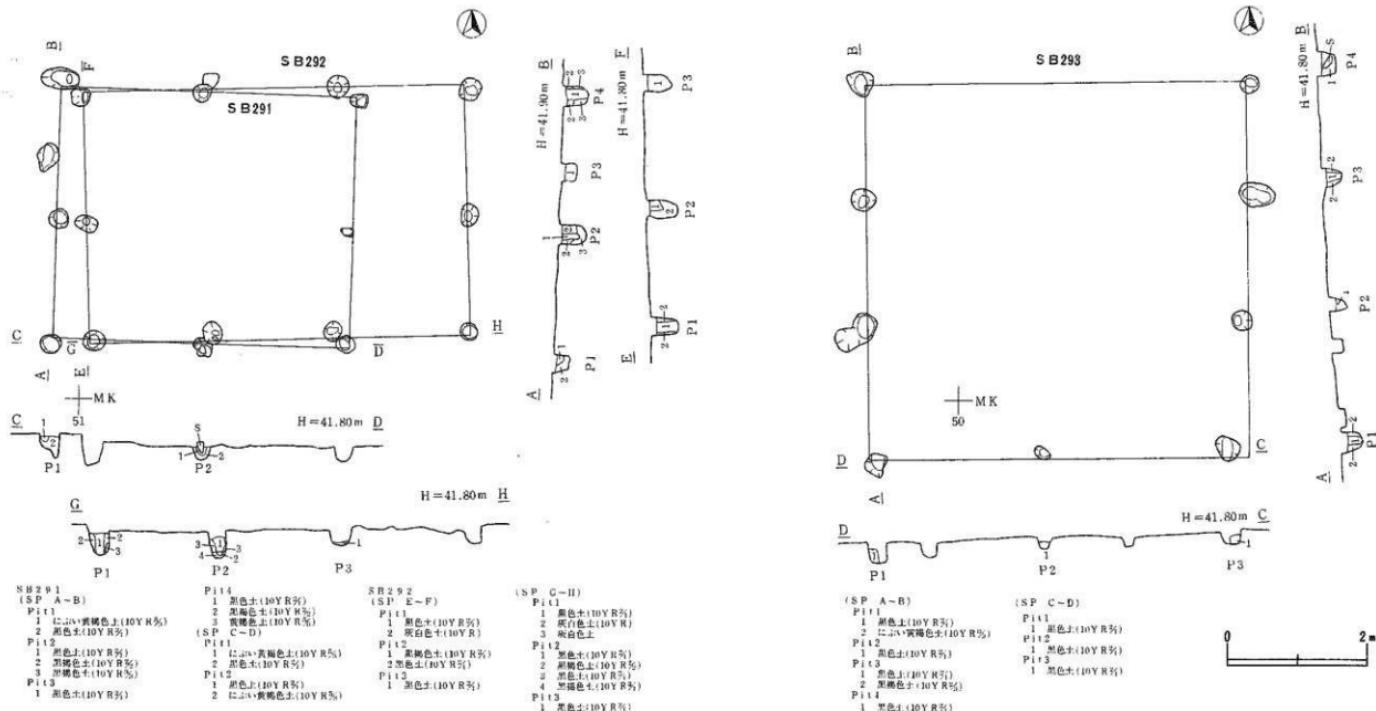
D区のLP49・50グリッドで検出した。平面形は395cm×430cmの隅丸方形を呈し、底面も286cm×320cmの隅九方形を呈している。底面の面積は9.30m²である。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は55cm~61cmである。北東隅・南東隅にて径25cm前後のビットを各1個を検出したが、いずれも2~9cmと浅く、柱穴とは考えがたい。埋土は8~12・15~20層が自然堆積で、他の層は地山ブロックを多量に含み人為的堆積と考えられる。

遺物はほぼ底面にて刀子1点(第31図RM1)、石剣1点(RQ1)、青磁片2点(RP1・2)が出土している。その他に埋土中から繩文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

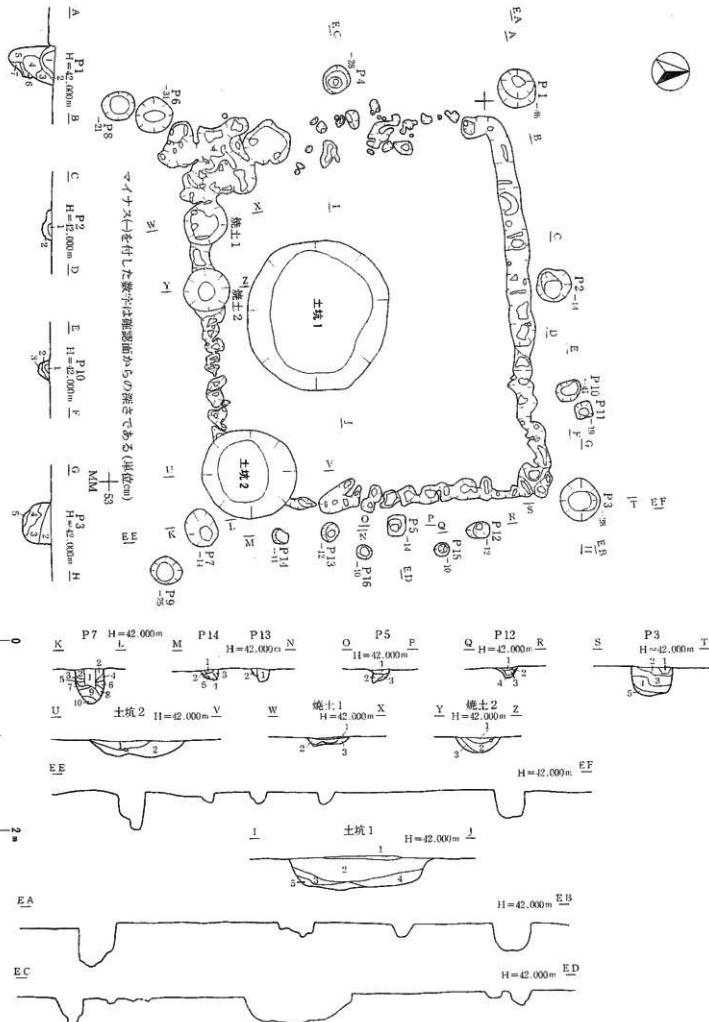
SK I 112 (第32・34図、図版4・5・36)

D区のLO47グリッドで検出した。平面形は271cm×296cmの隅九方形で、底面はほぼ平坦で200cm×216cmを呈している。底面積は3.88m²である。壁は北東側は垂直に、他は大変緩やかに立ち上がり、壁高は42cmである。埋土は黒色・黄褐色土を主体とし、全体的に明黄褐色土ブロックの混入層が多く、2・3・5・7層には多量に含まれることから人為的堆積と考えられる。

遺物は繩文・弥生土器、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。



第28図 S-B柱立柱建物跡 (12)



P7 SPA-X
 1 黒色土(7.5YR5/1) に於く黄褐色小～大ブロック、黄褐色砂粒混入、液化粘土。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、液化粘土投入。
 3 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、液化粘土投入。
 4 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、液化粘土投入。
 5 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、液化粘土投入。
 6 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、液化粘土投入。
 7 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、液化粘土投入。
 8 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、液化粘土投入。
 9 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、液化粘土投入。
 10 黑褐色土(10YR5/1) 黄褐色砂粒混入、液化粘土投入。

P1 SPA-N
 1 黑褐色土(10YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 2 黑褐色土(10YR5/1) 黑色土混入。
 3 黑褐色土(10YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 4 黑褐色土(10YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 5 黑褐色土(10YR5/1) 黄褐色砂粒混入。

P12 SPA-N
 1 黑褐色土(10YR5/1) に於く黄褐色小～大ブロック混入、黑色土混入。
 2 黑褐色土(10YR5/1) 黑色土混入。

P5 SPO-P
 1 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 3 黑褐色土(7.5YR5/1) 混入なし。

P1 SPO-R
 1 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 3 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、黑色土混入。
 4 黑褐色土(10YR5/1) 黄褐色砂粒混入。

P3 SPS-T
 1 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 3 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、黑色土混入。
 4 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。

地2 SPU-Y
 1 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。

出土1 SPA-X
 1 明黄色土(7.5YR5/1) 植化材含入。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) 墓葬土土塊入、黄褐色ブロック混入。
 3 黑褐色土(10YR5/1) 黄褐色砂粒混入。

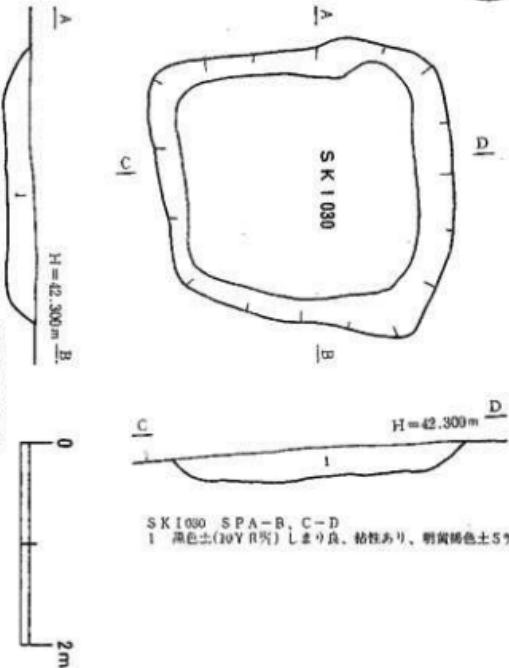
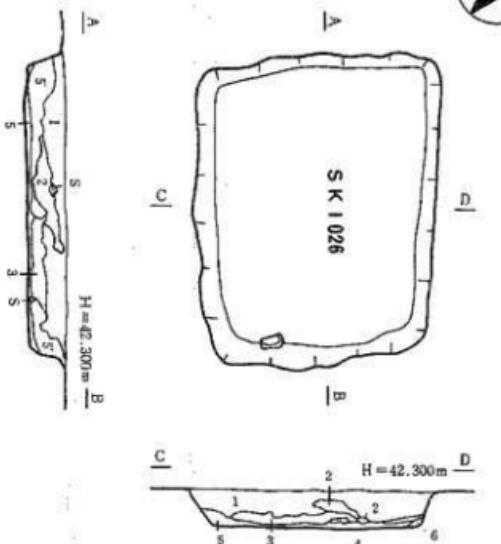
出土2 SPA-Y
 1 黑褐色土(7.5YR5/1) 人骨の明黄色土含入、植化材混入。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) に於く白褐色砂粒混入、黄褐色砂粒混入。
 3 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。

P1 SPA-A
 1 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、液化ブロック、液化ブロック混入。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) 黑色土含入、液化粘土。
 3 黑褐色土(7.5YR5/1) 中～大粒の明黄色土土塊入。
 4 黄褐色土(7.5YR5/1) 横の明黄色土、中～大粒の明黄色砂粒混入。
 5 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入、小粒の明黄色砂粒混入。
 6 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 7 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色大ブロック断入。

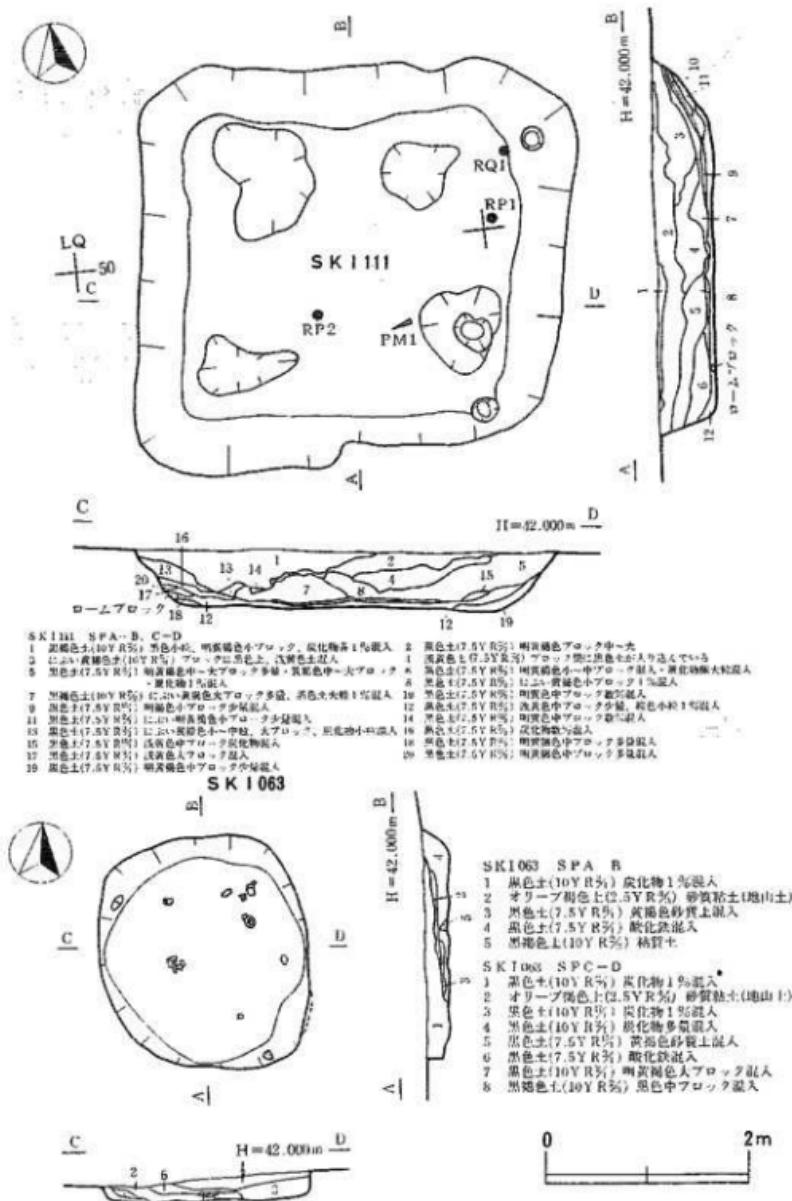
P2 SPA-C-D
 1 黄褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。

P10 SPA-E-F
 1 黑褐色土(7.5YR5/1) 植化材含入、に於く黄褐色小ブロック混入。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 3 黑褐色土(10YR5/1) 黄褐色砂粒混入。

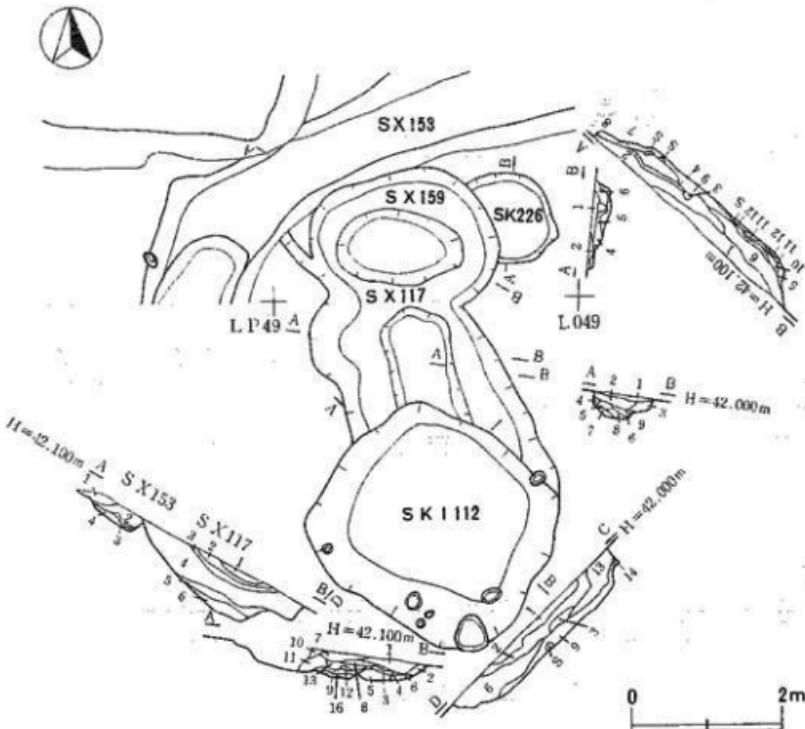
P3 SPC-E
 1 黑褐色土(7.5YR5/1) 植化材含入、に於く黄褐色小ブロック混入。
 2 黑褐色土(7.5YR5/1) に於く黄褐色小～中ブロック混入、液化粘土混入、小粒の赤色粘土。
 3 黑褐色土(7.5YR5/1) に於く黄褐色中～大ブロック混入、赤色土、液化粘土。
 4 に於く黄褐色土(10YR5/1) 黄褐色ブロックに於く黄褐色砂粒混入、液化粘土。
 5 に於く黄褐色土(10YR5/1) 液化粘土、液化砂粒混入、黑色土混入。
 6 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色砂粒混入。
 7 黑褐色土(7.5YR5/1) 黄褐色大ブロック断入。



第30図 SK 1026・030豊穴状連構

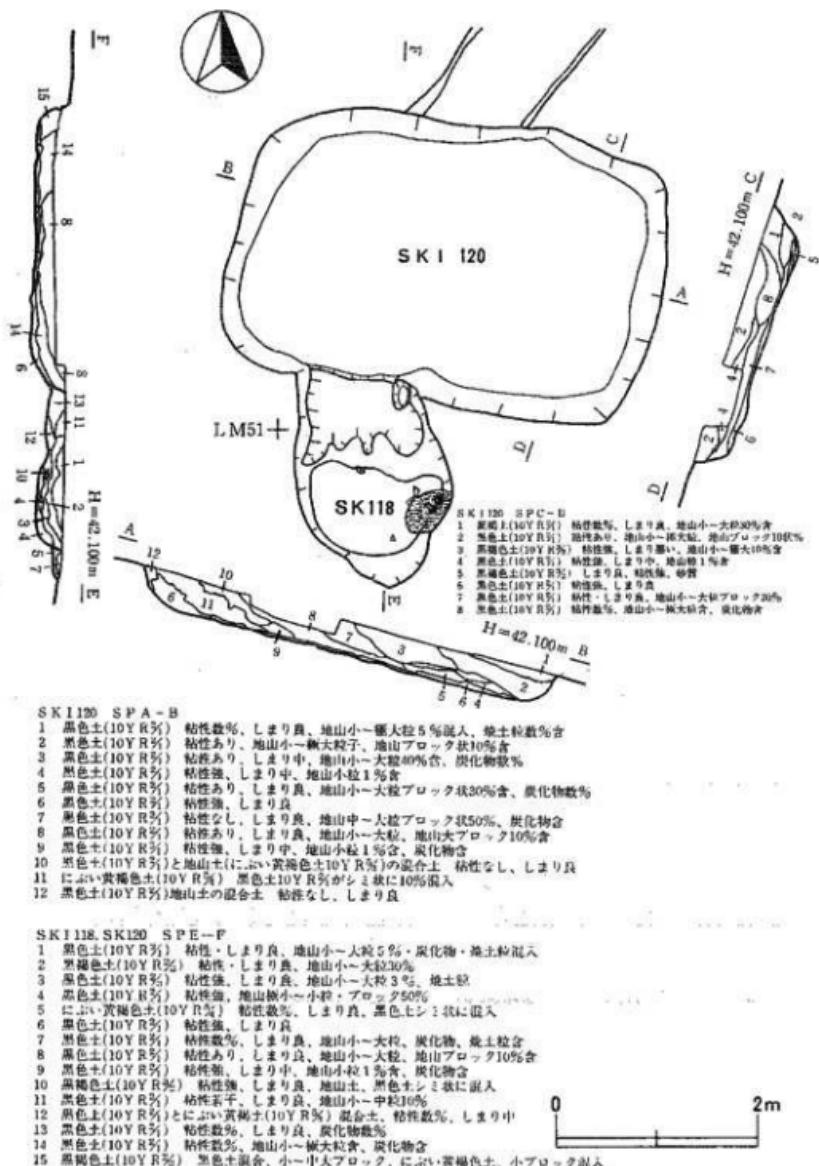


第31図 SK I 063・竪穴状遺構



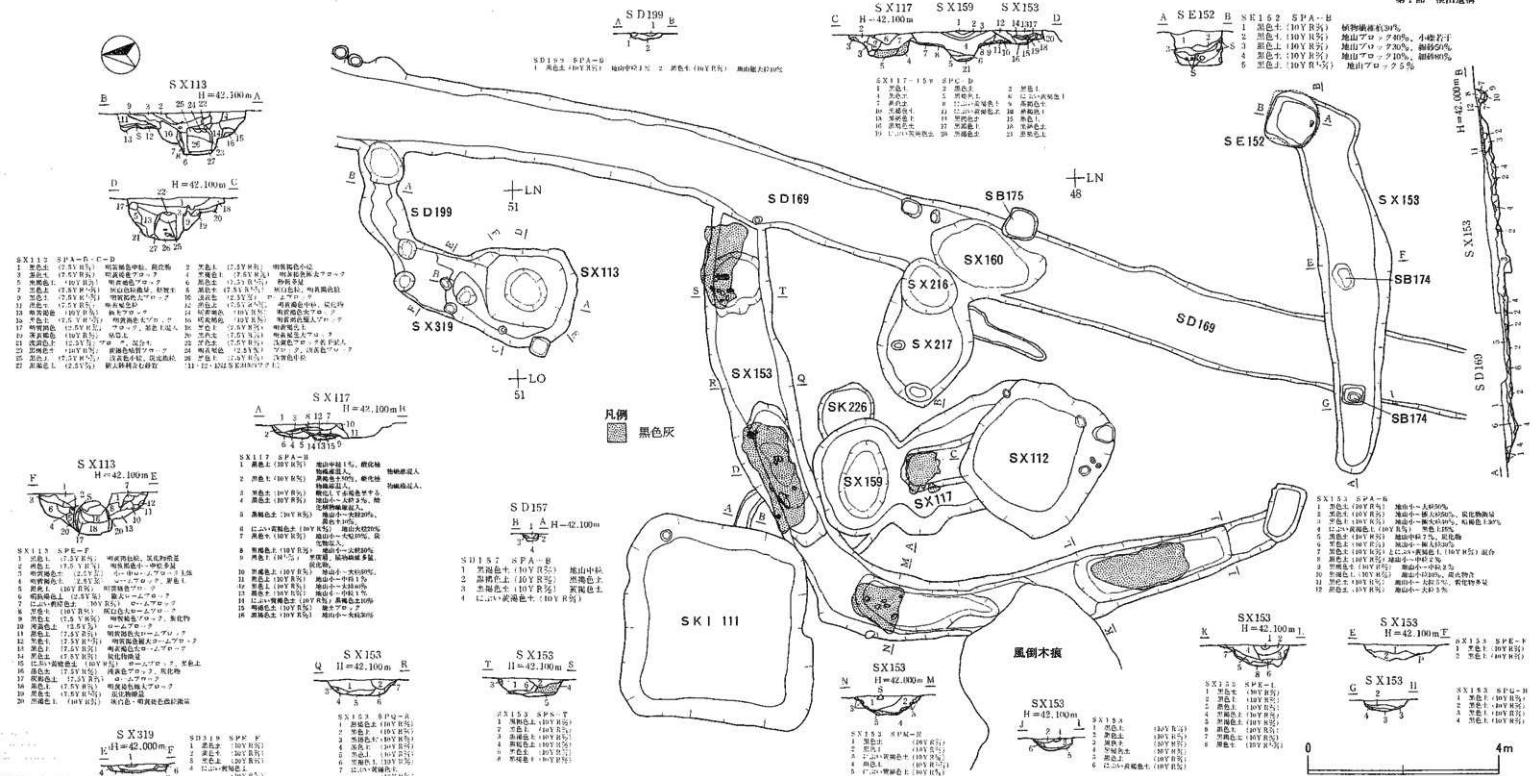
- S X 153 S P A - B**
- 黒色土(7.5Y R 5%) 廉化物微少混入
 - 黒色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり良、地山小→大粒40%
 - 褐色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり不良、地山小→大粒40%
 - 黒色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまりなし、地山小→大粒20%にぶい・黄褐色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり強、黒色土40%
- S K 226 S P A - B**
- 黒色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、堆山小→中粒1%
 - 4 黃褐色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり良、地山小→大粒15%
 - 5 にぶい・黃褐色土(10Y R 5%) 粘性不良、しまり良、地山小→大粒20%
 - 6 黑色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり不良、地山小→大粒10%
 - 7 黑色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり不良、地山小→中粒1%
 - 8 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり良、地山小→中粒1%
 - 9 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり良、地山小→中粒1%
 - 10 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり良、地山小→中粒10%
 - 11 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、堆山小→中粒1%
 - 12 黑色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、堆山小→中粒1%
 - 13 黑色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、堆山小→中粒1%
 - 14 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒30%
 - 15 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒30%
- S X 117 S P A - B**
- 黒色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、堆山小→中粒1%
 - 2 黑色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒1%
 - 3 黑色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒1%
 - 4 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 5 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 6 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 7 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 8 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 9 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 10 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 11 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 12 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 13 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 14 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
 - 15 黄褐色土(10Y R 5%) 粘性・しまり良、地山小→中粒20%
- S K 1112 S P C - D**
- 黒色土(7.5Y R 5%) 廉化物微少混入
 - 2 黑色土(7.5Y R 5%) 廉化物微少混入
 - 3 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土ブロック多量混入
 - 4 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土小粒多量混入
 - 5 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土ブロック多量混入
 - 6 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土小粒多量混入、廉化物微少混入
 - 7 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土ブロック多量混入
 - 8 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土ブロック多量混入、黑色土混入
 - 9 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土ブロック、炭化物微少混入
 - 10 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土ブロック、炭化物微少混入
 - 11 黑色土(7.5Y R 5%) 廉化物微少混入
 - 12 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土ブロック、砂質混入
 - 13 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土中ブロック、黒色土大粒混入
 - 14 黑色土(7.5Y R 5%) 明黄褐色土中ブロック、黒色土大粒混入
 - 15 にぶい・黄褐色土(10Y R 5%) 明黄褐色土中・中ブロック混入
- S X 150 S P A - B**
- 黒褐色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり良、地山中粒1%
 - 2 黑褐色土(10Y R 5%) 粘性あり、しまり良、地山中粒3%
 - 3 黑褐色土(10Y R 5%) しまり良、砂質、地山小→大粒40%
 - 4 黑褐色土(10Y R 5%) 粘性あり、地山小→大粒5%
 - 5 黑褐色土(10Y R 5%) 粘性あり、地山小→中粒1%
 - 6 黑褐色土(10Y R 5%) 粘性強、地山小粒1%

第32図 S K 1112堅穴状造構、S K 226土坑
S X 117・159その他の遺構



第33図 SK I 120堅穴状造構、SK I 118土坑

第1節 悅出感情



第34図 SK I 111・112・堅穴状造構、SE 152・井戸跡、SD 157・169・199・溝状造構、SK 226土抗S X 113・117・153・159・160・216・217・319その他の造構、SB 174掘立柱建物跡

S K I 120 (第33図、図版7・37)

D区のL L51・LM51グリッドで検出した。S D119と重複し、本遺構が古い。平面形は275cm×421cmの隅丸長方形で、底面は平坦で240cm×374cmを呈している。底面積は18.49m²である。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は36cmである。埋土は黒色土を主体にして、地山の粒子・ブロックがほとんどの層に混入し、3・5・7・10・12層にはその傾向が著しく、10・12層は黒色土と地山上の混合土であり、土層の流れが西から東に傾いており、西方向から人為的に埋められたものであろう。

遺物は縄文・弥生土器、ソレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

5. 井戸跡

S E 014 (第35図、図版38)

F区のL F15・16グリッドで検出した。平面形は略円形で、規模は開口部径134cm×157cm、底部径88cm×100cm、深さ111cmである。断面形は袋状で、底面は凹凸がある。埋土は13層に分層した。黒ないし黒褐色土・赤黒色土を主体に、2・3・7層にはローム粒子・ブロックが、1～4層には小礫が混入し、最下層の13層は小礫が主体となる。

遺物は出土しなかった。

S E 028 (第35図、図版39)

D区のL H46グリッドで検出した。平面形は円形で、規模は開口部径80cm×92cm、底部径47cm×50cm、深さ92cmである。断面形はほぼ円筒形で底面は平坦である。埋土は8層に分層した。黒褐色土・黄褐色土を主体とし、3・6層には2cm～10cmの礫が混入している。4層は空洞となっている。

遺物は縄文・弥生土器、フレイクが僅少出土した。

S E 031 (第35図、図版40)

D区のL K45・L I45グリッドで検出した。S K032と重複し、本遺構が新しい。規模は開口部径100cm×127cm、底部径48cm×50cmである。平面形は略梢円形で、断面形はソラスコ状で、底面はほぼ平坦である。埋土は6層に分層した。1層以外は礫を含み、特に2層は10cm～20cmの角礫が主体を占め、4層は3～5cmの円礫が主体を占める砂礫層である。3・5・6層は湿り氣があるが、良く繋まる。3・4層は空洞があり、特に3層は2層直下の縦15cm、横50cmほどの空洞で分断された格好になっており、下の3層は卵形の堆積状況を呈している。埋土中には礫の混入はほとんどなく、種子を含む。

遺物は縄文・弥生土器がやや、上部器・須恵器が僅少出土した。

S E 067 (第35図、図版41・42)

B区のMK50グリッドで検出した。規模は開口部径116cm×126cm、底部径70cm×74cm、深さ86cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっていたと思われるが、その後の崩壊によってやや開口部が外に向いている。平面形は円形で、断面形は円筒形を呈していたと考えられるが、崩壊によって現状では逆台形状を呈している。覆土は黒色土が大半を占め、地山土が小ブロックとなって混入している。砂利層を掘り込んでいる6～8層は水分を多く含み、壁および底面からは常に漏水している。

底面からやや浮いた状態の6・8層間にて、径25.1cm、高さ16.1cmの曲物(第185図34)と柄の取れた径12cm、高さ10cmの柄杓(第185図35)が出土した。他に遺物は縄文・弥生土器、フレイクが少量出土した。

S E 086 (第36図、図版43)

E区のME42・43グリッドで検出した平面形が梢円形の井戸跡である。規模は開口部径150cm×170cm、底部径73cm×93cm、深さ73cmである。底面は平坦で壁は外に向かって緩やかに立ち上がる。

埋土は黒色土を主体にして、中央部は水平な堆積をしている。4～6・8層には砂質粘土ブロック・粒子が多く混入し、6・8層には特に多い。

出土遺物は縄文・弥生土器がわずかに出土した。

S E 088 (第36図、図版44)

D区のL L42グリッドで検出した。S D087と重複し、本構造が古い。規模は開口部径89cm×93cm、底部径84cm×90cm、中端132cm×167cm、深さ83cmである。平面形はほぼ円形で、断面形は底面から緩く立ち上がり中ほどで外にふくらみ、その上はまっすぐに立ち上がる。底面はやや凹凸がある。埋土は13層に分層した。黒褐色土を主体として、全体的に地山ブロック・粒子が多く混入し、特に2・7・9・10層はその混合度が高いことから人為的堆積と考えられる。遺物はフレイクが僅少出土した。

S E 116 (第37図、図版44-45-48)

D区のL N54グリッドで検出した。中端で段がつく、2段構造となっている。規模は開口部径196cm×206cm、底部径112cm×117cm、中端130cm×138cm、深さ76cmで砂利層を掘り込んでいる。平面形は略円形で、断面形は外側に向かって緩く立ち上がる。埋土は14層に分層した。黒色土を主体とし、全体的に黄褐色ブロック・粒子を混入する。1・2層は水気を多く含まず良くしまるが、3～14層は水気を多く含み、3・11層以外はいずれも粘性がある。

遺物は縄文・弥生土器、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S E 125 (第36図、図版45-46)

D区のL R44グリッドで検出した。規模は開口部103cm×117cm、底部径86cm×88cm、中幅

112cm×132cm、深さ98cmである。平面形は円形で、断面形は袋状で、底面は平坦である。埋土は10層に分層した。ほとんど黒色土が主体で、1・3～5層には植物繊維を含み、9層には糠が多量に混入する。この他、地山ブロックが多く含まれるのでレンズ状の堆積をしているものと人为的堆積と考えられる。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクがやや、土師器・須恵器が僅少出土した。

S E152 (第34図、図版5・46)

D区のLM46グリッドで検出した。SX153、SB173と重複し、いずれよりも新しい。規模は開口部径106cm×117cm、底部径74cm×80cm、深さ73cmである。平面形は鶴丸方形で、断面形は円筒形で底面は平坦である。埋土は5層に分層した。黒色土が主体で、1・2・5層には植物繊維が混入し、特に5層には植物繊維と樹皮を多量に含む。4層には細砂や礫が多量に混入する。この他、1層以外には地山ブロックが多く含まれていることから、レンズ状の堆積をしているものと人为的堆積と考えられる。

遺物は縄文・弥生土器、フレイクがやや、土師器・須恵器が僅少出土した。

S E215 (第36図、図版47)

D区のLM49グリッドで検出した。規模は開口部径64cm×71cm、底部径45cm×50cm、深さ64cmである。平面形は円形で、断面形は円筒形で底面は平坦である。埋土は6層に分層した。黒色土が主体で、いずれにも地山粒子が混入し、3・4層ではその度合が高い。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

6. 溝状遺構 (第42～47図、付図2～5)

S D001

F区のLC14グリッドからLD15グリッドにかけて東西に走っている。西端は調査区外に延びている。北部にSK010、SD002がある。規模は総延長3.76m、幅16cm～24cm、深さ22cm～26cmである。埋土は黒褐色土もしくは黒褐色と黄褐色土の混合土を主体としている。

遺物はフレイクが出土した。

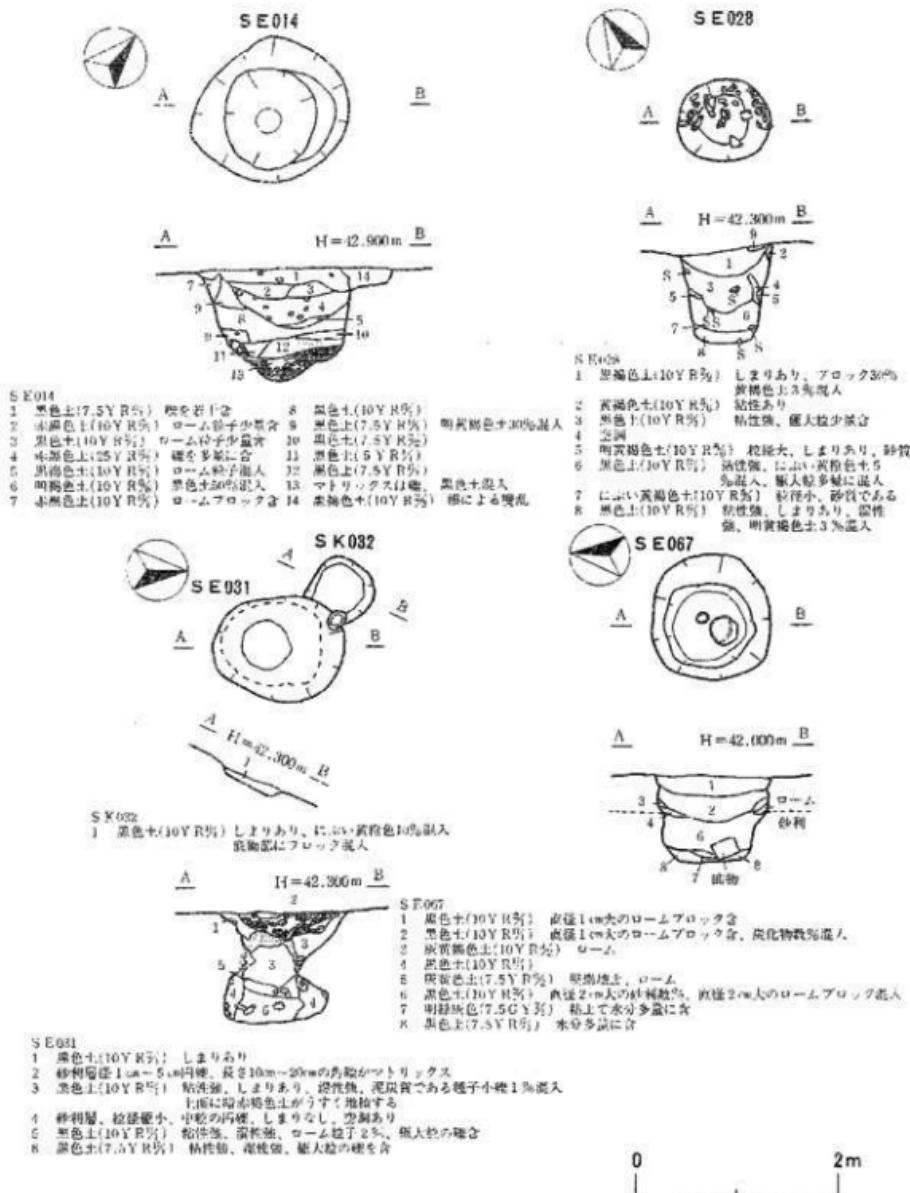
S D002

F区のLC14グリッドでSD001と並行して東西に延びている。西は調査区外に延び、東は搅乱されている。規模は総延長4.78m、幅18cm～26cm、深さ2cm～8cmである。埋土は黒褐色土系の混合土もしくは黒色土と黒褐色土の混合土を主体としている。

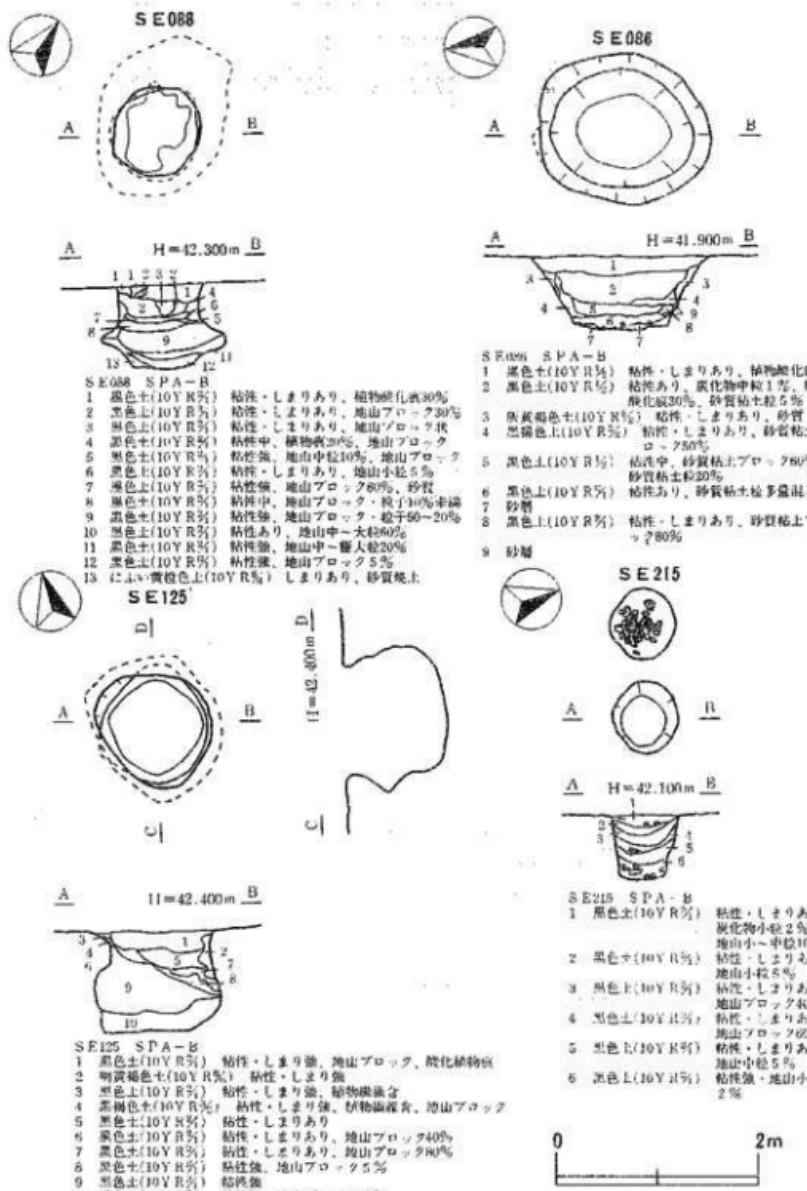
遺物は出土しなかった。

S D003

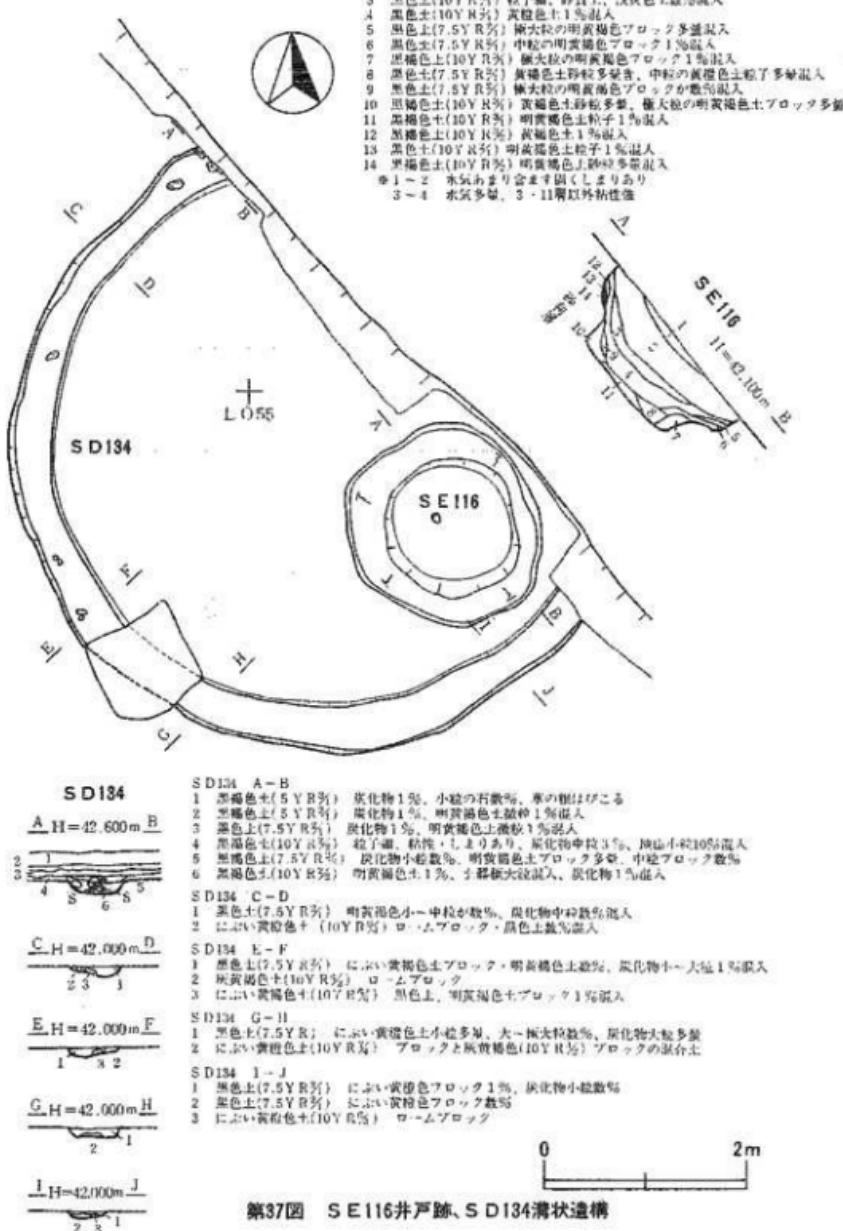
F区のLA14グリッドに位置し、東西に延びている。規模は総延長8.40m、幅12cm～28cm、



第35図 SE014・028・031・067井戸跡、SK032土坑



第36図 S E 086・088・125・215井戸跡



深さ6cm～20cmである。埋土は黒褐色を主体とし、2～5cm大の礫を含む。

遺物は出土しなかった。

S D004

F区のK Q14・15グリッドからK R14・15グリッドにかけて東西に延びている。西は調査区外に延びている。規模は総延長2.26m、幅13cm～30cm、深さ30cm～50cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトブロックを10%混入する。

遺物は出土しなかった。

S D005

F区のL F17グリッドからL E22グリッドにかけて南北に延びている。S D008・S X016を切っており、南は調査区外に延びる。規模は総延長22.0m、幅46cm～90cm、深さ2cm～12cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトブロックを少量混入する。

遺物は出土しなかった。

S D006

F区のL C・L D18グリッドからL C・L D22グリッドにかけて南北に延びており、S D007に切られている。規模は総延長15.04m、幅40cm～50cm、深さ4cm～12cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトを少量混入する。

遺物は出土しなかった。

S D007

F区のL C18グリッドからL E20グリッドにかけて東西に延びており、S D006を切っている。規模は総延長10.5m、幅20.5cm～40cm、深さ8cm～34cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトを混入する。

遺物は出土しなかった。

S D008

F区のL D20グリッドからL F20グリッドにかけて延びている。S X016を切り、S D005によって切られている。規模は総延長11.5m、幅30cm～60cm、深さ1cm～12cmである。埋土は黒褐色土の混合土もしくは黄褐色土シルトブロックを混入する。

遺物は出土しなかった。

S D009

F区のL I21グリッドから北へ9.8m直進しそこで北西に曲がり、L M27グリッドまで延びている。規模は総延長23.0m、幅30cm～60cm、深さ3cm～14cmで、疊層・シルト層を掘り込んで構築されている。

遺物は出土しなかった。

SD 027

D区のL J42グリッドからL H47グリッドまで北に延びて、調査区外にいたる。S E028、S D091、S X033と重複し、S E028、S X033より新しい。規模は総延長18.3m、幅40cm～130cm、深さ8cm～12cmである。

遺物は石器やフレイタ、土師器・須恵器が出土した。

SD 029

D区のL K42グリッドからL K43グリッドにかけて延びている。S A274・S K I030と重複しており、両遺構より新しい。規模は総延長8.4m、幅25cm～45cmである。

遺物は出土しなかった。

SD 056 (第42・57図)

D区のL P53グリッドからL Q53グリッドにかけて東西に延びている。北東端部はS A222、S B170獨立柱建物跡の柱穴に一部埋され、北西はS K138に切られている。南側に並行するS D251がある。S K138から西に延びるSD201と同一かもしれない。規模は総延長5.4m、幅47cm～113cm、深さ9cm～18cmである。埋土には礫を多量に含んでいる。

遺物は縄文・弥生土器が、石器・フレイタ、土師器・須恵器が出土した。

SD 057 (第42図)

D区のL M52グリッドからL M53グリッドにかけて東西に延びている。規模は総延長3.9m、幅45cm～90cm、深さ11cm～40cmである。埋土は黒・暗褐色土を主体とし、炭化物・ローム粒子20%混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイタ、土師器・須恵器が出土した。

SD 070

E区のL R36グリッドからL Q41グリッドにかけて延びている。規模は総延長22.8m、幅50cm～70cm、深さ10cm～20cmである。埋土は砂質粘土粒を多量に混入する。

遺物は出土しなかった。

SD 071

E区のL P38グリッドからL O42グリッドにかけて南北に延びており、SD104によって切られている。規模は総延長9.1m、幅30cm～80cm、深さ10cm～18cmである。埋土は黒色土を主体とし、砂質粘土ブロックを多量に混入する。

遺物はフレイタがわずかに出土した。

SD 072

E区のL O36グリッドからL P39グリッドにかけてやや蛇行しながら南北に延びており、SD104につながる。規模は総延長11.8m、幅60cm～80cm、深さ70cm～90cmである。埋土は黒色

上、にぶい・黄褐色土を主体とし、砂質粘土ブロックを混入する。

遺物はフレイクがわずかに出土した。

S D073

E区のL O35グリッドからL P37グリッドにかけて延びている。規模は総延長8.0m、幅20cm～30cm、深さ14cm～18cmである。埋土は黒色土・黒褐色土を主体としている。

遺物は出土しなかった。

S D074

E区のL R32グリッドからL R36グリッドにかけて延びている。規模は総延長22.8m、幅50cm～70cm、深さ30cm～50cmである。埋土は黒色土・にぶい・黄褐色土を主体とし、砂質粘土ブロック・炭化物を混入する。

遺物は出土しなかった。

S D075

E区のL Q31グリッドから北のL R36グリッドにかけて延びている。規模は総延長10.7m、幅62cm～84cmである。埋土は黒色土・にぶい・黄褐色土を主体とし、粘土がブロック状に混入する。

遺物は出土しなかった。

S D076

D区のL Q31グリッドから北のL Q33グリッドにかけて延びている。規模は総延長16.4m、幅52cm～96cm、深さ14cm～33cmである。埋土は黒褐色・にぶい・黄褐色砂質土を主体とし、粘土を多量に混入する。

遺物は出土しなかった。

S D079 (第56図)

C区のMD57グリッドからMC60グリッドにかけて延びており、北西端でS D168にぶつかる。規模は総延長12.1m、幅10cm～16cm、深さ38cm～44cmである。埋土は黒色・黒褐色土を主体とし、炭化物粒子・地山ブロックが混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土飾器・須恵器がわずかに出土した。

S D080

D区のLM47グリッドからLL47グリッドにかけて延びている。規模は総延長7.5m、幅15cm～31cmである。遺物は出土しなかった。

S D087

D区のLL41グリッドから北西のLL42グリッドまで延び、そこから北東に折れLM41グリッドの調査区外にいたる。S E088・S D089より新しい。規模は総延長6.4m、幅25cm～30cm、

深さ7cm～11cmである。埋土は黒褐色土を主体としている。

遺物は縄文・弥生土器がわずかに出土した。

S D089 (第42図)

D区のLK41グリッドからLN42グリッドにかけて延びている。SD087、SD169に切られている。規模は総延長11.9m、幅90cm～115cmである。埋土は黒褐色・灰黄褐色土を主体とし、炭化物・地山粒・地山の粒子を混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土器器・須恵器が出土した。

S D090

E区のLS34グリッドに位置し、南北に延びている。規模は総延長2.8m、幅52cm～62cm、深さ17cm～21cmである。

遺物は出土しなかった。

S D091 (第42図)

D区のLH45グリッドからLI45グリッドにかけて延びており、SX033より新しい。規模は総延長6.7m、幅35cm～50cmである。

遺物は出土しなかった。

S D092 (第42図)

MA42グリッドを中心に、E区のMC41グリッドからD区のLS46グリッドにかけてV型に延び、SL323で止まる。

D区のLS46グリッドから南西側E区MA42グリッドに延びて、ほぼ90°北西に折れSL323の南端にいたる。規模は総延長23.2m、幅76cm～124cm、深さ12cm～130cmである。埋土は黒色土系や灰白土を主体として、灰白色やロームのブロック、炭化物粒子が混入する。

遺物は縄文・弥生土器、石器やフレイク、土器器・須恵器が少量出土した。

S D093

E区のME40グリッドからME39グリッドにかけて延びて、調査区外にいたる。

規模は総延長3.28m、幅36cm～56cm、深さ82cm～86cmである。埋土は黒色土を主体として、地山ブロックが多く混入する。

遺物は出土しなかった。

S D094

E区のMD40グリッドからME43グリッドにかけて延びている。規模は総延長11.8m、幅8cm～12cm、深さ80cm～90cmである。埋土の3層はにぶい黄褐色土に地山ブロックが多量に混入する。

遺物は出土しなかった。

S D095

E区のMG42グリッドからMG43グリッドにかけて延びている。規模は総延長9.65m、幅27cm～33cmである。埋土は黒色土を主体とし、地山粒子・地山ブロック・砂質粘土ブロックを多量に混入する。

遺物は出土しなかった。

S D096

E区のMF43グリッドからMG43グリッドにかけて延びている。規模は総延長2.4m、幅18cm～32cm、深さ19cm～78cmである。

遺物は出土しなかった。

S D097

E区のMG42グリッドでやや南西から北東にかけて延び、両端とも途中で切れている。規模は総延長1.22m、幅17cm～26cm、深さ80cm～91cmである。

埋土は耕作土、黒色・黒褐色土を主体とし、地山ブロックが多く混入する。

遺物は出土しなかった。

S D098

E区のMH43グリッドに位置する。規模は総延長1.16m、幅33cm～68cm、深さ73cm～96cmである。

遺物は出土しなかった。

S D099 (第43図)

D区のLK48グリッドからLK49グリッドにかけて延び、SX084を切っている。規模は総延長4.8m、幅55cm～85cmである。埋土は黒色・黒褐色・にぶい黄褐色土を主体とし、炭化物、地山粒・ローム粒子を混入する。

遺物は縄文・弥生土器、石器・フレイクが少量出土した。

S D104

E区のLO38グリッドからLQ42グリッドにかけて延びている。LQ42グリッドでSD105を切りSD108につながる。規模は総延長16.4m、幅64cm～108cm、深さ10cm～130cmである。埋土は黒色土を主体とし、明黄褐色土を少量混入する。

遺物は縄文・弥生土器、石器・フレイクが少量出土した。

S D105

E区のLQ37グリッドからLP42グリッドにかけて延びている。SD104に切られている。規模は総延長17.3m、幅18cm～68cm、深さ6cm～26cmである。

遺物は弥生土器が出土した。

S D106

C区のMF61グリッドからMD64グリッドにかけて延びている。S D228・S D107と重複し、S D107より新しい。規模は総延長16.6m、幅50cm~80cm、深さ10cm~144cmである。

遺物は縄文・弥生土器、石器・フレイク、土師器・須恵器がわずかに出土した。

S D107

C区のME57グリッドからMF64グリッドにかけて延びている。S D106・S D228と重複する。規模は総延長31.2m、幅50cm~100cm、深さ20cm~96cmである。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが少量、土師器・須恵器がわずかに出土した。

S D108

E区のLP42グリッドからLQ42グリッドにかけて延びている。規模は総延長6.1m、幅24cm~152cmである。

遺物は出土しなかった。

S D110 (第43図)

D区のLM42グリッドから垂直に北から北西にかけて延びている。S B165・S D168と重複し、S B165より新しい。規模は総延長9.0m、幅60cm~90cmである。埋土は黒色・黒褐色・にぶい黄褐色土を主体とし、炭化物・地山粒を混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

S D119 (第43図)

D区のLN50グリッドからLM52グリッドにかけて延びている。SK118・SK1120を切っている。規模は総延長9.0m、幅60cm~100cm、深さ4cm~15cmである。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが少量、土師器・須恵器が少量出土した。

S D121 (第64・81図、図版6)

D区のLS46グリッドからLT47グリッドにかけて延びている。SX184・195・196を切っている。規模は総延長6.7m、幅60cm~110cm、深さ12cm~18cmである。埋土は黒色・黒褐色・にぶい黄褐色土を主体とし、炭化物若干・地山粒10~40%混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

S D122 (第44・64・81図)

D区のLS46グリッドに位置し、SX184に切られている。規模は総延長0.5m、幅40cm~60cm、深さ6cm~14cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、炭化物・地山ブロックを混入する。

遺物は弥生土器が出土した。

S D130 (第38図、図版6-38-48)

D区のLS56・57グリッド、LR56・57グリッドに位置する。溝が環状に巡る遺構である。断

面形は「U」字形を呈する。SK132より古く、SX167・192より新しい。規模は外径5.5m、内径4.5m、幅43cm～56cm、深さ11cm～21cmである。埋土は黒色・黒褐色土を主体とし、地山粒5～10%、地山ブロック20～50%混入する。

遺物は繩文・弥生土器、石器・フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

SD134 (第37図、図版48)

D区のL N54-55グリッドからL O54-55グリッドに位置し、東側1/3強が調査区外であるが、溝が環状に巡る遺構と思われる。断面形は「U」字形を呈する。規模は外径6.2m、内径5.3m、幅40cm～50cm、深さ5cm～20cmである。埋土は黒色・黒褐色土、灰黄褐色・にじい・黄褐色土を主体とし、炭化物が混入する。

遺物は繩文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

SD150 (第44図)

D区のL O42グリッドからL O43グリッドにかけて延びている。規模は総延長1.8m、幅25cm～30cm、深さ2cm～4cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、地山粒10～30%混入する。

遺物は出土しなかった。

SD151 (第44図)

D区のL O43グリッドからL N45グリッドにかけて延びている。規模は総延長5.8m、幅40cm～90cm、深さ7cm～21cmである。褐色土系の埋土に黄褐色土・炭化物粒子がやや混入する。

遺物は珠洲系陶器が出土した。

SD157 (第34図)

D区のL O49グリッドに位置する。規模は総延長1.0m、幅30cm～40cm、深さ14cm～21cmである。

遺物は弥生土器、フレイクがわずかに出土した。

SD163

C区のME59グリッドからMF64グリッドにかけて延びている。規模は総延長9.4m、幅80cm～92cm、深さ60cm～88cmである。

遺物は繩文・弥生土器が多く、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

SD166

C区のMD60グリッドに位置する。規模は横3.6m、縦3.0m、幅10cm～30cm、深さ12cm～68cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、地山ブロック、白色の地山上、炭化粒1%を混入する。遺物は石器がわずかに出土した。

SD168 (第44・45・56図、図版5)

D区のL P43グリッドからほぼ垂直に北へ延び途中で折れ、さらに北西にかけて延びてい

る。規模は総延長52m、幅45cm~140cm、深さ24cm~43cmである。埋土は黒色・黒褐色土を主体とし、炭化物中粒・ローム粒子・地山粒を混入する。

遺物は縄文・弥生土器、石器・フレイクが多く、土師器・須恵器がわずかに出土した。

S D169 (第34・44・45図、図版5・7)

D区のL P43・L O43グリッドからL L53グリッドにかけて延びている。S X153・160・216より新しい。規模は総延長40m、幅140cm~200cm、深さ3cm~37cmである。褐色土系や黄褐色系の埋土を主体とし、炭化物・鉄分・ローム粒子を混入する。

遺物は縄文・弥生土器、石器・フレイク、土師器・須恵器が少量、中世陶器がごくわずか出土した。

S D191 (第45・46図)

D区のL T61グリッドからL S61グリッドにかけて延びている。規模は総延長2.6m、幅50cm~60cmである。埋土は黒色土とにじむ黄褐色土を主体とし、地山粒を混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

S D197 (第46図)

D区のMC47グリッドからMC48グリッドにかけて弧状に延びている。規模は総延長5.3m、幅25cm~35cm、深さ18cm~20cmである。埋土は黒色土と黒褐色土を主体とし、地山粒が多く、炭化物がごく少量混入する。

遺物は出土しなかった。

S D199 (第34・46図)

D区のL O51グリッドに位置し、東西に延びている。S D169・S X319と重複し、S X319より古い。規模は総延長2.3m、幅70cm~100cm、深さ9cm~26cmである。埋土は黒色土とにじむ黄褐色土を主体とし、黒色地山ブロック・地山粒が多く、黒色土がわずかに混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器がわずかに出土した。

S D201 (第46図)

D区のMC53グリッドからL R53グリッドにかけて延び、S X138にぶつかりS D201とS D056との接点は不明である。S D168を切っている。S D056と同一かもしれないがS D056のように礫は多量に含んでいない。S X138の接点で計測した規模は、総延長19.9m、幅40cm~90cmである。埋土は黒色・黒褐色・褐色土を主体とし、炭化物1%、地山粒10~90%、焼土1%混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

S D203 (第46図)

D区のMB49グリッドからL S49グリッドにかけて延びている。規模は総延長9.4m、幅

40cm～70cm、深さ7cm～19cmである。埋土は黒色土と黒褐色土を主体とし、炭化物や地山粒子を混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイクが少量出土した。

S D204 (第66図)

D区のL O48グリッドに位置し、南東にかけて延びている。S X216-217に切られている。規模は総延長2.1m、幅25cm～60cm、深さ25cm～28cmである。埋土は黒色土とにぶい黄褐色土を主体とし、地山上・黒色土がシミ状にやや混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器がごくわずか出土した。

S D228

C区のME61グリッドからMF61グリッドにかけて延びている。規模は総延長4.7m、幅10cm～90cm、深さ20cm～100cmである。

遺物は弥生土器が出土した。

S D231

C区のMC54グリッドから6mほど北西に延びて折れ、北へと延びている。規模は総延長14.3cm、幅28cm～66cm、深さ10cm～106cmである。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器、伊万里染付がわずかに出土した。

S D244

D区のL Q51グリッドからL P51グリッドにかけて延びている。S K245・S X238と重複し、両遺構よりも新しい。規模は総延長3.97m、幅55cm～66cm、深さ28cm～33cmである。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器がわずかに出土した。

S D246 (第47図)

D区のL P47グリッドに位置する。規模は総延長2.7m、幅45cm～60cm、深さ7cm～11cmである。

遺物は縄文・弥生土器が僅少、フレイクがわずかに出土した。

S D251 (第47図)

D区のL P53グリッドからL Q53グリッドにかけて延びている。規模は総延長5.4m、幅55cm～110cm、深さ7cm～9cmである。埋土は黒色土・にぶい黄褐色土を主体に、円礫・炭化物が多量に、地山・黒色灰がやや混入する。

遺物は縄文・弥生土器、石器・フレイク、土師器・須恵器がわずかに出土した。

S D260 (第47-57図)

D区のL S50グリッドに位置し、東西に延びている。規模は総延長1.9m、幅30cm～50cm、深さ11cm～23cmである。埋土は黒色土とにぶい黄褐色土を主体とし、地山5～30%、植

物鐵錐30%、炭化物5%、白色粘土ブロック15%を混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、グルミがわずかに出土した。

S D269 (第68図)

D区のL P57グリッドからL Q58グリッドにかけて延びている。規模は総延長6.2m、幅18cm~62cm、深さ8cm~47cmである。埋土は黒褐色土にぶい、黄褐色土に地山・焼上・炭化物の粒子が混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、中世陶器がわずかに出土した。

S D272

C区のM E44グリッドに位置し、北東に延びている。S D296と重複し、S D296より新しい。規模は総延長2.8m、幅38cm~40cm、深さ8cm~9cmである。

遺物は出土しなかった。

S D279 (第39図、図版49)

B区のM I 45-46グリッド、M J 45-46グリッドに位置し、東側1/3が調査区外であるが、溝がほぼ環状に巡る遺構と思われる。断面形が「U」字形を呈しており、規模は上面幅が最大122cm、深さ16cm~33cm、外径7.95m、内径6.05mの環状となっているものである。埋土は黒色土と焦褐色土を主体とし、炭化物・地山粒10~60%、小砾若干混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、中世陶器がわずかに出土した。

S D281 (第40図、図版50・51)

B区のMO57-58グリッドからMM57-58グリッドにかけて延びている。溝が環状に巡る遺構である。S X312より新しく、S X313・315・321より古い。断面形が「U」字形を呈しており、規模は上面幅最大約156cm、深さ16~26cmの溝が、外径9.6m、内径6.9mの環状となっているものである。埋土は黒色土を主体とし、炭化物・地山の粒子・ブロックがわずかに混入する。

遺物は弥生土器・フレイク・土師器・須恵器片が少量出土した。また南西部覆土中から大小の礫が約20個、集中して検出された。

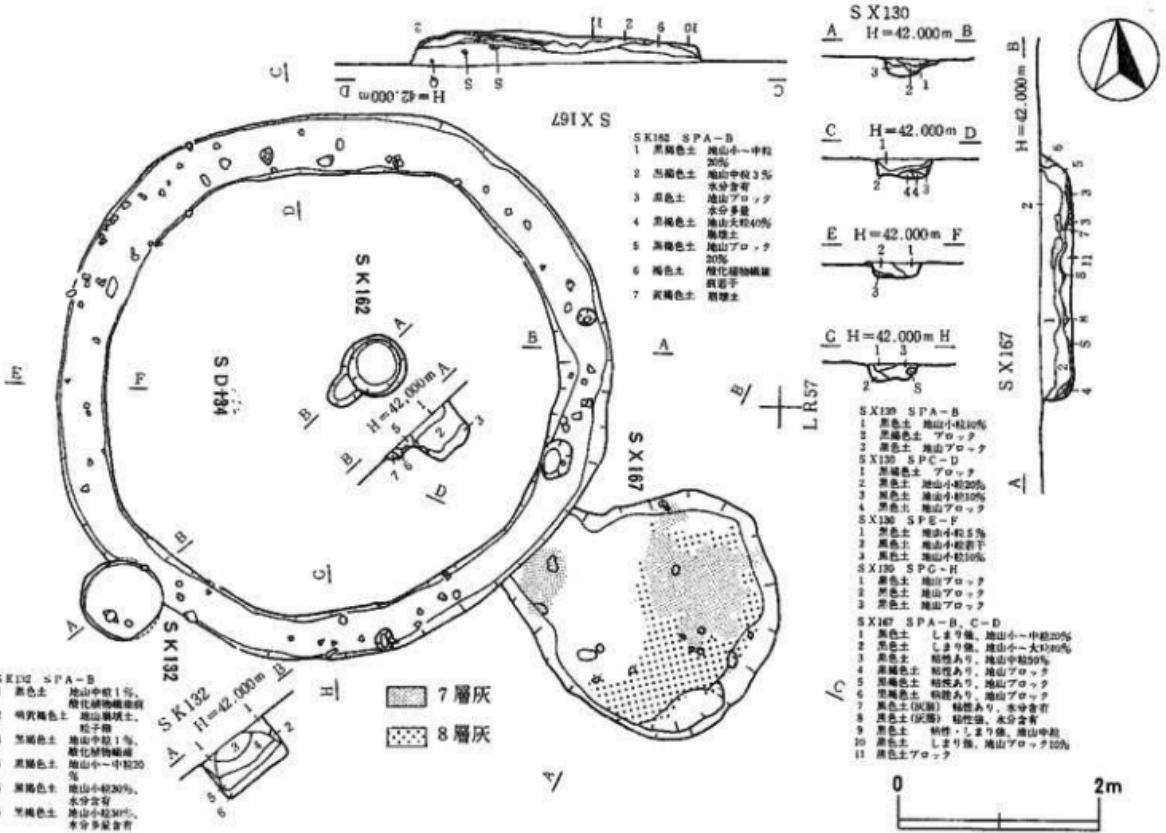
S D282 (第41図、図版50・51)

B区のMP57-58、MR57-58グリッドに位置する。溝が環状に巡る遺構で、底面は疊層である。中心を南北にトレンチが入っている。断面形が「U」字形を呈しており、規模は上面幅84cm、深さ7cm~26cmの溝が外径4.3m、内径3.0mの環状となっているものである。埋土は黒色土と黒褐色土を主体とし、地山ブロック40%、地山粒子5%混入する。

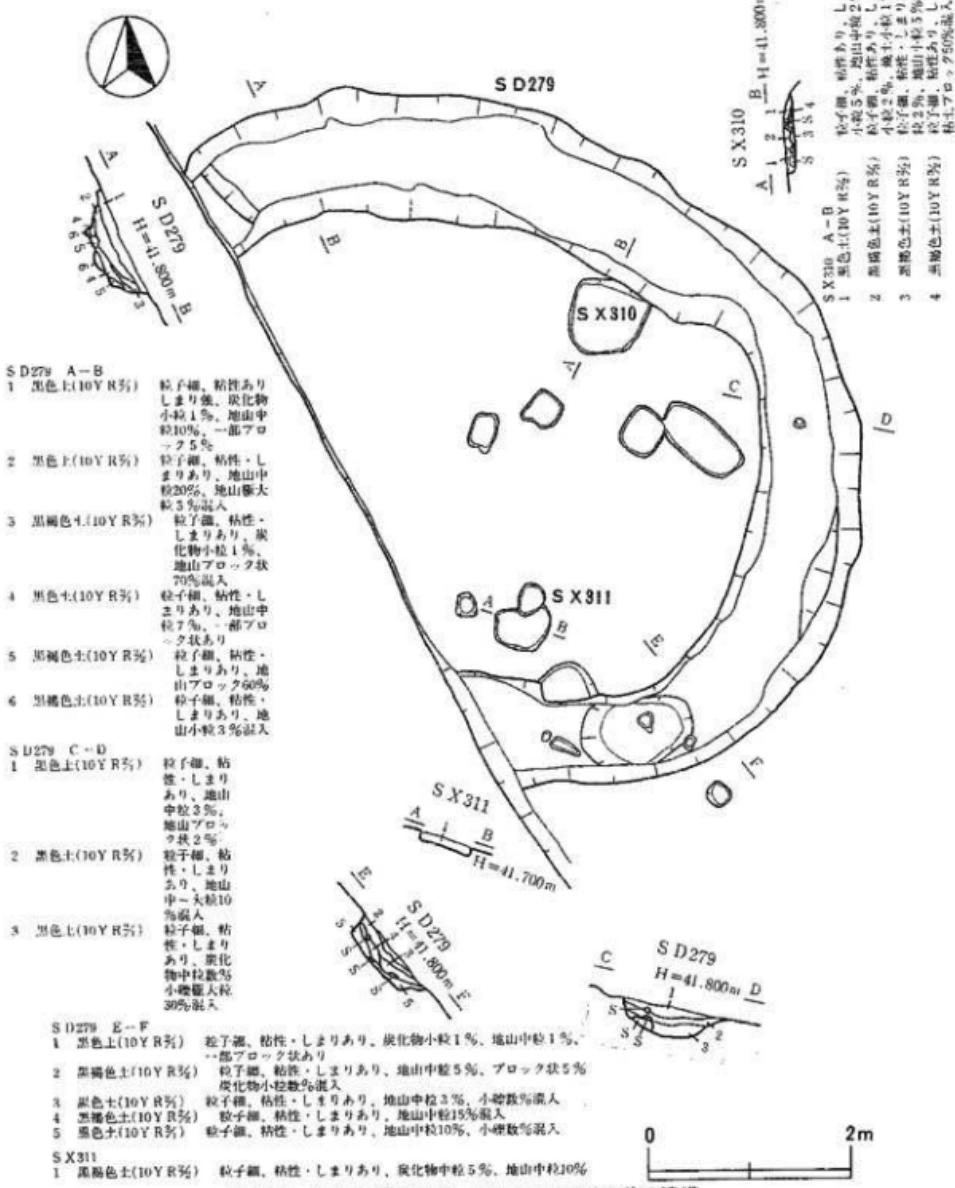
遺物は縄文・弥生土器、石器がわずかに出土した。

S D296

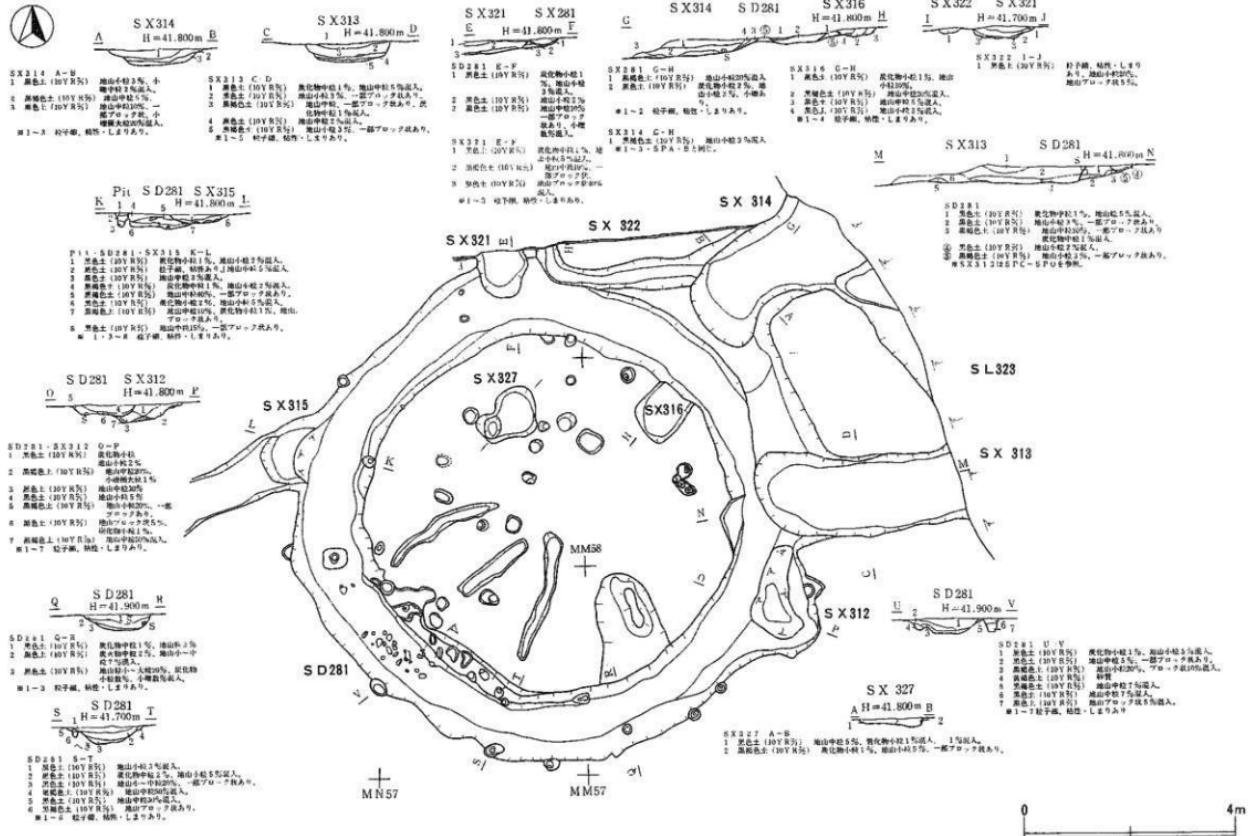
C区のMD44グリッドに位置する。S D272より古い。規模は総延長3.4m、幅28cm~80cmで



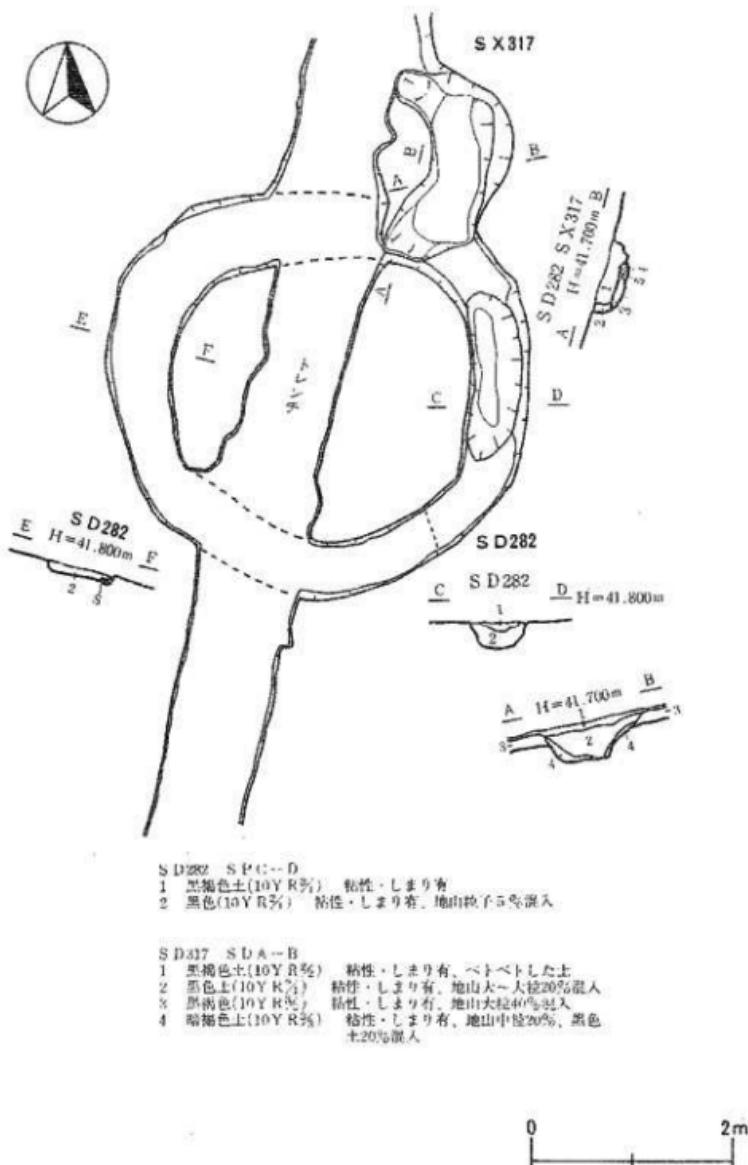
第38図 SD130溝状道構、SK132・162土坑、SX167その他の造構



第39図 SD279溝状遺構、SX310・311その他の遺構

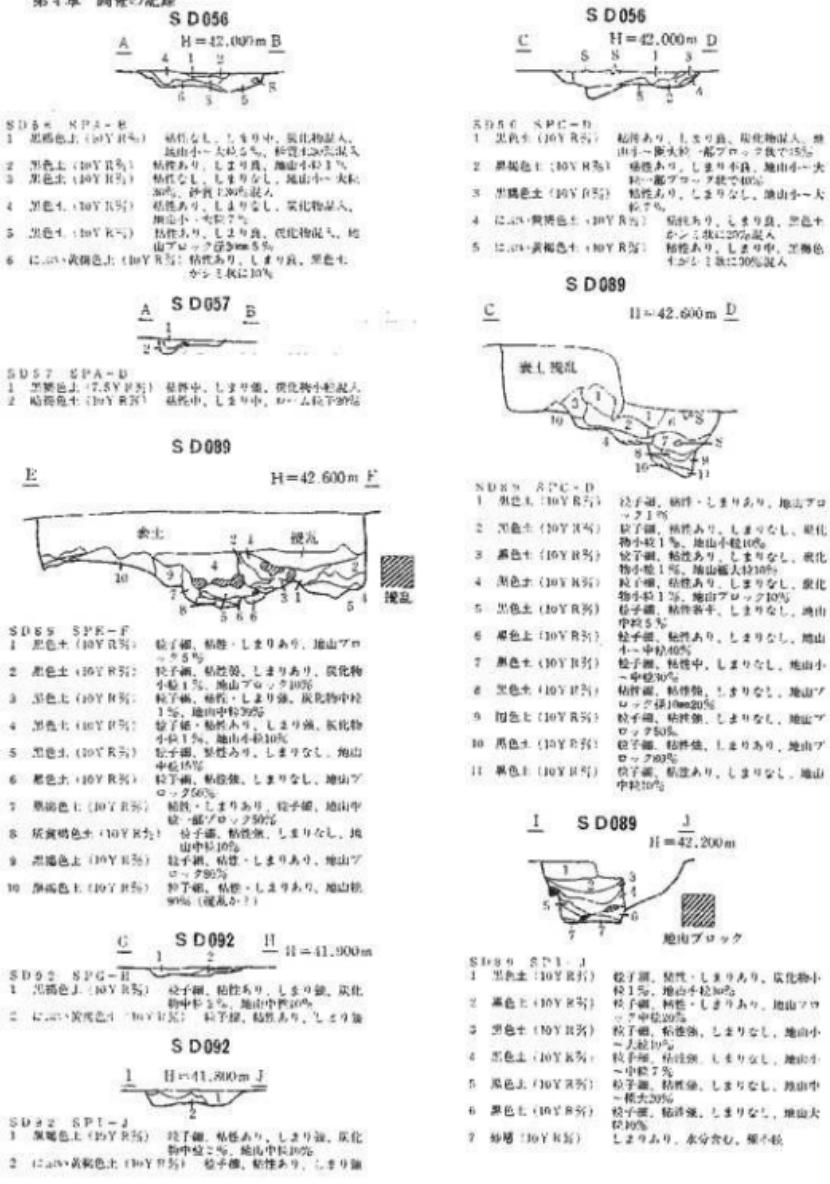


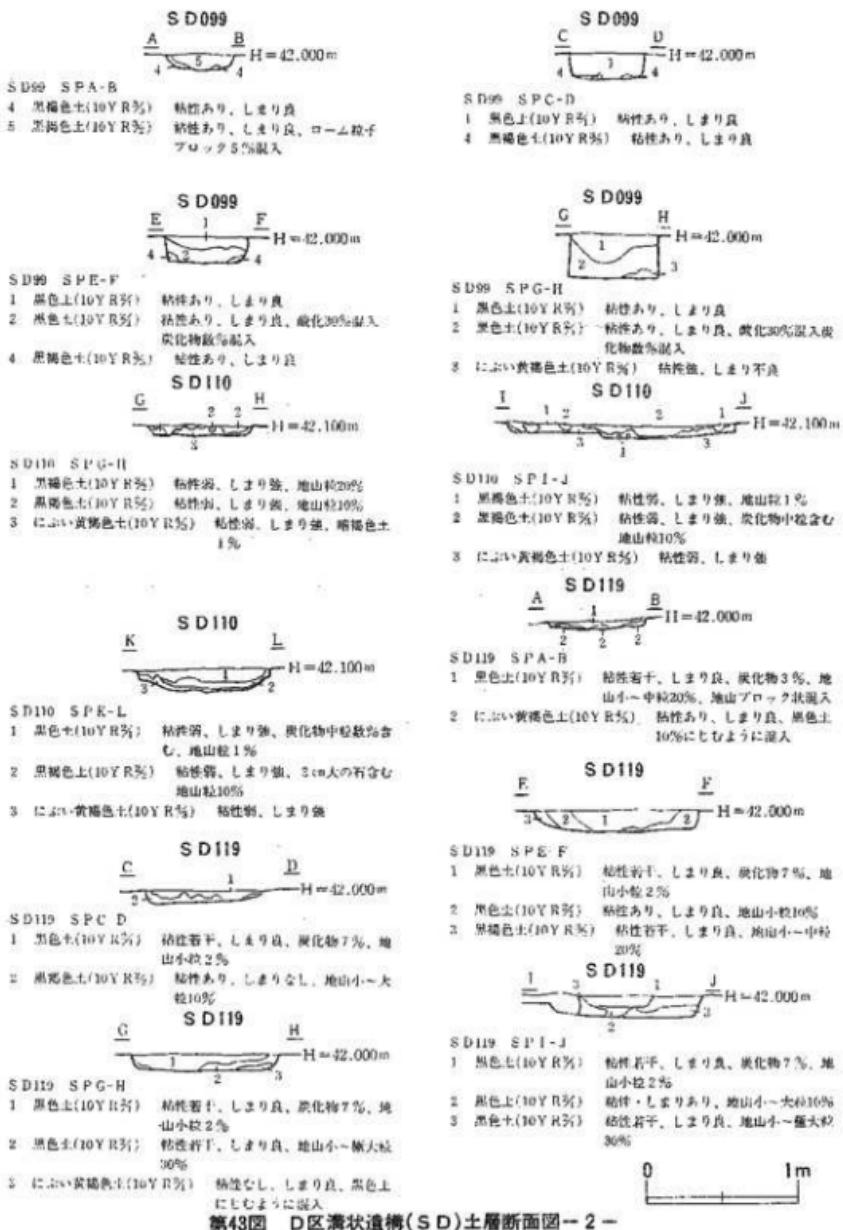
第40図 SD281溝状遺構、S X312~316・321・322・327 その他の遺構



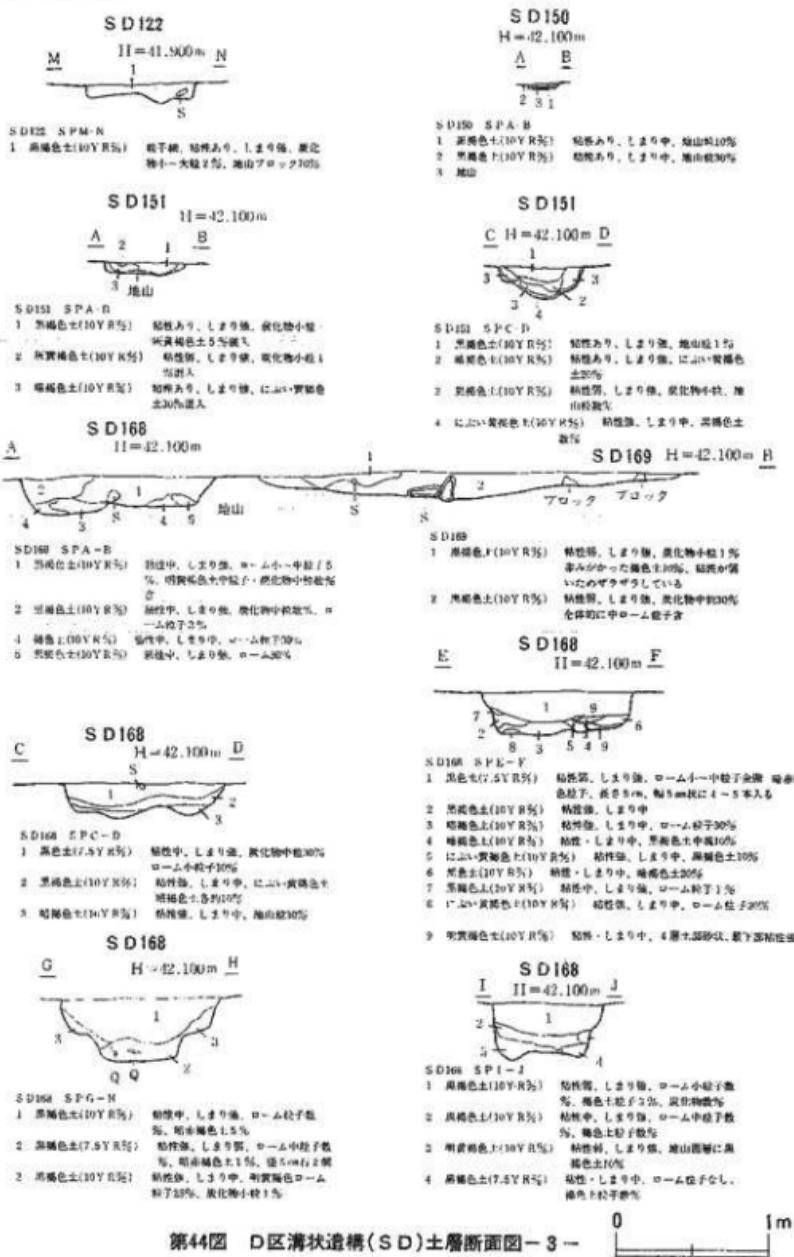
第41図 S D 282溝状造構、S X 317その他の造構

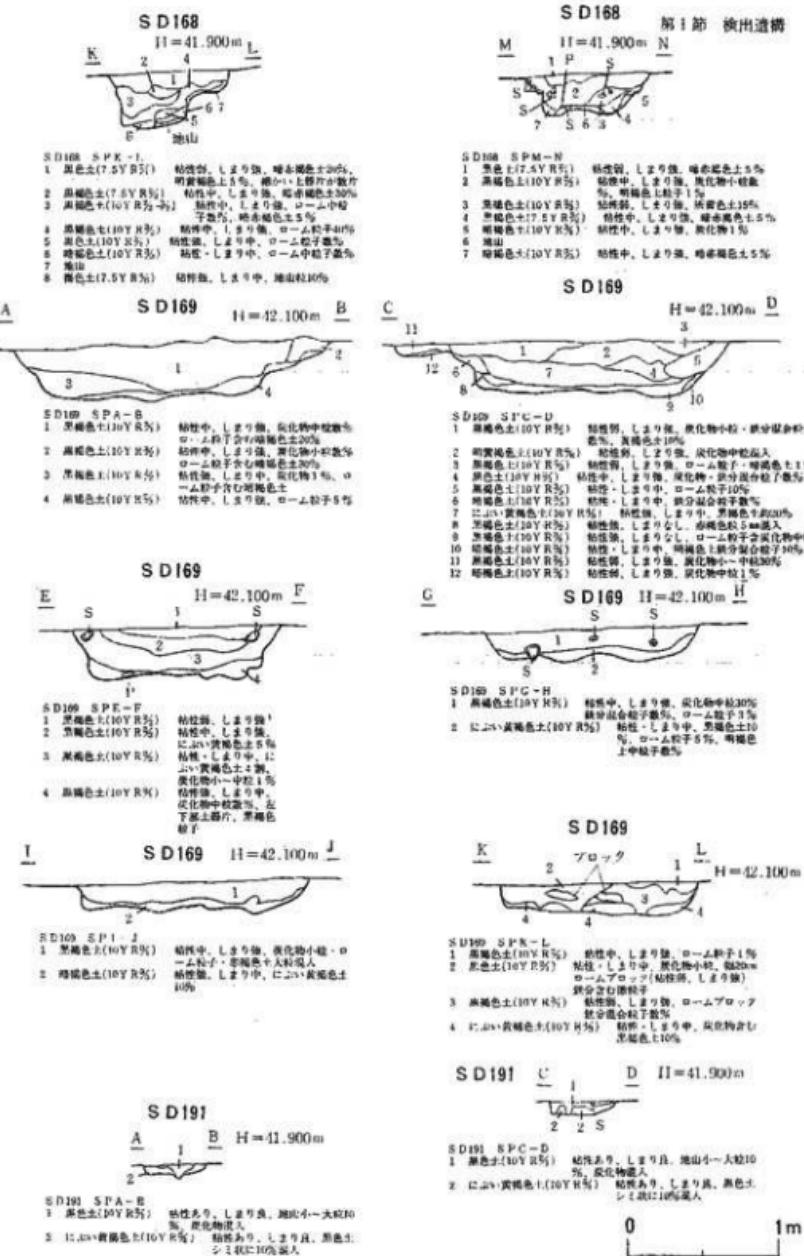
第4章 調査の記録





第4章 調査の記録





第45図 D区溝状遺構(SD)土層断面図-4-



第46図 D区溝状構造(S D)土層断面図-5-



第47図 D区溝状造構(S D)土層断面図 - 6 -

ある。

遺物は縄文・弥生土器がわずかに出土した。

S D 303 (第70図)

B区のMH44グリッドに位置し、南北に延びている。規模は総延長2.7m、幅36cm~92cm、深さ72cm~108cmである。堆上は黒色土を主体とし、炭化物1%、地山粒5%混入する。遺物は縄文・弥生土器、石器がわずかに出土した。

S D 305 (第70図)

B区のM 145グリッドに位置し、東西に延びている。規模は総延長2.48m、幅24cm~60cm、深さ24cm~32cmである。埋土は黒褐色土を主体とし、地山ブロック70%を混入する。

遺物は出土しなかった。

S D 308 (第47図)

D区のL Q・L R・L S・L T43グリッドからMB・MC44グリッドにかけて北西~東に延びている。規模は総延長22.6m、幅55cm~190cm、深さ11cm~74cmである。埋土は黒色土と黒褐色土を主体とし、炭化物・地山ブロック、砂がわずかに混入する。

遺物は縄文・弥生土器、石器・フレイクや、土師器・須恵器、中世陶器がわずかに出土した。

7. 旧河川 (第48~50図、付図1~3、6図版9~14・22~24)

S L 323

E区を源とし、A・B・C区間を北流していたと想定される旧河川である。河岸には、本遺構名の由来となった『手取清水』の跡も含まれている。河幅は12~22m、深さは60~80cmである。河底はほぼ平坦で、河岸は緩やかに立ち上がる。

埋土中からは縄文・弥生土器、土師器・須恵器、鳥形・齊串等の祭祀用具、文字資料(墨書き土器・木筒・将棋の駒)、漆器・下駄・鏽などを含む木製品が多数、古銭が1点出土した。

S L 324

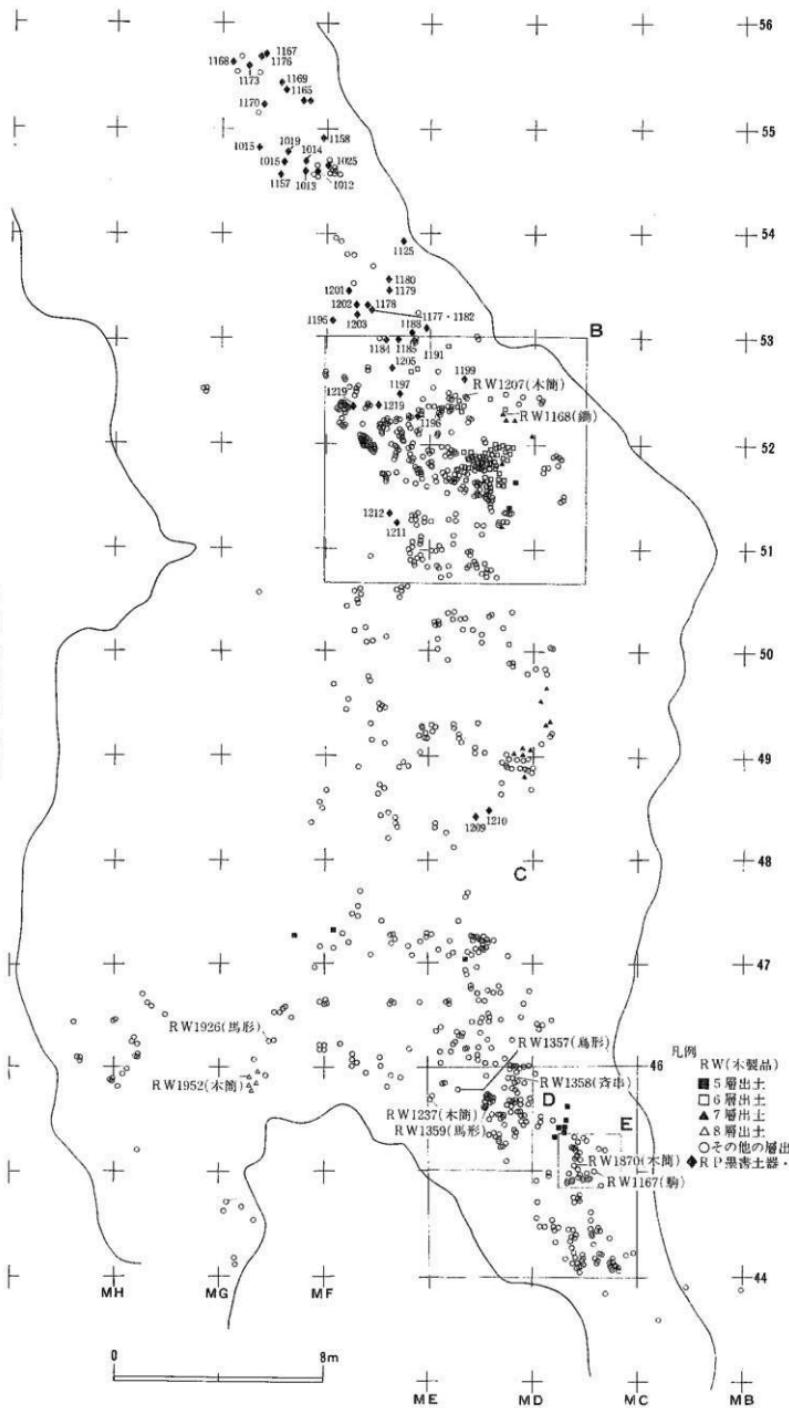
A区北西端のNH70グリッド~NL73グリッド付近に位置する。南西から流れ込んでS L 323の下流で合流している。地形や土層断面図などからはS L 323との境は明確にできなかったが、深さは約1mほどである。

埋土中からは縄文・弥生土器、土師器・須恵器・墨書き土器、木製品、古銭が出土した。

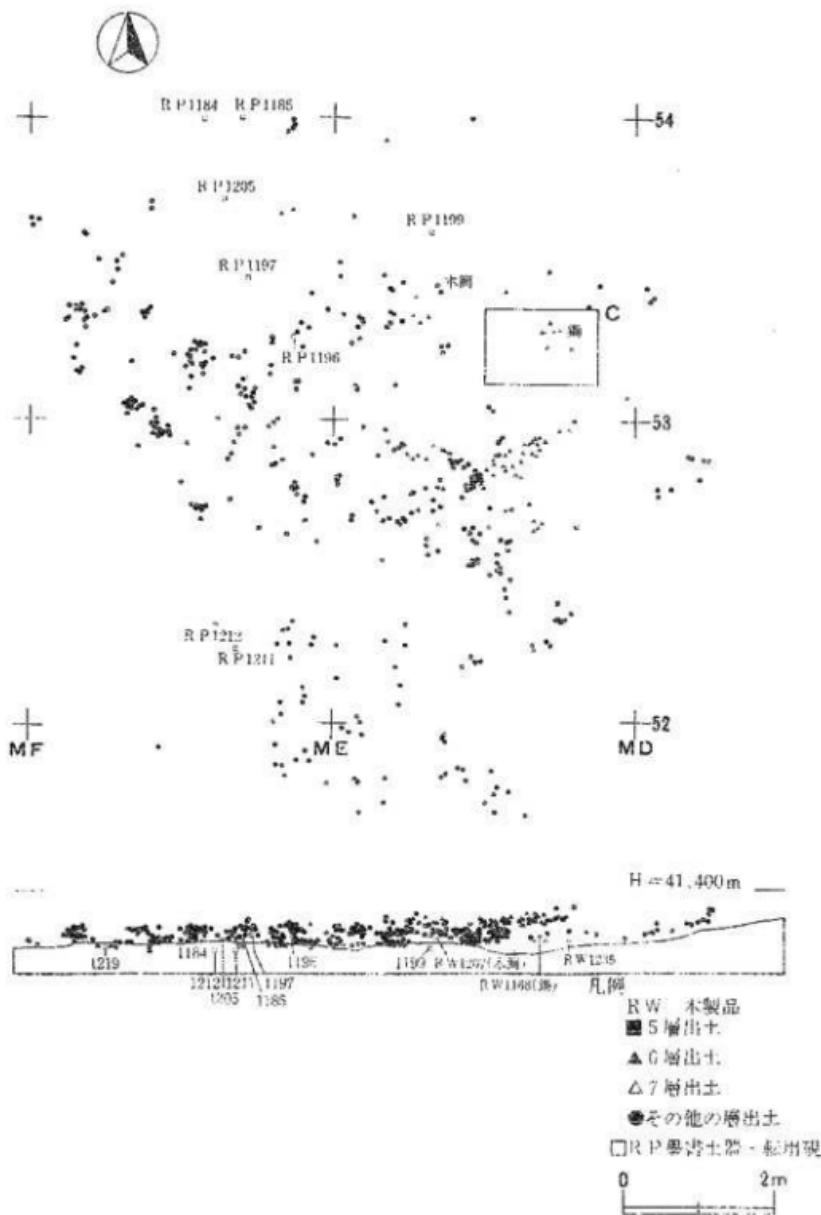
S L 325

A区の中央部西端のND65グリッド~NF67グリッドに位置する。南西から流れ込んで、S L 323の下流で合流している。S L 323との境は明確でない。

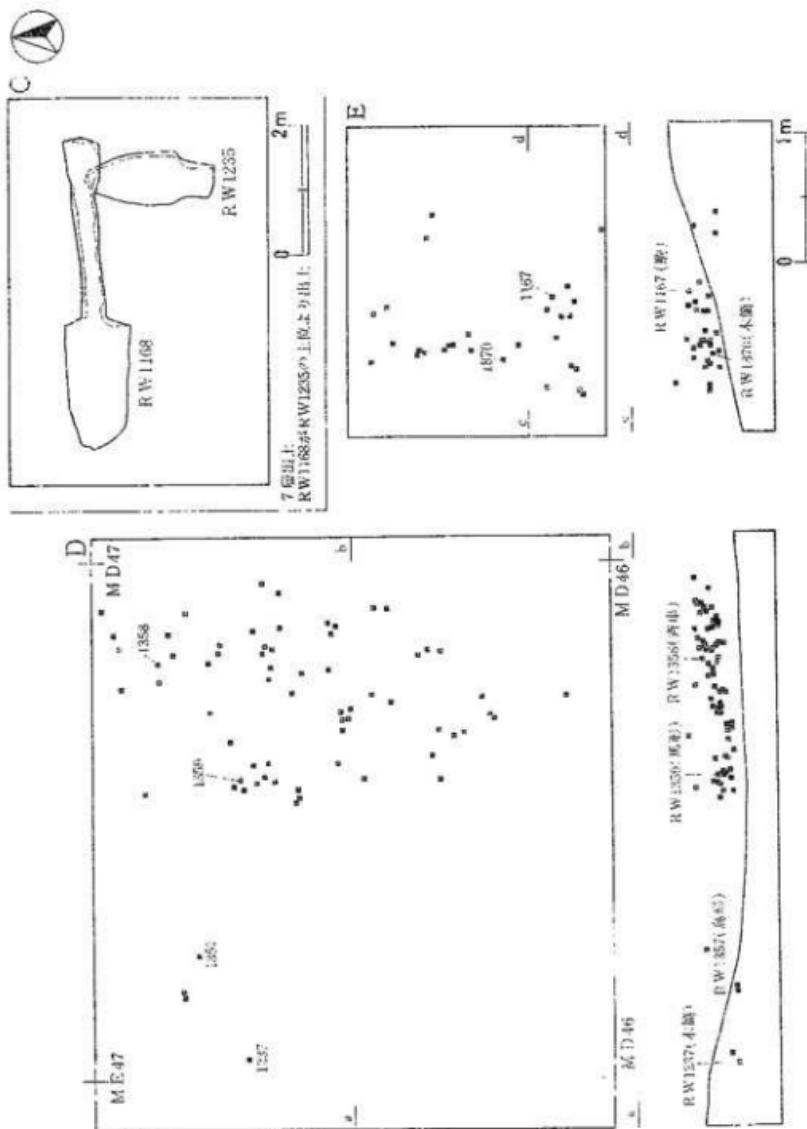
埋土中からは縄文・弥生土器、土師器・須恵器、木製品が出土した。



第48図
旧河川遺物出土状況図-2-
(SL323-C区)



第49図 旧河川遺物出土状況図—3—
(S L 323-C区)(B部分の拡大)



第50図 旧河川遺物出土状況図-4-(SL323-C区-)[C~E部分の拡大]

S L 326

B区中央部のやや西寄りで、D282の北側、MS58グリッド付近に位置する。南西から流れ込んでS L 323にはどなく合流する。規模はMS58グリッド付近で河幅約4mであるが、その境は明確ではない。

埋土中からは縄文・弥生土器、土師器・須恵器がわずかに出土した。

8. 土 坑

SK010 (第51図)

F区のLC14グリッドで検出した。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径48cm×50cm、坑底部径39cm、深さ15cmである。底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。中央部東寄りに径7cm×8cmの落ち込みがあるが、其伴か擾乱かは不明である。

埋土は黒色土の單一層で地山粒子を少量混入する。南側は擾乱を受けている。

遺物は出土しなかった。

SK011 (第51図)

F区のLC20・21グリッドで検出した。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径82cm×85cm、坑底部径60cm×66cm、深さ15~20cmである。底面は小さな起伏があるが、全体的に平坦で、東から西にかけて緩く傾斜する。壁は西側で垂直に立ち上がり、東側では緩い。

埋土は2層に分層した。黒褐色土を主体に地山ブロックを少量混入する。

遺物は出土しなかった。

SK012 (第52図)

F区のLE・LF21グリッドで検出した。南側がSK016と切り合っているため、全体の形態は不明であるが、平面形は梢円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部114cm、坑底部84cm、深さ15~24cmである。底面は全体的に平坦であるが、北東部に最大深部があるため、その方向に緩く傾斜している。南西壁際の落ち込みは擾乱である。壁は南西側がほぼ垂直に立ち上がり、他は緩く立ち上がった後に一旦段をもちながら開口部に移行する。

埋土は2層に分層した。黒褐色土で地山ブロックを多く混入する。

遺物は出土しなかった。

SK013 (第51図)

F区のL122グリッドで検出した。SK018より新しい。平面形は略円形で、遺構の規模は坑口部80cm×85cm、坑底部径46cm×72cm、深さ20~25cmである。底面は中央に向かって緩く傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は黒褐色土の單一層で、径2~7cmの礫を含むが、特に確認面のほぼ中央部に集中する。

遺物は出土しなかった。

SK017 (第51図)

F区のL 122グリッドで検出した。SK018より古い。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径48cm×50cm、坑底部径35cm×36cm、深さ12cmである。底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。埋土は2層に分層した。1層は黒色土、2層は黒褐色土で、下層に径2~5cmの礫が少量混入する。

遺物は出土しなかった。

SK018 (第51図)

F区のL 122グリッドで検出した。SK017より新しく、SK013より古い。平面形は隅丸方形で、遺構の規模は坑口部141cm×214cm、坑底部127cm×179cm、深さ7cm~10cmである。底面は平坦で、壁はかなり緩く立ち上がる。

埋土は黒褐色土の單一層で、径2~3cmの礫を多く混入する。

遺物は出土しなかった。

SK024 (第51図)

D区のL J 44グリッドで検出した。平面形は長椭円形で、遺構の規模は坑口部116cm×235cm、坑底部93cm×206cm、深さ10~17cmである。底面は南東部で緩く起伏しながら、そのまま壁に移行し、北西部は平坦で壁もほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は黒褐色土の單一層で地山ブロックを混入する。中央北壁寄りの柱穴はSA273であり、南壁寄りでも柱穴1基を検出したが、どちらも本遺構より古いものである。

遺物は出土しなかった。

SK025 (第51図、図版52)

D区のL I-L J 46グリッドで検出した。平面形は略円形で、遺構の規模は坑口部径65cm×72cm、坑底部径37cm×44cm、深さ22cmである。底面は平坦で、壁は北東側ではほぼ垂直に立ち上がり、南東側ではやや緩く立ち上がる。

埋土は2層に分層した。黒褐色土が主体で、地山粒子及び焼土粒を少量混入する。

遺物は繩文・弥生土器がやや、フレイクが僅少出土した。

SK032 (第35図)

D区のL K-L L 45グリッドで検出した。SE031に切られているため全容は不明であるが、平面形は椭円形で、遺構の規模は坑口部62cm、坑底部46cm、深さ7cm~11cmである。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩い。

埋土は黒色土の單一層で下位ににぶい黄橙色土のブロックが混入している。

遺物は出土しなかった。

SK036 (第53図)

C区のMC・MD55グリッドで検出した。平面形は不整形で、遺構の規模は坑口部103cm×164cm、坑底部87cm×148cm、深さ17cmである。底面は緩い起伏があるが、全体的には平坦である。また、5基のビット状の落ち込みがあるが、共伴か擾乱かは不明である。

埋土は9層に分層した。9層の灰白色粒子を除いて黒褐色土・黒色土を主体とし、炭化物、地山粒を微量混入する。6～9層は北東部寄りの埋土であるが、ブロック状を呈することから人為的堆積がうかがえる。1～5層は自然堆積であろう。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクがやや出土した。

SK037 (第53図)

C区のMC54・55グリッドで検出した。本遺構の南西部に位置するSK082を廃して構築されている。平面形は不整橢円形で、遺構の規模は坑口部132cm×178cm、坑底部122cm×172cm、深さ20cm～29cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北東部に不整形の落ち込みと浅いビット状の落ち込みがあるが、共伴か擾乱かは不明である。

埋土は7層に分層した。黒褐色土・黒色土を主体とし、炭化物・地山ブロックを混入する自然堆積を呈する。

遺物は縄文・弥生土器がやや、フレイクが少量、土師器・須恵器が少量出土した。

SK040 (第53図)

D区のLT50・51で検出した。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径88cm、坑底部径79cm、深さ15cm～23cmである。底面は中央部に向かって緩く傾斜し、壁は南東側が垂直に立ち上がり、他は緩く立ち上がる。

埋土はすべて黒色土であるが、地山ブロックの混入量が下層ほど多くなることから、3層に分層した。また、小蝶を少量混入する。

遺物は出土しなかった。

SK043 (第54図)

D区のLR55グリッドで検出した。平面形は不整形で、遺構の規模は坑口部58cm×118cm、坑底部65cm×110cm、深さ16cm～19cmである。底面はほぼ平坦であるが、南東部で円形に緩く凹むところがある。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は6層に分層した。1・2層は炭化物を混入する黒色土、3～6層は地山ブロックを主体とする黒色土で自然堆積と思われる。

遺物は縄文・弥生土器が多く、フレイクがやや出土した。

SK059 (第55図、図版52)

D区のMB47グリッドで検出した。ラスコ状七坑である。遺構の規模は坑口部90cm×100

cm、頸部47×59cm、坑底部60cm×70cm、深さ60cmである。底面は中央部に向かって緩く傾斜し、礫層に達している。頸部の張り出しあはそれほど顯著ではなく、特に南西部は崩壊が著しい。埋土は3層に分層した。2層を除いて黒褐色土が主体で、1層は粘性・しまり・混入物からさらに2層に細分可能である。全体的に炭化物を微量混入するが、3層はその他に地山粒、小礫を混入し、上器片も含む。

遺物は縄文・弥生土器がやや、フレイクが僅少、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K064 (第55図、図版53)

B区のMK51・52グリッドで検出した。平面形は梢円形で、遺構の規模は坑口部152cm×182cm、坑底部90cm×132cm、深さ26cmである。底面は緩い起伏にとみ、そのまま壁に移行する。したがって壁はかなり緩い立ち上がりを呈する。

埋土は4層に分層した。4層の黒褐色土を除いて他は黒色土である。黒色土は混入物によりさらに1～3層に細分できる。1層は混入物がほとんどなく、2層は地山ブロックが多い、3層は地山ブロックが少量混入する。一見自然堆積を呈するが、混入物、遺物の出土状況から人為的堆積と思われる。1・4層は自然堆積であろう。

遺物は土師器片が3層上面および3層中にて一括出土している。縄文・弥生土器が少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K066 (第55図、図版54)

B区のMK・ML51グリッドで検出した。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径130cm×132cm、坑底部径136cm×140cm、深さ22cm×30cmである。底面は平坦で中央から壁に向かって緩く傾斜する。壁は開口部に向かってオーバーハングする。

埋土は7層に分層した。5～7層は壁の崩落土と考えられる。1～4層は黒色土であるが、混入物によりさらに細分できる。2・4層は地山粒の混入が多く、1・5～7層を除く2～4層は人為的堆積と思われる。

遺物は2・3層から5点の土器片を番号を付して取り上げた。

S K082 (第53図)

C区のMC54グリッドで検出した。南部が水路により、北部がSK037により切られているため全容は不明であるが、平面形は梢円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部62cm×85cm、坑底部25cm×25cm、深さ19cm～23cmである。底面は北東部に段をもち、壁は緩く立ち上がると思われる。

埋土は5層に分層した。黒色土を主体とし、地山ブロックを若干混入する。9・13層はやや砂質を帯び径1.5cm～2cmの砂利を混入する。全体的に自然堆積を呈する。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

SK083 (第53図)

C区のMC54グリッドで検出した。SK037と切り合っているが新旧関係は不明である。平面形は橢円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部110cm、坑底部95cm、深さ7cm×15cmである。底面はやや起伏があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は不明である。

遺物は縄文・弥生土器が僅少、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

SK085 (第55図、図版54)

D区のLL51グリッドで検出した。SK1120の南東隅部に位置し、本遺構が新しい。平面形は橢円形で、遺構の規模は坑口部56cm×73cm、坑底部44cm×65cm、深さ13cm～16cmである。底面は緩い起伏があり、壁は北東部が垂直に立ち上がり、他は緩く立ち上がる。

埋土は2層に分層した。1層は黒色土で骨片、炭化物、焼土粒を混入し、特に炭化物が多い。2層は骨片を多量に混入する黒色土で、炭化物を若干混入する。本遺構は土坑墓と考えられるが、埋土の状況および壁・底面が焼けていないことから、他で火葬された後、本遺構に埋めたものと考えられる。

遺物は縄文・弥生土器がやや、フレイクがやや出土した。

SK115 (第56図)

C区のMD57グリッドで検出した。SD079より新しい。平面形は橢円形を呈し、遺構の規模は坑口部75cm×93cm、坑底部47cm×80cm、深さ18cm～39cmである。底面は平坦であるが、中央やや北西寄りでピット状に落ち込む。壁は北西側で直線的に立ち上がり、南東側では一旦緩く立ち上がってから垂直に開口部へ向かう。

埋土は10層に分層した。内8～10層は本遺構より古いピットの埋土であるため、1～7層が本遺構の埋土である。黒褐色土・地山土を主体とし、下層ほど地山粒・地山ブロックの混入が多くなる。

遺物は1・2層より上器片が出土した。縄文・弥生土器がやや、フレイクが少量、土師器・須恵器が少量出土した。

SK118 (第33図、図版7)

D区のLL50グリッドで検出した。西側が南北に走るSD119により切られているが、平面形は不整橢円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部115cm×150cm、坑底部80cm×125cm、深さ25cmである。底面は平坦で、壁は緩い起伏をもちながら開口部に向かって開き、断面形が逆台形を呈する。

埋土は5層に分層した。黒色土を主体とし、しまりがあり粘性が強い埋土である。確認面の1層中には炭化物・焼土粒を多く混入する。地山粒は全体的に混入し、焼土粒は3層にも若干

混入する。遺物は1・2層中から出土し、本遺構の東部に集中する。

・遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが少量出土した。

S K123 (第56図)

D区のL S46グリッドで検出した。平面形は略円形で、東側は擾乱を受けている。遺構の規模は坑口部97cm×122cm、坑底部77cm×83cm、深さ11cm～17cmである。底面はやや起伏があり、中央部に向かって緩く傾斜する。壁は東西ではほぼ垂直に立ち上がり、南北で緩く立ち上がる。

埋土は東側の擾乱も含めて5層に分層した。本遺構の埋土は3層までである。1・2層は黒色土で、地山粒・炭化物を少量混入し、3層は地山ブロックを多量に混入する。埋土の堆積状況から自然堆積を疑すると考えられる。

遺物は縄文・弥生土器がやや、フレイクが僅少、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K124 (第56図、図版3-55)

D区のL R47・48グリッドで検出した。平面形は略円形で、遺構の規模は坑口部径104cm×110cm、坑底部径87cm×95cm、深さ30cm～39cmである。底面は中央からやや南東寄りにかけて起伏がある。その周辺から壁際にかけては平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は10層に分層した。しかし、1～4層は地山ブロックを多量に混入する黒色土で、その断面観察から本遺構より新しい別遺構の可能性が高い。したがって本遺構の埋土は5～10層が相当する。全て黒色土であるが、混入物により細分できた。6・10層が地山ブロックを多量に混入し、他は炭化物を少量混入する。一部最下層となる9層にはベンガラが微量混入されていた。

遺物は土器片が7層に集中して出土している。縄文・弥生土器が少量、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K128 (第58図)

D区のL S58グリッドで検出した。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径90cm、坑底部径65cm、深さ15cmである。底面は起伏があり、壁は緩く立ち上がる。南西壁・東壁直下にそれぞれ往25cm、径10cm、深さ11cmのピット状の落ち込みを検出したが、本遺構に伴うものと考える。埋土は7層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とし、炭化物・地山粒を混入するが、1層は特に炭化物が多く、また1・5・7層は地山粒の混入が多い。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが少量出土した。

S K132 (第58図、図版6-38・56・57)

D区のL S56グリッドで検出した。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径80cm、坑底部径75cm、深さ46cmである。底面は平坦で碎混りの砂層に達している。壁は垂直に立ち上がり、断面形が円筒状を呈する。

埋土は6層に分層した。黒褐色土を主体とし地山粒を混入するが、下層に地山粒を多く混入する。また、1・2層は粘性が弱いのに対し、3～6層は粘性が強く、水分を多く含む。底面から15cmの位置から確認面に向かってアーチ状にわずかに空洞部分がある。すなわち1・2層と3～5層間である。

遺物は下層から出土し、特に4層以下には5cm～10cm大の礫を含んでいる。縄文・弥生土器が僅少出土した。

SK136 (第56図)

D区のL P 55グリッドで検出した。SK137が古い。平面形は橢円形で、遺構の規模は、坑口部100cm×133cm、坑底部78cm×111cm、深さ20cm～28cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。中央やや南東寄りに径25cm×33cmの略円形状の落ち込みがあり、深さ8cm～16cmを測る。北東側はこれより新しいと思われるビットによって痕されている。

埋土は9層に分層した。3・9層は黑色土で、2・4～8層は地山ブロックを混入する黒色土・黄褐色土である。形態および埋土の堆積状況から本遺構は掘立柱廬と考えられるが、これに伴う他の柱穴は不明である。調査時の遺構名を優先させSKと付しておく。

遺物は出土しなかった。

SK137 (第56図)

D区のL P 54・55グリッドで検出した。SK136・S A 227が新しい。平面形は橢円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部79cm、坑底部59cm、深さ14cm～22cmである。底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。

埋土は4層に分層した。黑色土であるが、混入物によって細分ができる、2層は地山ブロックが少量、3層は地山粒が多量に混入する。

遺物は縄文・弥生土器が僅少、フレイクが僅少、石製品が僅少出土した。

SK138 (第57図、図版57・58)

D区のL R 53グリッドで検出した。平面形は略円形で、遺構の規模は坑口部径130cm×140cm、坑底部径95cm×105cm、深さ80cmである。底面はほぼ平坦で砂層に達している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は円筒形を呈する。

埋土は22層に分層した。黑色土を主体とし、黒色灰・炭化物・地山粒を混入する。3・5・6・8・9・10層は黒色灰層で、特に8・9層は層厚があり、焼土粒を少量混入する。黒色灰層以下は地山粒の混入が多く、全体的にしまりに欠ける。埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。

遺物は出土しなかった。

SK145 (第59図)

D区のL P・L Q56グリッドで検出した。平面形は梢円形で、遺構の規模は坑口部143cm×117cm、坑底部105cm×76cm、深さ37cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。断面形はタライ状を呈する。

埋土は10層に分層した。黒褐色土を主体とし、炭化物・地山粒を混入するが、特に2・3・4・6・9層は地山粒の混入が多く、遺物は3層に含まれている。埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。

遺物は繩文・弥生土器が少量、フレイクが少量、土師器が出土した。

S K146 (第56図)

D区のL P55グリッドで検出した。平面形は梢円形で、遺構の規模は坑口部70cm×82cm、坑底部58cm、深さ22cmである。底面は平坦で、北東・北西側に径15~18cmのピットがある。しかし、本遺構に伴うかどうかは不明である。壁は南東側はほぼ垂直に立ち上がり、北西側は一括垂直に立ち上がった後、緩く開口部に向う。

埋土は7層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とし、2・4・6層には地山粒を多量に混入し、1~5層には炭化物が少量混入する。

遺物は繩文・弥生土器が僅少、フレイクが僅少出土した。

S K147 (第58図)

D区のL S58グリッドで検出した。S K164が古い。平面形は不整形を呈し、遺構の規模は坑口部径63cm×120cm、坑底部径40cm×92cm、深さ14cmである。底面は起伏が著しく、壁はかたたり緩く立ち上がる。

埋土(±2層)に分層される。黒色土を主体とし、炭化物、地山粒を少量混入する。2層は地山ブロックと黒色土の混合土である。

遺物は出土しなかった。

S K148 (第60図)

D区のL S59グリッドで検出した。平面形は略円形で、遺構の規模は坑口部径54cm、坑底部49cm、深さ24cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は3層に分層した。黒色土を主体とし、地山粒を少量混入し、1層はベンガラ粒を微量混入する。

遺物は繩文・弥生土器が少量、フレイクが少量出土した。

S K156 (第53図、巻首図版7、図版58-59)

D区のMA49グリッドで検出したフ拉斯コ状土坑である。遺構の規模は坑口部67cm×78cm、頸部58cm×66cm、坑底部58cm×66cm、深さ61cmである。最大幅は底面から14cm上にあり68cm×79cmを測る。底面は平坦で、砂層を10cmほど掘り込んでいる。

埋土は8層に分層した。3・5層は壁の崩落土、1・2・7層は黒褐色土、4・6・8層は黑色土である。7・8層は地山粒を混入するが、他は地山ブロックを多く混入する。埋土は上面(1・2層)がマウンド状に盛り上がる堆積を呈し、1層と確認面までの埋土との間に空洞が見られた。下層の7層からは杭状の木材が1点出土し、また最下層の8層からは種子が多く出土した。

遺物は繩文・弥生土器がやや、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K162 (第38図、図版38)

D区のL R・L S 57グリッドで検出した。南西部でピット状の落ち込みと切り合うが、本遺構が新しい。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径60cm、坑底部径42cm、深さ43cmである。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がり、断面形は円錐形を呈する。

埋土はピットの埋土を含めて7層に分層した。本遺構は4層に細分され、黒褐色土を主体とし、水分が多く粘性が強い。地山粒は上層ほど多く混入される。ピットの埋土は褐色土を主体とし、炭化物を少量混入する。

遺物は出土しなかった。

S K164 (第58図)

D区のL S 59グリッドで検出した。SK147が新しい。平面形は略円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部径65cm×72cm、坑底部径40cm、深さ22cmである。底面は起伏が著しく、壁は緩く立ち上がる。

埋土は5層に分層した。黒色土を主体とし、炭化物・地山粒を少量混入する。最下層の4層には地山ブロックを多く混入する。

遺物は繩文・弥生土器が少量、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K179 (第61図、図版78)

D区のL R 54・55で検出した。西側をS X149により切られているため、全体の形態は不明であるが、橢円形を呈すると思われる。遺構の規模は現存部分で坑口部154cm×69cm、坑底部147cm×65cm、深さ17cmである。底面は緩い起伏があり、特に南西部では若干凹む。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は8層に分層した。黒色土・暗褐色土を主体とし、炭化物・地山粒・地山ブロックを多く混入する。

遺物は繩文・弥生土器がやや、フレイクが少量出土した。

S K185 (第61図)

D区のL R 54グリッドで検出した。北東側をS X146により切られているため、全体の形態は不明であるが、橢円形を呈すると思われる。遺構の規模は現存部分で、坑口部径40cm×56cm、坑底部径32cm×46cm、深さ19cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

埋土は7層に分層した。黒色土を主体とし、炭化物・地山粒・地山ブロックを混入する。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが僅少出土した。

S K186 (第60図)

D区のL R・L S 60グリッドで検出した。調査区の北東端に位置し、一部調査区外になつてゐるため、その全容は不明であるが、東西に長軸をもつ橢円形を呈すると思われる。現存する遺構の規模は坑口部67cm×54cm、坑底部48cm×35cm、深さ23cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、開口部付近でやや開く。

埋土は3層に分層した。礫を多く含む黒褐色土を主体とし、1層はしまりがなく炭化物を多量に混入する。2層以下は地山粒・地山ブロックを混入するが、層厚のある最下層は地山ブロックおよび5cm～15cm大の礫が多い。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが少量出土した。

S K187 (第62図)

D区のL R 59グリッドで検出した。東側のS K214の大部分と南西側のS K213を切つている。平面形は方形で、遺構の規模は坑口部96cm×110cm、坑底部82cm×91cm、深さ15cm～27cmである。底面はかなり起伏があり、中央南寄りでは底面から13cm程盛り上がっている。壁は垂直に立ち上がる。

埋土は5層に分層した。1・3・5層が黒褐色土、4層が黒色土、2層がにじい黄褐色土であり、各々地山粒がブロック状あるいはシモフリ状に混入することで細分した。埋土の堆積状況から人為的堆積が強いと思われる。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクがやや、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K188 (第62図、図版59-60)

D区のL T54-55グリッドで検出した。フラスコ状を呈し、径23cm～34cm、深さ13cm～35cmの4基のピットを伴う。本遺構とピット3・4は同一軸線上にあり、ピット2・3、ピット1・4は本遺構と同一主軸をとる。またピット1・2とピット3・4の軸線方向は4°ずれている。遺構の規模は坑口部径90cm×97cm、頸部径58cm×59cm、坑底部径52cm×60cm、深さ55cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がった後、頸部から開口部にかけて緩く立ち上がる。

堆土は10層に分層した。9・10層は崩落土、3～6層は黒褐色土、7・8層が黒色上で地山粒を混入し、粘性が強く下層ほど水分がある。3層上面でマウンド状の盛り上がりを呈し、確認面までの1・2層との間に空洞がある。堆積状況から1・2層は自然堆積、3～8層は人為的堆積と考えられる。

遺物は縄文・弥生土器がやや、フレイクがやや、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K189 (第58図)

D区のL S・L T60グリッドで検出した。平面形は不整橢円形で、遺構の規模は坑口部110cm×80cm、坑底部90cm×45cm、深さ15cm～22cmである。底面は緩い起伏があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は6層に分層した。黒色土を主体とする。南東側では炭化物・地山粒を混入し、北西側では地山粒のみ混入する。最下層のにぶい黄褐色土は黒褐色土粒を多量に混入する点で違いはないが、別遺構の堆上の可能性もある。

遺物は繩文・弥生土器が少量出土した。

S K193 (第63図、図版61)

D区のL S51グリッドで検出した。フラスコ状を呈し、遺構の規模は坑口部径78cm×82cm、頸部径66cm、坑底部径75cm×87cm、深さ66cmである。底面は平坦である。

埋土は8層に分層した。1～4層は黒褐色土、5～8層は黑色土、1・2層に炭化物が少量混入する。地山粒および少疊は各層に混入され、3・4・6層には黑色灰を含む。一見自然堆積に見えるが、混入物等により人為的な堆積を呈すると考えられる。

遺物は繩文・弥生土器が少量、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K194 (第58図)

D区のL T・MA57・58グリッドで検出した。「コ」の字を呈するS X133により大部分が切られているため全容は不明であるが、現存する底面形態から橢円形を呈すると考えられる。遺構の規模は坑口部は不明であるが、坑底部50cm×155cm、深さ28cmである。底面は平坦で、壁は開口部に向かって直線的に立ち上がり、断面形は指鉗形を呈する。

埋土は4層に分層した。黒色土を主体とし、炭化物・地山粒・土器片を混入する。層厚のある上層はしまりはあるが、下層はしまりに欠ける。埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。なお最下層の5層はにぶい黄褐色土で崩落土であろう。

遺物は繩文・弥生土器がやや、フレイクが僅少、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K198 (第62図、図版62)

D区のL M52グリッドで検出した。南東隅部はSD169により切られている。平面形は隅丸方形で、遺構の規模は坑口部95cm×98cm、坑底部81cm×82cm、深さ11cm～15cmである。底面はやや起伏があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北壁中央直下および底面西側でビットを検出したが、埋土状況から本遺構より古いと判断した。

埋土は底面西側のビットを含めて5層に分層した。本遺構の埋土は1～3層までであるが、埋土の状況から1層が柱模で2・3層は掘り方の埋土と考えられる。ビットの埋土は黒色土であるが、4層はしまりがあり地山粒を多く混入し、5層はしまりがなく地山粒の混入も4層に比べて少ない。

本遺構は掘立柱跡と考えられるが、これに伴う他の柱穴は不明である。調査時の遺構名を優先させてSKと付しておく。

遺物はフライクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

SK200 (第62図)

D区のLQ49グリッドで検出した。平面形は略円形で、遺構の規模は坑口部径108cm×118cm、坑底部径100cm、深さ26cm～32cmである。底面は緩い起伏があるものの全体的には平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は7層に分層した。3・6・7層は崩落土で、他は黒色土・黒褐色土であるが、いずれも地山粒および黒色土ブロックを混入し、1・5層には炭化物も少量混入する。

本遺構の南東部に近接してSQ237が位置する。確認面でのレベルがほぼ一致するが、本遺構との関連は不明である。

遺物は弥生土器片が主に1層から多く出土し、2層中では3点、5層では1点である。他に、フライクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

SK202 (第65図)

D区のLS53グリッドで検出した。SX133より古い。平面形は橢円形で、遺構の規模は坑口部79cm×93cm、坑底部径42cm、深さ12cm～29cmである。底面は西寄りに位置し平坦である。西壁側はほぼ垂直に立ち上がるが、他はやや段をもつ形で緩く立ち上がる。特に東壁は底面が西に寄っているためかなり緩く立ち上がる。

埋土は4層に分層した。黒褐色土であるが、下層ほど地山粒・地山ブロックの混入が多い。

遺物は1層から縄文・弥生土器が少量、フライクがやや、土師器・須恵器、礫が僅少出土した。

SK211 (第58図、図版62-63)

D区のLS57グリッドで検出した。SX133より新しい。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径60cm、坑底部径52cm、深さ49cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は7層に分層した。黒褐色土を主体とし、地山粒を少量混入するが、1・5層では地山ブロックおよび少砾を混入する。底面から20～30cmのところに空洞部分があり、その直下までの埋土は盛り上がった堆積を呈する。空洞以下の土はいずれも粘性が強く、また4・6層のみしまりがない。本遺構の空洞は、しまりがない下層の堆積土が沈下したためと思われる。

遺物は出土しなかった。

SK212 土坑(第60図)

D区のLS60グリッドで検出した。SK186により南東側を切られているが、平面形は略円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部径38cm×44cm、坑底部径20cm、深さ10cmである。

底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。

埋土は2層に分層した。粘性はあるが、しまりに欠ける黒褐色土を主体とし、地山粒を多量に混入する。

遺物は繩文・弥生土器が僅少出土した。

S K213 (第60図)

D区のL R59グリッドで検出した。SK187の南西隅部に位置し、SK187により切られているため全容は不明であるが、平面形は略円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部径60cm~70cm、坑底部径50cm~57cm、深さ30cmである。底面は緩い起伏があり、壁は垂直に立ち上がる。

埋土は2層に分層した。1層は黑色土で、地山粒・炭化物・土器片を混入し、2層は黑色土・地山ブロックを多量に混入するにぶい黄褐色土である。

遺物は繩文・弥生土器が少量、フレイクが僅少、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K214 (第60図)

D区のL R59グリッドで検出した。SK187の北東隅部に位置し、大部分がSK187により切られているため、わざかに壁の一部を残すものである。したがって全容は不明である。

遺物は出土しなかった。

S K219 (第63図)

D区のL S51グリッドで検出した。フ拉斯コ状を呈し、平面形は梢円形で、遺構の規模は坑口部51cm×62cm、頸部径50cm、坑底部径34cm、深さ50cm、最大幅52cmである。底面は緩い起伏があり全体的に中央に向かって緩傾斜する。

埋土は5層に分層した。1層は黑色土で、他は黒褐色土である。炭化物は1・2層に少量混入、1・2・4層は地山ブロックを多量に混入、3・5層は地山粒を混入する。2・5層には少種を混入する。

遺物は繩文・弥生土器が少量、上師器・須恵器が僅少出土した。

S K225 (第65図)

D区のL T48グリッドで検出した。平面形は梢円形で、遺構の規模は坑口部65cm×122cm、坑底部59cm×108cm、深さ21cm~25cmである。底面は北側から南側へ緩く傾斜しており、全体的には平坦である。北東壁寄りに径15cm×18cm、深さ10cmのビットが1基あるが、本遺構より古いと考えられる。

埋土は5層に分層した。黑色土・黒褐色土を主体とする。5層は崩落土と思われ、地山粒・炭化物を少量混入する2~5層は自然的堆積と考えられるが、1層は層厚があり、しまりもかなり強いことから人為的に埋められた可能性がある。

遺物は繩文・弥生土器がやや、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

S K226 (第32・34図)

D区のLO49グリッドで検出した。SX159により南西部を切られているため全容は不明であるが、平面形は略円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部径120cm、坑底部径100cm、深さ8cm～24cmである。底面は南から北に向かって起伏をもちながら傾斜している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は9層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とし、地山粒・黒色土・黒褐色土粒および地山ブロックを混入し、堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。

遺物は繩文・弥生土器、フレイク、土師器が僅少出土した。

S K235 (第63図)

D区のLR49グリッドで検出した。SX328により南東部を切られているため全容は不明であるが、平面形は稍円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部55cm×77cm、坑底部41cm×68cm、深さ26cm～38cmである。底面は平坦であるが、壁際は勾配をもつ。壁は北西から南西にかけてオーバーハングし、北東から南東にかけては、ほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は13層に分層した。黒褐色土と黄褐色土を主体とするが、後者は崩落土である。地山粒、地山ブロック、灰白色粘土粒を混入する。

遺物は土師器が出土した。

S K236 (第65図)

D区のLR49・50グリッドで検出した。南西隅のピットは本遺構より古い。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径69cm×75cm、坑底部径62cm×65cm、深さ58cmである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南東部では一旦オーバーハングして開口部に移行する。

埋土は9層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とする。1・2・5・8・9層は地山ブロックを多量に混入し、2・4層のみ炭化物が少量混入する。また、南壁際には幅14cm、長さ30cmの礫がほぼ垂直に据えられた状態で検出された。確認面からは10cmほど頂部を露出している。埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。

遺物は繩文・弥生土器が少量、フレイク、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K245 (第66図)

D区のLR51グリッドで検出した。SD244により南半分を切られているため、全容は不明であるが、平面形は円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部径90cm、坑底部径67cm、深さ21cm～25cmである。底面は平机で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は4層に分層した。黒褐色土を主体とする。上層は炭化物を少量混入し、下層は地山粒の混入が多くなる。

遺物は出土しなかった。

SK247 (第65図)

D区のL R・L S 52・53グリッドで検出した。平面形は略円形で、遺構の規模は坑口部径86cm×93cm、坑底部径78cm×84cm、深さ6cm～7cmである。底面は緩い起伏があり、そのまま壁に移行する。

埋土は2層に分層した。1層は黒色土で炭化物、地山粒を少量混入し、2層は黒褐色土で地山ブロックを多量に混入する。

遺物は縄文・弥生土器がやや、フレイクが僅少出土した。

SK249 (第65図)

D区のL S・L T 52グリッドで検出した。南西部分をSD168によって切られているため全容は不明であるが、平面形は梢円形を保すると思われる。遺構の規模は現存部分で坑口部53cm×97cm、坑底部47cm×86cm、深さ8cm～15cmである。底面は北西側で一部平坦面をもつが、大部分は起伏があり、中央部では径40cm×60cmの不整形に落ち込んでいる。壁は垂直に立ち上がる。

埋土は3層に分層した。1・3層が黒色土で地山ブロックの混入が多く、2層は黒褐色土で地山粒を混入する。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが僅少出土した。

SK250 (第57図、図版65・66)

D区のL Q・L R 53グリッドで検出した。フラスコ状を呈し、遺構の規模は坑口部径80cm×90cm、頸部径70cm、坑底部径58cm×80cm、深さ75cmである。底面は緩い起伏があり、部分的に砂層に達している。壁は底面から40cmまで緩くオーバーハングし、開口部に向かって聞く。

埋土は18層に分層した。黒褐色土を主体とし、黒色灰・炭化物・焼土粒・地山粒を混入する。特に7層以下では黒色灰(9・11・13・15層)と黒色灰をシミ状に混入(10・16・18層)する層が多く、また最下層直上の17層は細砂を多量に混入し、全体的にしまりに欠ける。また、1～5層と6層の間にわずかに空洞部分がある。

遺物は縄文・弥生土器がやや、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

SK252 (第63図、図版64・65)

D区のL P 53グリッドで検出した。平面形は円形を呈し、遺構の規模は坑口部径84cm、坑底部径52cm、深さ66cmである。断面形は、上部がやや開く逆台形を呈している。埋土は一括投棄されたと考えられる黒色灰を主体とし、壁が外に開き始める部分に空洞部分が認められる。自然堆積した最下層中よりコブシ大の標1個を検出した。

埋土中に空洞部分が認められる遺構は、他にも8遺構ある。規模はそれぞれ異なるもののおよそ円形プランを呈し、断面形は円錐形ないしビーカー状、もしくはフラスコ状を呈する。

本遺構の空洞部分は、埋土の大半を占める黒色灰の沈下による空洞化と考えられる。しかし、他の8遺構中7遺構は黒色灰を含んでおらず、空洞化の原因は他にあると考えられる。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

S K258 (第66図、図版67)

D区のL L46グリッドで検出した。S X081の南西隅部と切り合っている。S X081の黒色灰は一部床底にみられるほど底レベルで検出しているが、本遺構の黒色灰確認面・確認面直下で検出したことから本遺構が古いと考えられる。平面形は、略円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部62cm、坑底部52cm×58cm、深さ17cm～22cmである。底面は全体的に平坦であるが、北東から南北方向に緩く傾斜している。壁は北東部分ではほぼ垂直に立ち上がるが、他は緩く立ち上がる。

埋土は6層に分層した。1・2・3・5層は黒色土で、4・6層はにぶい黄褐色土である。2層には黒色灰が90%近く混入し、また1層にもシミ状に混入する。埋土の堆積状況から短時間の間に埋められたと考えられる。

遺物は縄文・弥生土器、フレイクが僅少出土した。

S K267 (第67図)

C区のMA53グリッドで検出した。S X230により西側を切られているため全容は不明であるが、平面形は椭円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部122cm×65cm、坑底部110cm×55cm、深さ26cmである。底面はやや起伏をもち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は5層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とし、地山粒・灰白色粘土粒を少量混入する。1・4・5層には炭化物が少量混入する。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイク、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K270 (第68図)

D区のL Q57・58グリッドで検出した。D区の北東端と並走するS D269を切って構築され、一部が調査外にあたるため全容は不明であるが、平面形は不整円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部径115cm、坑底部径100cm、深さ20cm～34cmである。底面は起伏が著しく、壁は開口部に向かって直線的に開きながら立ち上がる。本遺構の北西端・南東端に掘立柱建物跡があり、それより新しい。

埋土は3層に分層した。黒褐色土を主体とし、地山粒・炭化物・焼土粒・地山ブロックを混入する。遺物は各層に含まれ、埋土の堆積状況から短時間に埋められた可能性がある。

本遺構は、S D269のプラン内に位置する。S D269の大部分が調査区外にあるため、その全容は不明であるが、埋土の堆積状況を他の溝状遺構と比較した場合、いわゆるレンズ状堆積はみられず、むしろ「コ」の字を呈するS X084・133・153に類似する。この観点からすれば本遺構

はS D269構築時の一連の作業で形成された可能性がある。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイク、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K280 (第69図)

B区のML55・56グリッドに位置し、II層黒色土上面で検出した。平面形は円形で、遺構の規模は坑口部径165cm、坑底部径175cm、深さ22~35cmを測る。底面は緩い起伏があり、比較的良くしまっている。壁は開口部に向かって立ち上がるが、やや内傾を呈する。

埋土は6層に分層した。黒褐色土を主体とし、地山粒・地山ブロック・土器片・小礫を混入する。下層の3~5層は比較的地山粒の混入が少なく、層厚のある1層は地山粒の混入が多い。土器片・小礫は1~4層に含まれる。埋土の堆積状況から、短時間に埋められた可能性がある。坑口部辺から30cm~50cm離れた四隅に本遺構に伴うと考えられる径15cm~20cm、深さ7cm~14cmのピットを4基検出した。ピット間の距離は130cm~175cmを測り、ピットを結んだ4辺の軸線は4度~7度のズレがあり、全体的に西側に寄った配置を呈している。

遺物は縄文・弥生上器が少量、フレイク、土師器・須恵器が僅少出土した。

S K294 (第54図)

D区のLR55グリッドで検出した。平面形は長橿円形で、遺構の規模は坑口部56cm×109cm、坑底部42cm×101cm、深さ12cm~17cmである。底面は平坦であるが、中央部で緩く凹む。壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東隅部にあるピットは本遺構より古いピットである。

埋土は7層に分層した。4~6層は本遺構より古いピットの埋土と考えられる。したがって1~3・7層が本遺構の埋土で自然堆積を呈する。2層が黒色土で他は黒褐色土を呈し、地山ブロックおよび炭化物を混入する。

遺物は縄文・弥生土器が少量出土した。

S K304 (第70図)

B区のMI45グリッドで検出した。袋状を呈し、遺構の規模は坑口部径55cm×59cm、坑底部径35cm×40cm、深さ39cm、最大幅径70cmである。底面は平坦で砂層に達している。壁は底面から緩く立ち上がった後、開口部に向かって内傾する。最大幅は確認面から底面のはば中間である。

埋土は2層に分層した。黒色土であるが、下層ほど地山粒の混入が多い。炭化物を少量混入し、5cm~20cm大の礫が中位から上位にかけて多量に混入する。埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。

遺物は縄文・弥生土器が僅少出土した。

S K306 (第70図、図版67)

B区のMF45グリッドで検出した。南側隅部にある掘立柱跡に切られている。平面形は北東

から南西に伸びる溝状を呈する。遺構の規模は上面幅34cm~61cm、上面長130cm、底面幅30cm~51cm、底面長120cm、深さ5cm~12cmである。底面は軽い起伏をもしながら、南西から北東に傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は8層に分層した。黒褐色土を主体とし、炭化物、地山粒、地山ブロックを少量混入する。最下層には黒色灰の堆積がみられ、その上層には焼上ブロック・焼土粒を混入する。また本遺構の周辺には焼土粒が散布していた。

遺物は繩文・弥生土器が僅少出土した。

9. 配石遺構

S Q237 (第62図)

S K200の南隣に位置する。5cm~15cmの砾をほぼ長方形に近い形に配している、その規模(±40cm×45cmで、直下および脇に掘り込みは確認できなかった)。

10. 土器埋設遺構

S R023 (第71図、図版68)

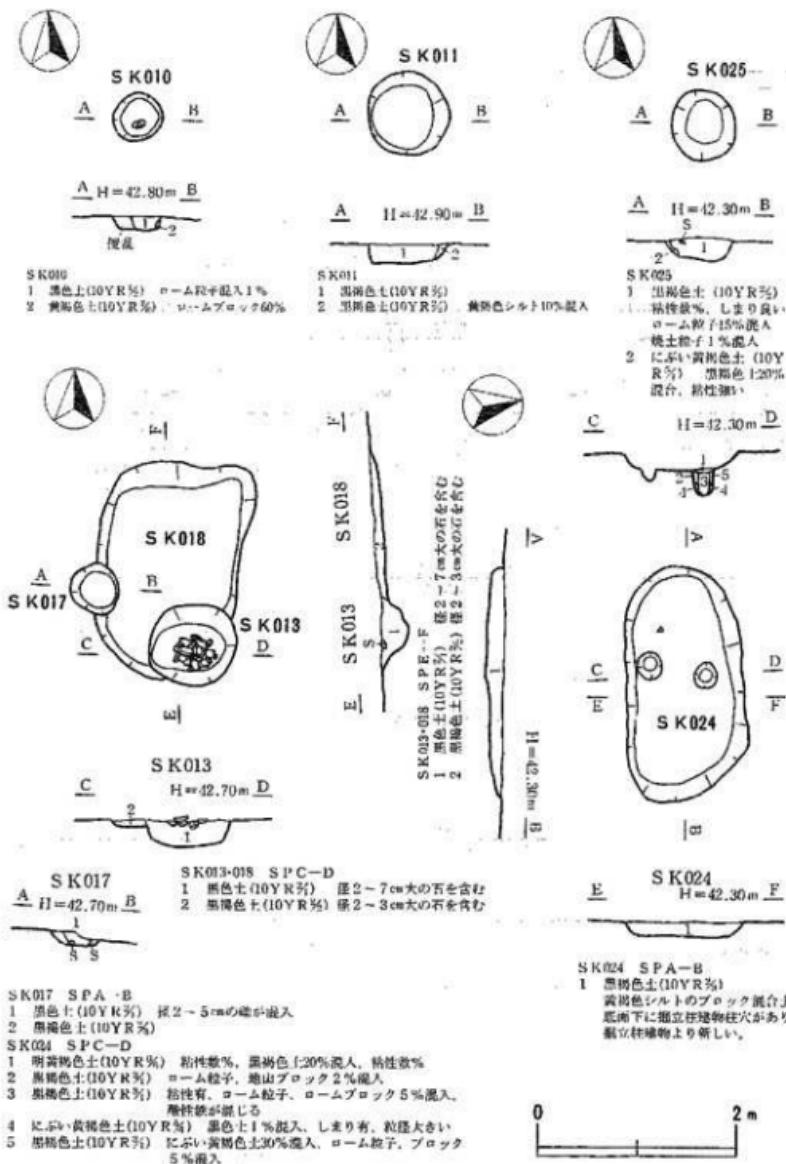
D区のL J 46グリッドに位置する。正立埋設で、土器の上半部は検出した段階で欠失しているが粗製の深鉢と思われる。土器の径は35cmであるが、掘形はそれよりもひと回り大きい長径49cmの円形プランで、断面形は東側が平坦な底面から直に立ち上がり、西側は外に向かって緩く立ち上がり、その深さは15cmである。土器は底面から1cm上にあり、東西は3cm~10cmの隙間があり、その間には黒色・黄褐色土と地山粒子や黒褐色の混合土が充填されている。内部の埋土は黒色土を主体とし、ローム・炭化物粒子が混入する。

S R034 (第71図)

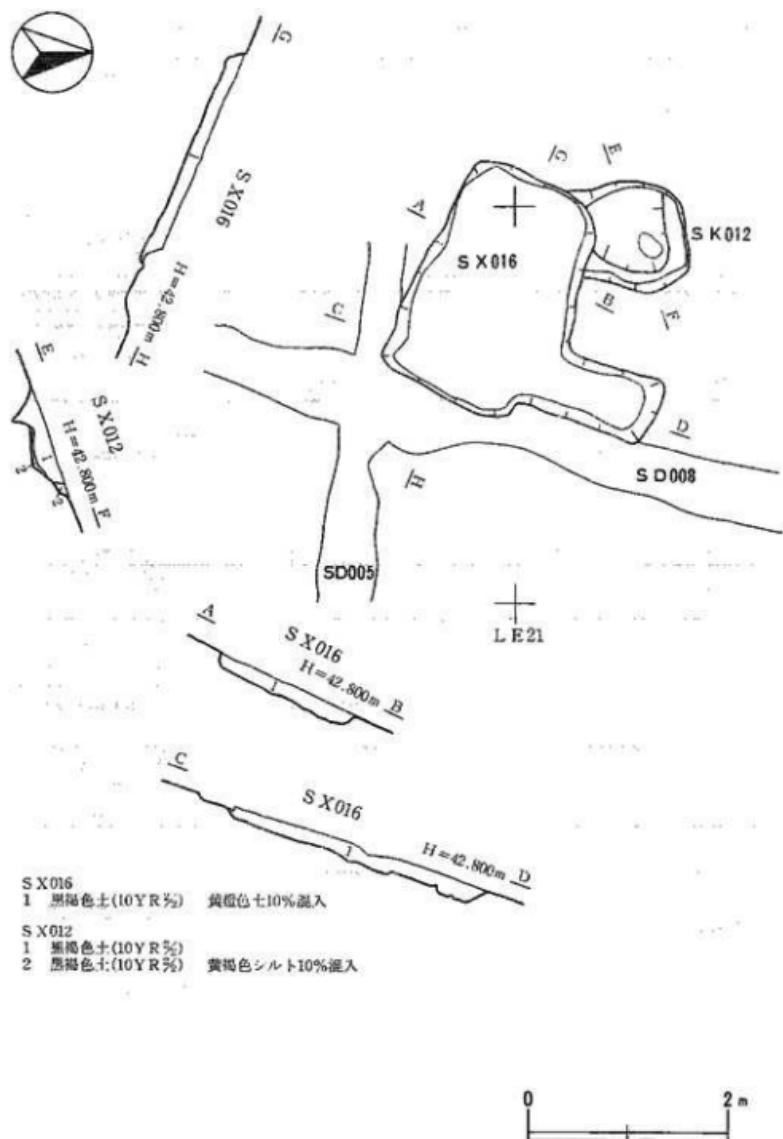
D区のL N 40グリッドに位置する。正立埋設で、土器の上半部は検出した段階で欠失しているが粗製の深鉢形土器と思われる。土器の径は20cmであるが、掘形はそれよりもひと回り大きい径25cmの円形プランで、断面形はやや凹みのある底面から外に向かって緩やかに立ち上がり、その深さは12cmである。土器は底面から2cm上にあり、南側ではほぼ壁に沿い、北側では1cm~3cmの隙間があり、その間には黒色土と黄褐色土ブロックの混合土が充填されている。

S R126 (第71図)

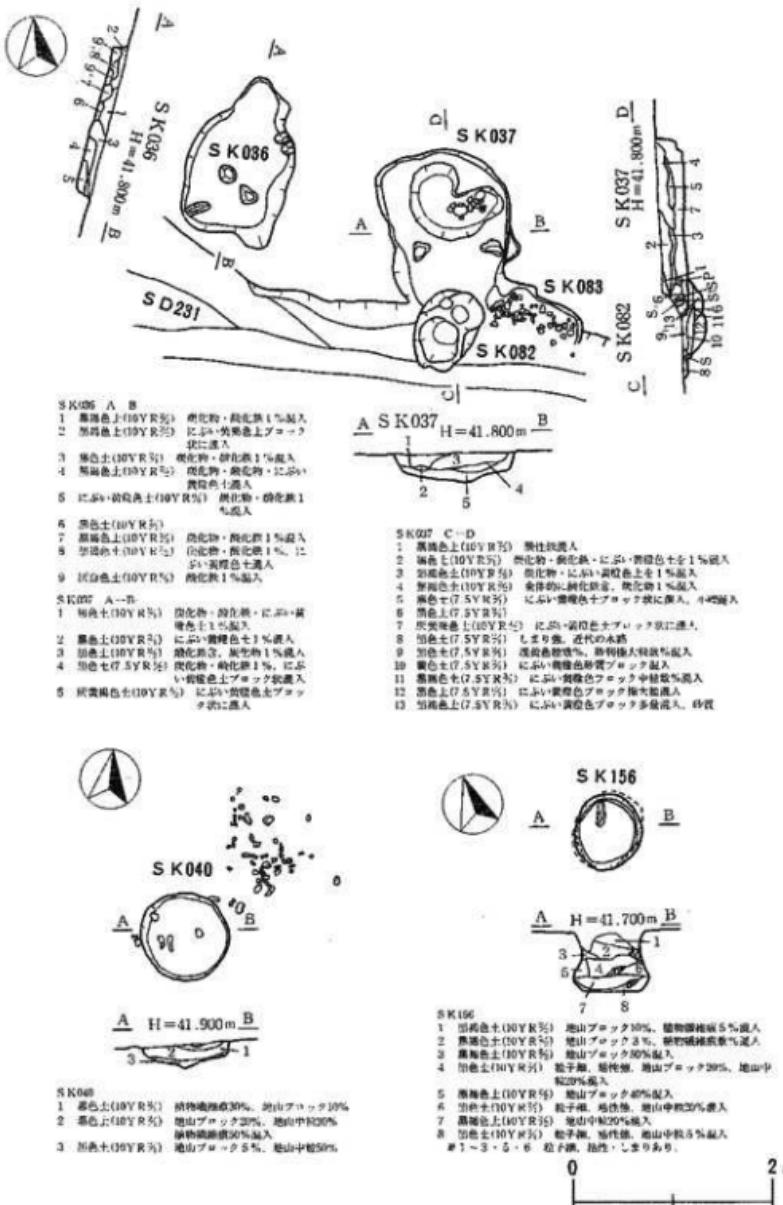
D区のL R 56グリッドに位置する。正立埋設で、土器の上半部は検出した段階で欠失している。土器の径は20cm以上あったと思われるが、掘形はそれよりもふた回りほど大きい径31cm×35cmの楕円形で、断面形は平坦な底面から外に向かって大変緩やかに立ち上がり、深さは15である。土器は底面から4cm上にあり、両壁との間は6cm~12cmの隙間があり、その間には黒



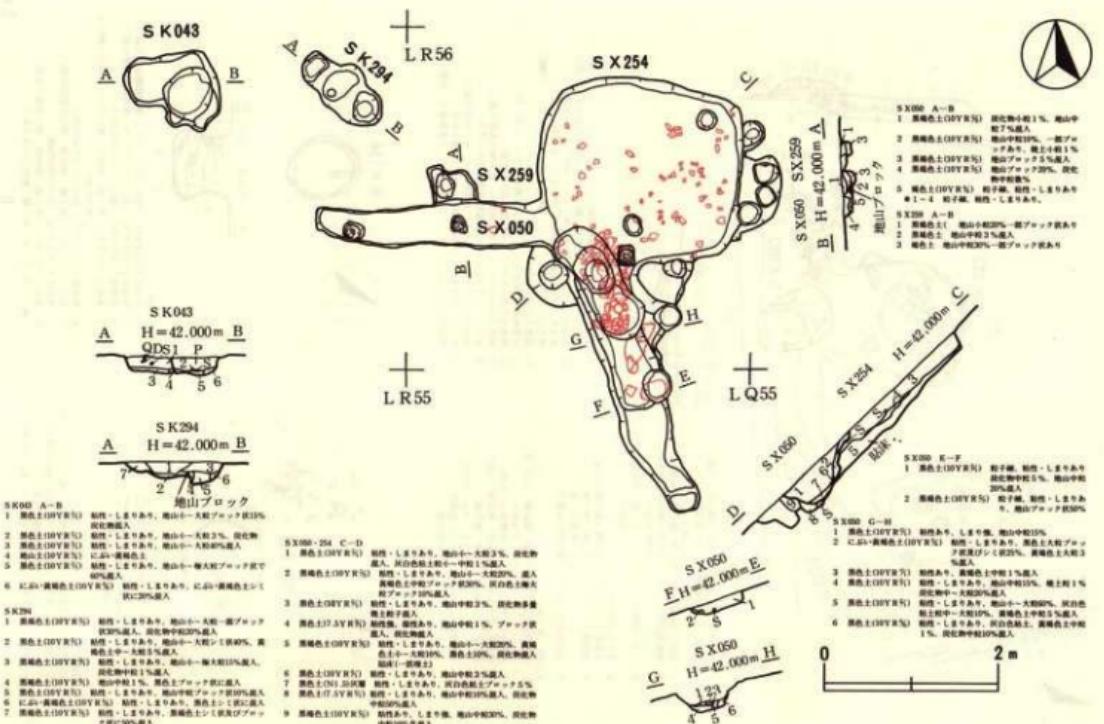
第51図 SK010・011・013・017・018・024・025土坑



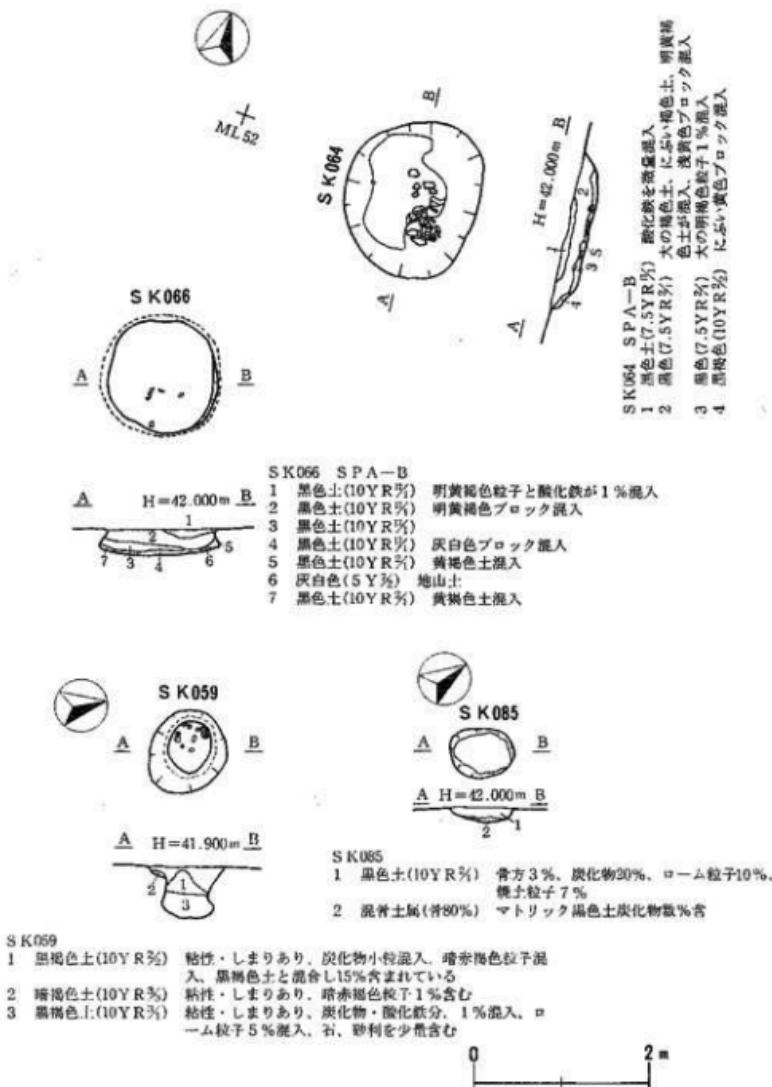
第52図 SK012土抗、SX016その他の造構



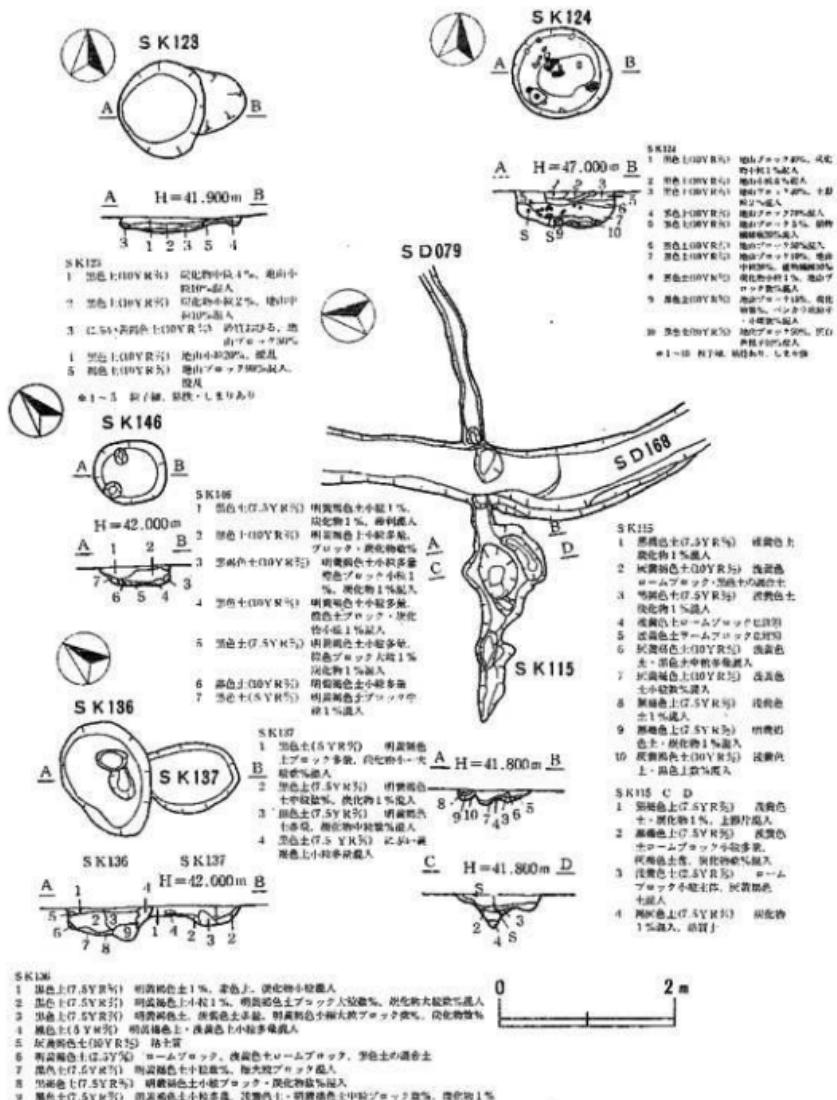
第53図 SK036・037・040・082・083・156土抗



第54図 SK043・294土抗、SX050・254・259その他の遺植

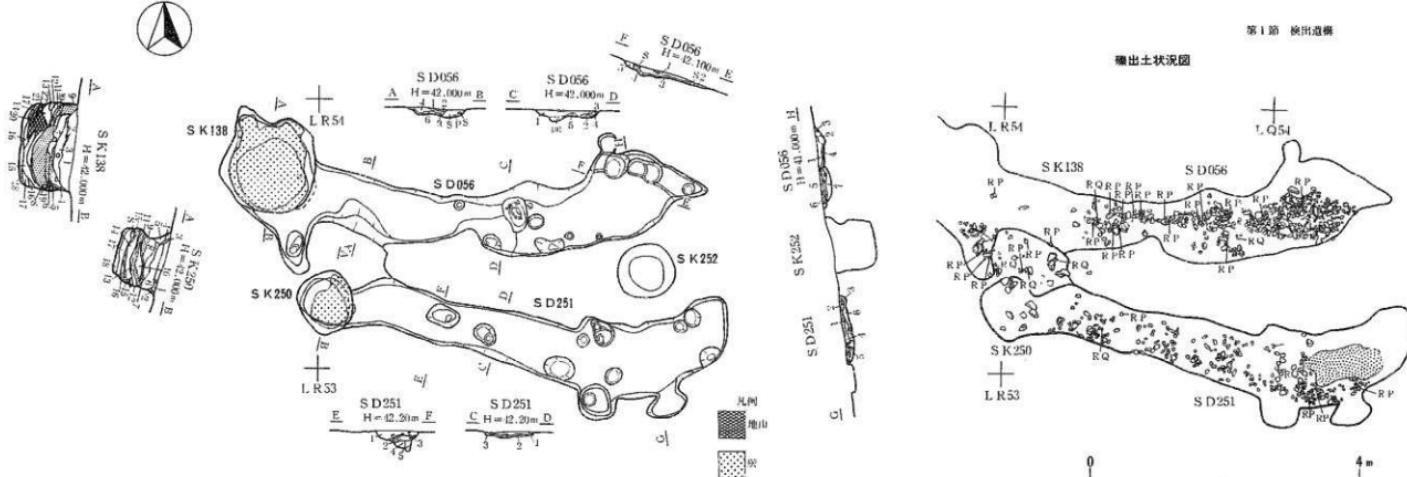


第55図 SK059・064・066・085土抗



第56図 SD079・168溝状遺構、SK115・123・124・136・137・146土抗

発出土状況図



SK138 A-B

1 黒褐色土(10YR 8V) 粘土層。粘性あり。しまりあり。炭化物中-大粒2%、地山中-大粒2%含

2 黄褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性あり。しまりなし。

3 黑褐色土(10YR 4V) 粘子層。粘性あり。地山中-大粒2%、地山中-中粒4%、断面下部

4 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性あり。しまりあり。地山中-中粒2%含

5 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性あり。しまりあり。地山中-中粒2%含

6 黑褐色土(10YR 5V) 粘性あり。しまりなし。水分多量。地山中-中粒2%含

7 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性あり。しまりあり。地山中-中粒2%含

8 黑褐色土(10YR 5V) 粘性あり。しまりなし。地山中-中粒2%含

9 黑褐色土(10YR 5V) 粘性あり。しまりなし。地山中-中粒2%含

10 黑褐色土(10YR 5V) 粘性あり。しまりなし。水分多量。地山中-中粒2%含

11 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性あり。しまりあり。地山中-中粒2%含

12 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性あり。しまりあり。地山中-中粒2%含

13 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性中。しまりあり。地山中-中粒2%含

14 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性中。しまりあり。地山中-中粒2%含

15 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性中。地山中-中粒2%含

16 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性中。しまりなし。地山中-中粒2%含

17 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性中。しまりなし。地山中-中粒2%含

18 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性中。しまりなし。地山中-中粒2%含

19 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性中。しまりなし。地山中-中粒2%含

20 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性中。しまりなし。地山中-中粒2%含

21 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性中。しまりなし。水分多

22 にぶい 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性中。しまりあり。地下水貯留層

SD056 F-E

1 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、炭化物混入

2 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、炭化物混入

3 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、炭化物混入

4 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、炭化物混入

5 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、一部ブロック状に混入。粗砂含

5%含

SK250 A-B

1 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山小-中粒2%含

2 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山小-中粒2%含

3 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

4 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

5 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

6 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

7 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

8 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

9 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

10 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

11 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

12 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

13 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

14 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

15 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

16 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

17 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

18 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

19 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

20 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

21 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

22 にぶい 黑褐色土(10YR 5V) 粘子層。粘性。しまりあり。地山中-中粒2%含

SD056 G-H

1 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、ブロック状5%含

2 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、地山中-中粒5%含

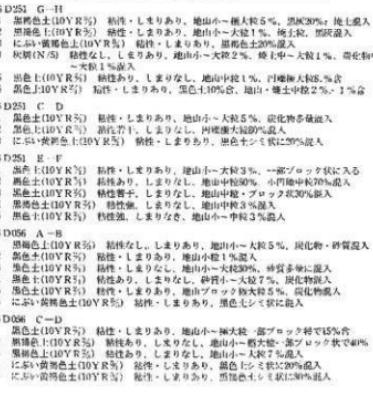
3 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、地山中-中粒5%含

4 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、地山中-中粒5%含

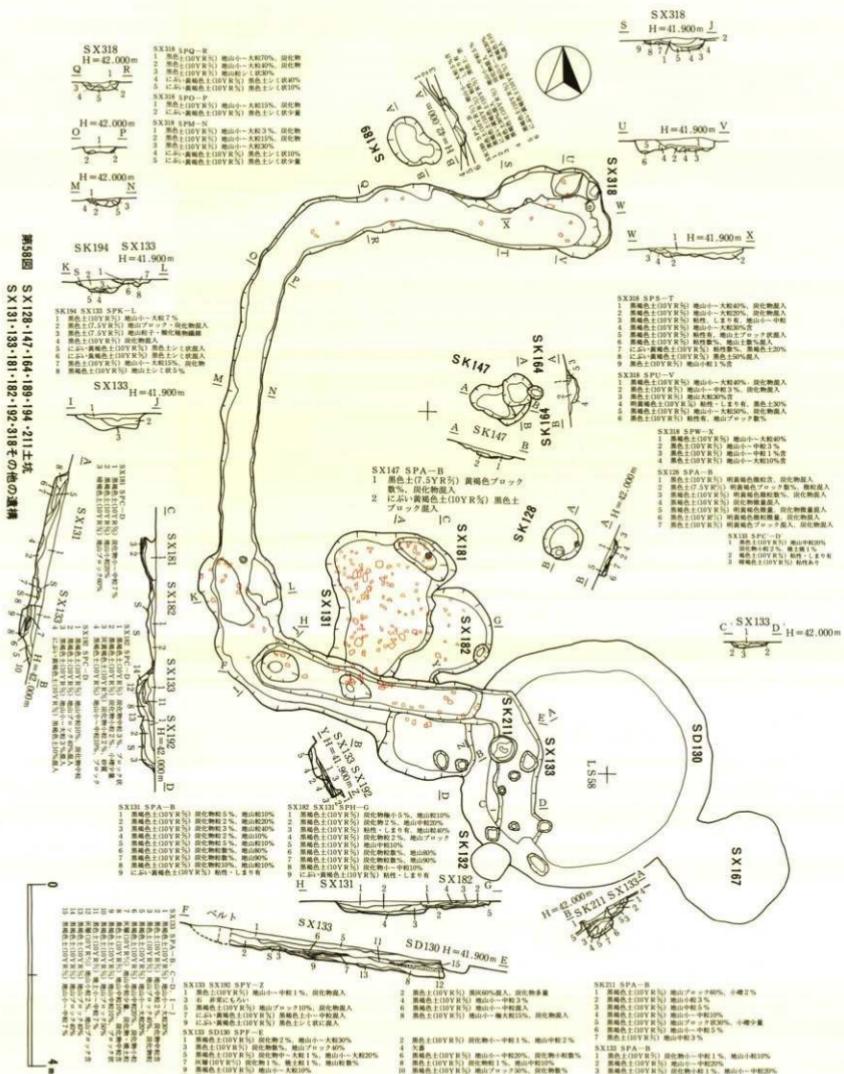
5 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、地山中-中粒5%含

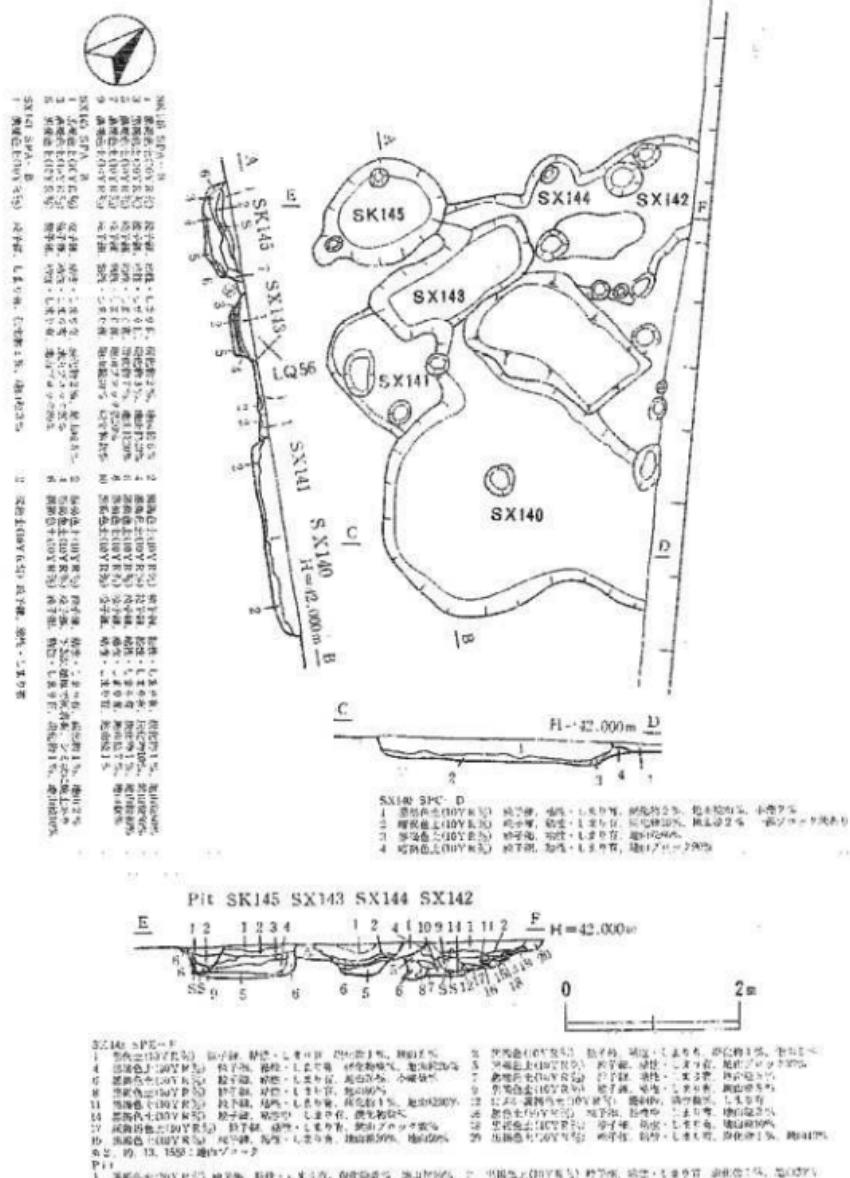
6 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、地山中-中粒5%含

7 黑褐色土(10YR 5V) 粘性。しまりあり。地山中-中粒5%、地山中-中粒5%含

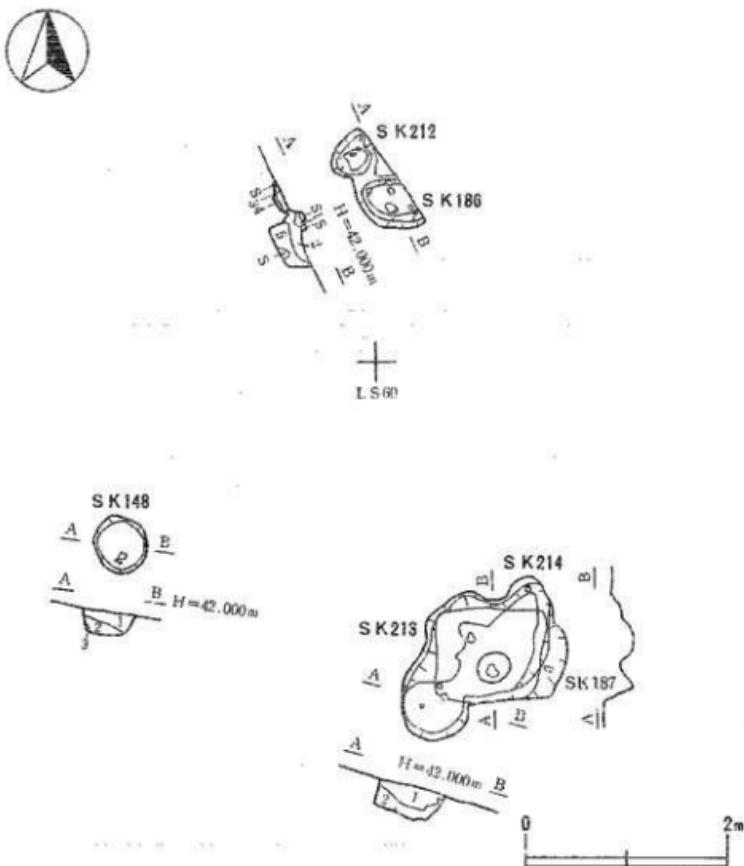


第57図 SK138・250・253土坑、SD056・251溝状造構





第59図 SK145土坑、SX139～144その他の遺構



SK212, 186 SPA-B

- 1 黒色土(10Y R 5%) 粘性有、しまり悪い、炭化物混入
- 2 深褐色土(10Y R 5%) 粘性強、しまり良
- 3 深褐色土(10Y R 5%) 粘性強、しまり良、黒色土20%、にぶい黄褐色土40%
- 4 深褐色土(10Y R 5%) 粘性強、堆山砂25%混入
- 5 黑褐色土(10Y R 5%) 粘性強、黑色土50%、堆山30%含
- 6 黑色土(10Y R 5%) 推算土

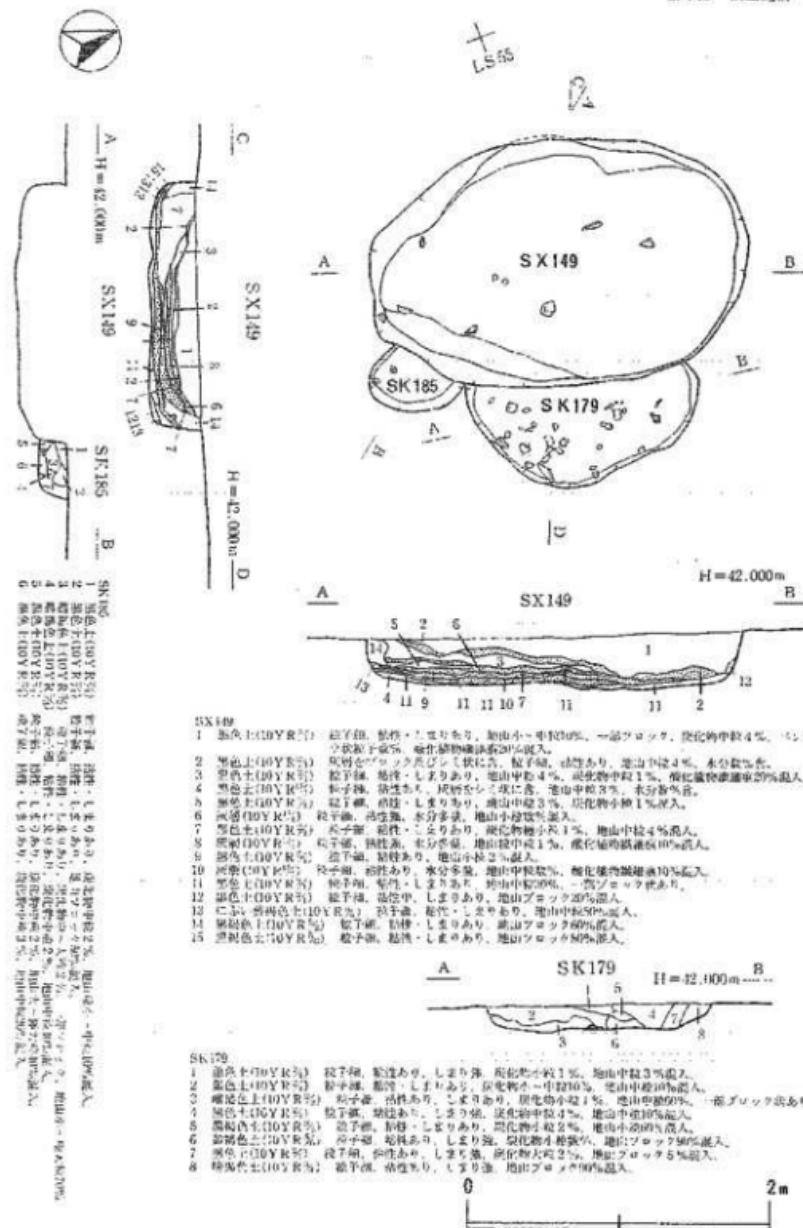
SK148 SPA-B

- 1 黒色(7.5Y R 5%) 炭化物・赤色微粒・明黄色粒・1%混入
- 2 黒色(7.5Y R 5%) 炭化物・赤色微粒1%混入
- 3 黑色(7.5Y R 5%) 炭化物1%混入

SK213 SPA-B

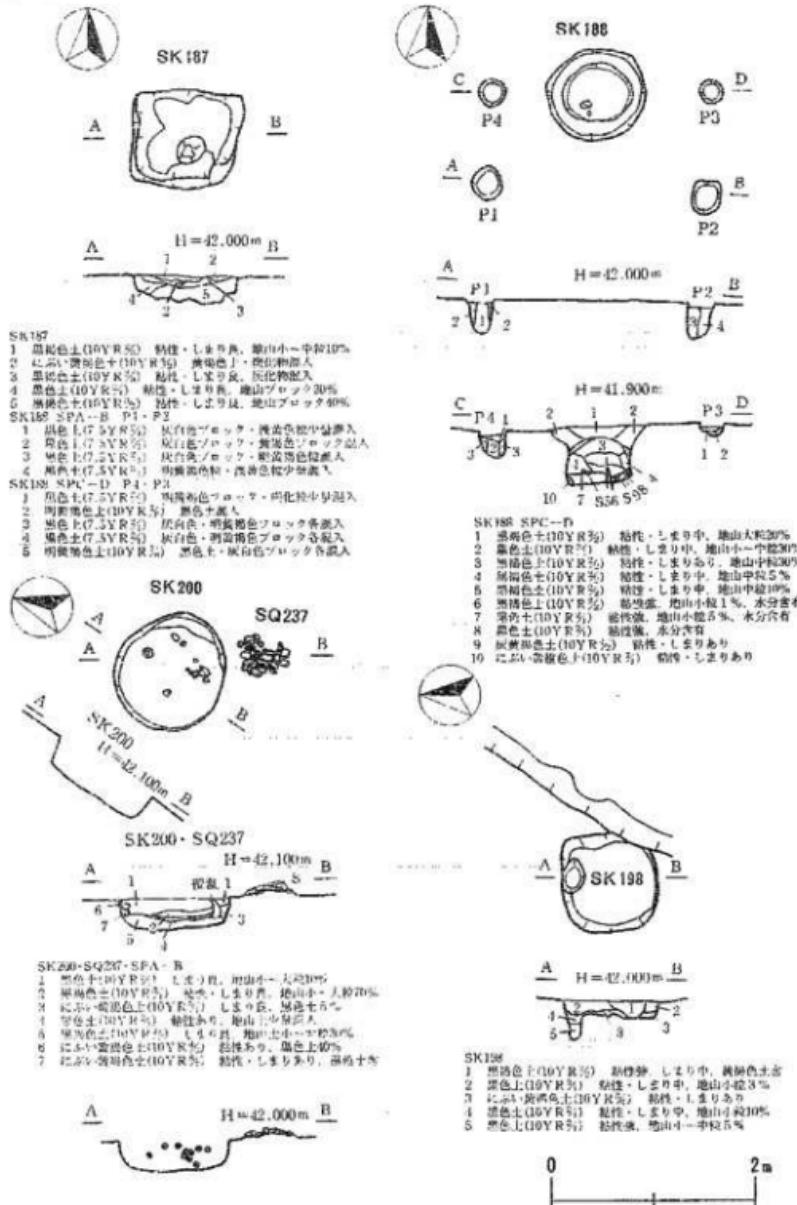
- 1 黒色土(10Y R 5%) 粘性有、しまり有、堆山砂20%、炭化物含
- 2 にぶい黄褐色土(10Y R 5%) 粘性有、黑色土シミ状に20%混入、黄褐色土30%混入

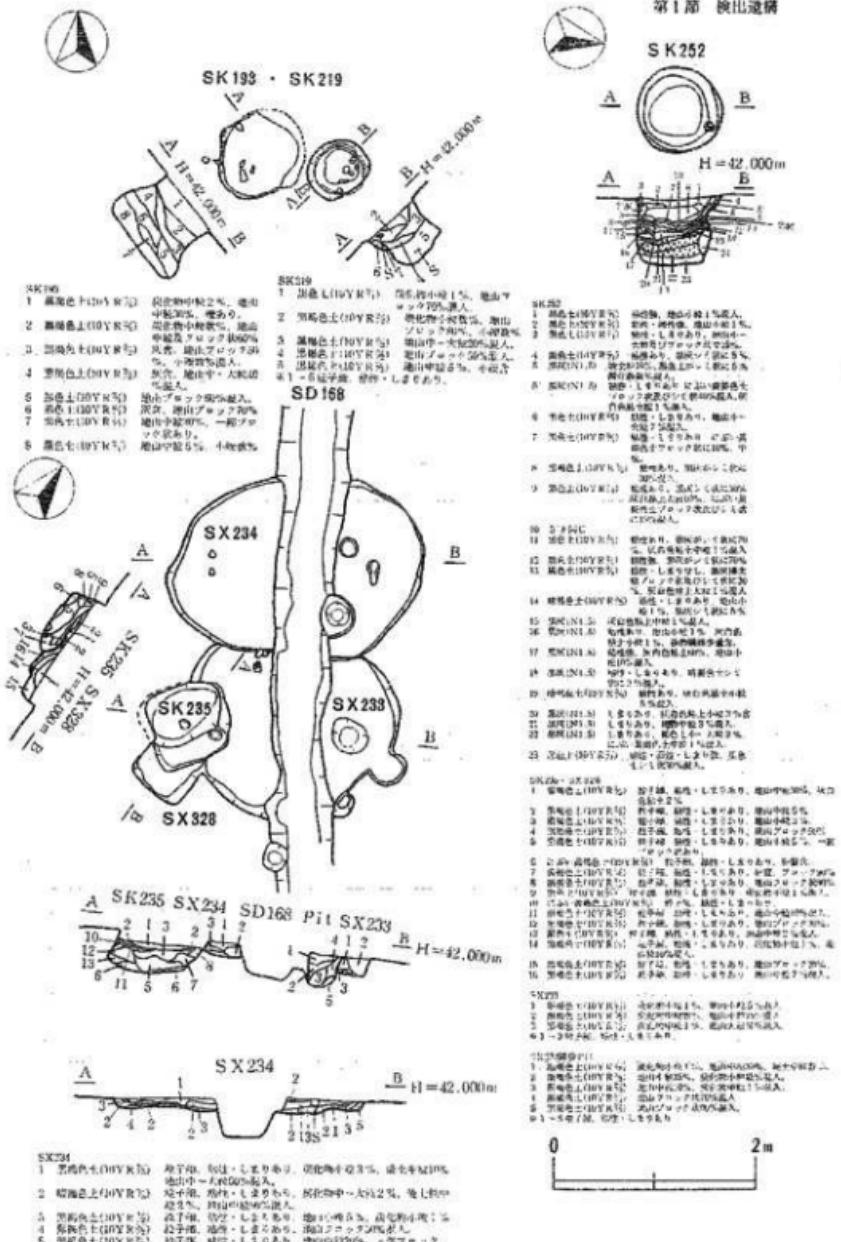
第60図 SK148・186・187・212・213・214土坑



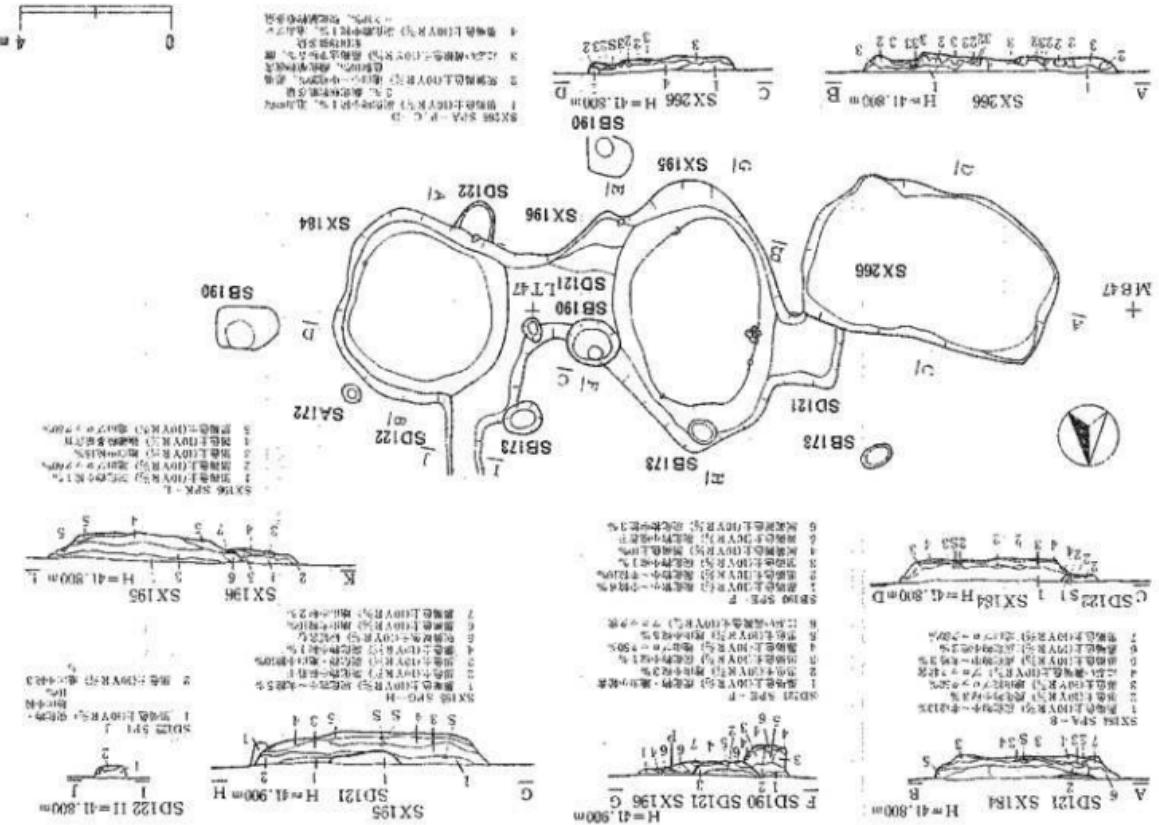
第61図 SK179・185土坑、SX149その他の遺構

第4章 調査の記録

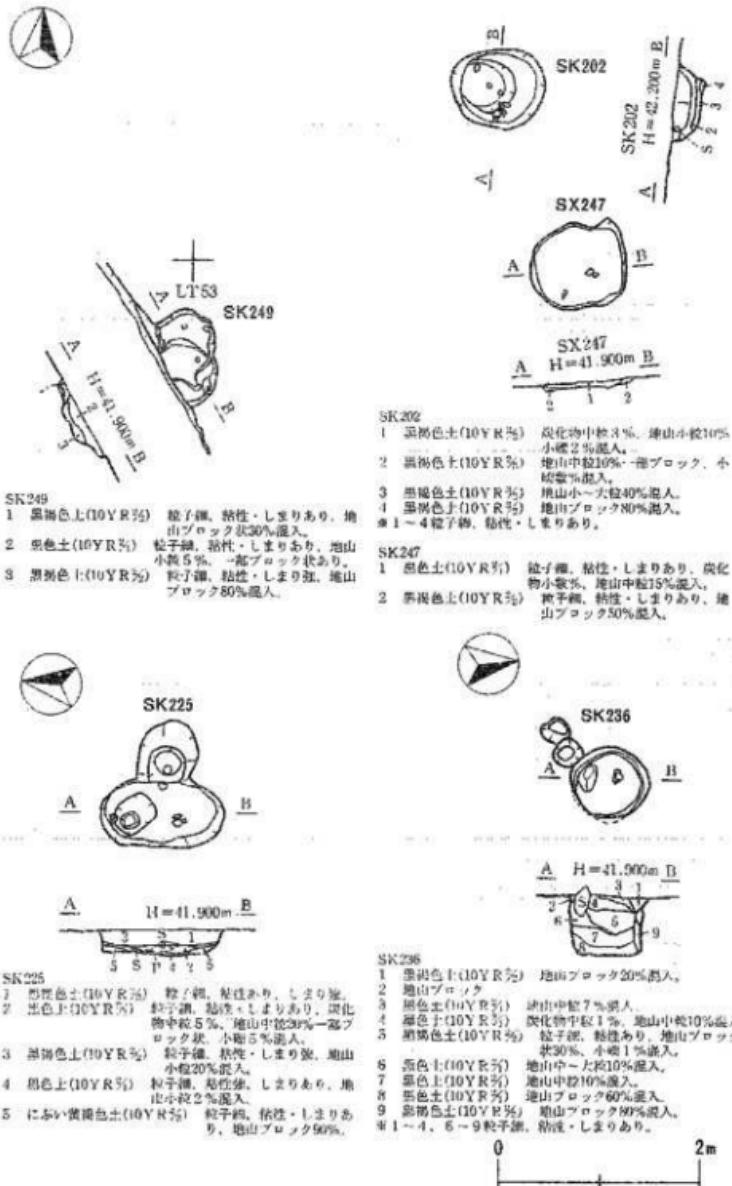




第63図 SK 193・219・235・252土坑、SX 233・234・238・328その他の遺構

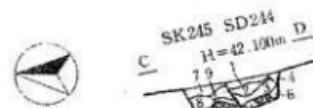


第64図 SD121・122溝状遺構、SK195土坑
SX84・85・86・87の他の溝槽、SA172柱列、SB173・190掘立柱遺物跡



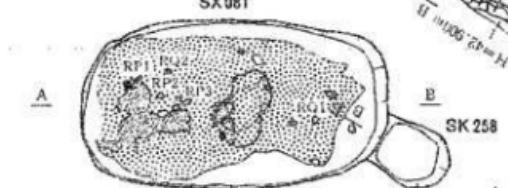
第65図 SK202・225・236・247・249土坑

第4章 調査の記録



1 黒色土(10Y R 5) 塗化物小粒1%、地山中粒5%混入。
 2 黒褐色J(10Y R 5) 塗化物小粒1%、地山粒30%混入。
 3 黒褐色J(10Y R 5) 地山中粒50%混入。
 4 黒褐色土(10Y R 5) 地山小粒30%混入。
 5 黒褐色土(10Y R 5) 地山ブロック状50%混入。
 6 黒褐色土(10Y R 5) 地山小粒50%混入。
 7 黒褐色土(10Y R 5) 塗化物小粒2%、地山小粒20%混入。
 8 黒褐色土(10Y R 5) 地山ブロック状60%混入。
 9 黒褐色土(10Y R 5) 地山小粒3%混入。
 10 黒褐色L(10Y R 5) 地山中粒7%一部ブロック状あり。
 11 ~ 10粒子細、粘性・しまりあり。

SX 081



SX 081 A-B
 1 黒色土(10Y R 5) 粘性・しまりあり、地山J粒5%、塗化物ブロック状混入。
 2 黒褐色J(10Y R 5) 地山ブロック・粘性・しまりあり、地山ブロック20%、塗化物粒子多量に入入。
 3 黒色土(10Y R 5) 粘性・しまりあり、地山J粒5%、塗化物土層上に「地山」が見らる。
 4 黒褐色土(10Y R 5) 粘性・しまりあり、地山J粒5%、塗化物土層上。
 5 黒褐色J(10Y R 5) ピーム柱子細孔、粘性・しまりあり、塗化物ブロック状混入。

第66図 SD 244溝状構造、SK 245・258土坑、SK 081・238・239その他の遺構

SX 238・SD 244 A-B
 1 黒色土(10Y R 5) 塗化物小粒1%、地山小粒5%混入。
 2 黒褐色土(10Y R 5) 塗化物小粒1%、地山小粒10%混入。
 3 黒褐色土(10Y R 5) 地山中粒30%一部ブロック状あり、塗化物混入。
 4 黒色土(10Y R 5) 黒色土(10Y R 5) 粒子細、粘性・しまりあり、地山中粒10%混入。
 5 黒褐色土(10Y R 5) 塗化物小粒2%、地山小粒3%。
 7 黒褐色土(10Y R 5) 地山中粒20%一部ブロック状あり。
 8 1~4、6~7と干渉、粘性・しまりあり。

SX 238・SD 244・SX 238・SX 239 E-F

1 黒褐色土(10Y R 5) 塗化物小粒1%、地山中粒40%一部ブロック状。
 2 黒褐色土(10Y R 5) 地山中粒15%一部塗化物小粒5%、塗化物小粒5%。
 3 黑褐色土(10Y R 5) 地山中粒20%一部ブロック状10%。
 4 黑褐色土(10Y R 5) 地山ブロック状80%。
 5 黑褐色土(10Y R 5) 地山中粒5%。
 6 黑褐色土(10Y R 5) 地山中粒10%、塗化物小粒5%。
 7 黑褐色土(10Y R 5) 地山小粒3%。
 8 黑褐色土(10Y R 5) 地山ブロック状70%。
 9 黑褐色土(10Y R 5) 地山ブロック状50%混入。
 10 黑褐色土(10Y R 5) 地山小粒5%。
 11 黑褐色土(10Y R 5) 塗化物小粒1%、地山中粒5%混入。
 12 黑褐色土(10Y R 5) 地山ブロック状30%混入。

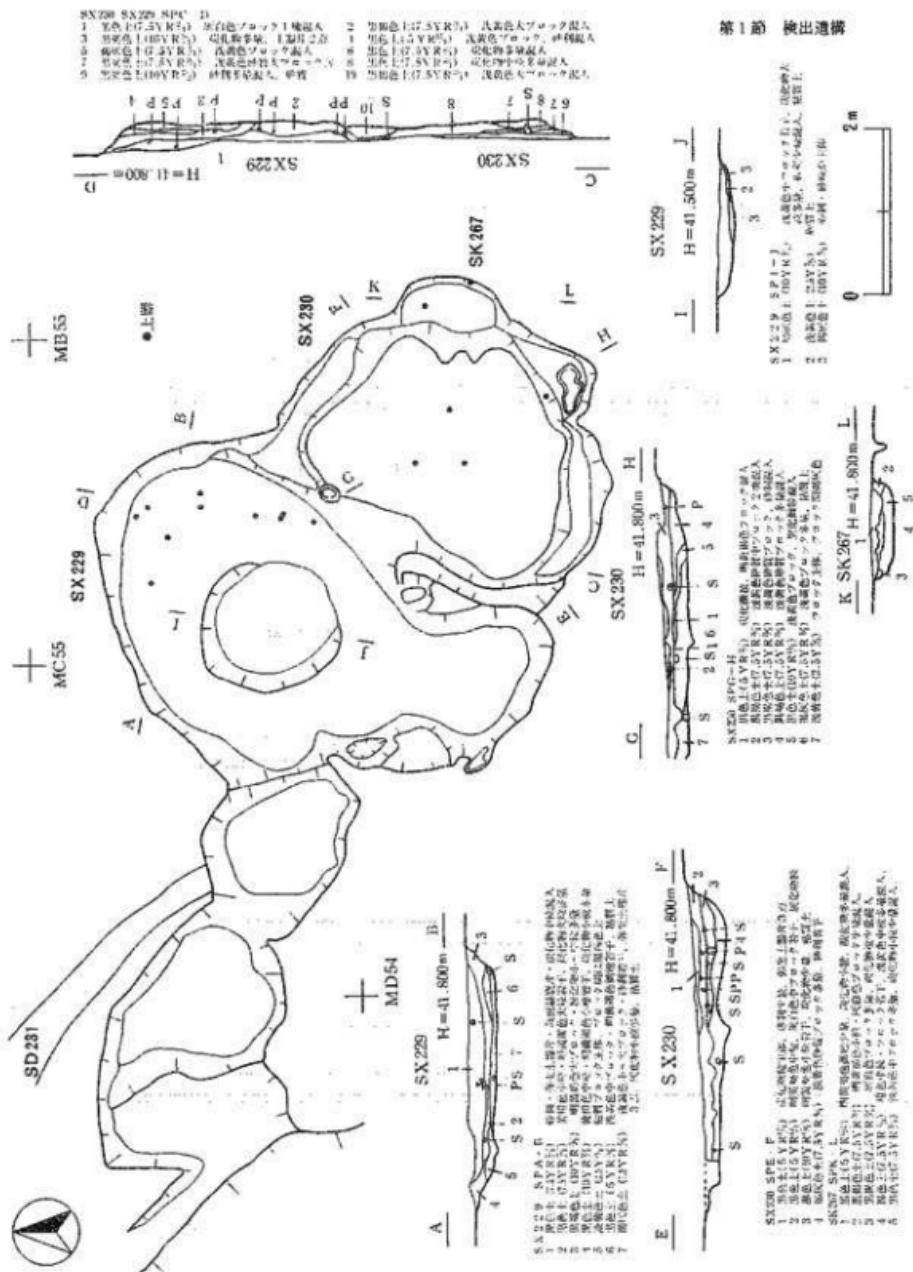
* 1~12粒子細、粘性・しまりあり。

SK 258 A-B
 1 黒褐色土(10Y R 5) 粘性・しまりあり、地山小粒大粒混入。黑色土質、黑色土質、黑色土質、黑色土質。
 2 黒褐色土(10Y R 5) 粘性・しまりあり、地山中粒10%混入。
 3 黒褐色土(10Y R 5) 地山中粒10%、地山中粒10%、地山中粒10%。
 4 黒褐色土(10Y R 5) 地山中粒10%、地山中粒10%、地山中粒10%。
 5 黒褐色土(10Y R 5) 地山中粒10%、地山中粒10%、地山中粒10%。
 6 黒褐色土(10Y R 5) 粘性・しまりあり、地山中粒10%。

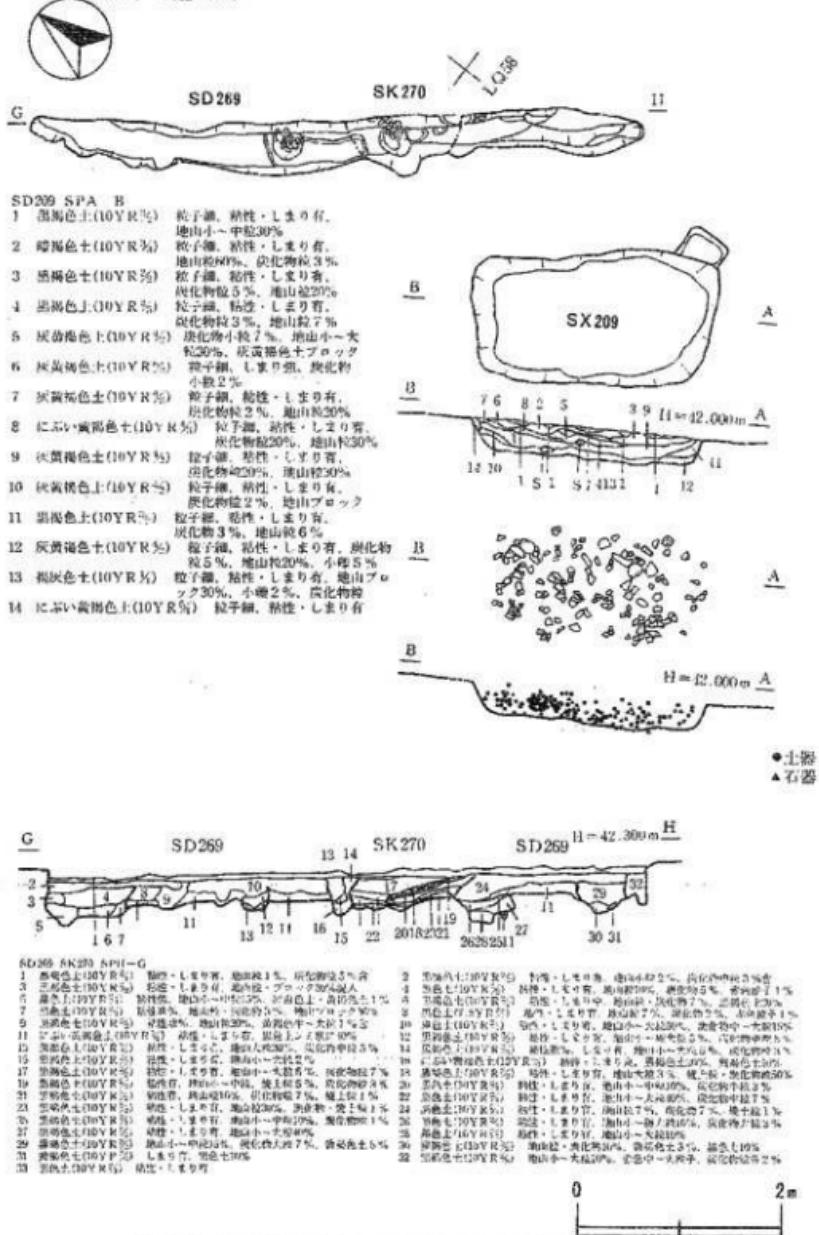
■ 細土

■ 黒灰

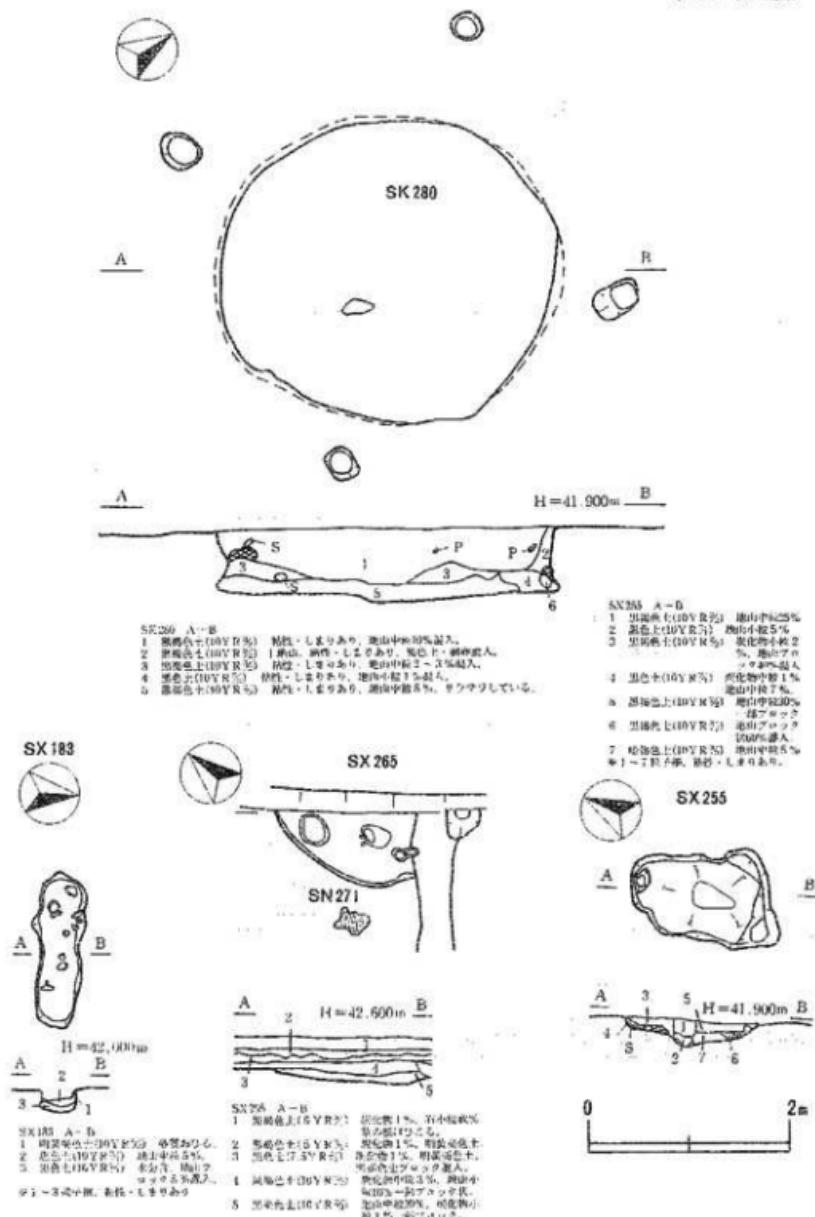




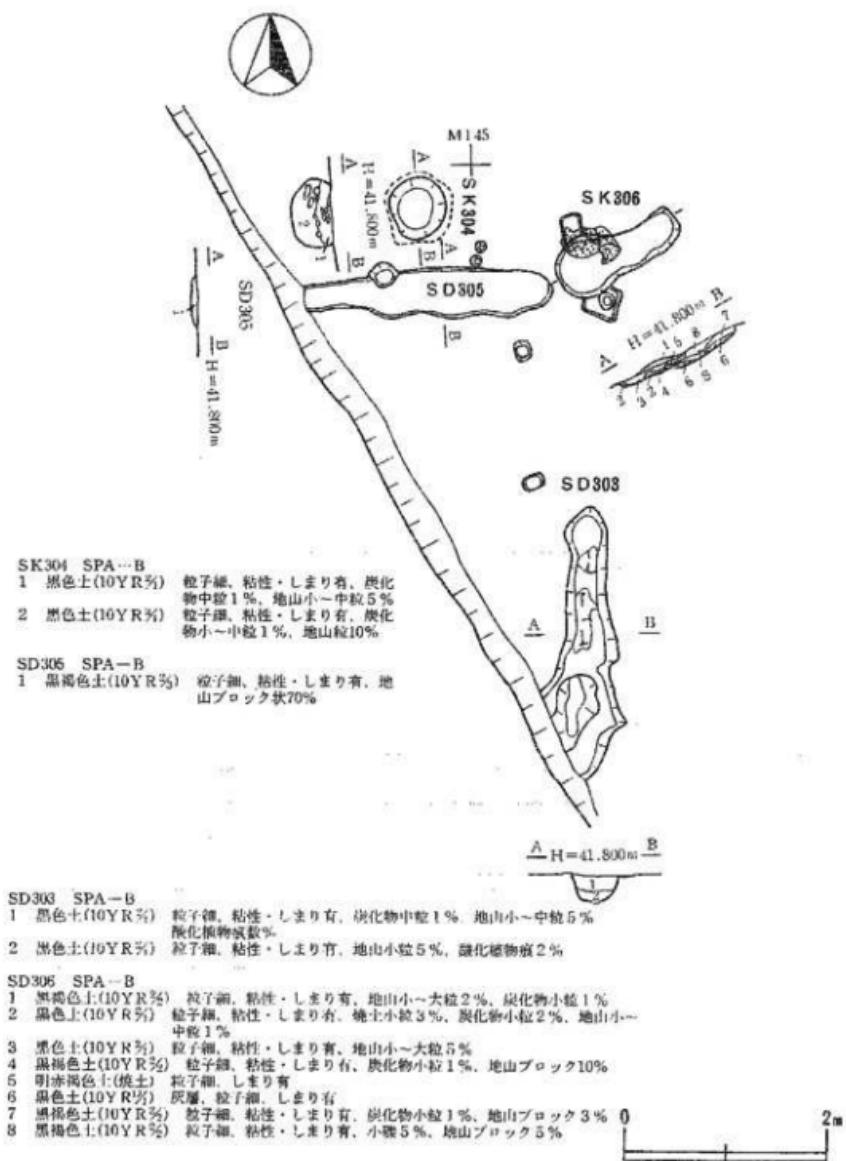
第67図 SK267土坑、SX229・230その他の遺構



第68図 SD269溝状遺構、SK270土坑、SX209その他の遺構



第69図 SK 280土坑、SX 183・255・265その他の遺構、SN 271焼土遺構



第70図 SK304・306土坑 SD303・305溝状遺構

色土・黒褐色土と地山粒子・ブロックの混合土が充填されている。上器は弥生土器4群である。

S R295 (第71図、図版69)

D区のLM53グリッドに位置する。掘形は平面プランが42cm×48cmの隅丸長方形で、断面形は、ほぼ半坦になっている底面から南側は直っすぐに、北側はやや緩やかに立ち上がり、深さは22cmである。土器は粗製の深鉢形土器で底部が下を向いており、だいぶ潰れた格好で出土した。底面と底部との間は1cmの隙間があり、黒褐色土と地山の混合土が入っている。掘形の直下には、径22cm×28cm、深さ25cmで、平面プランが橿円形の小ビット状の掘り込みがある。断面形は砲弾形を呈し、埋土の2層中から上器の大破片が3点出土しており、その土器は手取清水4群である。

II. 焼土遺構

S N015 (第72図)

F区のLG21グリッドに位置する。24cm~27cmの範囲の焼土が隣接して3ヶ所にあるが、土層の断面からすれば1つの遺構として考えられるもので、全体の範囲は52cm×75cmで、厚さは3cm~7cmである。下に掘り込みはない。

S N271 (第69図)

D区のLO55グリッドに位置する。その範囲は32cm×35cmである。

S N283 (第72図)

B区のMI48グリッドに位置する。規模は90cm×105cm、厚さは5cmである。黄褐色土・黒褐色土に焼土・炭化物・灰白色粘土の粒子やブロックが混入している。

II. その他の遺構

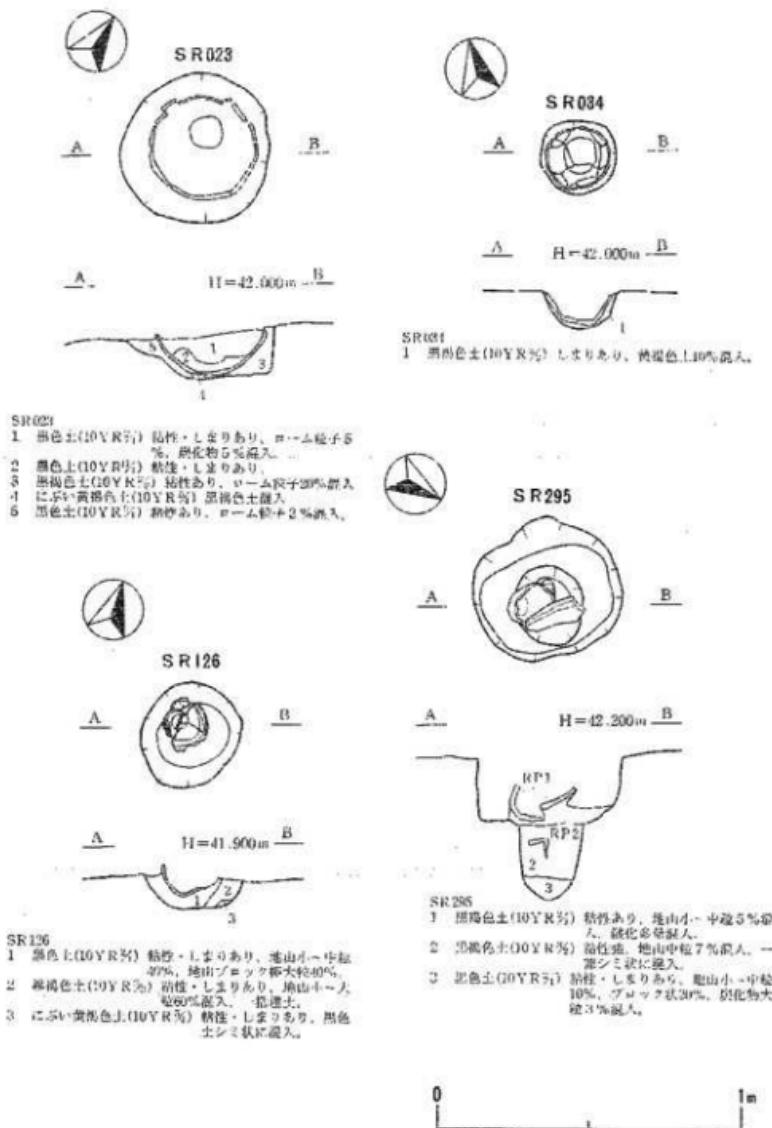
S X016 (第52図)

F区のLE-LF20-21グリッドで検出した。SK012と切り合うが、その新旧関係は不明である。南東壁側はSD005によって、南東隅側はSD008によって切られているため全容は不明であるが、平面形は方形プランを呈し、北東壁に溝状の張り出し部をもつ遺構である。遺構の規模は坑口部145cm×235cm、坑口部の張り出し部65cm×110cm、坑底部130cm×225cm、坑底部の張り出し部30cm×90cm、深さ14cmである。底面は張り出し部分は緩い起伏があるが、他は全体的に平坦である。

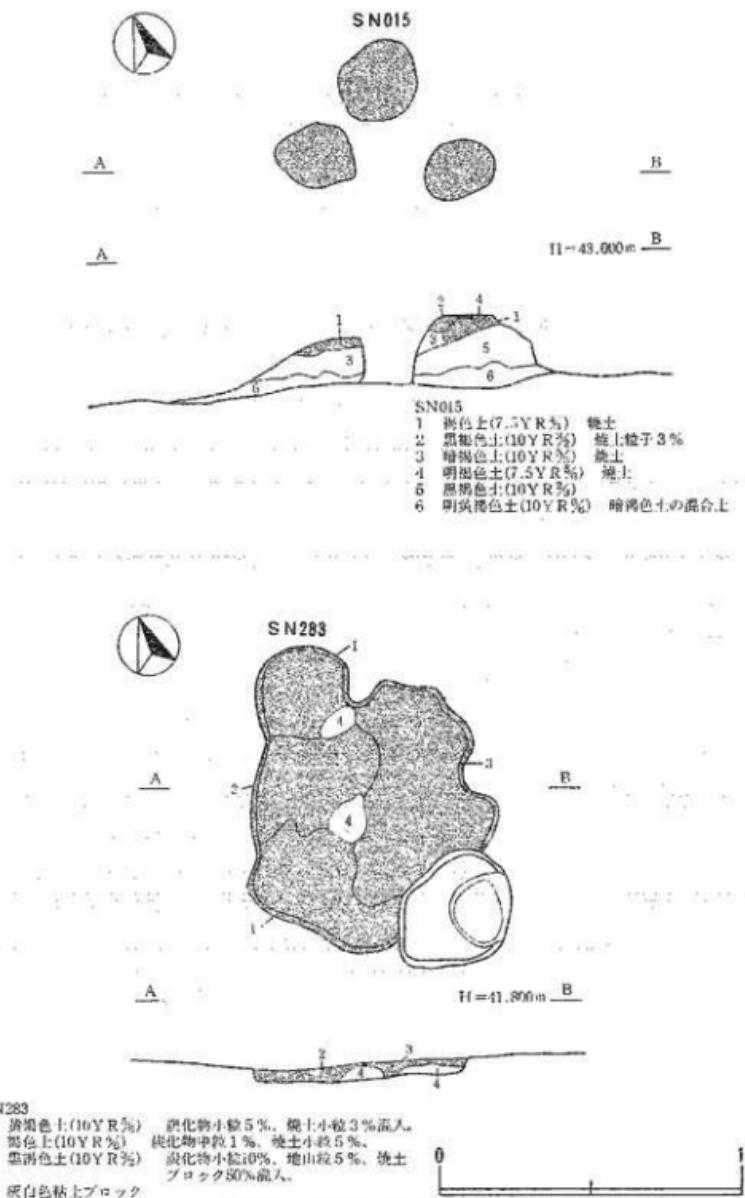
埋土は黑色土の单一層で地山粒を混入する。

遺物は出土しなかった。

S X033 (第73図)



第71図 SR023・034・126・295土器埋設遺構



第72図 SN015・283焼土遺構

D区のL.H.-I.I 44-45グリッドで検出した。南北に長軸をもつ不整方形を呈するが、ほぼ中央をS.D.91によって東西に切られ、東端を南北に走るS.D.027によって切られている。遺構の規模は坑口部420cm×668cm、坑底部365cm×624cm、深さ23cm～44cmである。底面はかなり起伏がある。中央から南側がやや高く盛り上がり、それを中心に壁際に向かって傾斜する。壁は南西壁ではほぼ垂直に立ち上がり、北東壁は緩く立ち上がる。

埋土は19層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とし、地山粒・地山ブロックを多量に混入する。層厚のあるものにしまりがわるい層が多く、特に5・6・20層は顯著である。

遺物は9層中から株洲系陶器1点(R.P.)・石斧1点(R.Q.)が出土した。

S.X.050 (第54図、図版70-71)

D区のL.Q.54-55、L.R.55グリッドで検出した。S.X.254より新しく、S.X.259より古い。上面幅26cm～66cmの溝状を呈する遺構で、S.X.254の南西隅部を支点に東西から南西へ向きをかえている。遺構の規模は東西350cm、北西から南東400cm、底面幅18cm～49cm、深さ8cm～42cmである。断面形はU字状を呈し、底面は起伏が著しい。向きをかえる部分から南東にかけて幅49cm、長さ224cm、深さ15～25cmの長方形を呈する落ち込みがある。底面は緩い起伏があり、南東から北東に向かって傾斜する。

埋土は6層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とし、炭化物・地山粒を混入する。落ち込みの部分では地山ブロック・灰白色粘土ブロックの混入があり、また、底面には層厚5cmを測る黒色灰がみられる。埋土の状況から人為的堆積と考えられる。

遺物は出土しなかった。

S.X.081 (第66図、図版7-71-72)

D区のL.L.46-47グリッドで検出した。S.K.258より新しくS.D.080より古い。平面形は橢円形で、遺構の規模は坑口部168cm×302cm、坑底部161cm×286cm、深さ22cm～25cmである。底面はほぼ平坦であるが、中央部に向かって緩く傾斜し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。中央部には50cm×70cmの小整形を呈する浅い落ち込みがあるが、底面の緩い起伏に起因するを考える。

埋土は6層に分層した。4層は搅乱であるため実際は5層である。黒色土を主体とし、下層には黒色灰がほぼ全域にみられる。その直上である2層中には焼土と地山ブロックの混合土が多量に混入する。遺物は各層から出土し、埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。

遺物は繩文・弥生土器が出土した。

S.X.084 (第74-75図、図版7-72-74)

D区のL.K.-L.L.47～50グリッドで検出した。中央部分を東西に走るS.D.99により切られているが、「コ」の字を呈する遺構である。幅100～150cmの溝状落ち込み3条から構成されている

が、ブリッジ延時にかけて「U」の字状に連続していたものである。遺構の規模は東西700cm、南北1200cmで、西に開口している。溝状の落ち込みの長さは500~620cmで、深さは25cm~45cmである。断面形は「U」字状を呈し、底面は起伏が著しい。

埋土は黒色土を主体とし、焼土・黒色灰・土器片を含んでいる。また焼土層・黒色灰層の堆積状況から、溝状の落ち込みは小単位の仕事の反復による堆積過程を観察できるため、遺構を体では若干の時間差があると考えられるがその差は僅めて短時間であったと考えられる。

遺物は繩文・弥生土器片、土師器・須恵器片が出土しているが、層位的な集中は見られない。

S X113 (第34図、図版4-7-74-75)

D区のL N50-51グリッドで検出した。平面形は不整方形で、断面形は上鍋状を呈し、底面の中央部に円形の落ち込みをもつ遺構である。遺構の規模は坑口部210cm×275cm、坑底部145cm×165cm、深さ55cm~62cmである。円形の落ち込みは口径80cm×92cm、底径65cm~72cm、深さ20cm~30cmを測る。底面は丸底を呈し、親い起伏があり、円形の落ち込み部では起伏が著しい。壁は全体的に緩い起伏をもしながら立ち上がるが、北壁側では崩壊したためか、起伏が著しい。

埋土は24層に分層したが、堆積状況から二大別できる。円形の落ち込みの底面から70cmまでのアーチ状を呈する埋土と、それ以外の人為的堆積を呈する埋土である。前者は黒褐色土で粘性が強く、炭化物・地山粒を少量混入し、最下層は砂粒を多く含む。後者は地山粒を混入する黒色土と地山ブロックを主体とする。また前者と後者の間には1cm~3cmの空隙があることから、埋土の堆積過程が異なったものと考えられる。

遺物は繩文・弥生土器・フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S X114 (第76図、図版)

C区のMA~MC63-64グリッドで検出した。調査区の北端に位置し一部調査区外になっているため全容は不明であるが、調査区側に舌状に張り出している。遺構の規模は最大幅(東西)680cm、最大長(南北)420cm、深さ(南~北)24cm~95cmである。底面はかなり起伏をもしながら、南から北に傾斜する。また壁もかなり起伏をもって立ち上がる。

埋土は4層に分層した。黒色土を主体とし、多量の地山ブロックを混入する。特に3層は地山上層である。埋土の状況から、短時間に埋められたと考えられる。また、形態および調査区内における位置関係から人為的なものではなく、自然の可能性が大きい。

遺物は出土しなかった。

S X117 (第32-34図、図版5)

D区のL O49グリッドで検出した。北側に位置するS X159を切り、南側に位置するS K T 112により切られているため全容は不明であるが、北西から南東に長軸をもつ長梢円形を呈す

ると思われる。遺構の規模は坑口部210cm×300cm、坑底部165cm×225cm、深さ22cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩く立ち上がる。中央部に長軸方向が一致する、幅86cm、残存長130cmの溝状の落ち込みがあり、断面形は「V」字形を呈し、深さ10cmを測る。底面は起伏が著しい。

埋上は16層に分層した。黒色土を主体とし、黑色灰・炭化物・地山粒を混入する。中位から下層は地山ブロックを微量混入する。黒色灰層は焼上ブロックを含み、平面的には中央落ち込み部の北側にある。埋上の堆積状況から短時間に埋められたと考える。

遺物は織文・弥生土器が少量、フレイクが僅少出土した。

S X129 (第76図、図版6・76)

D区のL S 58グリッドで検出した。平面形は梢円形を呈し、遺構の規模は坑口部167cm×311cm、坑底部130cm×280cm、深さ32cm×37cmである。底面は緩い起伏をもち、北壁から東壁はほぼ垂直に立ち上がり、他はそれよりやや緩く立ち上がる。

埋上は6層に分層した。6層は地山ブロック、1～4層は黒褐色土を主体とし、1層が地山ブロックの混入が多く、他は若干の混入である。最下層である5層は張床で、地山ブロックおよび黒色土ブロックを多量に混入し、よくしまっている。遺物が各層にわたり多量に出土している点、また混入物の状況から人為的堆積と考える。また、3層からは若干であるが黑色灰を検出している。

遺物は織文・弥生土器が出土した。

S X131 (第58図、図版6)

D区のL S・L T 57・58グリッドで検出した。北東隅から東部にかけてS X181・182により、南部はS X133により切られているため全容は不明であるが、南北に長軸をもつ不整形を呈すると思われる。遺構の規模は長軸315cm、幅150cm～250cm、底部長軸280cm、幅100cm～210cm、深さ28cmである。底面は緩い起伏があり、壁は開口部に向かって緩く開き、断面形が逆台形を呈する。

埋上は9層に分層した。黒褐色土を主体とし、炭化物・地山粒を混入する。壁際に近い3・6・7・9層では地山ブロックを多く混入する。遺物は各層に含まれるが、特に層厚のある1・2層に多く含まれる。遺物・埋土の堆積状況から短時間に埋められたものと考える。

遺物は織文・弥生土器、フレイク、土師器が出土した。

S X133 (第58図、図版6)

D区のL S・L T・MA56～60グリッドで検出した。上面幅70cm～150cmの溝状の落ち込みで、東に開口する「」の字状を呈するが、南東端部からさらに南へ300cm伸びているため実際はクランク状と呼ぶべきかもしれない。遺構の規模は東西650cm～720cm、南北1,100cm、深さ10cm～40cmである。断面形はU字形・逆台形を呈し、底面は起伏が著しい。

埋土は黒褐色土を主体とし、地山粒・地山ブロック・炭化物・焼土・黒色灰・土器片・磚を含んでいる。遺物・焼土および黒色灰は東西に走る深さのある東側の一辺に集中する。調査区内には同様の遺構がS X084・S X153の2基あるが、開口部方向・焼土・黒色灰の分布状況に相違点がみられる。特に本遺構は「コ」の字の一辺に集中する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

S X139 (第59図)

D区のL O65グリッドで検出した。D区の北東端部に位置し、その大部分が調査区外になっているため容は不明である。遺構の規模は坑口部190cm×35cm、坑底部165cm×30cm、深さ10cmである。底面はほぼ平坦である。北西隅部に径30cm×55cm、深さ30cmの落ち込みがあるが、本遺構との関係は不明である。

埋土は黒褐色土の單一層で、炭化物・地山粒を少量混入する。

遺物は出土しなかった。

S X140 (第59図)

D区のL P-L O55-56グリッドで検出した。北東端部をS X139によって切られているが、平面形は略円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部径250cm×285cm、坑底部径210cm×250cm、深さ25cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面中央部に径35cm、深さ6cmの落ち込みがあるが、本遺構との関係は不明である。

埋土は4層に分層した。3・4層は壁の崩落上で、1層は炭化物・地山粒を混入する黒褐色土、2層は砂質の暗褐色土を呈する。

遺物は少量であるが1層中より出土した。縄文・弥生土器、フレイクがやや出土した。

S X141 (第59図)

D区のL P56グリッドで検出した。北西部・東部をそれぞれS X143・S X141に切られているため、全容は不明であるが、平面形は不整形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部140cm×150cm、坑底部径140cm、深さ5cm～10cmである。底面は平坦であるが、北西から南東にかけて緩く傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。北東壁下および南部に計3基の落ち込みがあるが、本遺構との関係は不明である。

埋土は2層に分層した。黒褐色土を主体とし、炭化物・地山粒を少量混入する。

遺物は出土しなかった。

S X142 (第59図)

D区のL P56-57グリッドで検出した。D区の北東端部に位置し、一部調査区外にかかっている。また、南東・南西部がそれぞれS X144・ピット群によって切られているため、全容は不明であるが、南北に長軸をもつ橢円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部130cm×

220cm、坑底部100cm×200cm、深さ10cm~35cmである。底面は緩い起伏をもちながら中央やや南壁寄りに傾斜する。したがって最大深部は南壁寄りにあり、50cm×100cmの扇円形を呈する。壁は南壁がほぼ垂直に立ち上がり、他は緩く立ち上がる。

埋土は20層に分層した。地山粒・炭化物を混入する黒褐色土を主体とする。3・10・12・13・15・17層は地山粒ブロックが多く、2・5・6・8・19層は地山粒を多量に混入する。埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考える。

遺物は出土しなかった。

S X143 (第59図)

D区のL P56グリッドで検出した。S X141・144より新しい。平面形は長椭円形で、造構の規模は坑口部80cm×225cm、坑底部57cm×155cm、深さ35cmである。底面は平坦で、断面形は壁が開口部に向かって聞く逆台形を呈する。

埋土は6層に分層した。黒褐色土を主体とし、黒色灰・炭化物・焼土粒・地山粒・遺物を混入する。黒色灰は中位にあり、厚いところで5cmを測る。焼土ブロックを少量混入する。埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。

遺物は縄文・弥生土器がやや、フレイク、土師器・須恵器が少量出土した。

S X144 (第59図)

D区のL P56グリッドで検出した。南端部をS X143によって切られているため、全容は不明であるが、平面形は椭円形を呈すると思われる。造構の規模は坑口部60cm×80cm、坑底部45cm×60cm、深さ17cmである。底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。西壁直下の径15cm×25cm、深さ10cmの落ち込みは、本造構より古いものである。

埋土は黒褐色土の單一層で、炭化物を少量、地山粒を多量に混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイクが僅少出土した。

S X149 (第61図、図版6・78・79)

D区のL R54・55グリッドで検出した。南東部に位置するS K179・S K185を切っている。

平面形は椭円形で、造構の規模は坑口部164cm×251cm、坑底部149cm×235cm、深さ32cm~36cmである。底面はやや起伏があり、部分的に礫層に達している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は15層に分層した。黒色灰・黒色混灰土・黒色土の重層を呈する。1・3・5・7・9・11・12層が黒色土、2・4層が黒色混灰土、6・8・10層が黒色灰で、13~15層は壁の崩落土である。黒色土には炭化物・地山粒が小量混入し、黒色灰は水分が多く、厚い部分で6cmを測る。埋土の堆積状況は北東からの流れ込みが考えられる。

遺物は出土しなかった。

S X153 (第34・77図、図版5・79・80)

D区のLM~LP46~49グリッドで検出した。東に開く「コ」の字を呈する遺構である。北東端部と南東端部がそれぞれSD169・SE152によって切られているためその全容は不明であるが、前者はSD169内で、後者はSE152とほぼ同一位置で完結していたものと考えられる。また南西隅部は途切れているが、確認状況ではわずかに連続していたものである。遺構の規模は、東西幅8m~9m、南北幅10m、上面幅80cm~160cm、深さ13cm~50cmを測り、断面形は逆台形・開口部に向かって緩く開くU字状を呈する。底面は起伏が著しく、特に北辺・西辺では円形・楕円形・長方形の落ち込みをもつ。埋土は黒色土・黒褐色土を主体とし、黒色灰・炭化物・地山ブロック・骨片・土器片・礫を混入する。黒色灰は底面の起伏と関連し、落ち込みのある部分の底面付近で検出した。骨片は黒色灰に混入しているが、北東端寄りの黒色灰にのみ多量に含まれている。また、土器片・礫は大部分が埋土の中位すなわち黒色灰より上面で出土している。

埋土の状況から本遺構は小単位の溝状の掘り込みを構築し、短時間に埋め戻すという仕事の連続によって「コ」の字に配したものと考えられる。同様の遺構は調査区内に2基(SX084・SX133)あるが、開口部・黒色灰の分布・埋土状況に相違点がみられる。

遺物は織文・弥生土器がやや、フレイクが少量、玉飾器・箋窓器が僅少出土した。

SX155 (第77図、図版5)

D区のLM47グリッドで検出した。平面形は方形で、遺構の規模は坑口部90cm×95cm、坑底部85cm×90cm、深さ55cm~60cmである。底面は疊層に達しており、多少の起伏をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は9層に分層した。黒色土を主体とする。1・3層は地山ブロック・炭化物を少量混入し、5層以下は地山ブロックを多量に混入する。また3層以下では3cm~20cm大的の礫を含んでいる。2・4層は砂層である。埋土の堆積状況から人為的堆積と考えられる。

遺物は出土しなかった。

SX159 (第32・34図)

D区のLO49グリッドで検出した。SX117によって南端部を切られているため全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部173cm×248cm、坑底部157cm×221cm、深さ26cm~30cmである。底面は平坦であるが、中央に向かって緩く傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。中央部分には長軸167cm、短軸100cm、深さ30cmを測る楕円形の落ち込みがあり、断面形は「V」字状を呈し、底面は起伏が著しい。

埋土は12層に分層した。黒褐色土を主体とし、炭化物・地山粒を混入する。炭化物は3層に多く混入し、4層以下では微量である。また4層以下にはしまりの欠ける層が多い。

遺物は出土しなかった。

S X160 (第34・78図)

D区のLN48グリッドで検出した。SD169の底面で確認し、平面形は横円形を呈する。遺構の規模は坑口部156cm×251cm、坑底部127cm×194cm、深さ11cm～15cmである。底面は緩い起伏をもち、中央部は若干高く盛り上がっている。壁は緩く立ち上がる。

埋土は6層に分層した。黒色土を主体とし、しまりにややかける。地山粒を全体的に少量混入し、最下層の3層には炭化物を混入する。

遺物は出土しなかった。

S X167 (第38図、図版6・38・48・80)

D区のLR56グリッドで検出した。平面形は略円形を呈し、北西部分に幅110cmの溝状の張り出しをもつ。この張り出し部分はSD130により切られていたため全容は不明である。遺構の規模は坑口直径220cm～240cm、坑底部径222cm、深さ33cmである。底面は起伏があり、張り出し部に向かって緩い勾配をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は11層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とする。最下層の11層は地山ブロックと黒色土の混合土でその直上に黑色灰(8層)がある。7層も黑色灰であるが、7・8層間には地山ブロックを多量に混入する間層がある。7層は本遺構の北東部および張り出し部に1cmから10cmほど堆積し、8層は北東部から南西部にかけて2cmの厚層で堆積している。遺物は各層に含まれており、埋土の堆積状況とあわせて、短時間に埋められたと考えられる。

遺物は織文・弥生土器が出土した。

S X180 (第79・80図、図版81・82)

A区北西端のNH73・74グリッドに位置する。SL323河川跡の最下流にあたり、第3層の砂礫層を掘り下げ途中にて確認した。2本の大きな自然木(RW709・710)が「L」字状に横に並べられており、北の下流部に向かって開く。南西のRW709は長さ262cm、直径30cmで、木の中心部には、長さ25cm～37cm、直径5～6cmの杭を3本(RW704～706)に切り目を入れて打ち込んでおり、いずれも下に突き抜けている。木の筋にも長さ28cm、直径6cmの打ち込まれた杭が1本(RW708)確認された。RW709の土壠断面観察によれば埋められたものかも知れない。北東側のRW710は長さ385cm、直径20cmで、中央部に径12cmの杭(RW713)が打ち込まれており、これら2本の自然木の下にさらに2本の自然木(RW711・712)が横に並べられている。RW711は長さ143cm、幅22cmで、RW710とほぼ同方向に並び、1箇所に切り目がある。RW712は長さ176cm、幅19cmで、RW709と約80cm離れてやや平行に並ぶ。

さらに、「L」字状となったRW709・710の交点から北に約1m離れた地点には、28cm～60cm、幅5cm～11cmの杭が6本(RW245～250)並び、RW246以外は50cm～90cmの間隔で南から北に向かって並ぶ。

前述したように、本遺構は縄文・弥生土器が多く出土する砂礫層中にて検出したもので、杭・自然木はやや腐食が進んでいる。したがって、杭の上部は摩滅して丸くなってしまっており、この杭が本来の長さであるのか否かは不明であり、上部構造の有無・所属時期についても判然としない。

S X181 (第58図)

D区のL S・L T58グリッドで検出した。S X131より新しく、S X182より古い。平面形は指円形で、遺構の規模は坑口部70cm×150cm、坑底部35cm×90cm、深さ36cmである。底面は平坦で、壁は北東・南西壁がほぼ垂直に立ち上がり、南東・北西壁が緩く立ち上がる。北東壁寄りにある径10cmのビット状の落ち込みは、本遺構に伴うものかは不明である。

埋土は3層に分層した。黒褐色土を主体とし、地山粒・地山ブロックを多量に混入し、下層ほど多くなる。遺物は各層に含まれているが、下部に集中する傾向がみられる。遺物・埋土の堆積状況から、短時間に埋められたものと考えられる。

遺物は縄文・弥生土器、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S X182 (第58図)

D区のL S・L T57・58グリッドで検出した。S X131・181より新しい。平面形は指円形で、遺構の規模は坑口部157cm×190cm、坑底部130cm×160cm、深さ15cmである。底面は起伏があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東壁直下にある径30cmのビット状の落ち込みは、本遺構より古いものである。

埋土は5層に分層した。黒褐色土を主体とし、炭化物・地山粒を混入する。3層は炭化物を少量混入する地山ブロックである。遺物は各層に含まれるが、特に2層中の出土が顕著である。埋土の堆積がほぼ南東方向から北西方向に傾斜することから、この方向からの流入が考えられる。

遺物は縄文・弥生土器が少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S X183 (第69図)

D区のL O・L P43グリッドで検出した。S D169底面の崩壊で確認した。平面形は長指円形を呈する。遺構の規模は坑口部45cm×151cm、坑底部37cm×140cm、深さ15cm～22cmである。底面は中心に向かって緩く傾斜し、したがって中央部分が最も低い状態である。全体的に起伏も緩く平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は3層に分層した。1層は明黄褐色土でやや砂質があり、S D169の埋土(最下層)と考える。2・3層は黑色土で下層ほど粘性が強く、地山ブロックを多く混入する。また5cm～15cm大の礫が各層に混入している。

遺物は出土しなかった。

S X184 (第64・81図)

D区のL S 46・47グリッドで検出した。S D121・122より古い。平面形は円形を呈し、遺構の規模は坑口部径235cm～250cm、坑底部径190cm、深さ25cm～32cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は起伏が著しく、壁は坑口部に向かって直線的に聞く立ち上がりを呈する。

埋土は7層に分層した。黒色土を主体とし、炭化物・地山粒・土器片・磚を混入する。最下層の4層および離際の埋土はしまりがあり、地山ブロックを多量に混入するが、中位に相当する2・3層はしまりに欠ける。遺物・埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが少量、土師器・須恵器が少量出土した。

S X192 (第58図)

D区のL S・L T 56・57グリッドで検出した。「コ」の字状を呈するS X133と環状を呈するS D130が交差する部分に位置する。北側をS X133により、東側をS D130によって切られてい、そのため全容は不明であるが、平面形は方形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部135cm×200cm、坑底部110cm×160cm、深さ26cmである。底面は平坦で、壁は開口部にやや開くように立ち上がる。南東隅寄りにある2基のピット状の落ち込みは、本遺構より古いものである。

埋土は4層に分層した。黒褐色土を主体とする。炭化物・地山粒を混入するが、中間層では地山ブロックを多く混入する。遺物は各層に含まれているが特に2・3層に多くみられる。

遺物は縄文・弥生土器が多く、フレイクが僅少、土師器・須恵器が少量出土した。

S X195 (第81図)

-D区のL T 46・47グリッドで検出した。S D121より古く、S B173・190、S X196より新しい。平面形は扇円形を呈し、遺構の規模は坑口部218cm×356cm、坑底部178cm×255cm、深さ28cm～42cmである。底面は緩い起伏があり、一部傾斜に達している。壁は緩く立ち上がり、断面形は上部が聞く逆台形を呈する。

埋土は黒色土を主体とし、縄文・弥生土器片・土師器・須恵器片、5cm～20cm大の磚を多量に混入する。遺物・埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。

遺物は縄文・弥生土器・フレイク・土師器・須恵器が少量出土した。

S X196 (第64図)

-D区のL T 46グリッドで検出した。北側をS D121により、西側をS X195により切られてい、そのため全容は不明であるが、残存する形態から径100cmの不整形を呈すると思われる。底面上は緩い起伏があり、S D121側、すなわち北側へ傾斜する。深さは7cm～17cmを測り、壁は緩く立ち上がる。

埋土は7層に分層した。黒褐色土を主体とし、地山粒を混入するが、下層ほど地山粒の混入が多い。

遺物は土師器・須恵器が僅少出土した。

S X209 (第68図)

D区のL Q57グリッドで検出した。平面形は隅丸方形で、遺構の規模は坑口部136cm×245cm、坑底部115cm×213cm、深さ24cm～31cmである。底面は緩い起伏がある。壁は北西壁が緩く立ち上がり、他はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は14層に分層した。全体的には2つに大別できる。一つは1～4層の黒色土主体層、もう一つは5～13層の灰黄褐色土主体層である。遺物は各層から出土しているが、傾向として5層以下からの出土が多い。遺物および埋土の堆積状況から、短時間に埋められたと考えられる。特に5層以下はこの可能性が強い。

遺物は縄文・弥生土器、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S X216 (第34・78図)

D区のL N48グリッドで検出した。S X217より新しく、S X160より古い。平面形は略円形で、遺構の規模は坑口部径107cm×127cm、坑底部径70cm×94cm、深さ16cm～22cmである。底面は緩い起伏をもち丸底を呈する。壁は緩く立ち上がる。

埋土は6層に分層した。黒色土を主体とする。地山粒を少量混入するが、4層ではブロック状に多量に混入する。

遺物は縄文・弥生土器、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S X217 (第34・78図)

D区のL N・L O48・49グリッドで検出した。東側がS X216・160によって切られているため全容は不明であるが、平面形は梢円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部152cm×270cm、坑底部159cm×165cm、深さ28cm～38cmである。底面は緩い起伏をもち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。西壁直下に径32cm×60cm、深さ13cmのビット、北壁寄りに径17cm×30cmのビットがあるが、本遺構との新旧は不明である。

埋土は15層に分層した。黒褐色土を主体とし、全体的に地山粒を混入する。炭化物は上層に多く混入し、地山粒・地山ブロックは下層に多く混入する。遺物は少量含まれているが、大部分は8層から出土している。

遺物は縄文・弥生土器、フレイクが少量、土師器・須恵器が僅少出土した。

S X229 (第67図)

C区のM B・MC53・54グリッドで検出した。平面形は不整形を呈し、坑口部330cm×573cm、坑底部300cm×512cm、深さ22cm～34cmを測る。底面は起伏をもち、壁は緩く立ち上がる。中央部に口径170cm、底径138cm、深さ20cmを測る円形状の落ち込みがある。壁は南東が垂直に立ち上がり、他は緩く立ち上がる。

埋土は6層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とし、地山粒・地山ブロック・土器片を混入

する。炭化物の混入は1～4層に多くみられる。グライド化しているせいか粘性が強く、しまりもある。円形状の落ち込みの埋土は褐色土を主体とし、炭化物を少量混入する。

遺物は縦文・弥生土器が多量、フレイクが少量、須恵器、中世陶器が僅少出土した。

S X230 (第67図)

C区のMB53・54グリッドで検出した。北西壁側をS X229により切られているため全容は不明であるが、平面形は不整形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部290cm×460cm、坑底部245cm×310cm、深さ35cm～40cmである。底面は起伏をもち、南東壁および残存する北西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北東壁・南西壁は底面から立ち上がった後、緩い段をもちながら立ち上がる。

埋土は7層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とする。地山粒・地山ブロックを多く混入し、炭化物・土器片も各層に含まれている。南東部分では最下層に層厚のある褐色土がみられ、全体的にグライド化した粘質土でしまりがある。

遺物は縦文・弥生土器が多量、フレイクがやや、土師器・須恵器、炭化物が少量出土した。

S X233 (第63図)

D区のLR49・50グリッドで検出した。中央をSD168、北西をSX234に切られ、南西をSK235・SX328と切り合つたため、その全容は不明であるが、平面形は不整梢円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部168cm×200cm、坑底部152cm×190cm、深さ12cm～16cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北東部にあるビット(口径35cm、底径20cm、深さ14cm)は本遺構より新しい。

埋土は3層に分層した。黒褐色土であるが、下層ほど炭化物の混入が多い。

遺物は出土しなかった。

S X234 (第63図)

D区のLR49・50グリッドで検出した。中央(北西から南東)をSD168に切られているが、平面形は梢円形を呈する。遺構の規模は坑口部173cm×252cm、坑底部164cm×244cm、深さ8cm～12cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北東壁寄りにあるビットは径19cm、深さ5cmを測り、南東隅寄りのビットは径40cm、底径13cm、深さ23cmを測るが、本遺構より新しいビットである。

埋土は5層に分層した。黒褐色土を主体とし、1・2層は地山粒を多量し、焼土粒を少量混入する。埋土の堆積状況から短時間に埋められたと思われる。

遺物は出土しなかった。

S X238 (第63図)

D区のLR50・51グリッドで検出した。南北方向に長軸をもつ溝状を呈するが、中央部を東

西にS D244、南端をS X239によって切られているため全容は不明である。遺構の規模は上面幅60cm、底面幅35cm～50cm、深さ22cm～25cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩く立ち上がる。埋土は6層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とする。上層では炭化物を混入し、下層では地山ブロックを多く混入する。

遺物は土範型が出土した。

S X239 (第66図)

D区のL R50グリッドで検出した。S X238の南端を切って構築された、平面形が円形を呈する土坑である。遺構の規模は坑口部径70cm×75cm、坑底部径48cm×52cm、深さ26cm～30cmである。底面は平坦であるが、南から北へ緩く傾斜する。壁はほぼ直立に立ち上がる。

埋土は5層に分層した。黒褐色土を主体とし、1・3・4層は地山粒・地山ブロックの混入が多く、遺物は各層に含まれている。堆土の堆積状況から短時間に埋められた可能性が強い。

遺物は縄文・弥生土器が出土した。

S X248 (第76図)

D区のL S57-58グリッドで検出した。北東部でS X129と切り合っているため全容は不明であるが、平面形は横円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部55cm×75cm、坑底部42cm×69cm、深さ11cm～18cmである。底面は中央に向かって緩く傾斜し、径8cm×14cm、深さ8cmのピット状の落ち込みに移行する。

埋土は3層に分層した。黒褐色土であるが、1層は地山粒・炭化物を多く混入し、3層は湿性がある。

遺物は出土しなかった。

S X254 (第54図)

D区のL Q55グリッドで検出した。南西隅部はS X50により切られているため全容は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部212cm×236cm、坑底部190cm×222cm、深さ16cm～20cmである。底面は貼床が施されており、中央に向かって緩く傾斜し、しまりがあって堅緻である。貼床は床面から4cm～17cmである。

埋土は貼床を含めて3層に分層した。1・2層は黒色土で炭化物・焼土粒を少量混入し、貼床は、黒色土と地山ブロックの混合土である。

遺物は縄文・弥生土器がやや、フレイクが少量、土師器・須恵器がやや、鉄製品が僅少出土した。

S X255 (第69図)

D区のL Q54グリッドで検出した。平面形は不整形で、遺構の規模は坑口部96cm×137cm、坑底部24cm×40cm、深さ25cmである。底面は平坦で、壁がだらだらと緩く立ち上がる上綱状の

断面形を呈する。

埋土は7層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とするが、全体的に地山粒・地山ブロックの混入が多く、短時間に埋められた様相を示す。

遺物はフレイクが僅少出土した。

S X259 (第54図)

D区のL Q55グリッドで検出した。S X50より新しい。平面形は不整方形で、遺構の規模は坑口部45cm×50cm、坑底部40cm×44cm、深さ7cm～16cmである。底面は起伏があり、西寄りに径28cm×21cm、深さ10cmのビットがある。

埋土は3層に分層した。1・2層は黒褐色土、3層は黒色土で、地山粒・地山ブロックを混入する。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが僅少出土した。

S X265 (第69図)

D区のL O55グリッドで検出した。調査区の北東端にかかり、さらに南東部をS D134が切っているため全容は不明であるが、平面形は略円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部径145cm、坑底部径138cm、深さ5cm～10cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面にあるビット状の落ち込みはいずれも本遺構より古い。

埋土は黒褐色土の單一層で、炭化物・地山粒を多量に混入する。また、骨片を少量混入し、土器片は中央部から集中して出土している。遺物の出土状況、埋土の堆積状況から短時間に埋め戻されたと考える。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイク、土師器・須恵器が僅少出土した。

S X266 (第64・81図)

D区のL T・MA46・47グリッドで検出した。北東隅部でS D121と切り合うが、新旧関係は不明である。平面形は不整方形を呈し、遺構の規模は坑口部196cm×332cm、坑底部190cm×304cm、深さ12cm～25cmを測る。底面は起伏が著しく、一部疊層に達している。壁は北・西壁が緩く、南・東壁がほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は4層に分層した。黒褐色土と地山土がブロック状に混合し、炭化物・土器片を少量、礫を多量に混入する。埋土の堆積状況から短時間に埋められたと考えられる。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フレイクが少量、土師器・須恵器が少量出土した。

S X309 (付図3)

D区のMA・MB52グリッドで検出した。調査区の西端を南北に伸びるS L323の東辺に位置する。S L323から東方向に舌状に張り出す溝状を呈し、東西幅210cm、南北幅180cmを測る。西側はS L323に開口していたと考えられる。壁は緩く立ち上がり、底面はS L323に向かって

緩く傾斜する。

埋土は調査時の不手際から詳細な観察ができたかったが、弥生土器片が多く含まれていた。

遺物は細片で図示できなかった。

S X310 (第39図)

B区のM I 47グリッドで検出した。環状を呈するSD279の内側に位置し、北東隅部がSD279によって切られているため全容は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部71cm×74cm、坑底部66cm×67cm、深さ10cmである。底面は緩い起伏をもち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は4層に分層した。黒褐色土を主体とし、炭化物を多量に混入する。また、2層には焼土粒が少量混入する。

遺物は縄文・弥生土器が少量出土した。

S X311 (第39図)

B区のM I 46グリッドで検出した。環状を呈するSD279の内側に位置し、平面形は不整形を呈する。遺構の規模は坑口部40cm×52cm、坑底部21cm×48cm、深さ9cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。北壁にある径30cmのピットは本遺構より新しい。

埋土は黒褐色土の單一層で、炭化物・地山粒を少量混入する。

遺物は縄文・弥生土器が僅少出土した。

S X312 (第40図)

B区のMK・ML 57グリッドで検出した。北西側がSD281により切られているため全容は不明であるが、北西から南東に長軸をもつ不整橢円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部200cm×125cm、坑底部80cm×40cm、深さ39cmを測る。底面は起伏が著しく、壁は開口部に向かって起伏をもちらながら緩く立ち上がる。

埋土は4層に分層した。1・3層は地山粒・炭化物を少量混入する黒色土で、2・4層は地山粒を多量に混入する黒褐色土である。

遺物は出土しなかった。

S X313 (第40図)

B区のMK・ML 58グリッドで検出した。東西に走る溝状を呈し、東端はSL323に開口している。遺構の規模は上面幅150cm、底面幅120cm、上面長390cm、底面長365cm、深さ32cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦であるが、SL323(東側)に向かって緩く傾斜する。

埋土は4層に分層した。黒色土を主体とし、炭化物・黒色灰・地山粒を混入する。3層は黒色灰であるが、層厚があまりなく、普通の堆積とはみられない。下層の4~6層は地山粒とともに礫の混入が多い。

遺物は縄文・弥生土器が少量、フライクが僅少出土した。

S X314 (第40図)

B区のMK・ML59グリッドで検出した。南西から北東に走る溝状を呈し、北東端はS L323に開口している。遺構の規模は上面幅155cm~180cm、底面幅95cm~170cm、上面長315cm、底面長270cm、深さ21cm~30cmを測り、断面形は皿状を呈する。底面は平坦であるが、S L323(北東側)に向かって緩く傾斜する。

埋土は4層に分層した。黒色土・黒褐色土を主体とし、地山粒を少量混入する。最下層の3層には地山粒とともに礫を多く混入する。

遺物は縄文・弥生土器が僅少出土した。

S X315 (第40図)

B区のMN58グリッドで検出した。北東から南西に走る溝状を呈すると思われるが、南西端部は確認の段階でその形跡を留め得なかつたため不明である。遺構の規模は上面幅80cm~120cm、底面幅70cm~100cm、残存する上面長275cm、底面長225cm、深さ6cm~15cmを測る。底面は起伏が著しく、北東に向かって緩く傾斜し、北東端部では、径80cmの円形状に凹んでいる。

埋土は2層に分層した。黒褐色土が主体であるが、1層は炭化物・地山粒を少量混入し、2層は地山ブロックを多量に混入する。

遺物は出土しなかった。

S X316 (第40図)

B区のML58グリッドで検出した。環状を呈するS D281の内側、北東部に位置し、平面形は略円形を呈する。遺構の規模は坑口部径85cm、坑底部径70cm、深さ16cmを測る。底面は緩い起伏があり、壁が緩く立ち上がる皿状の断面形を呈する。

埋土は4層に分層した。黒色土を主体とし、炭化物・地山粒を少量混入する。

遺物は縄文・弥生土器が僅少出土した。

S X317 (第41図)

B区のMP58グリッドで検出した。環状を呈するS D282の北東部に位置し、本遺構の南端はS D282により切られるているが、西に開口する皿状を呈する。遺構の規模は坑口部上幅35cm×80cm、坑底部幅35cm×55cm、深さ40cmである。平面形が弧状を呈するに対し、底面は南北に長軸をもつ方形を呈し、平坦でしまりがある。したがって東西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、底面から孤端部にかけては緩く立ち上がる。

埋土は5層に分層した。黒色土・黒褐色土が主体で、地山粒を混入する。下層および端部は地山ブロック・黒色土ブロックを多量に混入する。

遺物は出土しなかった。

S X318 (第58図)

D区のL S60グリッドで検出した。「匁」の字を呈するS X133の北東端部に位置し、S X133に切られているため全容は不明であるが、平面形は梢円形を呈すると思われる。また、本遺構の東側には不整形の落ち込みがあるが、新旧関係は不明である。遺構の規模は坑口部長径160cm、坑底部長径125cm、深さ7cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は4層に分層した。黒褐色土を主体とし、地山粒を混入する。下層には黒褐色土をブロック状に混入する地山上が堆積する。東側の落ち込みは、径60cmの不整形を呈し、深さ20cmを測り、埋土は地山粒・炭化物を混入する黒褐色土である。

遺物は出土しなかった。

S X319 (第34図)

D区のL N51グリッドで検出した。南側がS K 1113によって切られているため全容は不明であるが、平面形は梢円形を呈すると思われる。遺構の規模は坑口部125cm×155cm、坑底部116cm×148cm、深さ13cm～20cmである。底面は北東側寄りで起伏があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は7層に分層した。黒色土を主体とし、地山粒・地山ブロックを混入する。

遺物は出土しなかった。

S X321 (第40図)

B区のMN59グリッドで検出した。北側をトレンチにより削平したため全容は不明であるが、南北に長軸をもつ溝状を呈すると思われる。遺構の規模は上面幅100cm、底面幅75cm、深さ15cm～25cmを測る。底面は起伏が著しいが、北に向かって若干傾斜する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は3層に分層した。黒色土を主体とし、炭化物・地山粒を混入するが、最下層の3層は地山ブロックを多量に混入する。

遺物は出土しなかった。

S X322 (第40図)

B区のML・MN59グリッドで検出した。北側をトレンチにより、東側をS X314により切られているため全容は不明であるが、南北から東西に「L字」を呈する驚状遺構と思われる。遺構の規模は上面幅32cm～60cm、底面幅14cm～22cm、深さ9cm～18cmを測り、壁が緩く立ち上がる逆台形の断面形を呈する。底面は平坦で、S X314に向かって緩く傾斜する。

埋土は黒色土の単一層で、地山粒を多く混入する。

遺物は出土しなかった。

S X327 (第40図)

B区のMM58グリッドで検出した。平面形は橢円形で、遺構の規模は坑口部70cm×97cm、坑底部64cm×75cm、深さ8cm～11cmを測る。底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。南西壁際で径35cm、深さ17cmのピットと切り合うが、木遺構のほうが新しい。

埋土は黒色土の單一層で、地山粒・炭化物を少量混入する。

遺物は出土しなかった。

S X328 (第63図)

D区のLR49グリッドで検出した。SK235より新しい。平面形は不整形で、遺構の規模は坑口部55cm×95cm、坑底部46cm×86cm、深さ20cm～25cmである。底面は平坦であるが、北側は一段低くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は3層に分層した。全て黒褐色土であるが、炭化物・地山粒・地山ブロックの混入により分層できた。

遺物は出土しなかった。

第2節 出土遺物

1 繩文・弥生時代

本項では遺構内出土遺物のうち、縩文・弥生時代の遺物のみ取り上げる。

(1) 遺構内出土遺物

① 土器

遺構内出土の土器はすべて取り上げたが、摩滅の著しいものも含まれている。土器の時期を特定できるものについて、縩文土器は型式名またはおよその時期を明記し、弥生土器は手取清水第1群土器～第8群土器と各段階で示すこととし、本文中では手取清水1群土器～8群土器などと明記した。なお縩文土器・弥生土器の判断のつくものは、器種名の後に(弥生土器)などと記した。詳細は「第6章 1 縩文・弥生時代の遺構と遺物について」の項を参照されたい。

S A240 (第82図1・2、図版83)

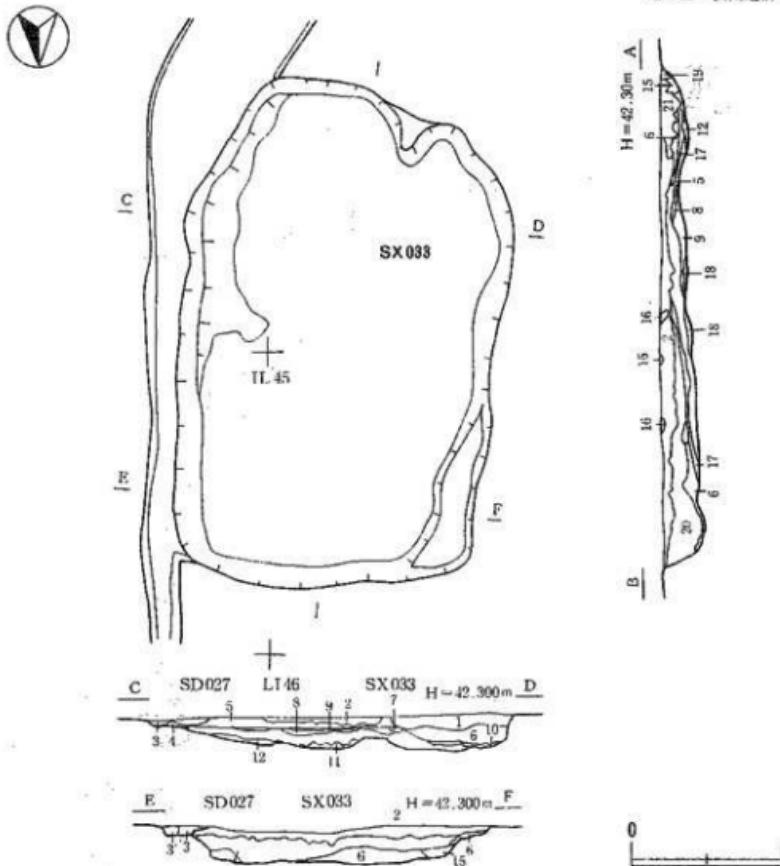
1は鉢形であろう。2は筒形土器か高杯形土器の脚部で、方形文と磨消縩文手法が認められる。2は手取清水4群土器である。

S A241 (第82図3・4、図版83)

3は壺形、4は鉢形土器である。3は口縁部外側がヘラケズリのあとヘラナデ調整があり、体内面には幅1cm前後の粘土紺裏が残りヘラナデ調整が認められる。

S A256 (第82図5・6、図版83)

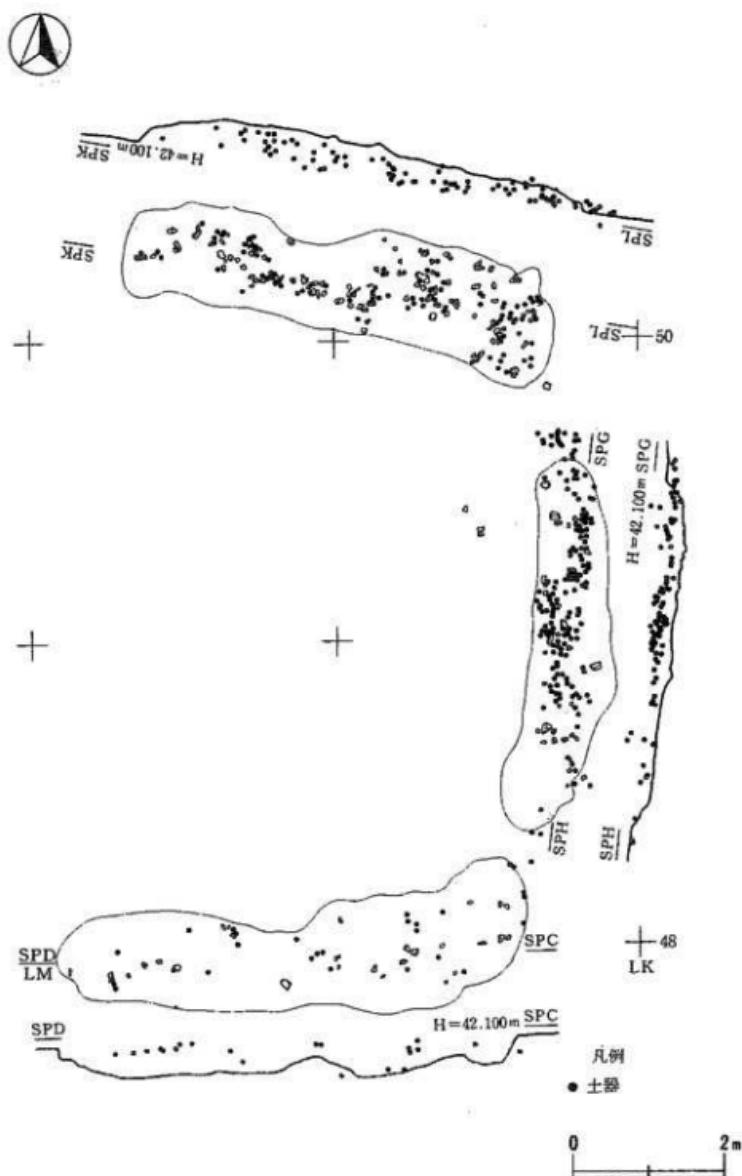
5・6は鉢形(弥生土器)であろう。



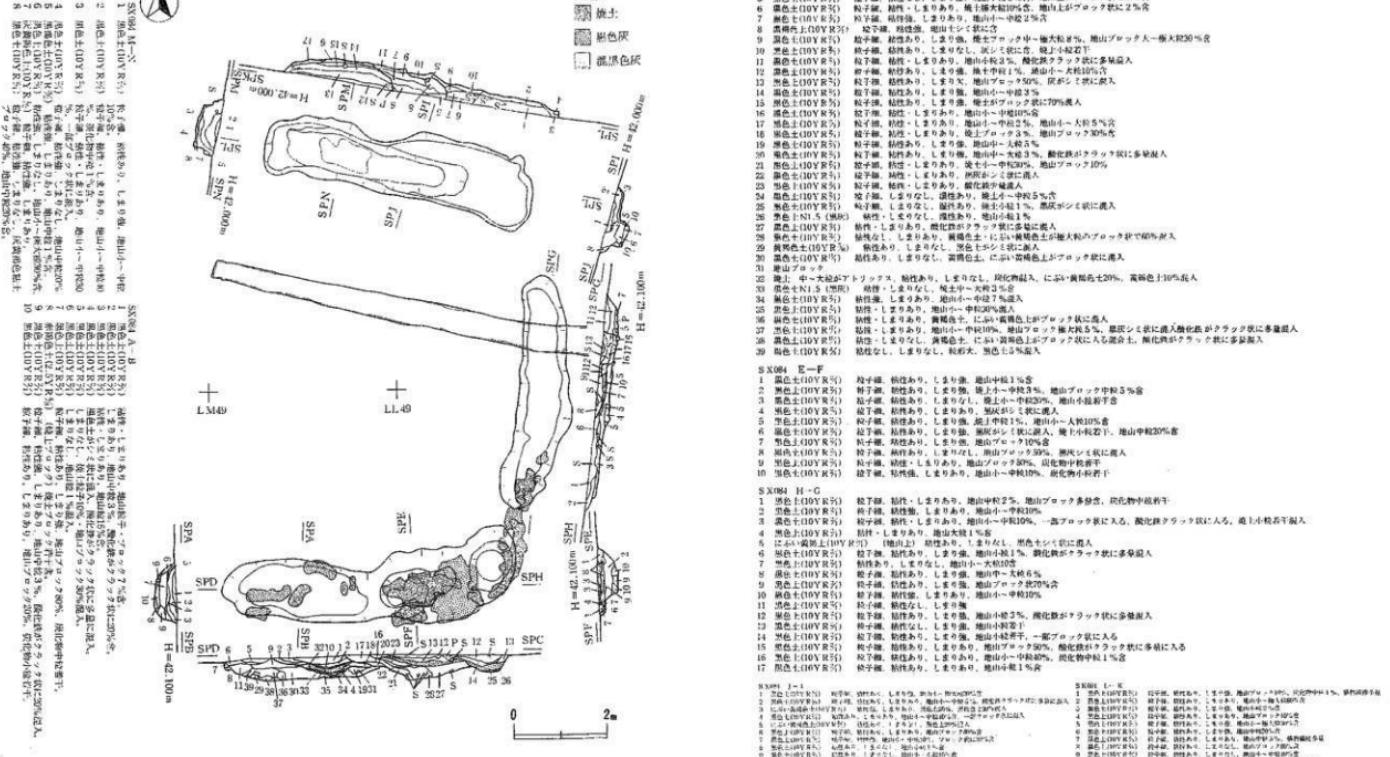
SX033 SD027

- 1 黒粘土(10YR 5%) 粘性なし。しまり良。ローム粒子3%混入
 - 2 黒褐色土(10YR 5%) 粘性なし。しまり良。ロームブロック20%混入
 - 3 黑褐色土(10YR 5%) 粘性なし。しまり良。ローム粒子2%混入。溝の側上
 - 4 黑褐色土(10YR 5%) 粘性あり。しまり良。ローム混入なし
 - 5 黑褐色土(10YR 5%) と黄褐色土(10YR 5%)の混合土。粘性あり。しまり良
 - 6 黑褐色土(10YR 5%) 粘性なし。しまり良。ロームブロック・粒子10%混入
 - 7 黑褐色土(10YR 5%) と黄褐色土(10YR 5%)の混合土。粘性なし。しまり不良
 - 8 黑褐色土(10YR 5%) と黄褐色土(10YR 5%)の混合土。粘性なし。しまり良
 - 9 黑褐色土(10YR 5%) 粘性なし。しまり良。ローム粒子10%混入
 - 10 明黄色土(10YR 5%) と黄褐色土(10YR 5%)の混合土。粘性あり。しまり良
 - 11 黄褐色土(10YR 5%) と明黄色土(10YR 5%)の混合土。砂質
 - 12 黑色土(10YR 5%) 粘性あり。しまり不良。ローム粒子1%混入
 - 13 黄褐色土(10YR 5%) 砂質
 - 14 黑褐色土(10YR 5%) 粘性あり。しまり不良
 - 15 黑褐色土(10YR 5%) と黄褐色土(10YR 5%)の混合土。粘性あり。しまり不良
 - 16 黑褐色土(10YR 5%) 粘性なし。しまり良
 - 17 黑褐色土(10YR 5%) と明黄色土(10YR 5%)の混合土。粘性なし。しまり良
 - 18 黑褐色土(10YR 5%) と明黄色土(10YR 5%)の混合土。砂質
 - 19 黑色土(10YR 5%) と黄褐色土(10YR 5%)の混合土。粘性あり。しまり良
 - 20 黑褐色土(10YR 5%) 粘性あり。しまり不良。ロームブロック・粒子20%混入
 - 21 黑褐色土(10YR 5%) 粘性なし。しまり良。ロームブロック40%混入
- * ロームブロック---黒褐色土(10YR 5%) 粘性あり

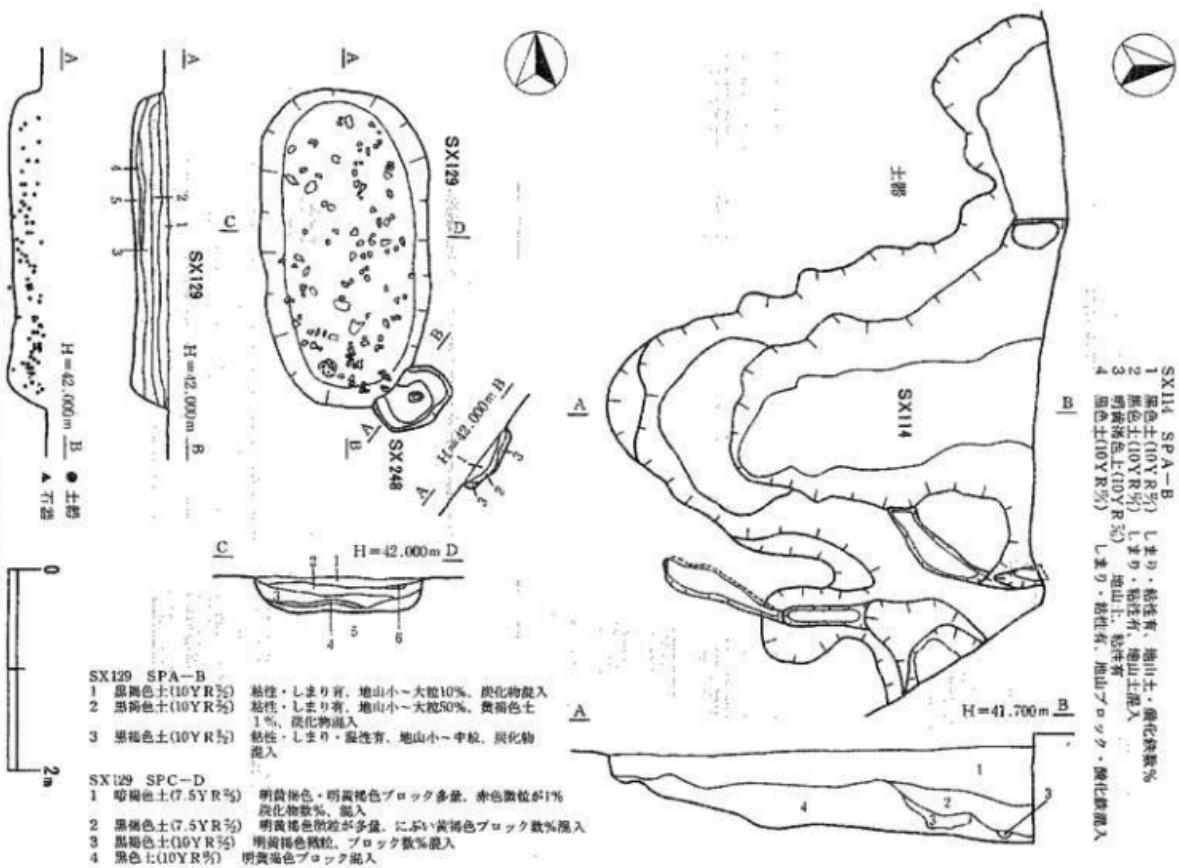
第73図 SX033その他の遺構



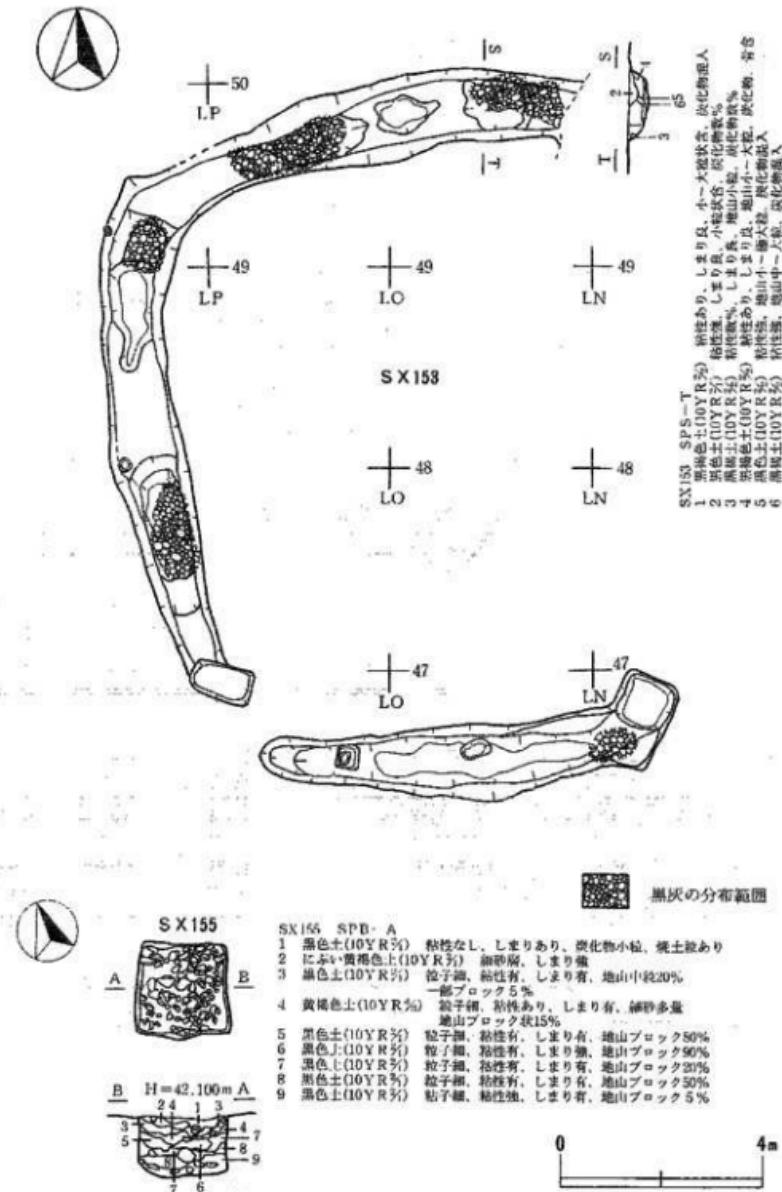
第74図 SX 084遺物出土状況図



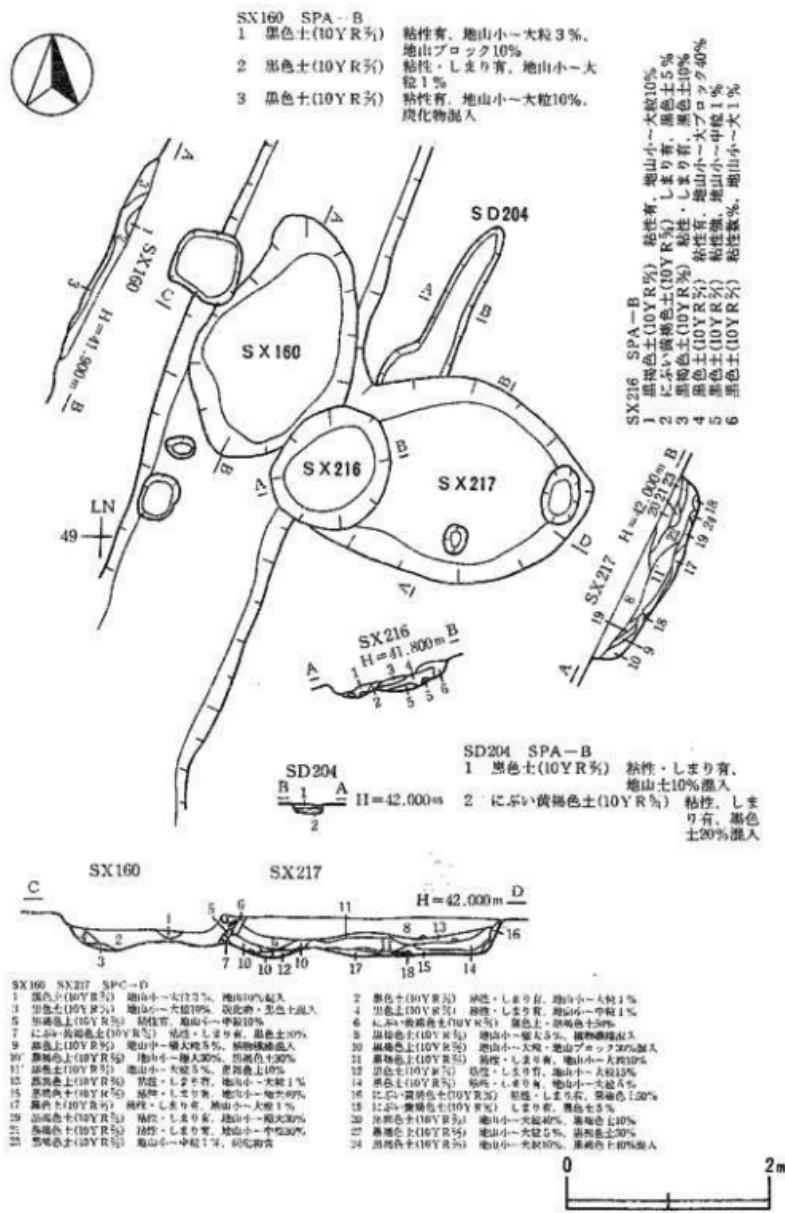
第75図 SX084その他の遺構



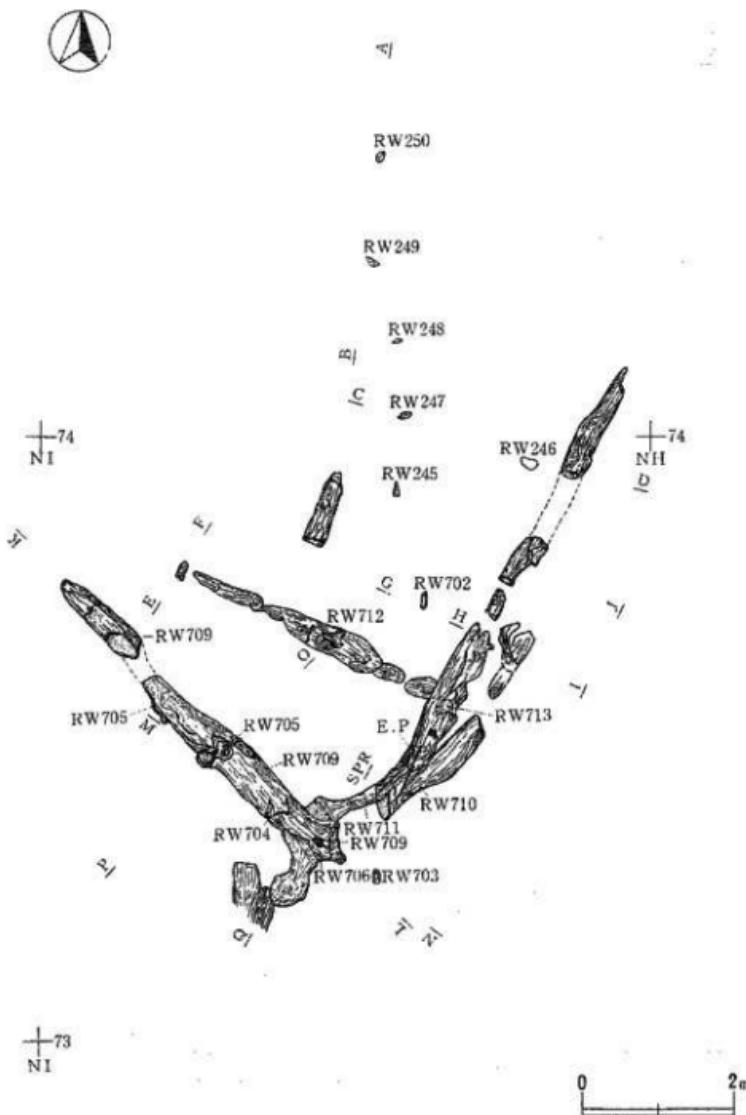
第76図 SX114・129・248その他の地図



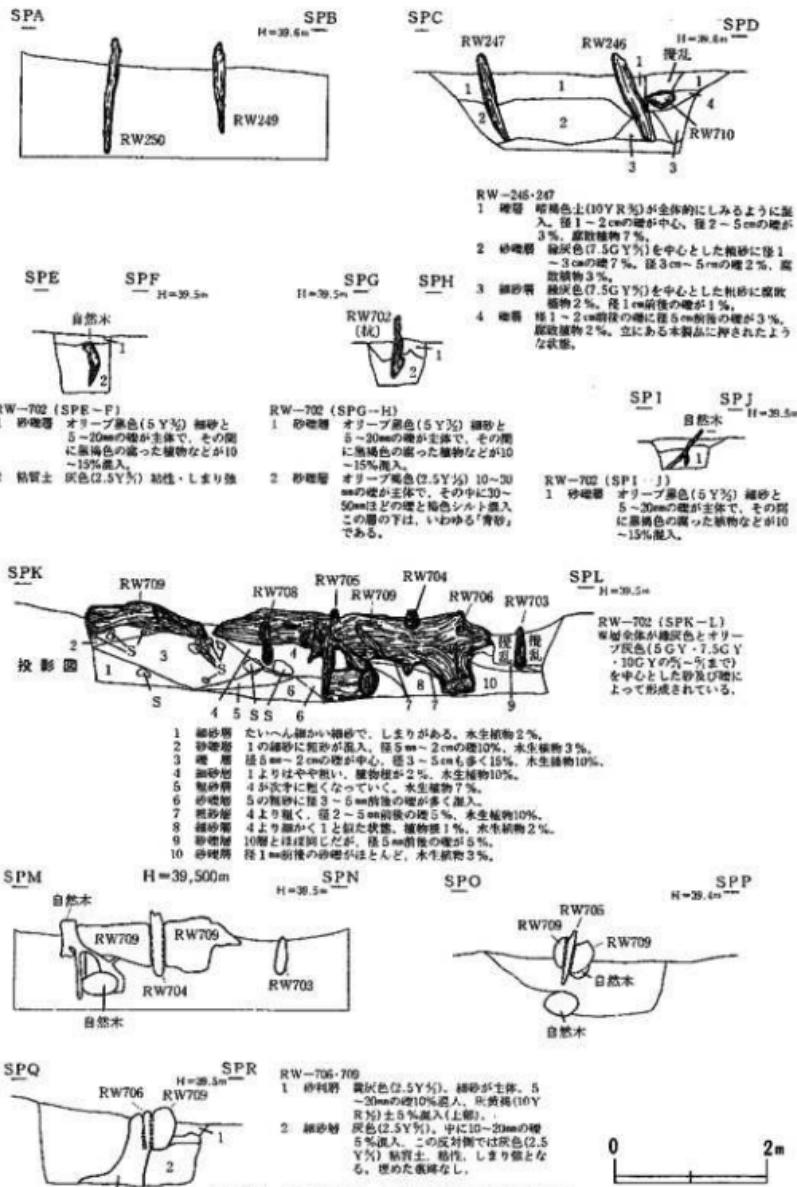
第77図 SX153・155その他の遺構



第78図 SX160・216・217その他の構造



第79図 SX 180 その他の遺構



第80図 SX180その他の遺構土層断面図

S A257 (第82図7、図版83)

7は鉢形であろう。

S B170 (第82図8、図版83)

8は鉢形(弥生土器)で沈線による菱形文である。手取清水5群土器。

S B171 (第82図9、図版83)

9は口縁部外面に刷毛目調整のある鉢形(弥生土器)である。

S B175 (第82図10~14、図版83)

10~14は鉢形(弥生土器)である。11は体部外面は縄文施文後、「変形工字文」的な文様構成を描いている。体部外面と口縁部内面にベンガラのような赤色がわずかに残っている。

S D056 (第82図15~21、図版83)

15~21はいずれも鉢形である。16は手取清水2群上器であり、21は縄文晩期の大洞A'式である。

S D089 (第82図22~25、図版83)

22~25は鉢形である。22は大洞A'式であり、23は手取清水2群土器である。

S D092 (第82図26~28、図版83・84)

26はにぶい橙色を呈する壺形(弥生土器)の肩部であろう。沈線に埋まれた1.3~1.7cmの範囲は薄く削り取られた後、丁寧なヘラミガキ調整を施している。手取清水2~3群土器頃に相当ものであろう。27はにぶい橙色の壺形(弥生土器)の口縁部であり、口縁部外側が肥厚している。28は口縁部途中が膨らむ壺形(弥生土器)である。手取清水2~3群土器。

S D099 (第82・83図29~34、図版84)

29~34は鉢形である。31・34は大洞A'式であり、30は手取清水2群上器である。

S D105 (第83図35、図版84)

35は鉢形(弥生土器)である。手取清水4群上器。

S D106 (第83図36~40、図版84)

36~40は鉢形(弥生土器)である。36は連弧文である。36・38・40は手取清水4群上器である。

S D107 (第83図41~43、図版84)

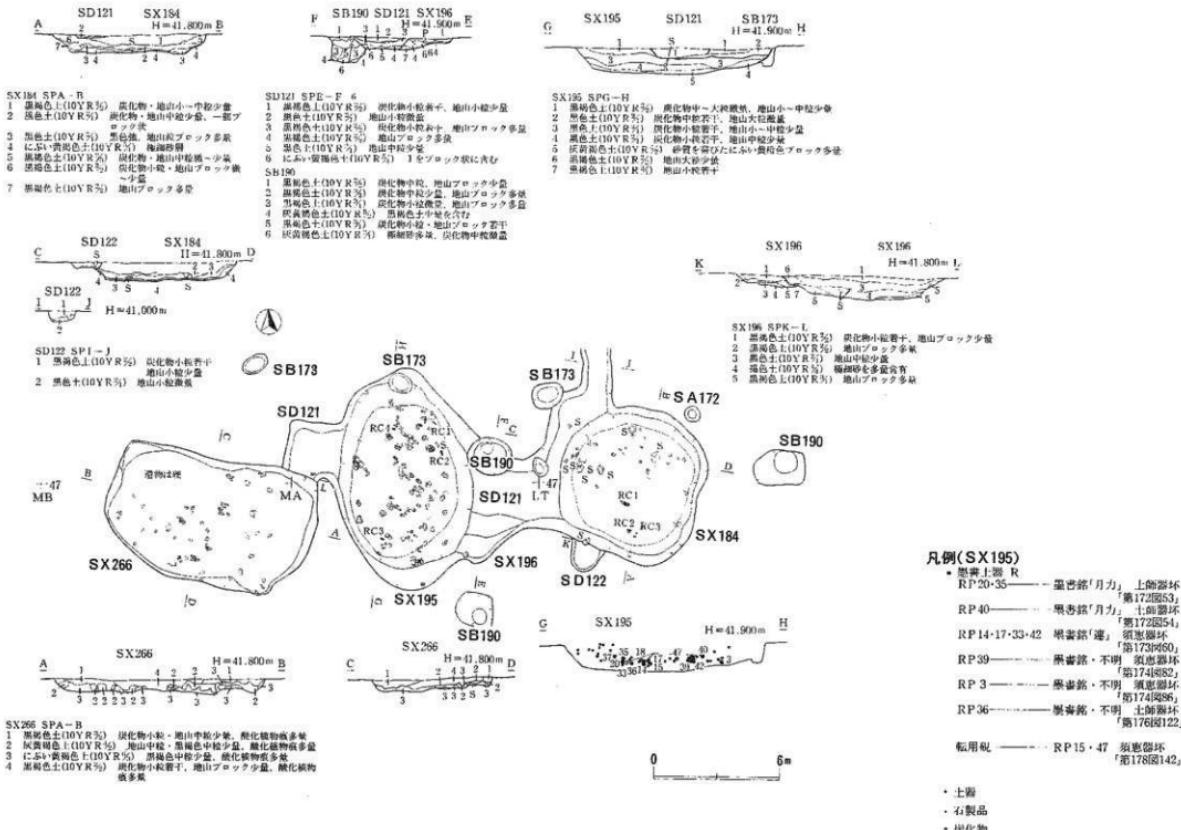
41~43は鉢形である。43は壺形(弥生土器)の体部上半の渦巻文か同心円文である。手取清水5群土器。

S D119 (第83図44、図版84)

44は鉢形である。

S D121 (第83図45、図版84)

45は鉢形であり、小孔がある。



第61図 SX184・195・266その他の遺構 SD121・122塗状遺構

S D122 (第83図46、図版84)

46は鉢形(弥生土器)であり、沈線文・列点文がある。

S D130 (第83図47~61、図版84・85)

47~61は鉢形(弥生土器)である。50は口縁外側が縱方向、内面は横・斜方向の刷毛目調整を認める。49の繩文帯はR L原体で丸底の底部となろう。52は變形土器である。51は手取清水4群土器である。

S D134 (第83図62・63、図版85)

62・63は變形土器で同一個体のようである。口唇部外側には僅3mm位の丸い棒のようなものを斜めに押圧した後、下位に沈線がめぐっている。

S D143 (第83・84図64・65、図版85)

64・65は鉢形であろう。

S D157 (第84図66、図版85)

66は鉢形であろう。

S D163 (第84図67・68、図版85)

67は浅鉢形で、浮線様に表現した変形丁字紋の交点に彫り込みがあり、大洞A'式であるが古い要素をもっている。68は深鉢形であろう。

S D169 (第84図69~71、図版85)

70は台付鉢形土器の右部であり、台部の側面に刻み目が施されている。70は晚期後葉の時期である。71は鉢形であろう。小孔の一部が残されている。

S D191 (第84図72、図版85)

72は鉢形(弥生土器)で、沈線間に列点文が認められる。

S D201 (第84図73~90、図版85・86)

73~75は變形であり、76~77・90は小形の甕に近い鉢形である。78~89は鉢形である。80の繩文はL R原体で沈線の中にベンガラのような赤色がわずかに残っている。78は手取清水1群土器で、82は手取清水4群土器である。

S D203 (第84図91・92、図版86)

91・92は鉢形である。

S D228 (第84図93、図版86)

93は鉢形のA突起であり、大洞A式である。

S D231 (第84図94、図版86)

94は變形である。

S D244 (第84図95、図版86)

95は鉢形(弥生土器)である。手取清水4群上器。

S D246 (第84図96、図版86)

96は鉢形(弥生土器)である。

S D251 (第84図97~101、図版86)

99~101は鉢形(弥生土器)であり、手取清水2~3群上器である。97·98は甌形である。

S D269 (第85図102、図版86)

102は甌形であり、外面全体にススが付着している。

S D279 (第85図103·104、図版86)

103·104は鉢形である。

S D303 (第85図105、図版86)

105は浅鉢形である。大洞C式。

S E086 (第85図106~108、図版86)

106~108は深鉢形である。

S E116 (第85図109~111、図版86)

109は鉢形である。111は底部であり、底面には木葉痕がある。

S K036 (第85図112~117、図版86·87)

113·114は深鉢形であり、115~117は鉢形である。112は大洞A式である。

S K040 (第85図118~123、図版87)

120は浅鉢形で大洞C式である。121は鉢形で、118·119·122は甌形であり、123は底部である。

S K043 (第85·86図124~137、図版87·88)

126~127·130·131は鉢形であり、125·129·135は甌形である。124·128·133は浮線状の工字文であり、大洞A式である。132の底部には数条の刻線がある。

S K059 (第86図138·139、図版88)

138·139は深鉢形·鉢形である。

S K064 (第86図140~143、図版88)

140~142は曉湖の鉢形である。

S K066 (第86図144~147、図版88)

144は鉢形である。145~147は深鉢形·鉢形であり、146は体部下端である。

S K082 (第86·87図148~163、図版88·89)

148~162は鉢形ないし深鉢形の口縁および体部である。157は楕円のL R·R L原体を交互に横位回転させたものである。163の底部は厚波が著しい。

S K083 (第87図164~168、図版89)

166は鉢形、他は深鉢形である。

S K115 (第87図169~177、図版89)

170~175は鉢形、他は菱形か深鉢形である。

S K118 (第87・88図178~188、図版89・90)

178~184・188は鉢形、他は菱形か深鉢形である。178は大洞C₂~A式である。

S K123 (第88図189~191、図版90)

189・191は鉢形である。

S K124 (第88図192~207、図版90・111)

203は菱形(弥生土器)であり肩部に継割線が入る。他はすべて鉢形である。194・197・202は方彌文と磨消繩文手法で描かれている。手取清水4群土器が主体である。

S K128 (第88図208・209、図版90)

209は鉢形である。

S K132 (第88図210~214、図版90)

210~214は鉢形である。210は刷毛目調整がわずかに残り、その上にミガキが認められる。

212は手取清水2群土器である。

S K137 (第88図215、図版90)

215は鉢形(弥生土器)である。

S K138 (第88・89図216~220、図版90・91)

216~218は鉢形、219は菱形か深鉢形、220は高杯形脚部である。216は径2mmの小孔が空いている。220は手取清水2群土器である。

S K145 (第89図221~227、図版91)

222~223は鉢形、221・224~227は菱形ないし深鉢形である。

S K146 (第89図228~230、図版91)

228は鉢形、229は菱形ないし深鉢形である。230は鉢形であろうが、粘土粒を張り付けた突起のようもある。

S K148 (第89図231~235、図版91)

すべて鉢形である。234はL R原体の縄文と磨消繩文手法が認められ、無文部はていねいに研磨されている。234は手取清水4群土器である。

S K162 (第89図236~239、図版91)

238は深鉢形であり、他は菱形か深鉢形である。239の体内面にナデ調整痕が認められる。

S K164 (第89図240~242、図版91)

240は鉢形であり、体外面に黒漆渦が付着している。

S K179 (第89図243~245、図版91)

243は鉢形であり、244・245は深鉢形である。245は手取清水2群土器である。

S K186 (第89図246~247、図版92)

246は方形文の上・下に3条の平行沈線がめぐる。手取清水3群土器。247は深鉢形であろう。

S K187 (第89図248、図版92)

248は鉢形(弥生土器)である。

S K188 (第89・90図249~252、図版92)

249~252は鉢形である。252の胎上に砂粒と微量の金雲母が入っている。

S K189 (第90図253・254、図版92)

253は鉢形、254は深鉢形の底部である。

S K193 (第90図255~257、図版92)

255~257は鉢形土器である。

S K194 (第90図258~269、図版92・93)

261・262は深鉢形、他は鉢ないし浅鉢形である。263は手取清水2~3群土器である。

S K198 (第90図270~271、図版93)

すべて鉢形(弥生土器)である。271は充填磨消繩文手法が施文され、小孔があり、手取清水2~3群土器である。

S K200 (第90・91図272~283、図版93)

247~277・279は鉢形・浅鉢形であり、他は深鉢形ないし鉢形である。279は手取清水2群土器である。

S K202 (第91図284~287、図版93)

284は壺形、285・286は小形の壺に近い鉢形である。284は口唇部に刻み目文、285は縦文が施文されている。287は浅鉢形で手取清水2群土器である。

S K211 (第91図288、図版93)

288は壺形である。

S K213 (第91図289、図版93)

289は鉢形(弥生土器)である。手取清水3群土器。

S K219 (第91図290・291、図版94)

290・291は鉢形である。291は手取清水2群土器である。

S K225 (第91図292~295、図版94)

292は壺形であり、他は鉢形であろう。

S K 247 (第91図296、図版94)

296は浅鉢形であり、手取清水1群土器である。

S K 250 (第91図297、図版94)

297は小形の甕形に近い鉢形であり、口唇部にススが付着している。

S K 252 (第91図298、図版94)

298は鉢形であろう。

S K 267 (第91図299~301、図版94)

299~301は鉢形であり、300・301は口唇部上に突起がある。

S K 280 (第91図302、図版94)

302は小形の甕に似た鉢形土器であろう。

S K I 063 (第91図303、図版94)

303は鉢形であり、T字文は大洞A式である。

S K I 111 (第91図304~310、図版94)

304~309は鉢形であり、310は蓋である。304・306・308は手取清水4群上器であり、307は手取清水5群上器である。310は甕形であろう。体部中央に十字形文と小さな刺突文、粘土粒が付されている。

S K I 112 (第91図311~319、図版94)

315は甕形であり、他は鉢形である。316は手取清水1群土器、313・318は手取清水4群上器、311・318は手取清水5群土器である。

S K I 120 (第10-11図320~323、図版94・95)

320~323はすべて鉢形である。

S R 034 (第92図324・325、図版111)

324は深鉢形で、繩文はLR原体である。325は小形の壺であらうか。繩文は細いLR原体を用いて全面施文後、方形文・同心円文と磨消繩文手法を用いている。繩目と沈線間にベンガラのような赤色がわざかに残っている。

325は手取清水4群上器頃と推定する。

S R 126 (第92図326~330、図版95・111)

326~330は鉢形土器である。330は小波状の口縁であり、全面に斜繩文を施文した後、沈線文・連続山形文・磨消繩文手法を用いて施文している。外底面には凸形文・十字形文をモチーフとした文様がある。326は大洞C₂式であり、327は手取清水2群上器、330は典型的な手取清水4群土器である。

S R 295 (第92-93図331~333、図版111・112)

331・333は菱形、332は筒形か鉢形であろう。331の体外面にはスヌが厚く付着している。底面は網代痕であったらしく、わずかに痕跡をとどめている。333の頸部にはスヌの付着はないが、他の体外面にはスヌの付着が認められるので、頸部に何かあてがった痕跡であろう。332の縄文はL R原体施文後、沈線とナテ調整が認められる。手取清水3～4群土器類と推定する。

S X084 (第93～95図334～386、図版95～97・112)

336・337・357は菱形、他は鉢形である。378には縦刻線が、379には列点文がある。380の口唇部には刷毛目痕とトテ調整痕が認められる。343・347は大洞A'式、335は手取清水2群上器、363は手取清水3群土器、334・350・361は手取清水4群土器、354・370は手取清水5群土器である。

S X133 (第95～97図387～444、図版97～99)

388・389・391・443・444は菱形であり、437は高杯形の脚部、438は底部であり、他はすべて鉢形である。437は高杯形脚部に垂下文が施文され、縄目の中にベンガラ様の赤色が残っている。405は刷毛目工具圧痕による斜格子文、ヘラ压痕文を施文している。刷毛目をもつもの(391・420・425・433・441)、列点文をもつもの(393・404・419・437・442)、刺突文(443)などがある。443の体内面には粘土紐1～2cm幅の痕跡がみえる。444の体内外面にはスヌが付着している。392・403・437など手取清水4群上器が目立ち、前後の時期のものも若干含まれている様相とみてよい。

S X153 (第97・98図445～471、図版99・100)

447・460は菱形であり、471の底部を除いて、他は鉢形である。446・450は口唇部に斜み目があり、445～457・461は小形の菱としてもよい鉢形であり、平行沈線の下位に列点文が並列している。手取清水4～5群上器が主体である。

S X050 (第98図472・473、図版100)

472は鉢形、473は菱形である。

S X081 (第98図474～476、図版100)

474～476は鉢形であり、磨消縄文が認められる。

S X082 (第98図477、図版100)

477は鉢形であろう。

S X113 (第98図478・479、図版100)

478は鉢形、479は蓋である。479は倒皿形の蓋で、体内面の口唇部から体外面にかけてスヌが付着している。479の連続山形と磨消縄文手法は手取清水4群土器の典型である。

S X114 (第98図480～487、図版101)

480～487は鉢形である。481は手取清水1群上器、483は手取清水3群土器である。486は摩滅のため不明。

S X117 (第98図488～491、図版101)

488～491は鉢形土器である。489は浮線状の工字文が描かれている。489は大洞A式である。

S X129 (第98図492～500、図版101)

492～500は鉢形である。497は縄文時代晩期の半齒状文であり、494～499は手取清水4群土器である。

S X131 (第99・100図501～547、図版101～103)

501・547鉢形であり、摩滅した細破片が多い。528は刺突文である。502は手取清水2群上器、509・534は手取清水4群土器である。手取清水3～4群土器が主体である。

S X140 (第100図548～552、図版103)

548は鉢形、他は鉢形である。550は手取清水2群上器、552は「変形工字文」的文様を細い沈線で描いたもので典型的な手取清水4群土器である。

S X141 (第100図553、図版103)

553は鉢形(弥生土器)である。

S X149 (第100図554～560、図版103)

554～560は鉢形である。559は刺突文が認められる。556は大洞A'式、560の方形文は手取清水3群土器、554は手取清水4～5群土器である。

S X159 (第100・101図561～572、図版103・104)

561～572は鉢形土器である。

S X160 (第101図573～581、図版104)

573～581は鉢形上器である。580の胎土は砂粒を全く含まず、色調も灰色で、しかも1本施文具、2条間の縄文はLR原体であり、連続連弧文のような文様を意図したものであろうか。他の上器とは異なり、搬入品であろう。

S X167 (第101図582～598、図版104・105)

583は壺か壺の口縁部、593は高杯形の脚部、他は鉢形である。583は連繋變形文が描かれている。584～586・593は手取清水2群土器、596・597は手取清水2～3群土器、582・583は手取清水5群土器である。

S X182 (第101・102図599～602、図版105)

599～602は鉢形(弥生土器)である。599は刺突文が認められる。

S X184 (第102図603～607、図版105)

603～607は鉢形である。603・604は手取清水4～5群土器である。

S X192 (第102図608~616、図版105)

608・609は變形、611・616は壺形、他は鉢形である。609の口縁部外面にはスヌの付着を認め、頸部には付着していないので、スヌの付かない使い方あるいは頸部に何かを差していたようである。610は壺の口縁部で縄文時代晚期後葉であろう。614は小波状の口縁と頸部に連続する2条の刺突文があり、手取清水5群土器である。

S X195 (第102図617~621、図版105)

608~606は鉢形(弥生土器)である。620は「變形工字文」的な文様の彫り込みが認められ、青森県の字鉄II式の資料に近いものである。

S X200 (第102図622~626、図版105・106)

622~624は鉢形(弥生土器)、625・626は鉢形か壺形であろう。622の口縁部の内外にスヌが付着している。623は刷毛目工具による範圧痕文が羽状に2、3段重なるようであり、小孔も認められる。

S X217 (第102・103図627~630、図版106)

627・629・630は鉢形、628は壺形である。629は手取清水4群土器である。

S X229 (第103・104図631~658、図版106・107・112)

632~636・652は變形、656は高台付鉢の高台、658は底部、他は鉢形である。文様帶のなかに列点文(638・653)、刺突文(648)のあるものがある。655は体内外面に刷毛目調整痕が残り、文様帶は「變形工字文」的な構成であるので、手取清水4群土器である。この他縄文時代晚期(644・649・656)、手取清水1群土器(637)などが認められる。

S X230 (第104~106図659~710、図版107~110・112)

659・661~672・674・683・689は變形、703~707は壺形、他は鉢形であるが、710は蓋の可能性もある。文様帶のなかに刺突文(681・683・691)、列点文(682・689・693・641・698・699)をもつものがある。681の口縁部には縦刻線が認められる。750は文様のモチーフが不明であるが、重菱形文ないし連續山形文に通じるものであろうから、手取清水5群土器と推測する。710は平行沈線と連續山形文があり、手取清水5群土器である。703は壺の肩部であり、沈線文と縦刻線が描かれ、手取清水5群土器である。704~706は壺形の胴部で、円心円文・渦巻文・三角文が描かれているので、手取清水5群土器である。707は壺の頸部で、手取清水5群土器である。710は鉢形でありスヌの付着はない、しかしこの形態は蓋の可能性もある。

S X234 (第106図711、図版110)

711は鉢形(弥生土器)である。

S X238 (第106図712・713、図版110)

712は鉢形、713は變形である。712は變形工字文の交点に粘土粒が残っている。713は口縁部

外面にていねいな刷毛目調整痕と平行沈線文が認められヌスが付着している。

S X239 (第106図714~716、図版110)

714~716は浅鉢形で、胎土・色調ともに近似しているので同一個体と考えられる。

S X248 (第106図717、図版110)

717は鉢形(弥生土器)で、ていねいな磨消細文手法が認められる。

S X254 (第106図718~723、図版110)

718~723は鉢形土器(弥生土器)である。

S X259 (第106図724~725、図版110)

724は鉢形(弥生土器)である。725は甕形か深鉢形である。

S X265 (第106図726~727、図版110)

726~727は鉢形(弥生土器)である。726は丸く中空の刺突具による刺突文である。

S X266 (第106図728、図版110)

728は鉢形である。

S X313 (第106図729、図版110)

729は鉢形である。

② 石 器

遺構内出土の定形的な石器はほとんど図示した。分類は遺構外出土の石器に準じている。

S A224 (第107図731、図版113)

731は定角式磨製石斧で、折損している。

S A256 (第107図732、図版113)

732は石鎌で、凸基有茎鎌である。

S A281 (第107図733、図版113)

733は擦石で、側面には敲打痕も残る。

S 1060 (第107図734、図版113)

734は範状石器である。形状は楕形で、刃部は丸みをもち両刃である。b類に属する。

S K I 112 (第107図735~741、図版113)

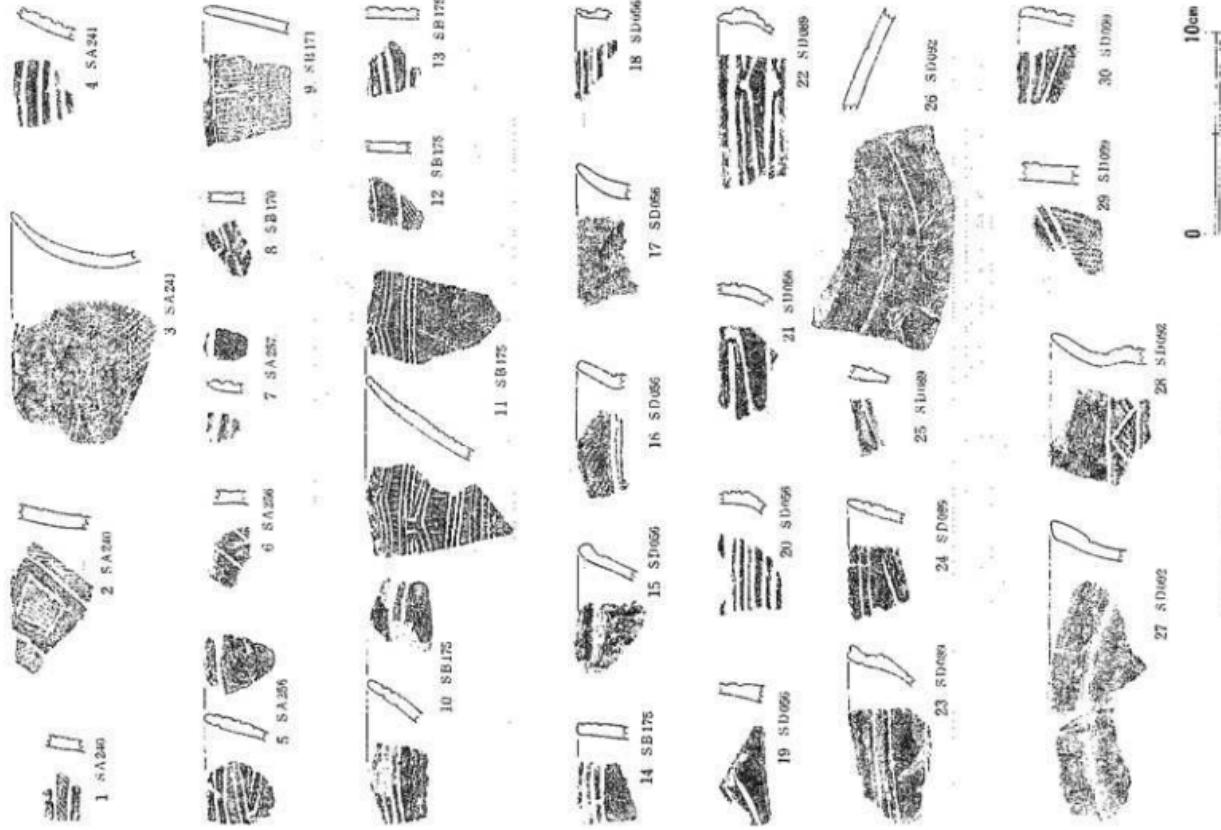
735~736は石鎌で、735は凸基有茎鎌、736は尖基鎌である。737は石槍でも類である。738~739は範状石器で、いずれもc類である。740は凹石である。741は搔器である。

S E116 (第108図742、図版113)

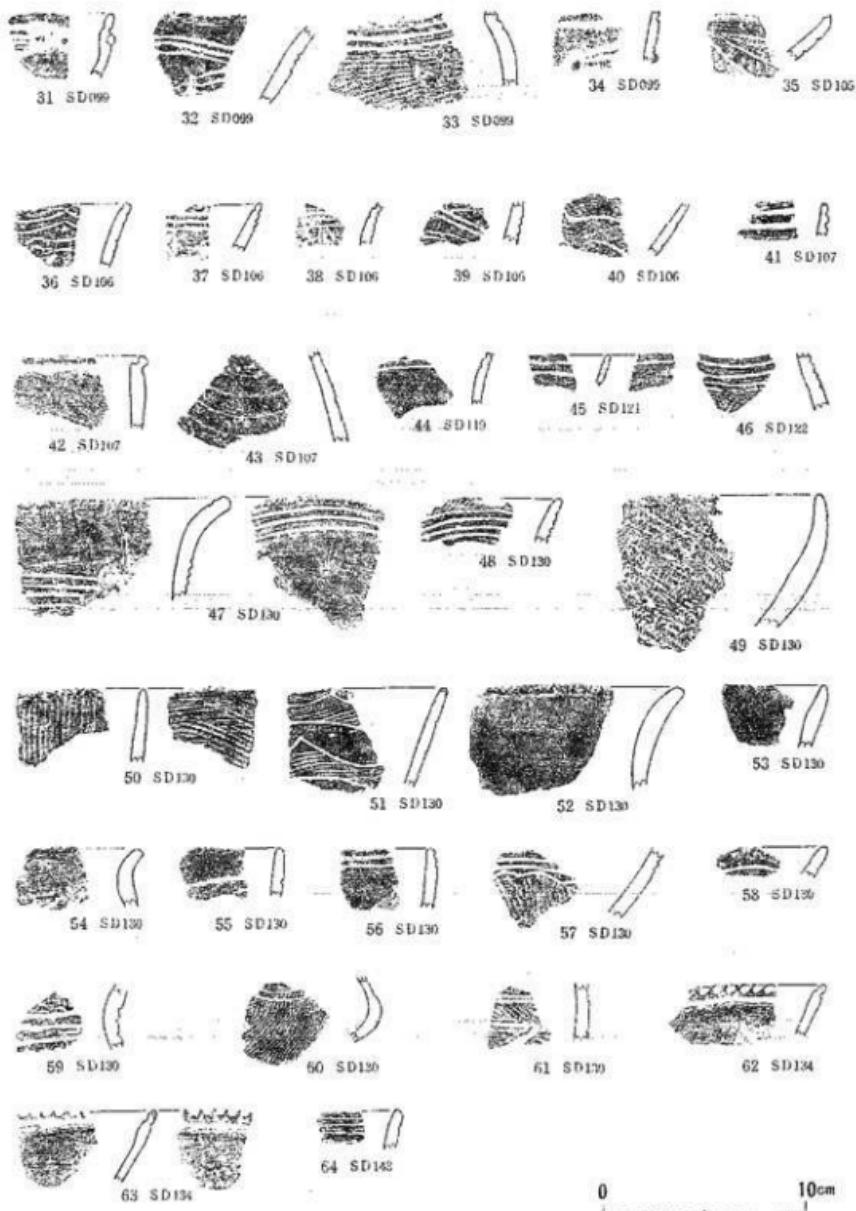
742は搔器である。

S E125 (第108図743~744、図版113)

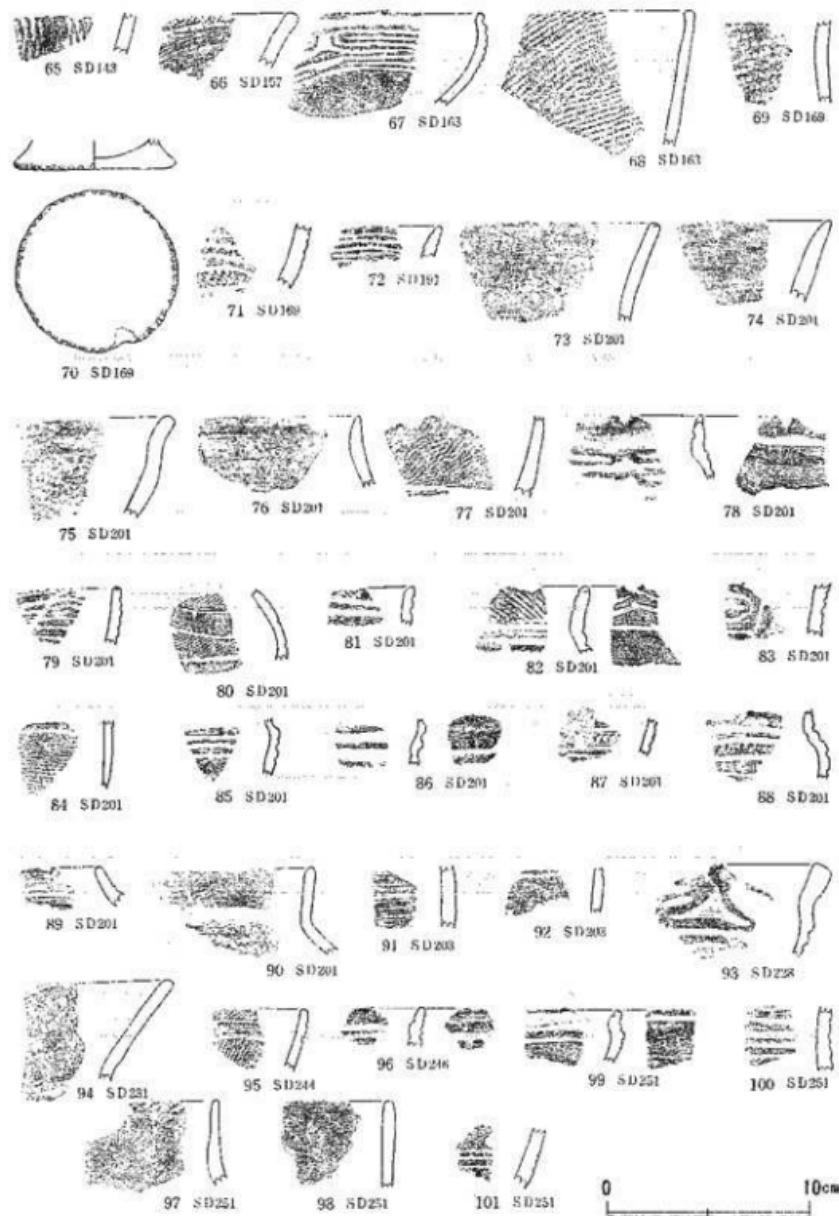
743は凹石で、744は石咀である。



第82図 遷擣内出土遺物(縄文・弥生時代)…

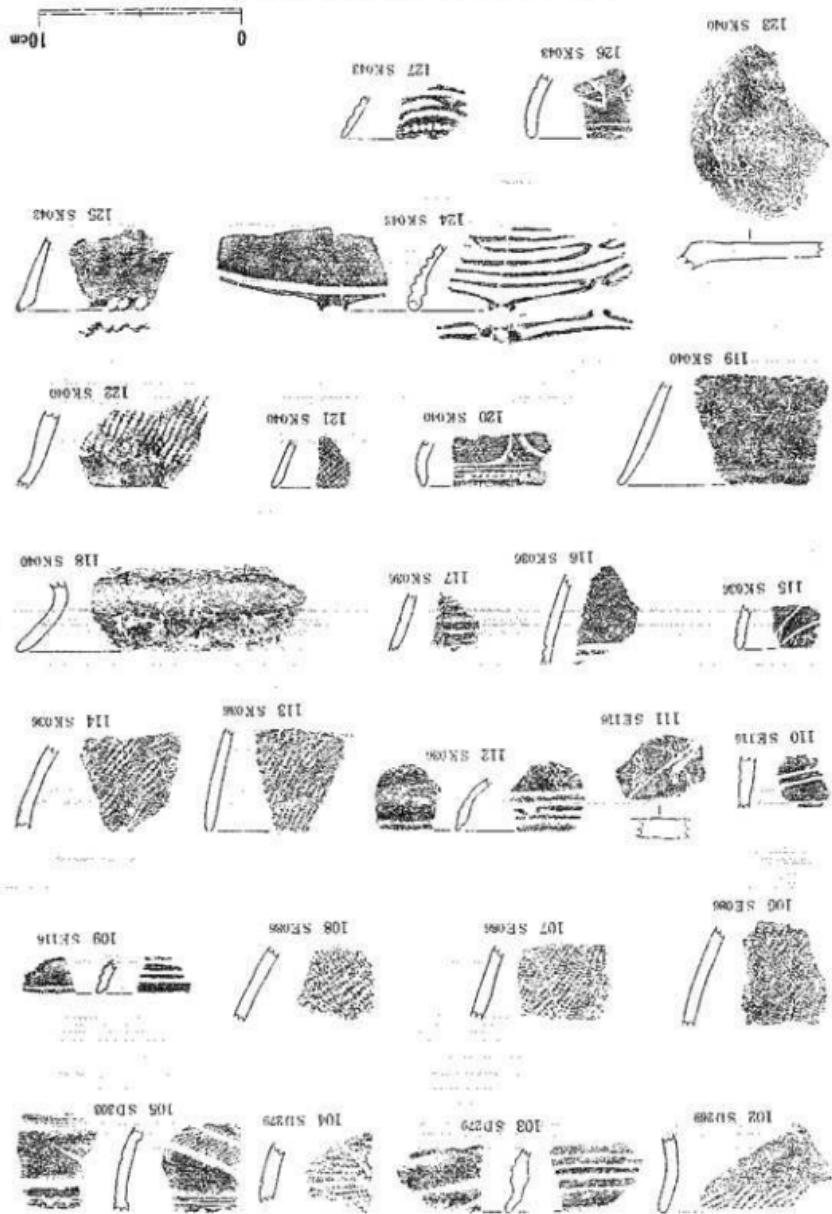


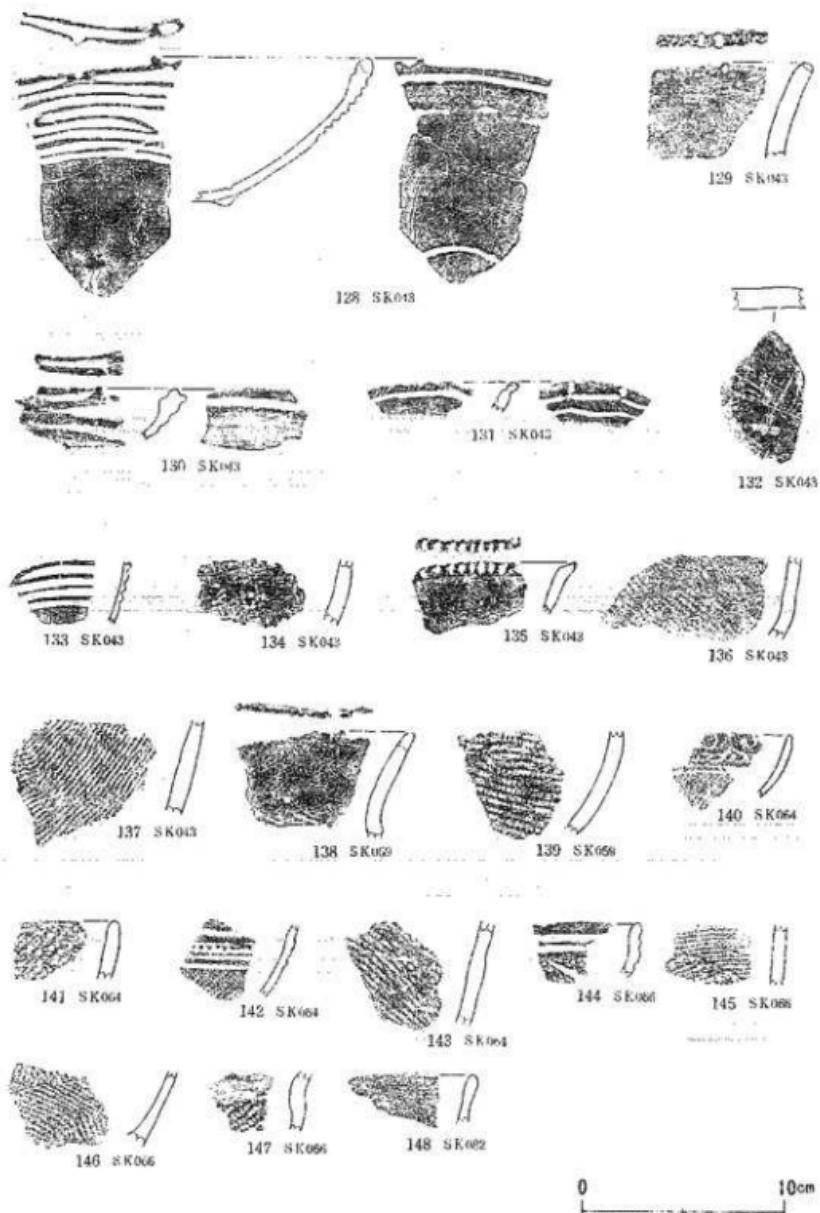
第83図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代)・2



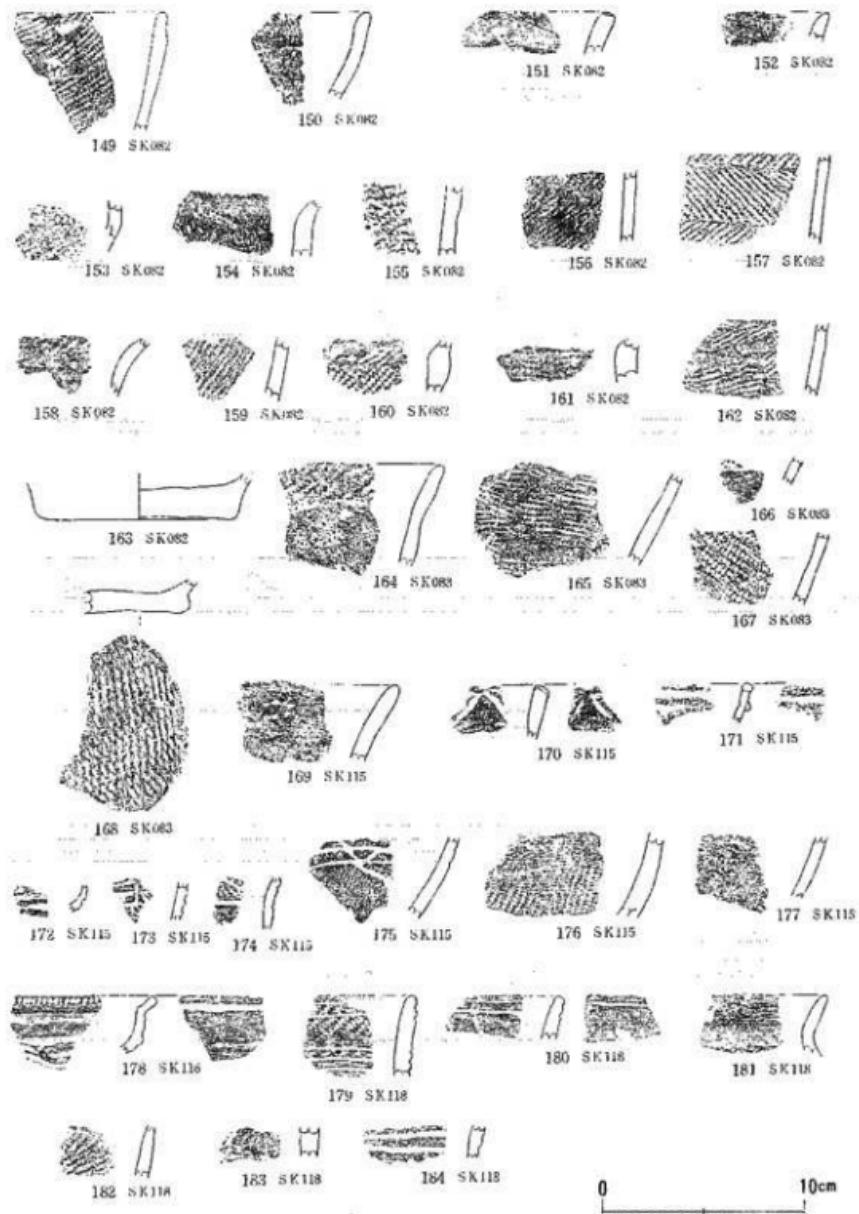
第84図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代)- 3

第85圖 遺構內出土遺物(鐵文·漆牛跡等) - 4



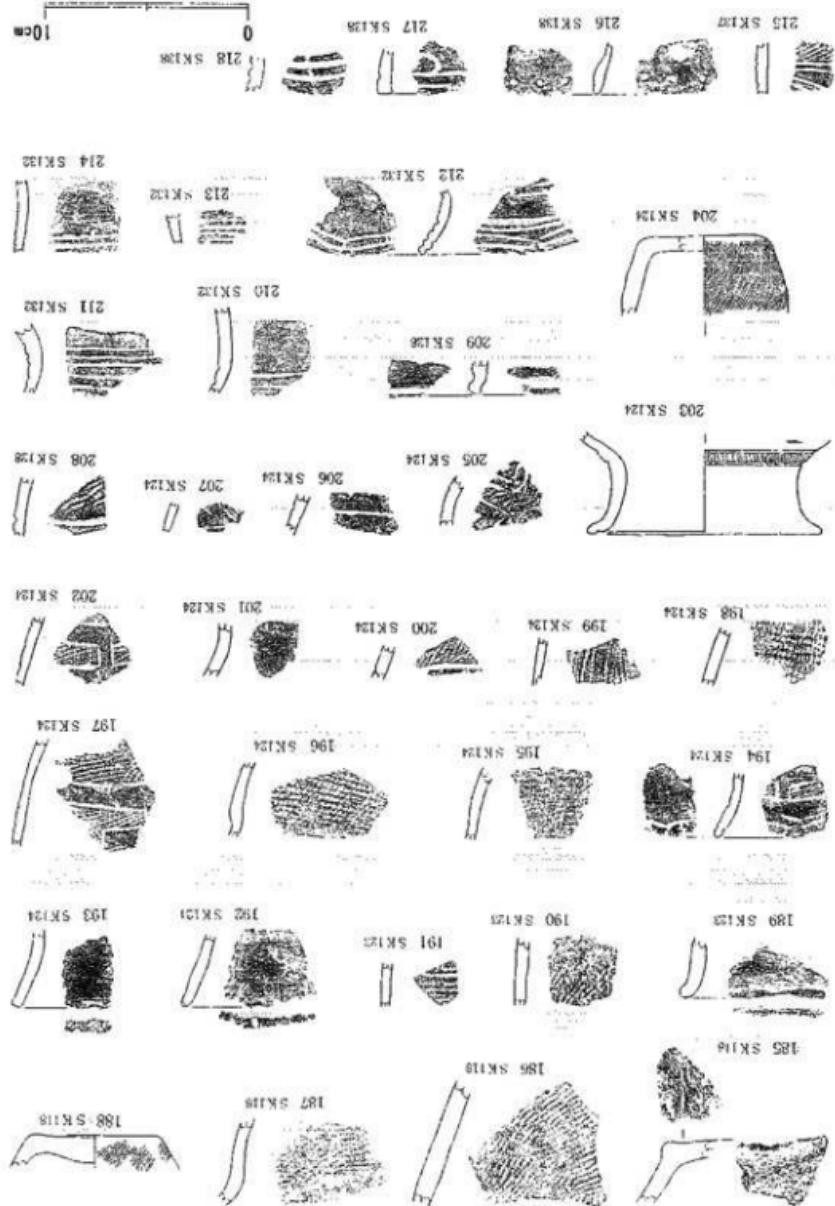


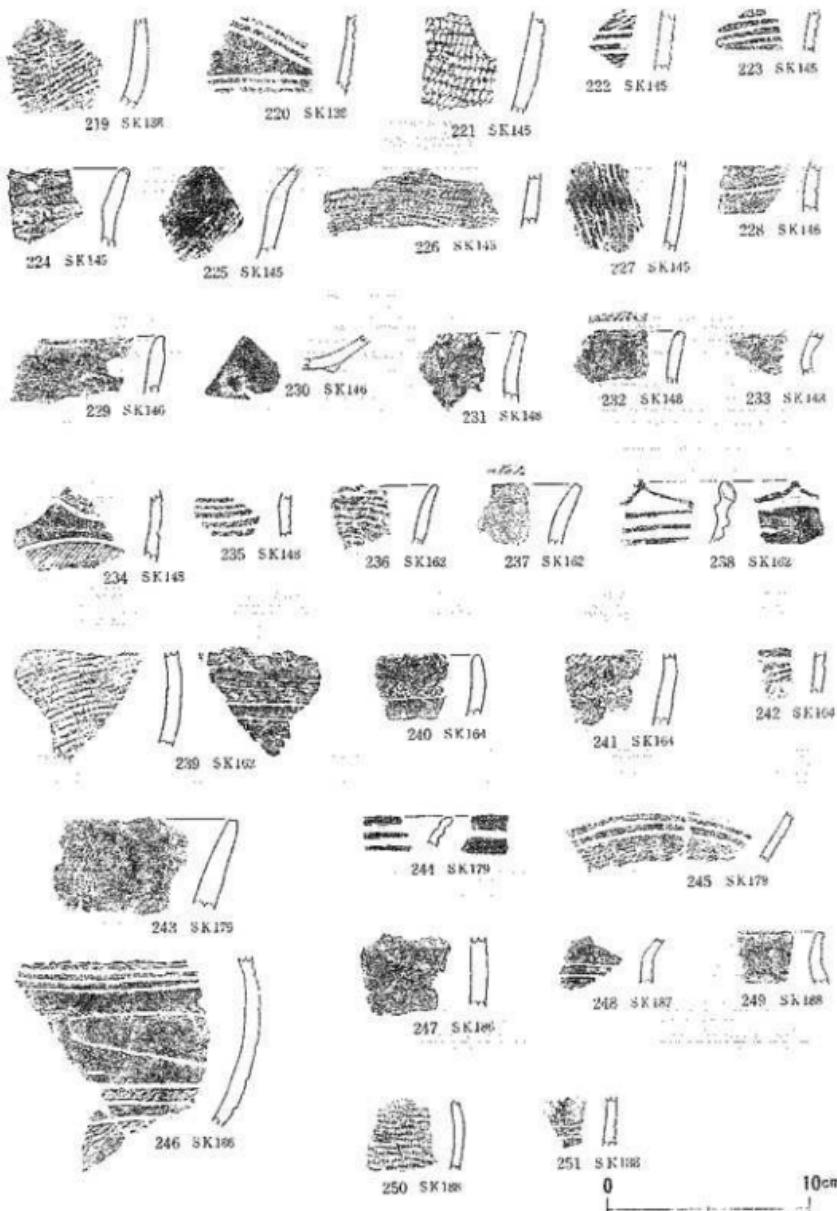
第86図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代)-5



第87図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代) - 6

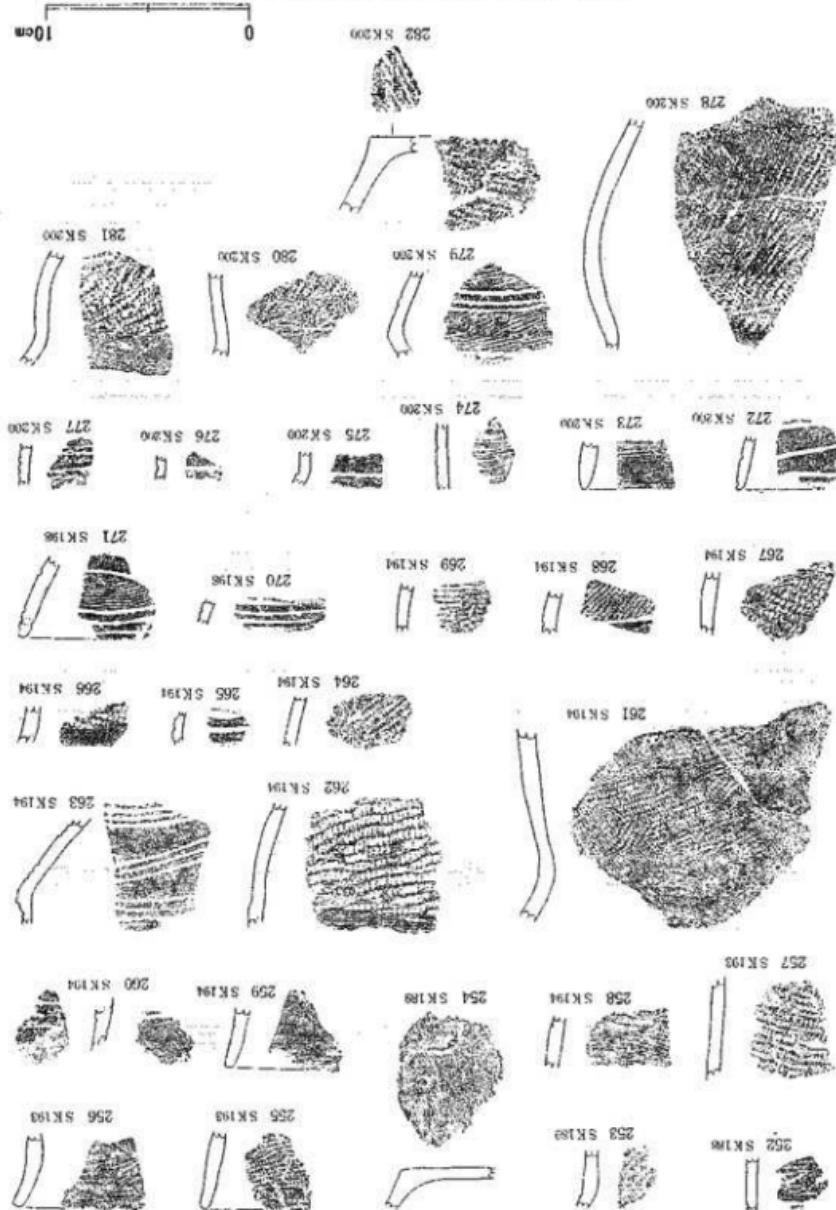
第88圖 遺構內出土遺物(鐵文·鄧生時代)一7





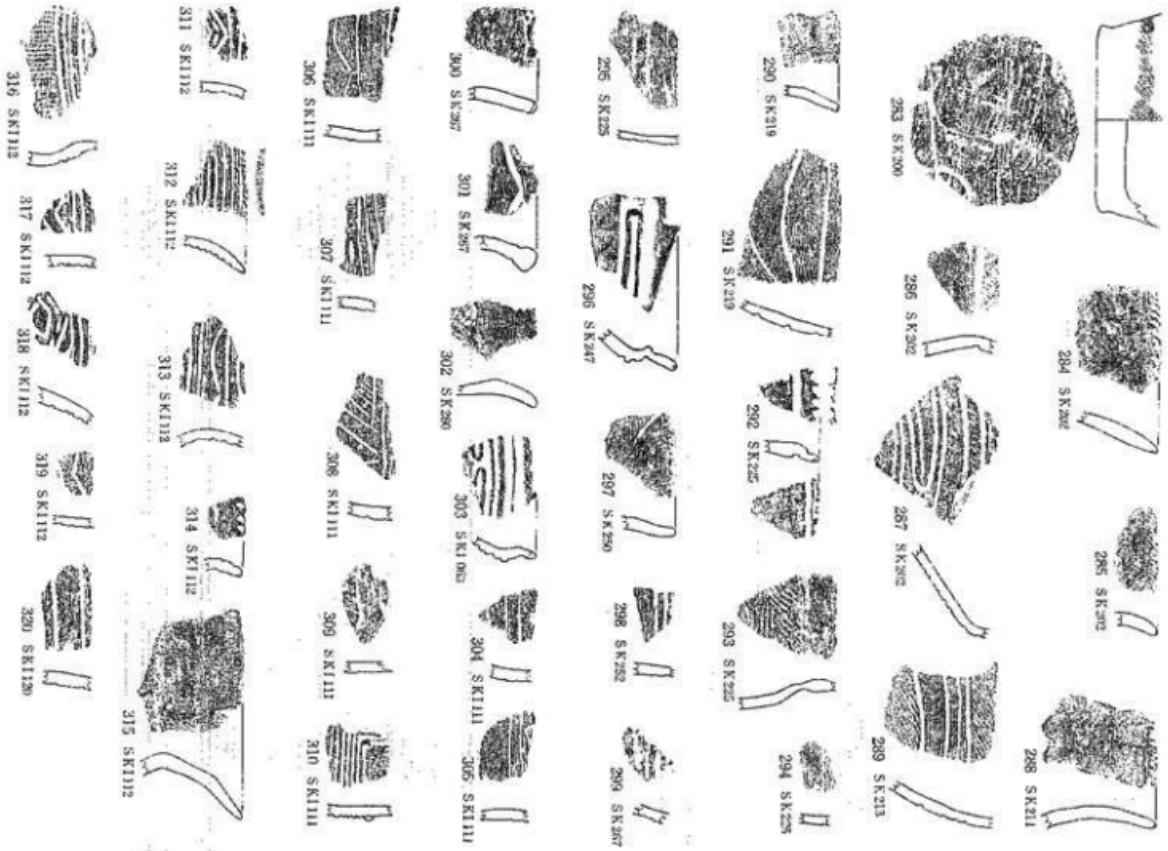
第89図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代) -8

第90圖 遺構內出土遺物(鐵文·鄒生詩代) - 9

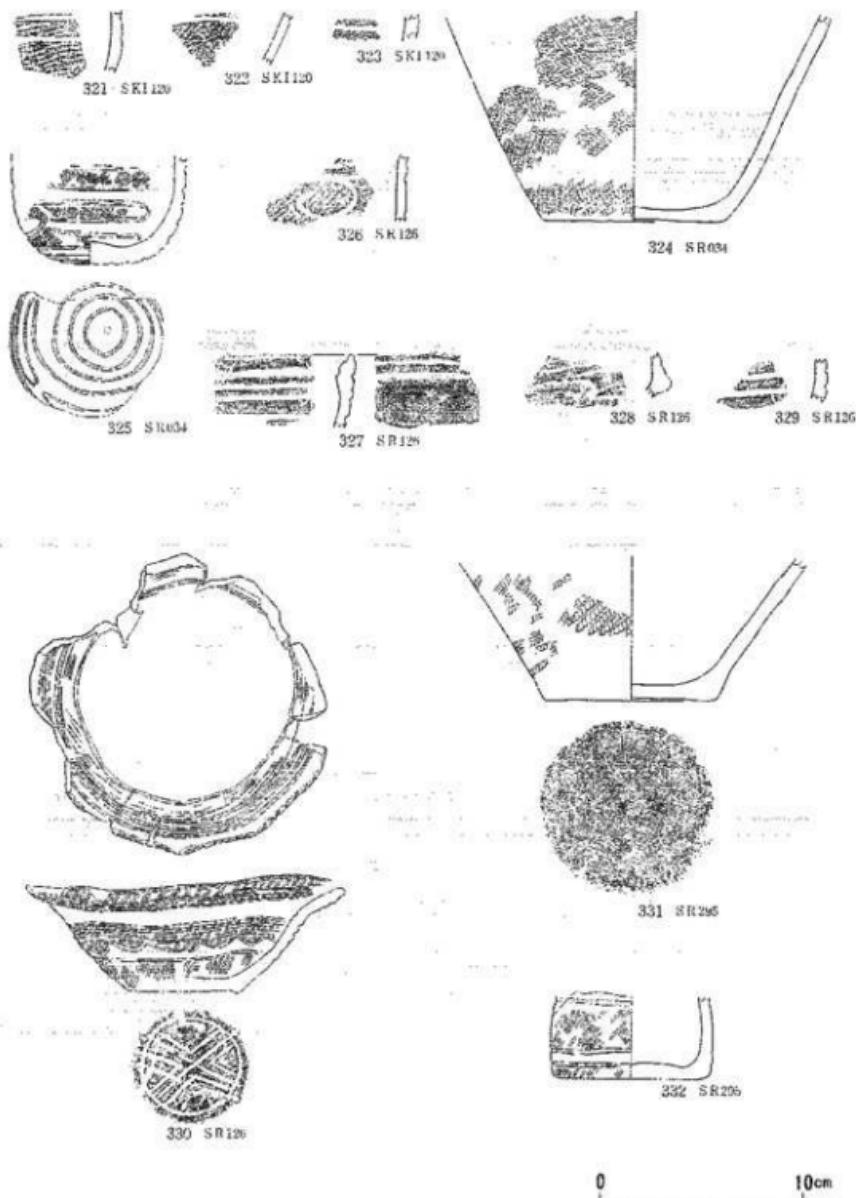


第4系 鐵文·鄒生詩代

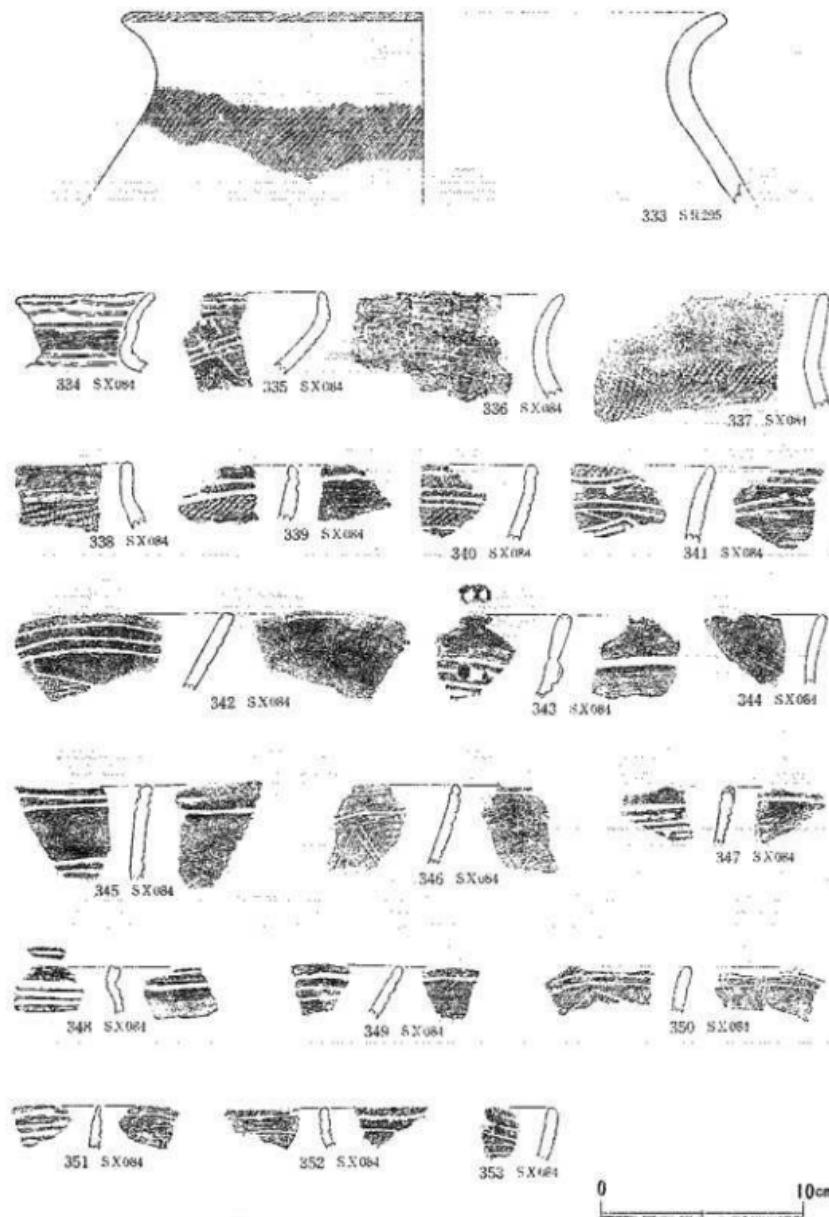
第2期 出土遺物



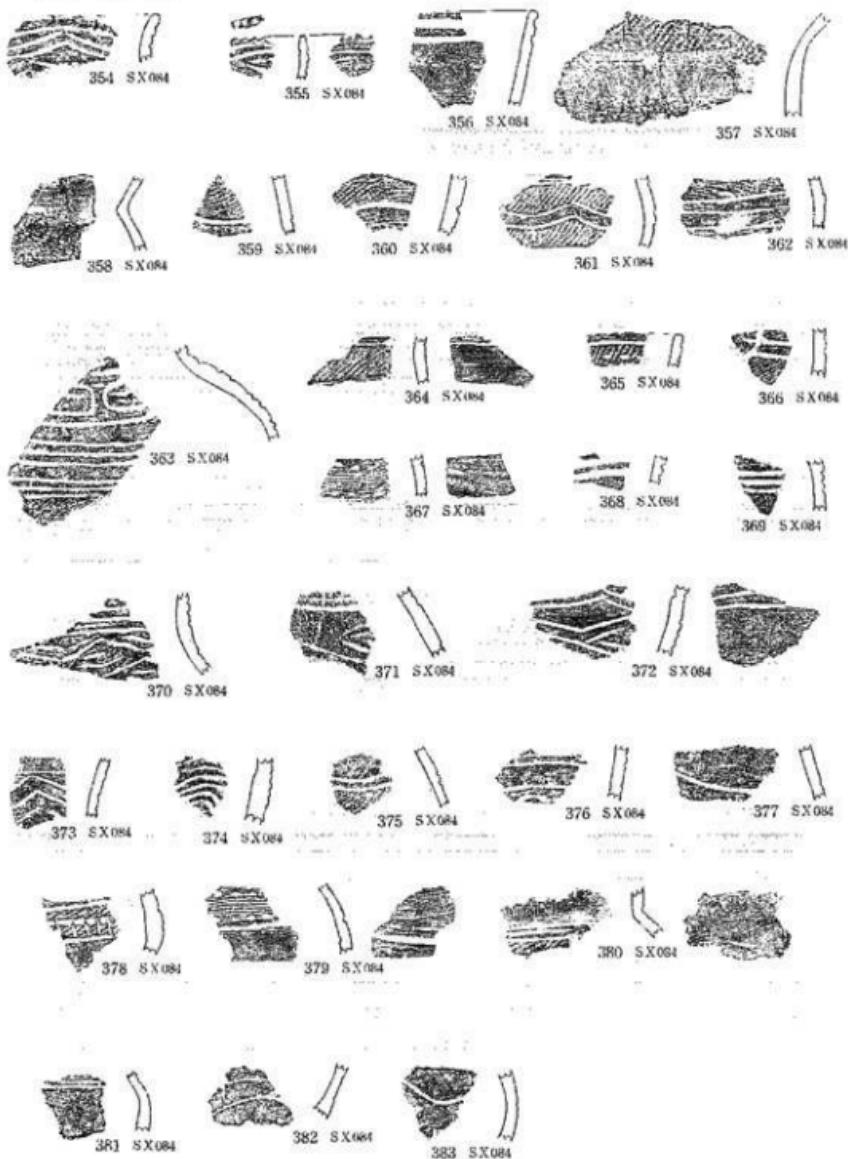
第91図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代) -10



第32図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代)—11

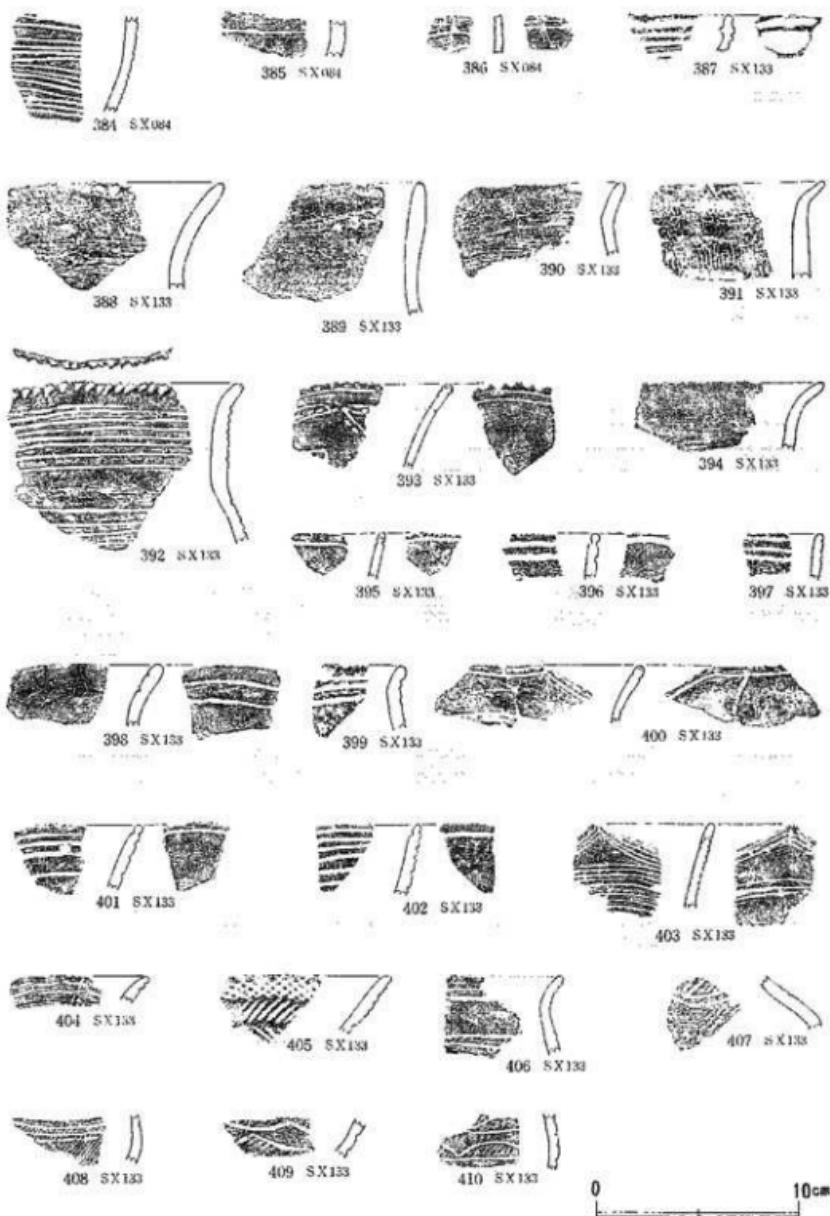


第93圖 造構内出土遺物(縄文・弥生時代) - 12



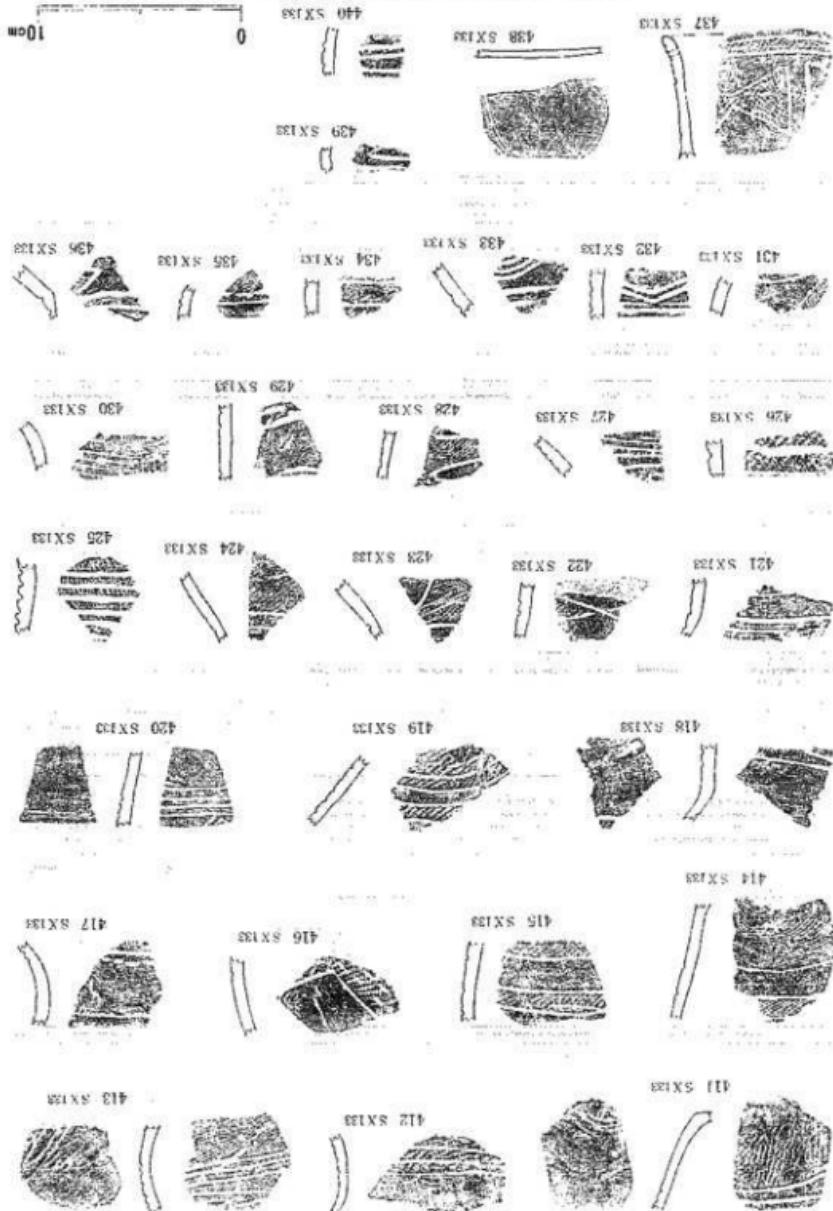
0 10cm

第94図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代)-13

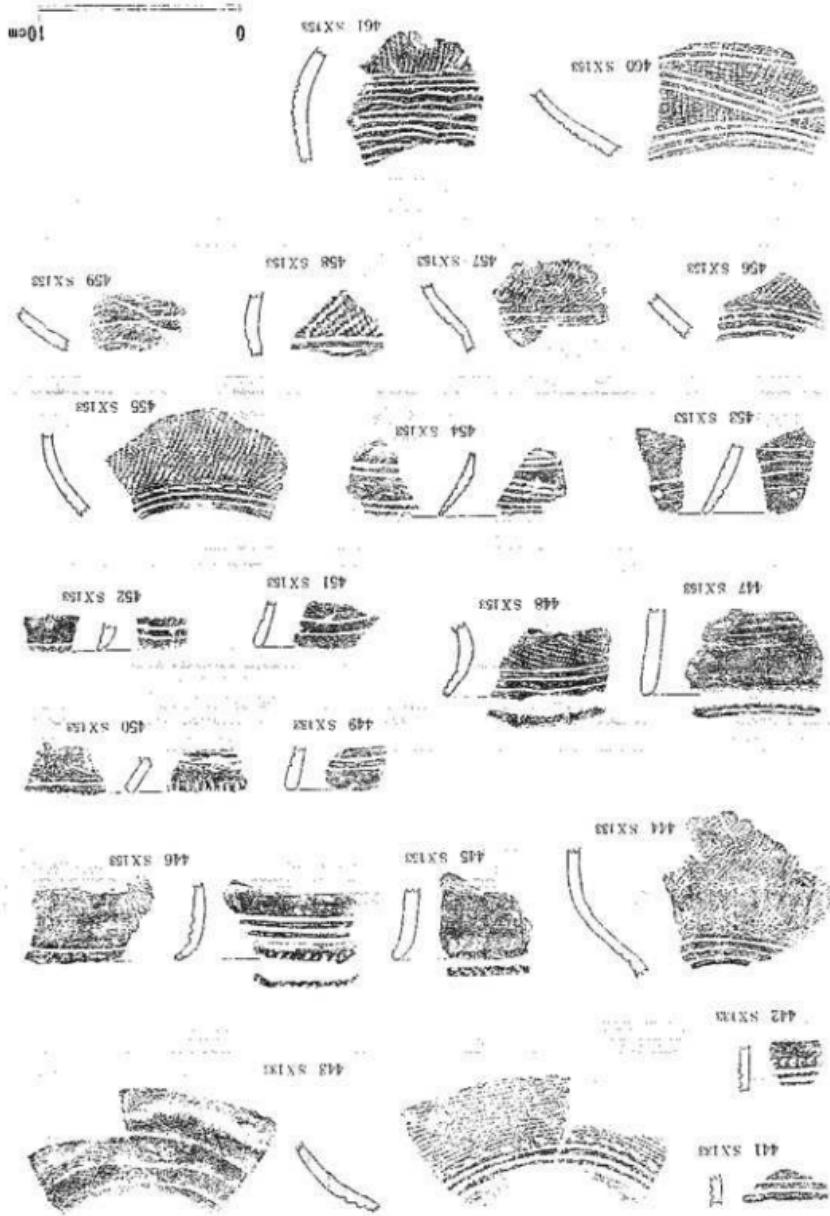


第95図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代)-14

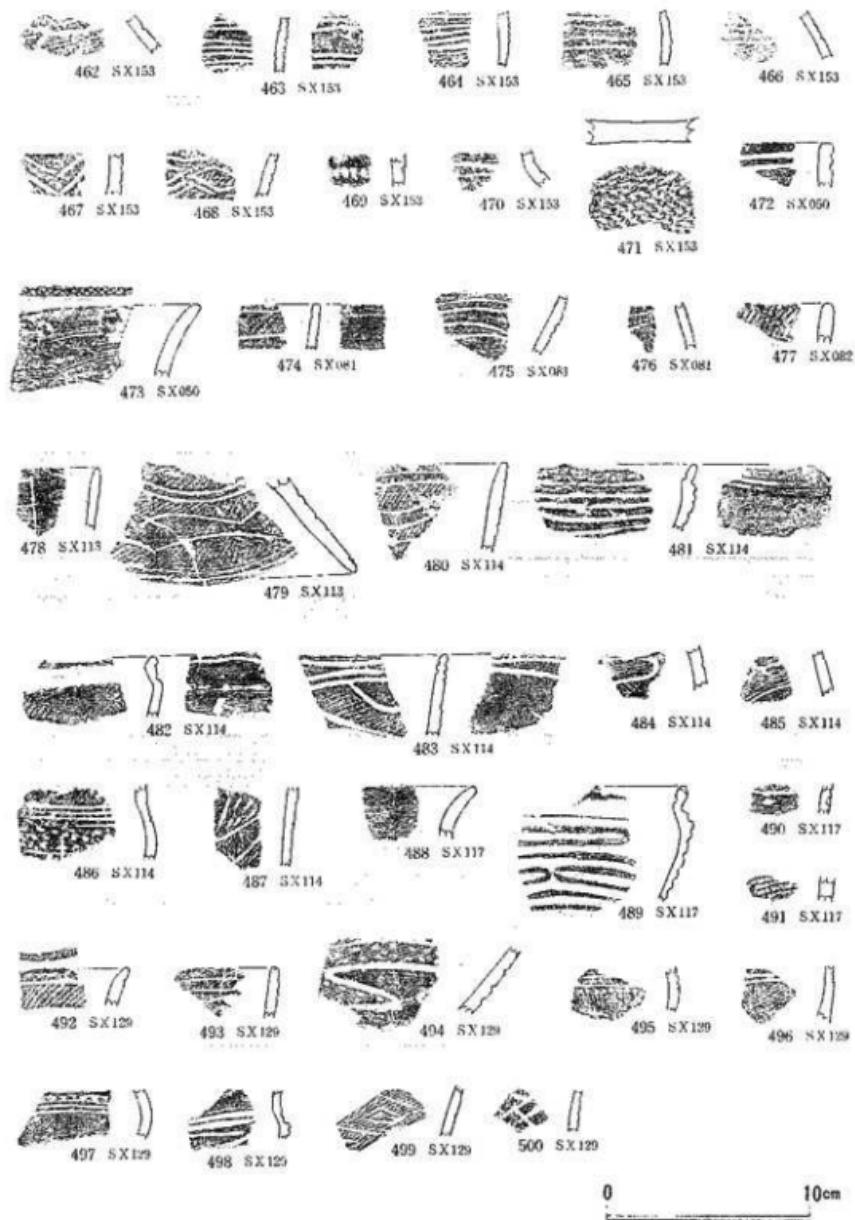
第96圖 遺構內出土遺物(鐵・金・玉・石・骨・貝等) - 15



第97圖 遺構內出土遺物(鐵文·漆牛牌件) - 16

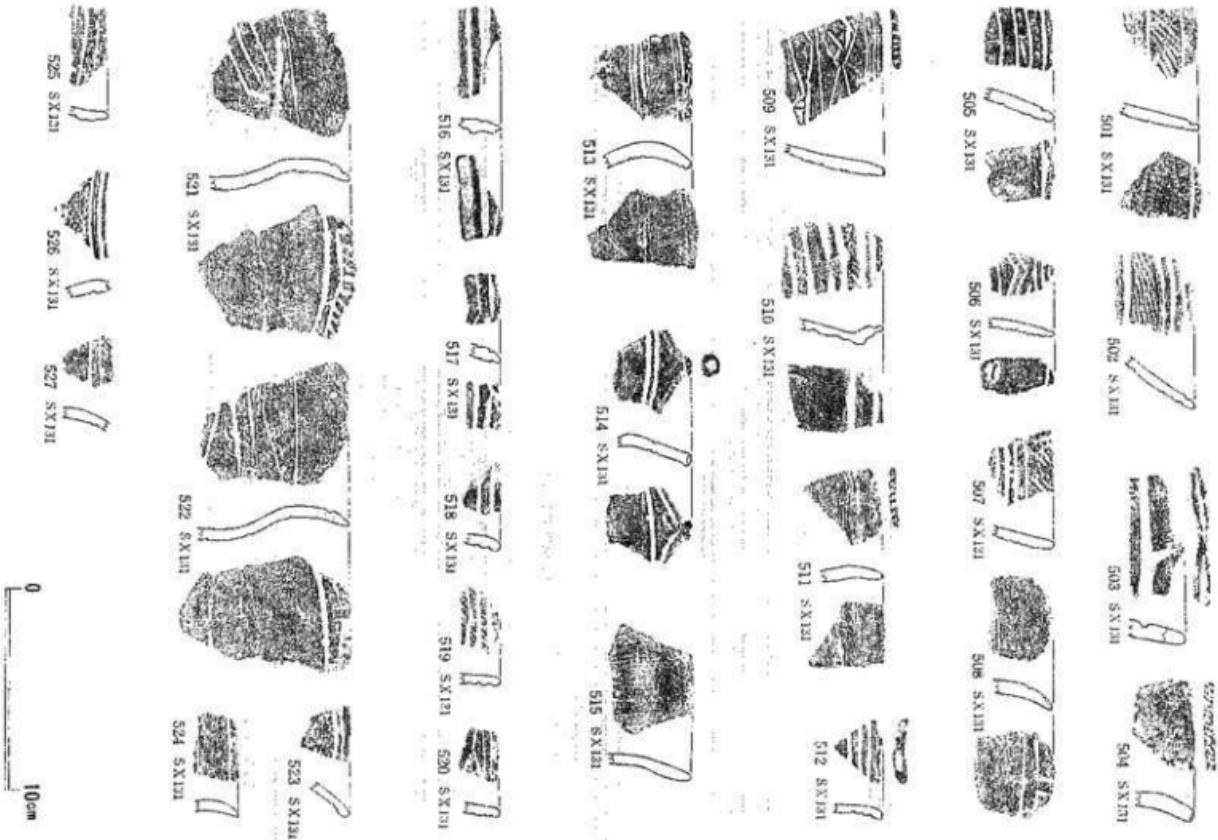


第二章 亂世亂局



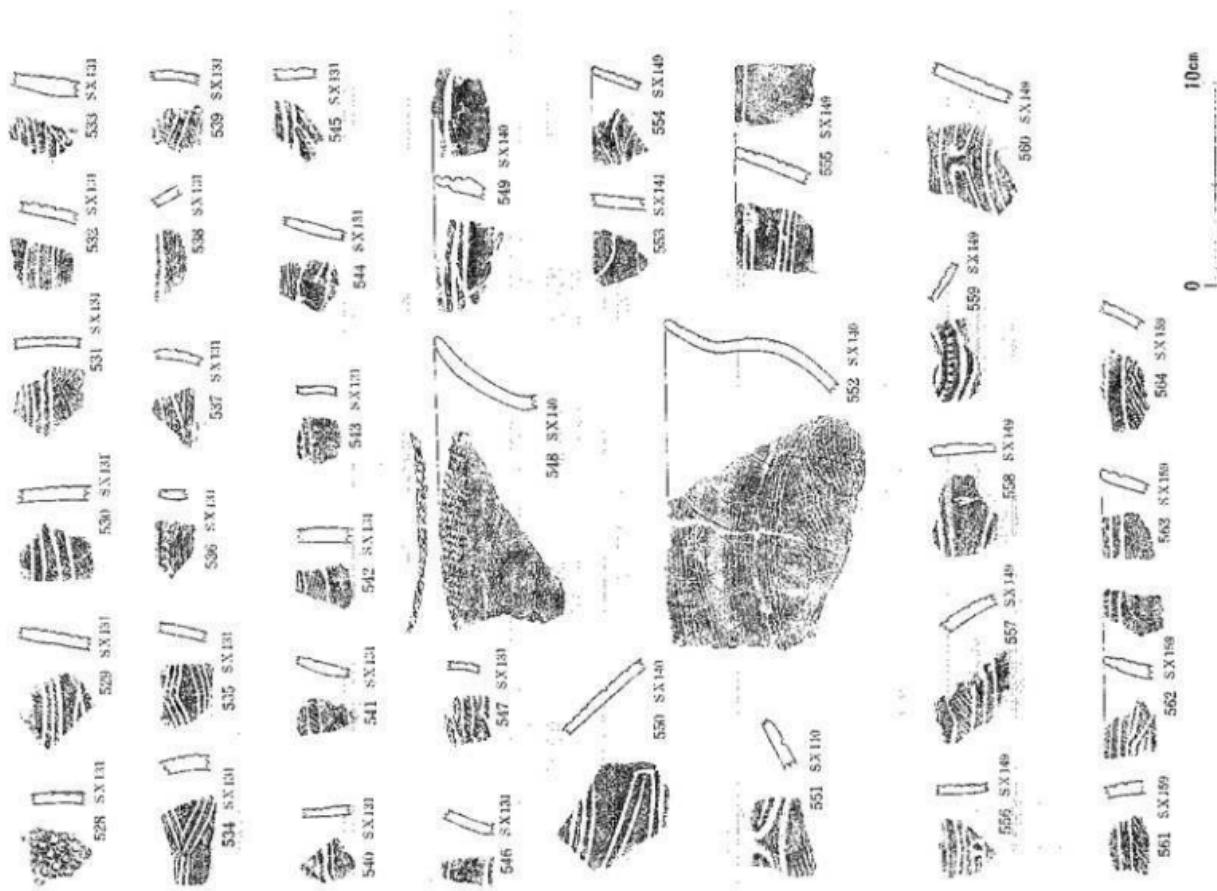
第98図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代)- 17

第2節 山上遺物

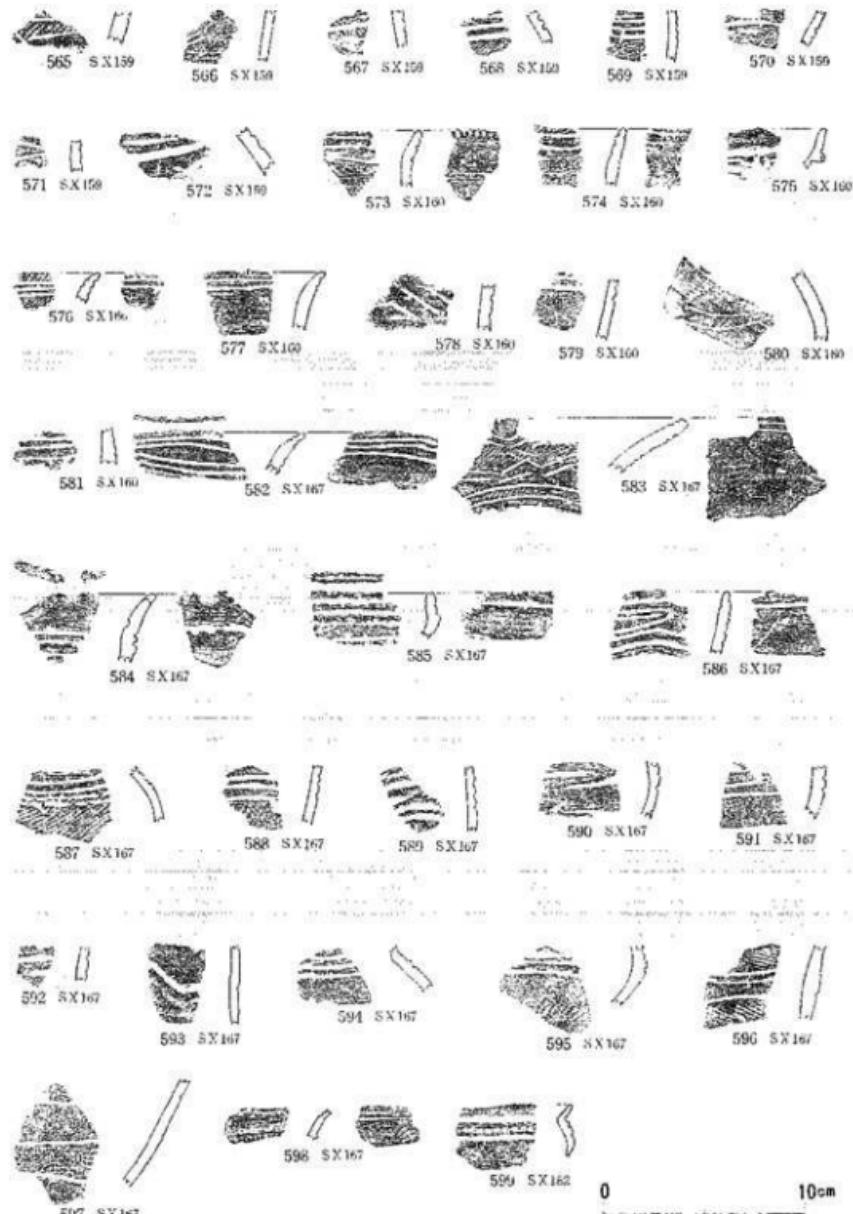


第99圖 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代) — 18

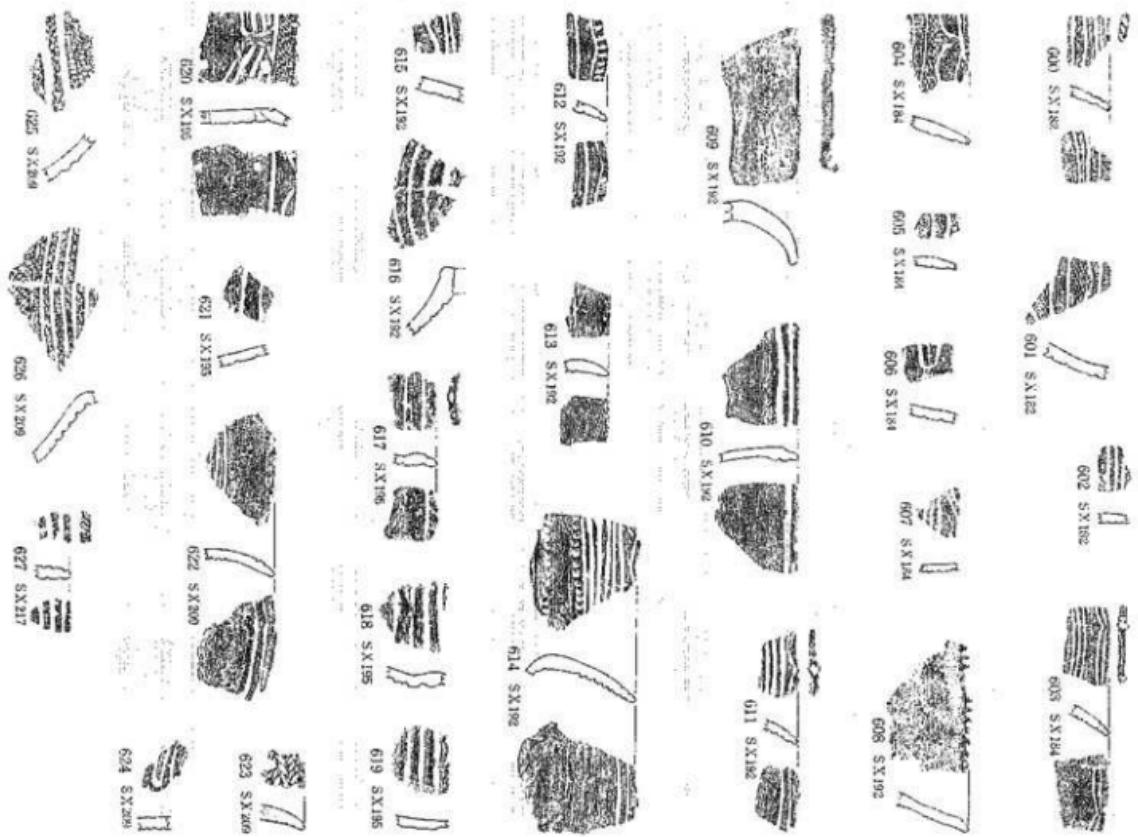
第4章 調査の記録



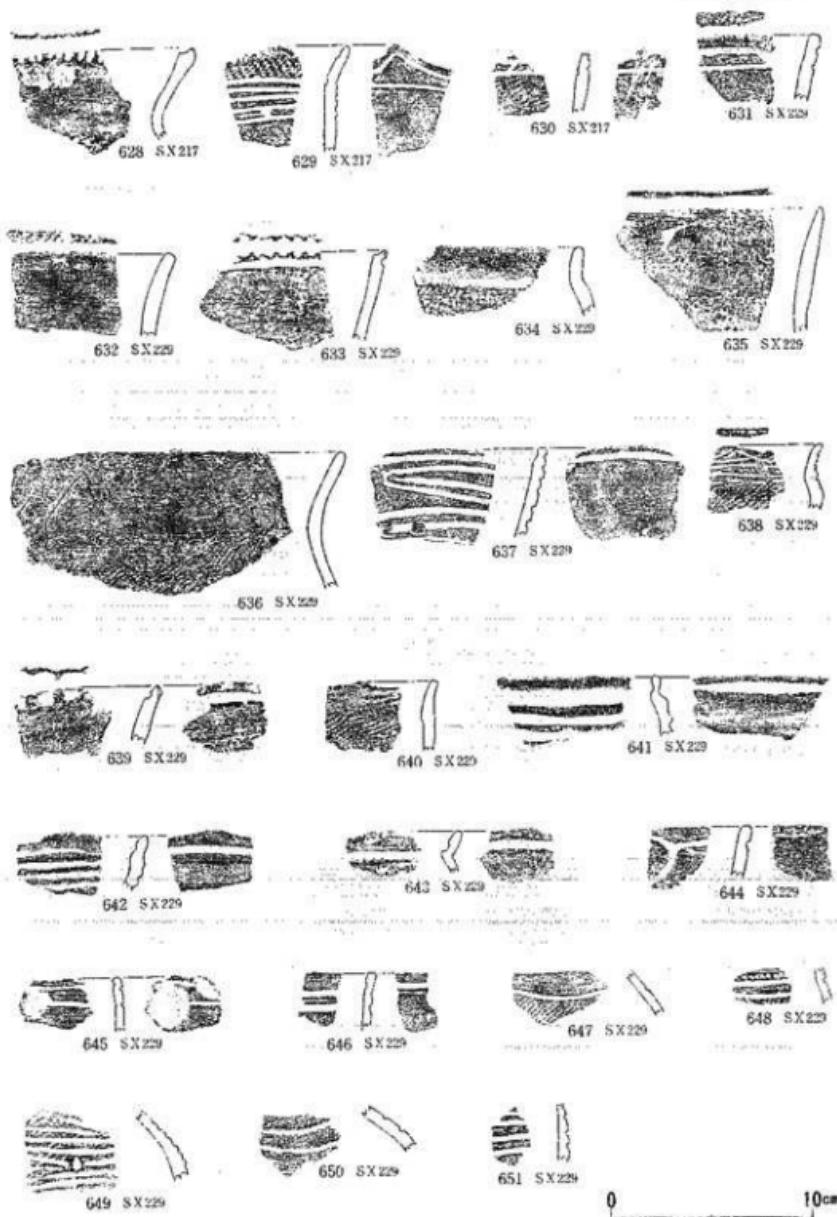
第100図 遷轄内出土遺物(縄文・弥生時代)…19



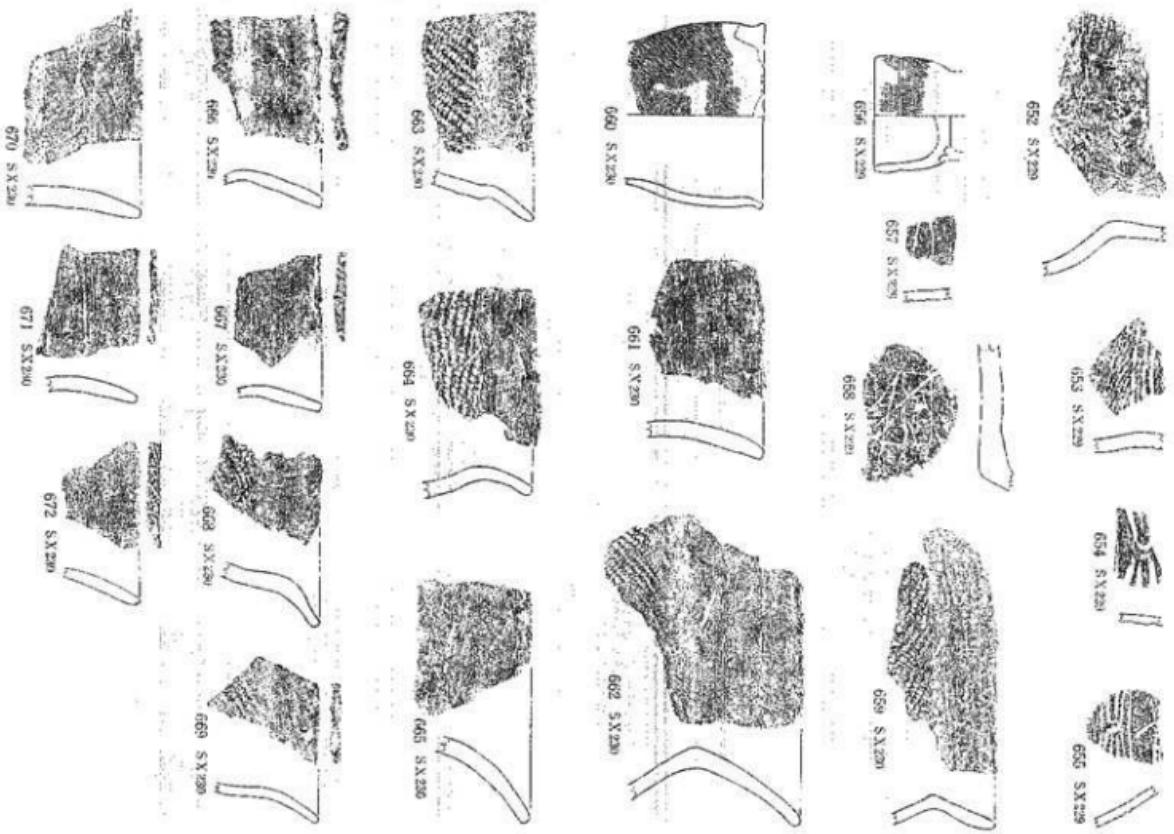
第101図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代) -20-



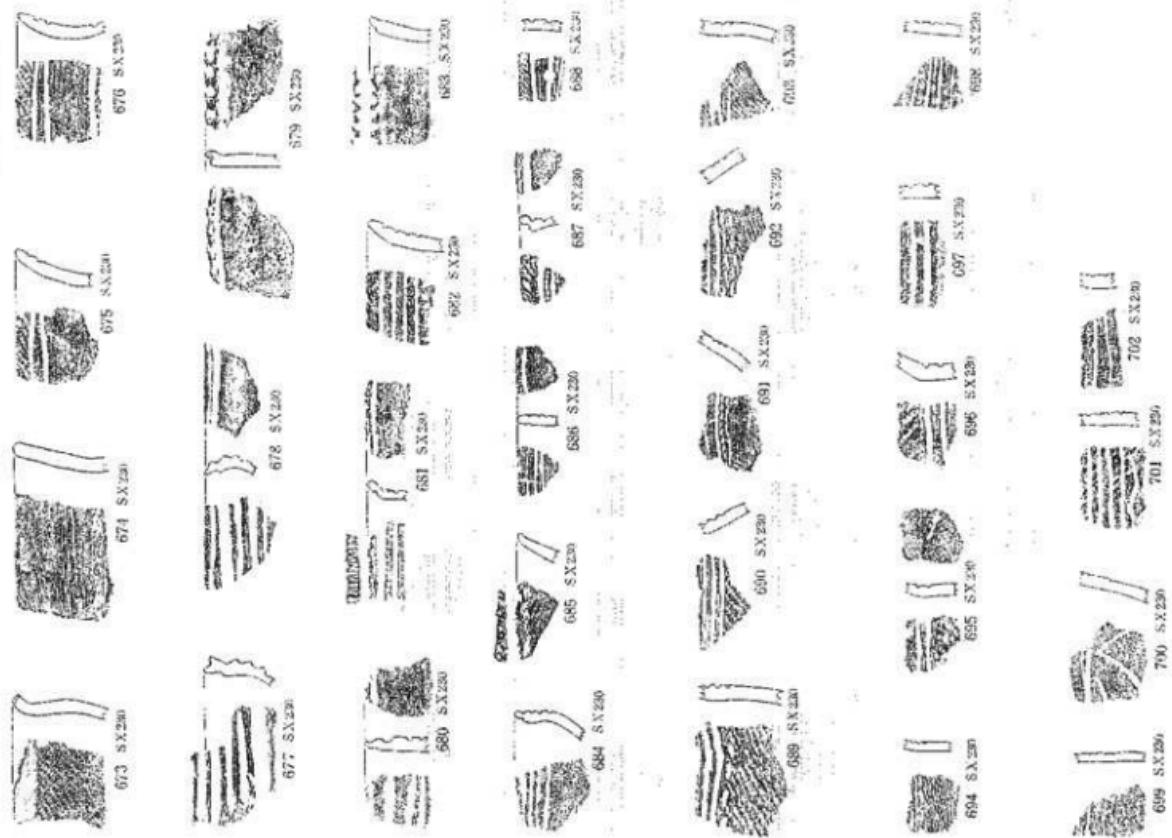
第102図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代) - 21



第103図 遺構内出土遺物(縄文・弥生時代) -22-

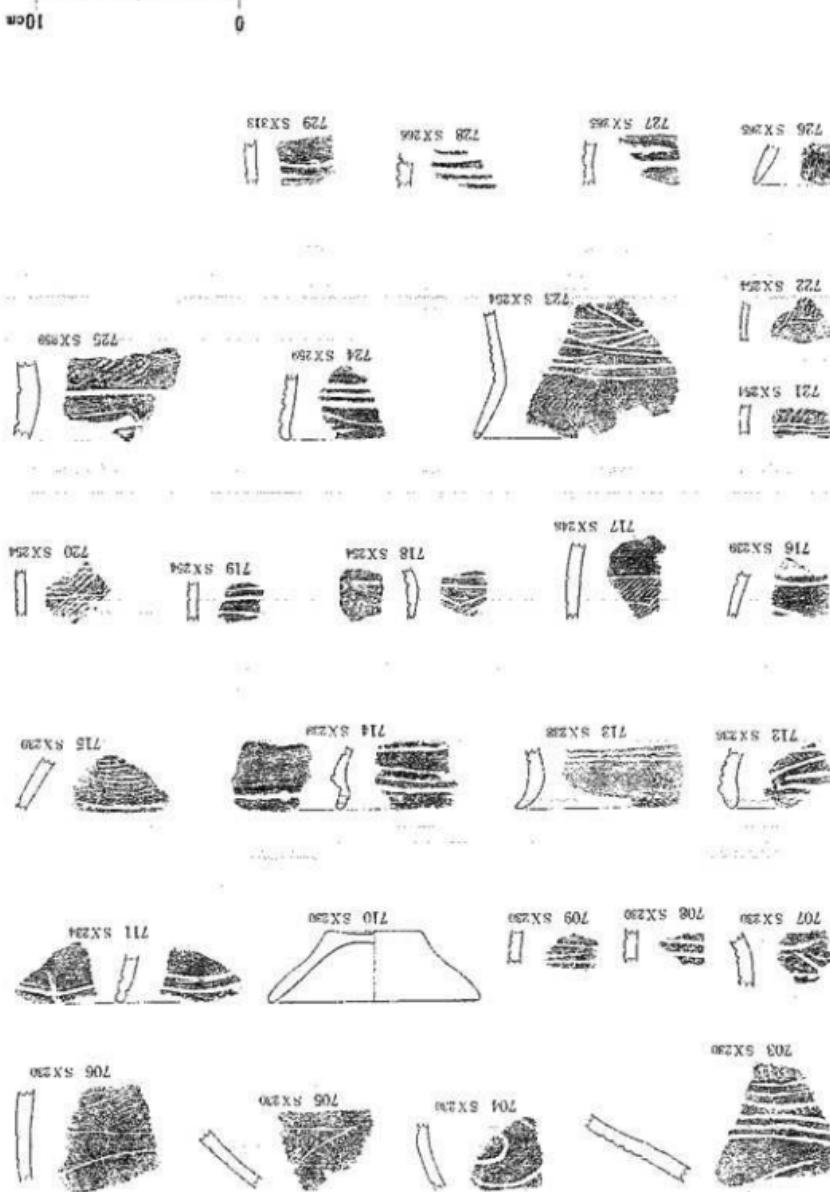


第104図 通構内出土遺物(縄文・弥生時代) - 23



第105圖 造構內出土遺物(韓文·弥生時代)—24

第106图 遗物内出土遗物(铜文·弦生时代) - 25



S E 215 (第108図745、図版113)

745は搔器である。

S D 027 (第108図746、図版113)

746は石鏃で、凸基有茎鏃である。

S D 056 (第108図747、図版113)

747は搔器である。

S D 092 (第108図748～750、図版114)

748は石匙で、折損しているが、縦型である。749は搔器、750は石皿である。

S D 099 (第108図751・752、図版114)

751は石鏃で、752は搔器である。

S D 104 (第108図753、図版114)

753はフレイクである。

S D 106 (第108図754～759、図版114)

754は石匙で、折損しているが、縦型である。755は石鏃で、尖基鏃である。756・759は石錐、757・758は搔器である。

S D 107 (第109図760、図版114)

760は搔器である。

S D 130 (第109図761・762・763、図版114)

761はフレイクである。762は石鏃である。763はフレイクである。

S D 166 (第109図764・765、図版114)

764・765は石錐で、いずれも凸基有茎鏃である。

S D 168 (第109図766～790、図版114・115・116)

766～769は石鏃で、766はアメリカ式石鏃、767・768は凸基有茎鏃、769は尖基鏃である。770・771は石錐、772は石槍、773～776は範状石器で773はb類、774はc類、775・776はd類である。777～783は搔器である。784・785は凹石、786は擦石、788は石皿である。789・790は石皿である。

S D 169 (第111図791～795、図版116)

791～793は石鏃で、791は凸基有茎鏃、792は尖基鏃である。794は範状石器である。795は定角式磨製石斧である。

S D 251 (第111図796～799、図版116)

796～799は石鏃で、796・797は凸基有茎鏃、798・799は尖基鏃である。

S D 282 (第111図800、図版116)

第4章 調査の記録

- S 8001は石錐である。
- S D 303 (第111図801、図版116)
- 801は定角式磨製石斧である。
- S D 308 (第111図802、図版116)
- 802は石匙で、横型である。
- S K 043 (第112図803、図版116)
- 803は搔器である。
- S K 059 (第112図804・805、図版116)
- 804は石錐で、凸基有茎錐である。805は石匙で、横型である。
- S K 064 (第112図806、図版116)
- 806は搔器である。
- S K 082 (第112図807、図版116)
- 807は搔器である。
- S K 115 (第112図808~811、図版116)
- 808は石錐で凸基有茎錐である。809は範状石器で、b類である。810・811は搔器である。
- S K 118 (第112図812・813、図版116・117)
- 812は範状石器で、c類である。813は搔器である。
- S K 124 (第112図814、図版117)
- 814は搔器である。
- S K 164 (第112図815、図版117)
- 815は範状石器で、i類である。
- S K 179 (第112図816、図版117)
- 816は石錐で、尖基錐である。
- S K 186 (第112図817、図版117)
- 817は範状石器で、c類である。
- S K 186 (第112図818、図版117)
- 818は燧石である。
- S K 188 (第113図819、図版117)
- 819は範状石器で、c類である。
- S K 194 (第113図820~824、図版117)
- 820~824は搔器である。
- S K 202 (第113図825、図版117)

825は擡器である。

S K 236 (第113図826、図版117)

826は石鏃で、凸基有茎鏃である。

S K 250 (第113図827、図版117)

827はフレイクである。

S R 295 (第113図828、図版117)

828は磨製石斧で中央部から先まで折損している。

S X 033 (第113図829、図版117)

829は磨製石斧で断面形は長梢円形である。

S X 084 (第113図830～843、図版117-118)

830～833は石鏃で、830・831は凹基無茎鏃、832は平基無茎鏃、833は尖基鏃である。834～839は範状石器で、834はd類、835～838はb類、839・840はc類である。841は擡器である。842は環状石斧で、石質は頁岩である。843は閃石である。

S X 114 (第114図845・848、図版118)

845・848は石槍でb類である。845は尖端が丸味をおびており、あるいは石錐としても使用されたものかもしれない。846・847は範状石器である。846はd類、847はc類である。

S X 131 (第114図849～853、図版118)

849～853は石鏃で、いずれも凸基有茎鏃である。854は石槍でb類である。

S X 133 (第114図855～863、図版118)

855～857は石鏃で、いずれも凸基有茎鏃である。858は石槍でb類である。859～861は範状石器で859・860はb類、861はd類である。862・863は擡器である。

S X 149 (第115図864、図版118)

864は石鏃で、凸基有茎鏃である。

S X 153 (第115図865、866、図版118)

865は石鏃で、凸基有茎鏃である。866は範状石器で、a類である。

S X 160 (第115図867・868、図版119)

867・868は石鏃で、凸基有茎鏃である。

S X 184 (第115図869～873、図版119)

869～873は石鏃で、873は尖基鏃、他は凸基有茎鏃である。

S X 229 (第115図874・877、図版119)

874は石槍で、尖基鏃である。875・877は範状石器で、875はb類、877はa類である。876は石槍で、b類である。

S X230 (第115図878~880、図版119)

878~880は範状石器で、878・879はd類、880はc類である。

S X238 (第115図881、図版119)

881は範状石器で、a類である。

S X254 (第115図882・883、図版119)

882は石鏃で、凸基有茎鏃である。883は鉈状石器で、b類である。

(3) 石製品

S A205 (第107図730、図版113)

730は石棒である。

S D168 (第110図787、図版115)

787は石棒である。

S X111 (第114図844、図版118)

844は石棒である。

S X310 (第115図884、図版119)

884は石棒である。

(2) 遺構外出土遺物

手取清水遺跡出土の縄文・弥生時代の土器・上製品・石器・石製品の総量はコンテナ250箱以上に達する。出土数量の最も多いD区は表上から地山までの土層が25~45cmと比較的薄く水田耕作や耕地整理事業などの影響を受けている。また旧河川出土遺物は周辺から流れ込んで来た遺物であり、摩滅が特に著しい小破片ばかりであると言っても過言ではない。したがって旧河川出土遺物は遺構外として取り扱った。

① 土器

本項で取り上げる遺構外出土土器は、比較的保存の良好な破片を集成したものである。遺構外出土の土器は縄文時代と弥生時代の土器に分けられ、相対的な出土総量は縄文土器(後期・晚期)が少なく、弥生土器が圧倒的に多い。

本遺跡から出土した縄文土器・弥生土器の出土状況は、既述したように遺構内から一括出土したもの、層位的に出土したものであっても、個々の出土土器の検討結果は縄文土器・弥生土器・古代土器・中・近世陶磁器が混在していたというのが実態であった。したがって遺構内出土土器、層位的に出土した土器であっても、縄文時代後期から弥生時代後期までの時期の異なる土器が含まれ、单一の時間幅に製作・使用されたものではない。このような土器群を整理するにあたっては、まず土器の形態を観察して器種を認定し、器種を主として施文・装飾技法の共通性から分類を行い、隣接地域との編年的対応関係から、ある程度の同時性を想定し得る各

器種ごとのまとまりを群として把えることにした。

縄文上器・弥生土器を記述するにあたっては、縄文土器(後期・晩期)は資料が少ないため、時期の古い順に記述することにした。弥生土器は器種分類を行った後、土器群を特定することにした。ただし「底部」については一括して扱った。

弥生土器の器種は、I類(斐形土器)、II類(鉢形土器)、III類(高杯形土器)、IV類(壺形土器)、V類(蓋形土器)とし、VI類(底部)を付け加えた。以下、取り上げる上器は遺構外出土土器であるが、各類の標式的土器については既に紹介した遺構内出土土器についても取り入れてある。この場合の土器番号は遺構内出土土器に記した同一番号を括弧内に記した。

縄文土器 (第116図1001~1016、図版120・133)

1001・1002は深鉢形土器の口縁部である。1002は縦に長い刻み目文のあと、沈線を施し、突起の下に円形の粘土板を張りつけた上に十字の刻み目を付してある。1003は浅鉢形土器で、いわゆる入組三叉文を施文している。1001~1003は縄文時代後期末葉の土器群である。

1004は鉢形で口縁上にB突起が付き、体部上半には彫り込んだ入組三叉文が施文されている。1005は大きな鉢か壺であろう。1006は横長の長横円文をもつ小形の壺である。1004・1005は縄文時代晩期C₁~C₂式であり、1006は大洞C₂式である。

1007は浅鉢形土器で、口縁上にはA突起とB突起が交互に付き、底面に四脚のような痕跡がある。1008~1009は鉢形、1011・1012は浅鉢形であり、いずれも浮線状の工字文が施文されている。大洞A式である。

1013・1014は口縁上に山形突起があり、1015・1016は平縁の鉢形土器である。いずれも変形工字文が施文され、1014は変形工字文の交点に粘土粒が付いている。大洞A'式である。

弥生土器

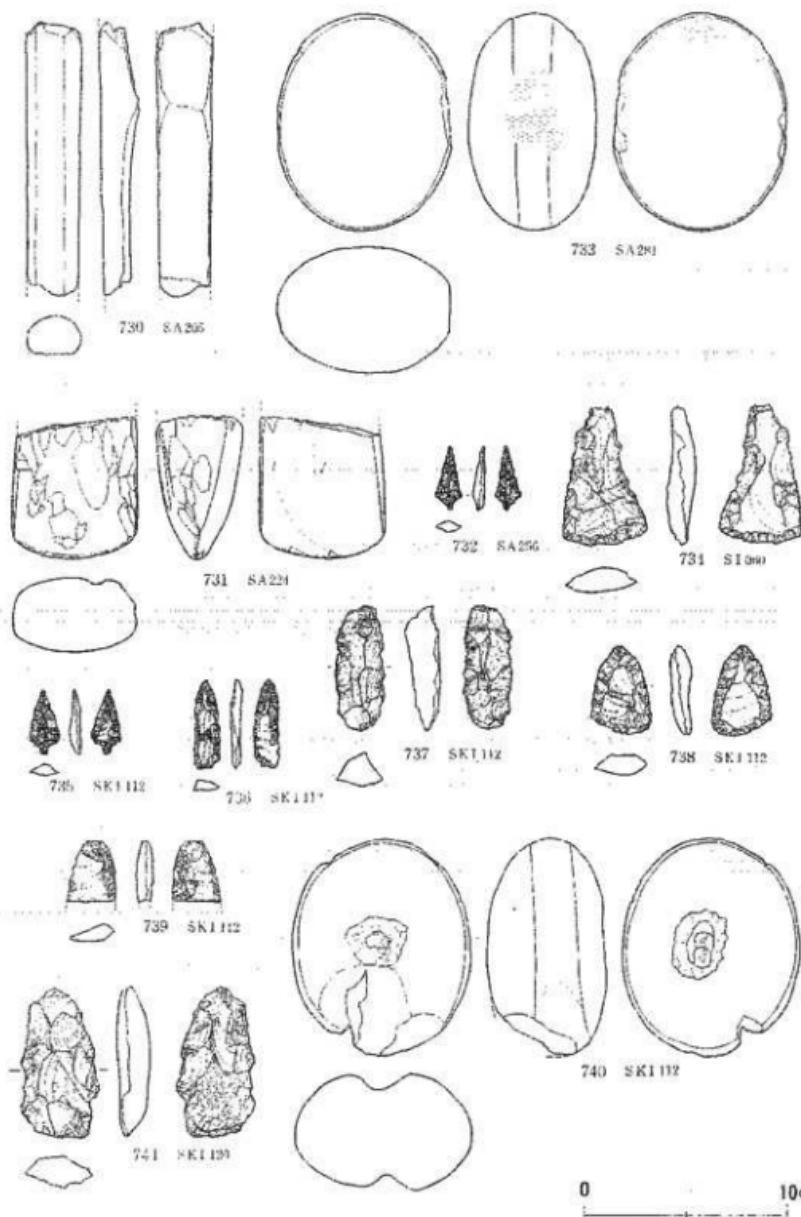
I類 斐形土器

I a類 (第117図1017~1022、図版121)

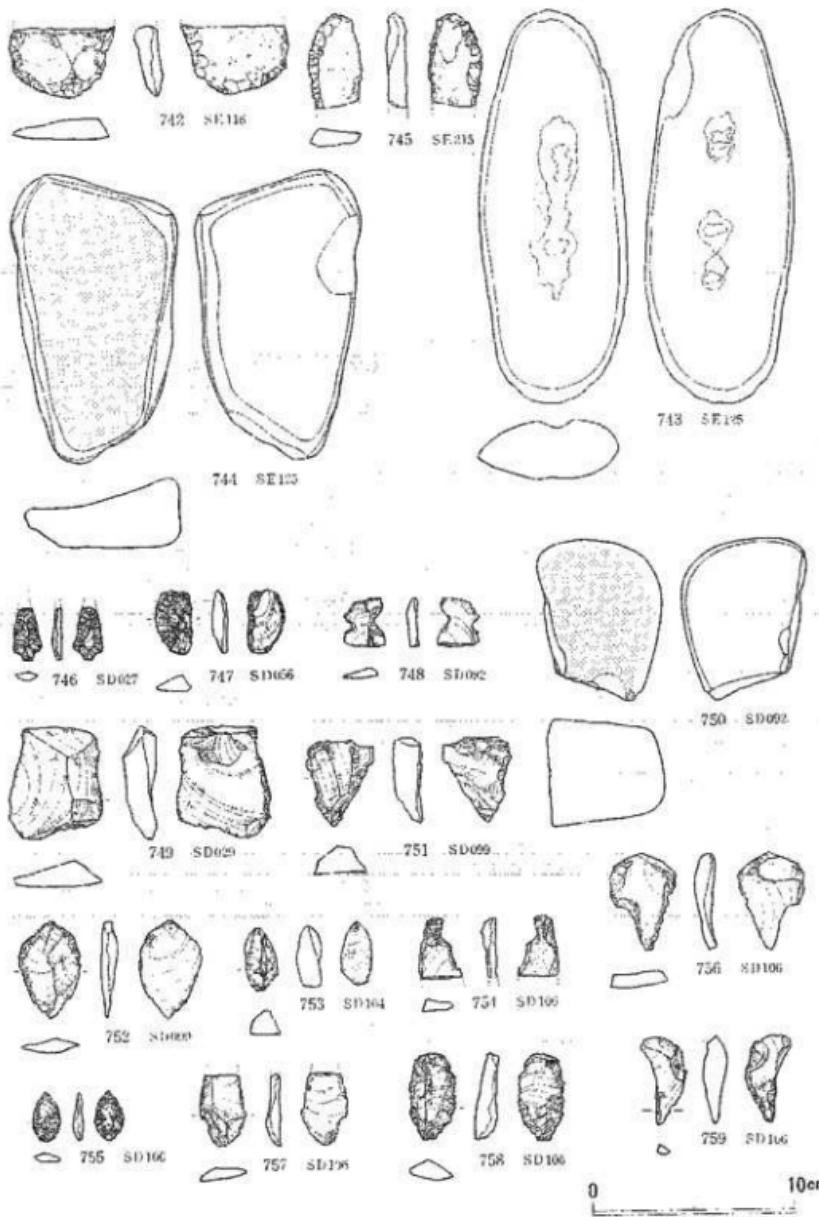
1017の口縁は小波状であるが、1018~1022は平縁である。口縁部は直立するもの(1017)、内弯ぎみに立ち上がるものの(1018)、外反ぎみになるもの(1019~1021)などがある。口縁部は無文であるが、頸部のくびれから体部下半は縄文帯となる。縄文はL R原体の斜位・横位回転である。小波状の口唇部上は沈線が刻まれるもの(1017)、縄文が付される(1020~1022)などがある。いずれも復原できる口径直径はおよそ25~30cm位である。

I b類 (第117図1023~1030、図版121)

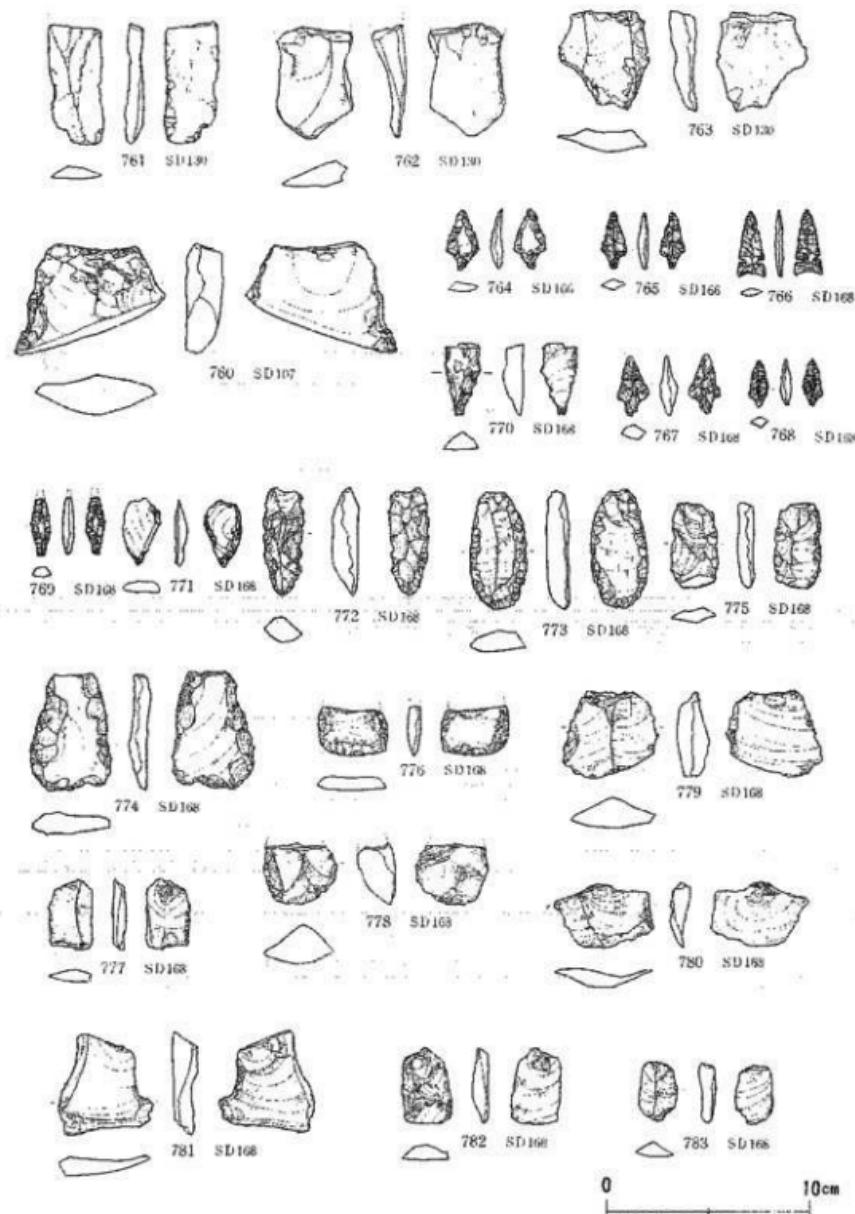
口縁部外面には縦の刷毛目調整があり、その上に1~3条の沈線をめぐらすものが多い。口



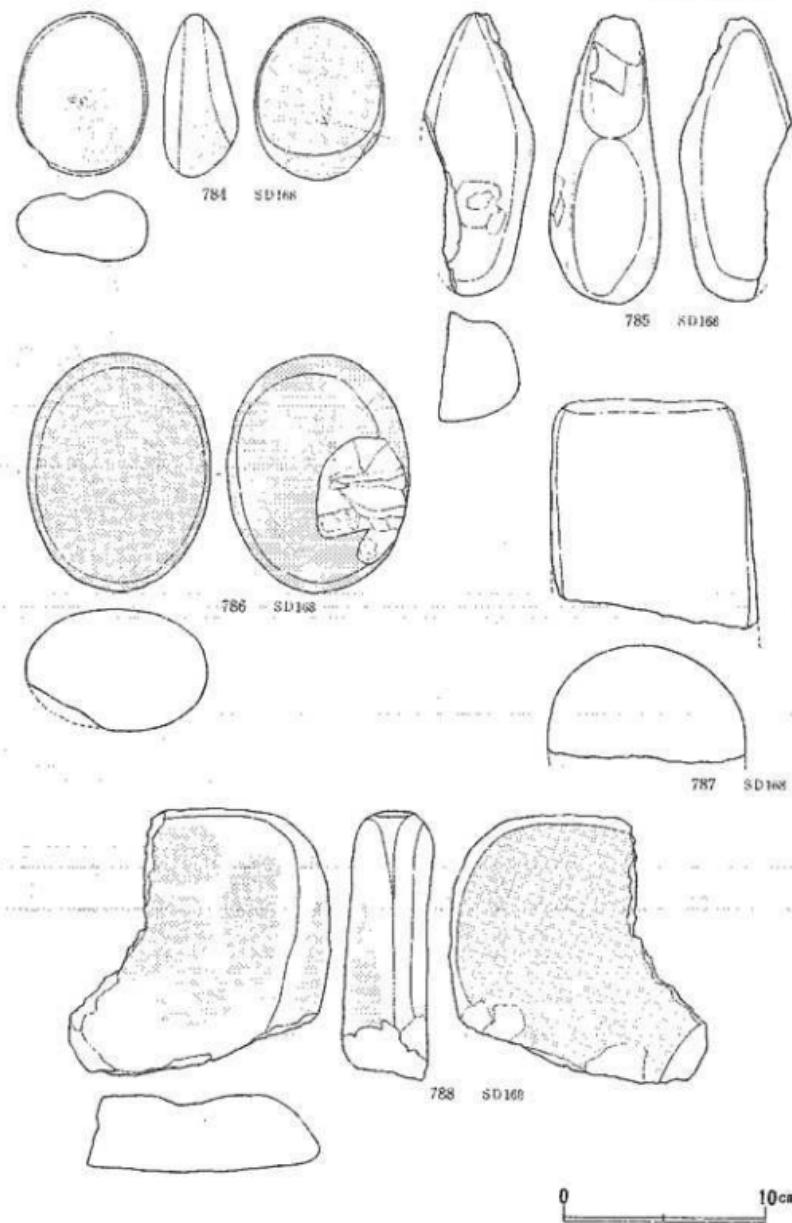
第107図 遺構内出土遺物一



第108図 遺構内出土遺物--2



第109図 遺構内出土遺物-4



第110図 遺構内出土遺物・4